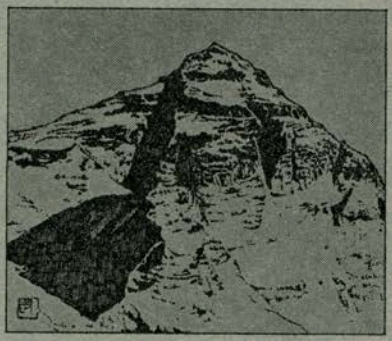
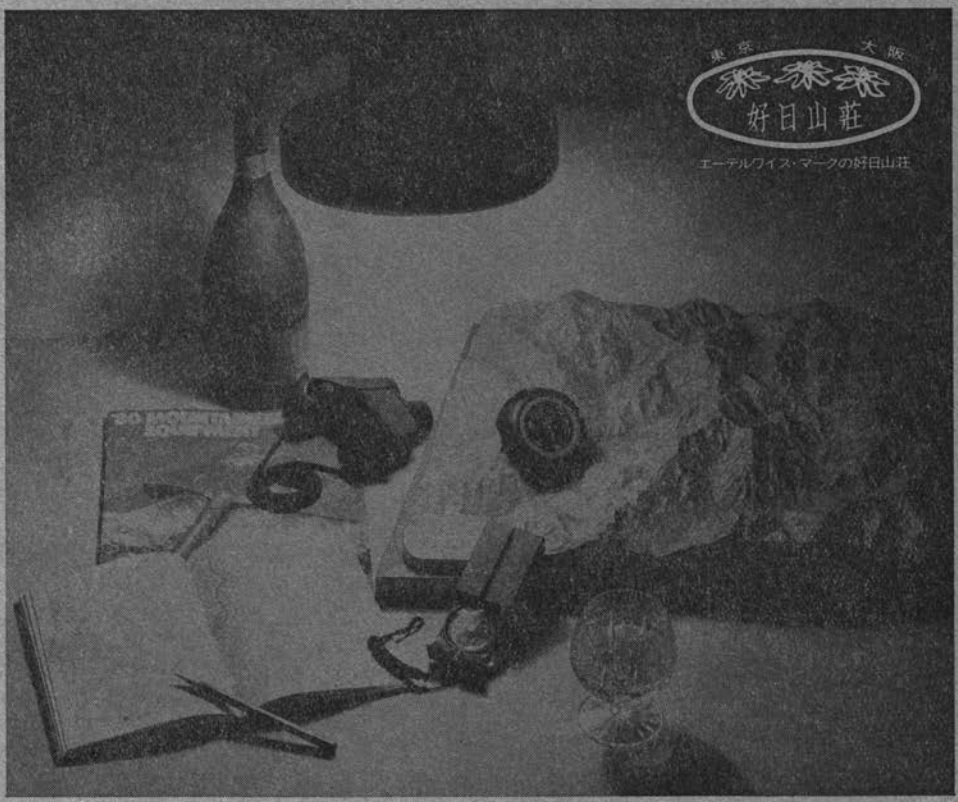
山岳



LXXV



未だ、辿る事なく、
計画のみに終っていた山行を今一度思い出してみる、峰、谷、稜線壁、頂。
いつまでも、最初に傾けた情熱を、山に注ぎ続けていたい。
山は快く受け止めて、くれるに、違いない。

好日山荘

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

伝統と信用の好日山荘は、8店舗です。

■東京銀座店　東京都中央区銀座3-5-7〒104……☎03(561)3600・(567)9031スキーショップ☎03(561)0966
■吉祥寺近鉄店　東京都武蔵野市吉祥寺本町1-19-1〒180 吉祥寺近鉄7F……☎0422(21)3331(代)内線3318
■苗場店　新潟県南魚沼郡湯沢町三国〒949-62(プリンスホテルツインタワービル内)…☎025789-2211(大代)
■大阪店　大阪市北区曽根崎1-2-8 〒530……☎06(364)0933(代)
■梅田店　大阪市北区曽根崎2-7-2 〒530……☎06(315)7985(代)
■セルシー店　豊中市千里中央くセルシー1階〉〒565……☎06(833)0123
■大阪三越店　大阪・北区三越新館2F……☎06(203)1331(代)
■福岡店　福岡市博多区須崎町1-4……☎092(281)3440・(291)6211

◎最近店名類似の店がありますが、当店とは無関係です。

山岳

第七十五年

山岳　第七十五年　目次　（一九八〇年度）

珠穆朗瑪登山・一九八〇年――北壁及び北東稜の登攀……渡辺兵力
宮下秀樹……浜野吉生……一

☆

プマリ・チッシュ登頂（一九七九年）……佐々木孝雄……五七
クンヤン・チッシュ北峰（一九七九年）……越前谷幸平……四四
ラカポシ北稜（一九七九年）……大谷映芳……七〇
スカムリ峰登頂（一九七九年）……亀井正……七八
ラトックⅢ峰（一九七九年）……寺西洋治……八七
ラトックⅠ峰遠征を終って……高田直樹……九五
テラム・カンリⅢ峰（一九七九年）……花田澄人……一〇三
五大氷河踏査とシア・カンリ登頂（一九七九年）……平岡誠一郎……一一一
パス一峰登頂（一九七八年）……新名進……一一八
タムセルク南西壁（一九七九年春）……木村武……一二三
カンテガ北壁（一九七九年春）……竹内孝一……一三三
ニルギリ中央峰（一九七九年春）……青木正樹……一三九

ガネッシュ・ヒマール（一九七九年秋）……小倉英郎……一四七
アンナプルナⅠ峰（一九七九年春）……静岡県山岳連盟……一五五
キシュトワール・ヒマラヤ（一九七九年）……伝田克彦　竹中昇……一六〇
剱岳登頂をめぐって――ある疑問点について……柴崎芳博……一六六
石川支部のあゆみ……若宮昇……一八二
高山植物の話……小野幹雄……一八九

☆

中島正文氏（広瀬　誠、永野　勉）、額田　敏氏（小野　幸）、山口清秀氏（海野治良）、大野俊夫氏（織内信彦）、和田一雄氏（上村　篤）、酒井吉国氏（小原勝郎）、松井久之助氏（田中栄蔵）、藤井運平氏（谷口現吉）、小林幹三郎氏（原田幹市）、宇部　明氏（田中壮佶）

追　悼……一九三

☆

J・Hunt 著『Life is Meeting』（島田　巽）、I・Chouinard 著『Climbing Ice』（駒宮博男）、P・Boadman 著『The Shining Mountain』（堀内章雄）、山崎安治著『登山史の発掘』（今村正二）、中島信一編『炉辺第八号』（山崎安治）、田渕行男著『日本アルプスの蝶』（奥原教永）、D・フーカー著『ヒマラヤ紀行』（岩坪五郎）、J・スペイン著『シルクロードの謎の民』（鹿野勝彦）、Z・クマール著『Kanchenjunga』（中島　寛）、上田　豊著『残照のヤルン・カン』（成川隆顕）

図書紹介……三三

会務報告……三四八
アイゼンの破損について……北海道大学山岳部……巻末
英文梗概……巻末

写真・図版

珠穆朗瑪に関するもの　写真P1(a)〜(f)、図C1
プマリ・チッシュに関するもの　写真P2(a)〜(b)、図C2(a)〜(b)
クンヤン・チッシュに関するもの　写真P3(a)〜(b)、図C3
ラカポシ北稜に関するもの　写真P4(a)〜(d)、図C4
スカムリに関するもの　写真P5(a)〜(b)、図C5(a)〜(b)
ラトックⅢ峰に関するもの　写真P6(a)〜(d)、図C6
ラトックⅠ峰に関するもの　写真P7(a)〜(d)
テラム・カンリⅢに関するもの　写真P8(a)〜(c)、図C7(a)〜(b)
シア・カンリに関するもの　写真P9(a)〜(b)、図C8
パスーに関するもの　図C9
タムセルクに関するもの　写真C10(a)〜(b)、図C10
カンテガに関するもの　写真P11(a)〜(d)、図C11(a)〜(b)
ニルギリに関するもの　写真P12(a)〜(c)、図C12(a)〜(b)
ガネッシュ・ヒマールに関するもの　写真P13(a)〜(c)、図C13
アンナプルナに関するもの　写真P14、図C14
キシュトワール・ヒマラヤに関するもの　写真P15(a)〜(b)、図C15

追悼　写真――中島正文氏、額田　敏氏、山口清秀氏、大野俊夫氏、和田一雄氏、酒井吉国氏、松井久之助氏、藤井運平氏、小林幹三郎氏、宇部　明氏

アイゼンの破壊に関するもの　写真二十三葉、図表十八枚

表紙カット　宮下啓三

珠穆朗瑪（チョモランマ）登山・一九八〇年

——北壁及び北東稜の登攀

渡辺兵力
浜野吉生
宮下秀樹

一、珠穆朗瑪計画（渡辺兵力）
はじめに——計画の推進——北京の経験——偵察隊のこと——本隊の編成——登山計画
二、登山活動の概要（渡辺兵力）
大本営生活——北東稜からの登頂——北壁隊の成功——登山と科学
三、北東稜隊行動日誌（浜野吉生）
ノース・コルへ——強風をついて——登頂成る
四、北壁隊行動日誌（宮下秀樹）
中央ロンブク氷河の荷上げ——北壁クーロアールを登る——ホーンバイン・クーロアール——第一次アタック隊の記録——第二次アタック隊遭難——攻撃再開——第三次アタック隊の記録
五、おわりに（渡辺兵力）
付記 (一)隊員名簿 (二)中国登山の経費について

一、珠穆朗瑪計画（編者注・1）

はじめに

日本山岳会にとって一九八〇年の珠穆朗瑪峯登山は十年振りの大きな行事であった。すなわち日本山岳会はエベレスト登山史の原点ともいえる北東稜ルートを含む中国領チベット側からの登山を計画し、世界に先駆けてその許可を得、そして二つの登路から登頂に成功した。隊の正式報告は目下作成中であるが、本稿は本年度の一行事として日本山岳会が行った珠穆朗瑪峯登山の記録を概括して報告するものである。本来、報告は客観的に登山経過を述べるべきであるが、ここでは筆者の個人的感想を述べたところも少くない。また資料の整理も不十分なため、登山記録の概要報告にとどめたことをあらかじめお断りしておきたい。

昨年の早春、折井副会長から、突然中国問題担当の役員になってほしいという要請の電話をうけた。私は大いに驚きかつ困惑した。私はかなり古い会員ではあるが、会務のお手伝いの方はほとんど経験がない。ただ、一九七六年のナンダ・デヴィ縦走計画のときには会にはいろいろとお世話になったので、頼まれれば断りにくい気持であった。また、終戦前に北京大学に奉職していて、中国には多少の縁があり、言葉も片言は使えるだろうと思っていた。この二つの理由から、あまり深くも考えずに、折井さんの要請をひき受けてしまった。五月の総会で正式に認められ、早速、計画の経過を勉強し、各関係筋への顔出しなどをはじめた。

そのころ、中国の山の解放も間近いという読みから、全国の数多くの登山団体が登山計画を申請し、各方面から中国側に働きかけを試みていたようである。日本山岳会も、そうした動きの一つといえる行動をかなり前からやってい

たわけである。しかし最近の登山界の動向について全くといってよいほど無知であった私は、やるべきことの勝手もわからず、いろいろな点で意外な思いの連続であった。とはいえ、ひとたび中国問題担当を受諾した以上、この計画を推進しなければならない。本当に余儀なく、幻の珠穆朗瑪への夢を描き、それを追う身になってしまった。

計画の推進

「中国の山へ行こうではないか」という発想は、今西会長時代から若手会員の間で芽ばえていたようだ。何ごとにつけ最初に手をつけることのお好きな今西さんのことだから、中国側にしかるべく働きかけておられたらしい。この思想は西堀会長に受けつがれた。そこで、外に対しては宮下理事を中心に各種の働きかけと中国情勢の情報あつめが根気よくつづけられてきた。一方、青年懇談会の有志がインフォーマルなかたちで中国の山の研究に着手していた。しかし、当時は日本でいかに張り切ってみても、中国側では外国隊を受け入れる準備ができていなかったようである。したがって各種多様の計画は実現性に乏しかったと思われる。

ご承知の人は多いと思うが、有名な卓球交流（一九五九年）にはじまる日中のスポーツ関係の交流促進については、日本中国文化交流協会（故中島健蔵会長）が両国の橋渡し役を担っていた。この協会が一九七七年の秋に、未交流スポーツ団体の代表者の人々を訪中させた。この訪中団に、西堀会長が日本の登山界を代表するかたちで参加された。幸い、中国登山協会の史占春副主席をはじめ協会幹部の人たちと親しく会談する機会をえて、日本の登山界の状況を伝え、また日本山岳会が中国の山の登山を熱望していることの意志表示をされた（編者注・2）。

中国側の諸情報に対応して、日中合同登山隊、女子隊案など各種の計画を検討してきたが、最終的に一九七九年の二月、日本山岳会は珠穆朗瑪計画を中華全国体育総会に提出した。ここまでの中国側の情報収集や関係筋への非公式な打診などは、主に日中文化交流協会の協力によってなされてきた。各登山団体からの計画のなかには有力筋からの

ものがいくつかあって、中国側としてもその選択にいささか困惑していたという。そのころ、故渡辺公平日本山岳協会会長と西堀会長とが会談し、協議のうえ正式に日山協の推薦文をそえた珠穆朗瑪峯計画書を中国大使館を通じて提出した（四月二十六日）。私は、これだけの経過があったところに、このプロジェクトに参画することになった。

中国側の事情の推移については詳らかでないが、一九七九年六月の全国人民大会のとき、外国登山隊を受け入れる方針が確認されたようである。我々のうけた許可状の日付が六月二十六日になっていたところをみると、一九八〇年には西独隊（シシャパンマ）と日本隊の二隊に許可することは六月中にきまっていたと思われる。

七月六日、日中文化交流協会から中国大使館に出頭するようにとの急報をうけ、宮下理事と共に大使館に出向いた。許可状の宛名は、日本山岳協会、日本山岳会、日中文化交流協会の三団体になっており、「私たちは貴会に対し、喜びをもってお知らせいたします。当協会は日本山岳会登山隊が一九八〇年にわが国の珠穆朗瑪峯へ登ることを歓迎します」としたためてあった。さらに、七月中に三名の代表を中国に招き、登山協会と具体的な問題について協議したいと追記してあった。

許可の下りた七月から取りかかって、翌年の六月にはもう山は終っていなければならない。ヒマラヤ最高の巨人を相手とする山登りを、一年以内で準備し成功裏に終らせるという至難の事業をどうやったらよいものか、その時は途方にくれた思いであった。

北京の経験

こうして日本山岳会隊に許可が下りたものの、これを会の独力でやることは一体可能なものか。世界が大いに注目しているにちがいないチベット側からの登攀を成功裏に遂行するには、どれだけの準備と態勢をととのえなくてはならないのだろうか。あれこれ考えてみても、とにかく中国側と具体的に話し合ってみなければ一切の判断がつかな

い。その結果、場合によっては日本山岳会の事業としては対応できないから、許可を辞退せざるをえないことも起りうると、一沫の疑懼の念をもつて、私は訪中への準備にとりかかった。

七月十三日に体協の記者クラブで許可の件を公表し、十六日の臨時理事会で珠穆朗瑪峯計画（ＪＱＥ計画）に着手することの再確認をえた。準備期間と財政規模とを考えると、一般募金方式では間に合わないので、いずれ強力なスポンサーをみつけなければならないと考えたが、経費の見当すらつかないうちにスポンサーに働きかけることもできないから、全ては北京から帰ってからだと決心した。

ところが、北京出発（七月二十九日）の直前になって、日中文化交流協会を介して、読売新聞社の非常に熱意のある働きかけを受けた。ここまでくるには日中文化交流協会には大変お世話になってきていたし、またこれからの訪中についても勝手不如意の私たちでは中国側と満足な交渉ができない。そこで、読売の幹部の方々とお会いした席上、われわれの事情を述べたところ、読売は全面的な協力をしたいと誠意を示された。あとになって知ったことだが、読売新聞社は中国とはいろいろの面で関係が深く、とくに中国登山については二十年前から計画をもち、ことあるごとに中国側に働きかけてきたとの由で、許可第一号が日本山岳会に出たので、これまでの努力からしても、どうしてもこの事業に協力したいというのが真意であったらしい。この結果、訪中団には三団体の代表の外に読売新聞社の代表者も参加することになった。

北京での協議のため、これだけは明らかにしたいという、質問、協議事項のメモを準備した。メモの主要点は、⑴日本隊の公式呼称、⑵一般事項、⑶登山計画立案のための基本事項、⑷輸送・梱包関係、⑸装備・食糧関係、⑹医療・学術関係、⑺通信・連絡関係、⑻経費関係、⑼保険関係、⑽その他雑件、である。この十項目毎にさらに細目を記した十数枚のメモ帳を作って訪中した。

訪中団は七月二十九日の夜、北京空港についた。史占春氏外数名の人たちの出迎えをうけ、ただちに宿舎に案内さ

れた。私にとって三十四年振りの北京であった。北京の東郊にあるらしい空港からの夜景は、私のイメージにある北京ではなく、別の土地に来た感じであった。既知の北京は地上から消えて未知の北京にきた、と心が締る思いであった。翌日の九時から会談がはじまった。中国側は「約定書」原案なるものを用意しており、話はその原案の逐条審議というかたちですすめられた。本文と付属書類四種からなる二十一頁におよぶ長文の約定書を、一つ一つ通訳づきで検討していくという、かなりしんどい会談であった。

本文の冒頭には「中国登山協会は、日中両国間の登山交流を発展させ、両国人民間の友好と相互理解を深めることを願い、日本山岳協会、日本山岳会、日中文化交流協会と読売新聞社が協力して進める日本山岳会登山隊が一九八〇年に登山することを同意する。日中双方は友好的協議を経て、つぎの如く議定する。

一、日本登山隊の名称―日本山岳会珠穆朗瑪登山隊、人数―三十名、隊長―西堀栄三郎、日本登山隊の活動事務を行なう日本国内の責任団体―日本山岳会（以下省略）」

と記してあった。この約定書原案には私のメモ事項の大半が含まれていた。さらに本文の末尾に一九七九年九―十一月の間に偵察隊を出すことを同意するとあった。

三日つづいた会談の後、二日に調印する運びになった。その間に珠穆朗瑪登頂者と面会ができ、映画や地図で山の状況の説明をうけ、また中国の登山用具などを見せてもらった。約定書の説明と検討をしている間にうけた印象では、仲々きびしいが中国側も真剣に準備して日本隊に心から協力しようという態度が伺われた。

登山関連の諸経費の単価には日本では考えられないレベルのものがあったが、チベットという特殊な条件の地域でのことであるから、こういうものかなと、自からを納得させざるをえない気持であった。一日の夜には一応の単価が判ったので、総経費の概算を計出してみた。輸送関係などにはっきりしない点もあったが、一応、一億数千万円内外でやれそうな結果がでた。ここで私は、この計画を実行に移そうと決心した。

八月三日に帰国、六日の理事会の席で訪中結果を報告し、計画に本格的に着手する承認をえた。検討の結果、ＪＱＥ計画の日本山岳会における責任機関として「チョモランマ委員会」（代表・西堀栄三郎）を設け、さらに実施機関として協力三団体（日中文化交流協会、読売新聞社、日本テレビ放送網）の人々も必要によって参加する「ＪＱＥ委員会」（代表・渡辺兵力）を組織することになった。

偵察隊のこと

未知の珠穆朗瑪である。ぶっつけ本番というわけにはいかない。とはいえすでに八月にはいっている。九月に偵察隊を出すのは容易なことではない。帰国早々偵察隊の計画を練り、隊員の人選にかかった。偵察隊にはつぎの三つの任務があった。第一は山の偵察である。北東稜、北壁両ルートの状況、とくに後者の可能性の確認である。第二は、乗物で五千メートルのベース・キャンプに至るという異常な入山経験である。これはいささかモルモット的任務といえる。第三は、一口にいうと、中国諸事情の偵察である。

この三役を一人でこなせる登山家で隊を編成することは不可能に近い。第一の任務には強力なクライマーが必要である。第二については高所医学の知見と経験が是非とも必要といえよう。第三が一番むつかしい。とにかく中国の経験者であることが望ましい。少なくとも偵察隊の隊長にはこの三役を一任できる人を選ばねばならない。しかし幸いなことに、京都大学学士山岳会会員で日本山岳会会員でもある斎藤惇生さんという適任者がいた。通称Ｙさんと呼ばているこのドクターはサルトロ・カンリの初登頂者で、ヤルン・カン遠征隊の隊付ドクターでもあった。さらに多少の中国語を習得していて、今春には訪中した経験もある。まさに、うってつけの偵察隊長であった。隊員の方はナンダ・デヴィ隊の隊員を中心に五名をえらんだ。北京から帰って十日後には報道側の参加者を含めて九名の隊が編成された。それからは多忙をきわめた準備作業であったが、読売の好意で市ヶ谷に広いオフィスも開設され、若い会員諸

君の献身的な協力もあって、計画通り九月十五日には偵察隊が北京に向けて出発した。

十八日に北京をたち、成都、ラサ経由、車でルクズ、シガルを経て、偵察隊は九月二十六日にベース・キャンプ予定地として考えていたロンブク氷河末端（五一五〇メートル）に到着した。案じていた入山時の高度順化も比較的順調にいって、ベース・キャンプで二日休養しただけで、氷河上流への偵察行動を開始した。北東稜方面（東ロンブク氷河の溯行）は、長谷川、横山、中村、北川隊員が担当し、北壁（中央ロンブク氷河）方面には、高見、尾崎、磯野、岡島隊員が出かけた。

北東稜隊は、ノース・コルに登り、北尾根の状況と北壁上部とを偵察する目的で、十一日、本隊のＡＢＣを予定している六五〇〇メートル付近に第三キャンプを建設した。偵察隊に協力した中国側の人々（張俊岩連絡官外十八名）のうち、高所協力員の大半は八千メートル以上の経験者であって、初見参の日本人に対して山を案内するという気持で接してくれた。十二日はノース・コルへのルート偵察の意味で、王洪宝（管理要員）、ニマザシ、ローランの三隊員が先行チーム、つづいて長谷川、横山、尚子平が後続チームをつくって、ノース・コル右側の斜面の登攀を開始。このコースの状態はかつて英国隊（一九二二年）が雪崩にやられたときのそれと近かったようである。約六五〇メートル付近に王洪宝が到着したとき、上方三〇メートルの辺から幅五十メートル長さ五十メートルほどの雪層が動き、上記の先行チームと、ザイルを解き一人で先行チームに近づいていった長谷川隊員とがその雪崩に巻きこまれて、下のクレバスに落された。長谷川隊員は奇跡的にも自力で出られるところで止ったが、三人の中国隊員は行方不明になってしまった。この遭難の詳細は本報告にゆずるが、誠に残念至極な出来事であった。

しかし、この貴い経験から我々は非常に大切な教訓をえた。その一つは日本側のリーダーシップの確立と中国側のパートナー・シップの在り方という極めて微妙な問題の存在。そして、隊員間で言葉が通じないためにおこる登山活動中の意思疎通の欠如。さらにチベット側の氷河という日本隊にとって未知の自然についての知見と注意の不足とい

った、本隊の編成と運行にとってたいへん重要な課題を教えてくれた。遭難の第一報は十月十八日の夜半に読売新聞社から入った。私は万一のリスクとして覚悟はしていたが、かなりショックを受けた。本隊計画がどうなるかと一瞬案じたが、その後の中国側の対応は、そうした心配を全く不要とした。かえって、現地における遭難発生後の日本隊全員の活動が中国側に非常な好印象を与えた様子であった。そのことが本隊の行動全体にも影響したと信じたい。三氏の事故は本当に不幸なことで申訳ないが、結果として日中友好という大目的を身をもって促進された貴い犠牲であったと深く心にとどめたい。

ノース・コルには到達できなかったが、東ロンブク谷の様子が判り、コルへのルートにも見通しがたった。北壁の方は、高見隊員たちが氷壁にとりつき、六五〇〇メートル辺りまで試登した。北壁下部の難所の通過のめどもたち、上部岩壁も登攀可能の見通しが得られた。

さらに、北京から数千キロの中国旅行を身をもって経験したことによって、北京での会談ではどうしても判らない具体的な情報を沢山持ち帰ることができた。偵察隊が北京に帰着する日に合わせて、浜野副隊長が北京まで出かけ、現地事情を確認して、本隊計画の下打合せを行った。十月七日、偵察隊は無事帰国した。七月の議定書では、偵察隊帰国後十日以内に、本隊の計画についての詳細をさらに協議し、日中相方の合意を確認する「覚書」をとりかわして調印することになっていたので、宮下副隊長が再度訪中して覚書の調印を終った。これで、ＪＱＥ計画の中国との問題の大半は片づいた。

本隊の編成

中国側に申請した第一次計画では、隊員三十名を想定、報道担当の隊員は考えていなかった。しかし議定書の調印のときには、読売新聞社の全面的協力がきまっていたので、この枠は報道隊員を含む三十名ということになった（日

本テレビも読売と同格で協力することに決まったので、偵察隊の編成にはＮＴＶを含めた三名の報道隊員が参加）。

今回の計画は登山の対象地域からしても、また登山許可をうけてからの経過からしても、これまでの多くの海外遠征登山計画とはいろんな点で異質なところがあった。いいかえると未知、未経験な問題は「山」だけではなかったのだ。その上、中国を訪れる最初の隊であるから、日本の登山界を代表することになる。と同時にこれから中国での登山を望んでいる人たちに迷惑をかけないように振舞わねばならない。さらにマスコミが全面的なスポンサーになって協力するのはあまり前例がないし、報道活動は特別重要な役割をはたすことになる。このようなことを考えて、今回のＪＱＥ計画の目的はつぎの三点に集約されるとした（会報『山』四二一号の拙稿参照）。

一、北東稜、北壁の両ルートからの並行登頂を目指す。

二、登攀と報道の両方の活動を一体として遂行する登山計画をたて、実践する。

三、中国側の協力者と友好関係をもちながら相方共に楽しい山登りをする。

帰国早々、このようなＪＱＥ計画の特異性とそれに対応する隊編成上の基本方針をまとめて、第一回チョモランマ委員会（八月二十三日）で審議した。三十名という枠組を前提として第一の目的を確実に成功させるには、登攀隊員は少くとも二十名は必要と考えたが、報道のことを考えるとかなりむずかしかった。そのうえ、中国の高所協力員（ベース・キャンプ以上の荷上協力者）は七五〇〇メートルぐらいまでしか協力してもらえないので、それ以上の登行は日本隊だけでやらねばならない。したがって登攀隊員はできるだけ強力でヒマラヤの経験のある人々で編成しなければならなかった。すなわち少数精鋭主義をとらざるをえなかった。

第二の目的を果すには、報道活動にとって必要最小限の人員は参加してもらわねばならない。この問題については、九月に入ってから関係四団体の代表者で四者連絡会というのを毎週一回もち、報道計画と登攀計画との協調に努めた。検討の結果、到底三十名の枠では無理なことがはっきりしたので、「覚書」の調印のときに、(1)西堀氏を総隊

長として隊員数の枠外とし、(2)ＪＱＥ隊員は三十七名にしたい、という二点を申し入れることにした。交渉の結果、中国側の合意をえて、「覚書」では渡辺隊長以下四十名（北島駐在隊員を含む）ということで承諾された。

結局、ＪＱＥ隊は、会社でいうと一種の事業部制に似た編成になった。すなわち北東稜隊と北壁隊とはそれぞれ別個の隊と考え、二人の副隊長が各隊についての全ての責任を持つ。この外に報道隊がある。この三つの隊を隊長が総括する。山では、報道隊は北東稜担当と北壁担当に分かれる。諸々の準備など、ＪＱＥ隊として共通するところは隊一本でやるが、登攀の作戦計画（タクティクスなど）は北東稜、北壁は別個に検討する。報道関係は、ニュースとテレビに分かれるが、これらも独自に計画をすすめることにした。こうした三つの事業部が、さきのＪＱＥ隊の三目的を共同の目的としてもち、それを是非とも完遂しようというのである。このような基本線はたてたものの、これがうまくいくか私としてはあまり自信がなかった。しかし、個性的できわめて有能な宮下、浜野両副隊長の指導の下、実践段階では殆ど案ずることなくうまく事が運んでいった。こうした形になっていくのに、さして議論をするまでもなく、お互いに理解のうえで自然に決っていった。この辺の運びについては西堀総隊長の役割が大きかった。

編成方針がきまれば、つぎは隊員選考にかからねばならない。隊員は日本山岳会を代表する最精鋭の隊員を選ぶという原則にのっとり、準備作業を積極的に担当してくれているＪＱＥ委員会のメンバーから一種の一般募集方式をとり選抜することにした。すなわち、各支部長からの推薦、有力な登山団体の責任者の推薦を受けた参加希望者に隊長、両副隊長が面接し、身上書提出、個人的意見の聴取、身体検査を通じて、各種データを検討、五十名ほどの候補者から西堀総隊長とも相談し十二月末に最終決定をした。隊員構成は、隊本部（大本営）三名（うち報道一名）、北東稜隊二十二名（うち報道十名）、北壁隊十四名（うち報道二名）、計三十九名という編成になった。隊員名については、本文末の付記㈠を参照されたい。

登山計画

隊員は東京からラサまで空路で入れるが、隊荷は東京―北京が海路、北京―ラサ間は陸路（汽車とトラック）となる。ラサからベース・キャンプ（約七五〇キロ）までは両方とも車である。隊荷が二月中旬までにラサに着くようにするには、十二月上旬に発送しなければならず、そのため十一月中に集荷と梱包を終っていなければならない。偵察隊の帰国を待っていられないから、手紙の情報を頼りに本隊の具体的な行動計画を練り、装備や食糧の準備にとりかかった。外貨費については心配がないが、遠征に行く者の本能として国内費は少しでも節約したいというので、現物の協力方を各方面へお願いしながら集荷作業を進めた。この期間に、大勢の会員諸兄やその友人の方々のお世話になった。洵に有難いことであった。

このような経過で、十一月上旬には基本的な隊の行動計画はほぼできていた。その要点は、一九八〇年二月二十二日先発隊（三十名）東京発、三月五日　本隊（九名）東京発、三月六日先発隊ＢＣ着、三月十一日北壁隊行動開始、三月十四日北東稜隊行動開始、三月十八日　本隊ＢＣ着、大本営設置、三月二十三日北東稜隊ＡＢＣ以上の行動開始、三月二十六日北壁隊ＡＢＣ以上の行動開始、四月下旬に登頂予定、五月二十日登山活動終了、五月二十五日ＢＣ撤収、六月六日東京帰着、であった（実際にはこのスケジュールより十日早く山を終った）。

チベット側の気象条件とＢＣ入り前後の高度順化のやり方、さらに両ルートのヤクによる荷上期間などを考慮し、われわれ隊員は四月中に登頂を目指すことを目標にした。ＢＣ入りまでは北東稜隊と北壁隊とは一つの隊として行動するが、それから先きは別々の隊となる。両隊のタクティクスの検討の結果、はからずも両方の登頂予定日にはそう大きな開きがないことになった。とにかく三月二十日ごろにＡＢＣを建設することを前半の一つの目標とした。実際の結果は、ＢＣ入りまでは計画通りに運んだが、ヤクの到着が少しおくれ、北壁隊の高所協力員に氷壁の登下降訓練

などをやらなければならなかったので、本格的な行動開始が遅れ、従ってＡＢＣ入りが多少遅れた。

ＡＢＣ以上の行動についても、三月末の荒天と四月上旬の強風などのために、計画より多少おくれ気味であったが、四月中旬からはかなり順調に動けて、四月二十一日には両隊共待望の八千メートルラインを突破できた。結局、四月二十九日に両隊は日を同じくして第一次攻撃の態勢に入り、当初計画の枠内で登頂ができたので、今回の登山計画はマクロ的視点からすると成功といってよい。しかし、ミクロ的には中国側の現地諸事情、それに対する我々の理解の不足などでこちらの思う通りにならなかったところが少なくなかった。また、両ルート共に最終キャンプの位置が予定高度より低く、その上の山の状況も予想外に悪く、最終の登頂行動では当初計画が大きく狂ってしまった。

（渡辺　兵力）

二、登山活動の概要

大本営生活

三月十七日、快晴の日に私たち本隊は大本営（ＢＣ）に着いた。ラサから自動車旅行で到着した私は、高度順化ができず、何か宙に浮いているような気分のままで運び込まれた感じであった。それでも一ヵ月近く顔をみなかった隊員諸君に会えて嬉しかった。ここＢＣは巨大なロンブク氷河の末端モレーンから二〇〇メートルほどはなれた河原にある。左右は荒涼とした茶色の岩山にかこまれ、北の方はロンブク谷が大きく開けて青い空とつながっている。冷たい殺風景なところである。しかし、南を仰げば、私の少年時代のイメージに浮んでいる見馴れた珠穆朗瑪北面の勇姿が、目前にひかえていた。何十年前の夢がやっとこの老骨の身になって現実となったのだ。

天幕は中国製のがっしりした大型のものが主力で、居住性は抜群であった。滞在中の大半は氷点下の生活であったが、乾燥しているせいか寒さを感じたことはない。毎日、朝夕食は中国料理、昼食は日本人の手製という方式で、食料カートンをあちこち探してラーメンなどを食べていたが、器用な神崎隊員がBCの住人になってから、甘味しいソバやスキ焼などにありつくことができて救われた思いであった。

心臓に欠陥のある私は、自分なりに体調をみて慎重に行動して、体力をつける努力をした。滞在中に数回の散歩行を独りで試みた。ロンブク氷河の右岸が上流に登るルートであるが、その左岸の山筋を西ロンブク氷河の分岐点が真近いところまで溯行してみた。東ロンブク氷河の方はかつての英国隊の第一キャンプ跡に行き、五十年前と思われるさびた鑵詰の残骸を拾ってきたりした。また、左岸の岩山を数百メートルほど登って氷河渓谷の大観を楽んだ。秘かな個人的希望としては、隊の行動に余裕があったら東ロンブク氷河のABCか、中央ロンブク氷河のロー・ラあたりに行ってみたいと考えていたが、この方は実現できなかった。

事業部制の会社の社長である私は、隊が順調に動いていれば何も仕事はない。両隊が出払ってしまうと、Yドクターと報道担当の島田隊員との三人だけで大本営生活を送る計画であった。ところが島田隊員の体調が思わしくなく、私たちのBC入りと代ってルクズに下りてしまった。

横山隊員が東ロンブク氷河に上ってしまった後、BCでの気象観測の仕事が私にまわってきた、また、両ABCから物資の注文がやってくる。その手配や輸送法の件で連絡官や会計係の人たちと交渉をする必要があった。社長の仕事はこうした雑件処理であった。四月に入ってからは東京と気象情報の交換がはじまり、ABC以上にいる横山隊員の定時観測結果を毎夕トランシーバーで受け、それと自分の観測値と一日の空模様とを打電する仕事ができた。毎夜、パタパタとタイプを打って無線局から送信してもらうのが私の日課となった。こうしてやるべき義務を課せられたことが、大本営生活に耐えていくのに大いに役立ったと思う。

それにしても、両ルートの登頂前後のころは大いに気をもんだ。なまじ無線通話器という文明開花の武器のあることは本当に善し悪しである。通話が何時でも完全にできるのであれば文句はないが、JAC、よみうり、NTVと三系統の無線システムが、大本営では通じたり通じなかったりして、やたらと気をもませられた。毎日の両隊の行動や状況を受けることは、報道の仕事として島田隊員が専門にやってくれたから私は結果だけをきいていればよかったが、ひとたび大本営側から何かを伝えようとするとしばしば不通になるので厄介だった。両隊のABC以上のキャンプ間ではトランシーバー通話がお互いにつつ抜けで、相方の状況が手にとるように判るらしい。その結果、両隊の間には良い意味での競争意識が湧き張り切った。一方が苦境にたつと他方が励ますという具合で、これもよかった。こんなトランシーバーの使い方は計画外のことで、現場の状況を隊員が文明を上手に利用した結果に外ならない。

登頂の二、三日前から私は急に忙しくなった。すなわち早くも撤収計画の立案が必要になったからだ。五月十四日BC撤収、二十一日北京着、そして二十四日には東京、という第一次計画案を作って、中国側と相談をはじめたのは五月一日のことである。それは両隊の第一次登頂隊が最終キャンプに入る前日だった。撤収は計画通りに運んだが、中国側が熱意のある協力をしてくれたお陰とはいえ、あまりうまく運んだのでわれながら驚いた。

北東稜からの登頂

古典的ルートである北東稜は、すでに五十年以上前に英国隊が頂上間近まで登っている。中国隊は二回（一九六〇年、一九七五年）の登頂に成功している。今回が第三登である。登頂だけをねらうのであれば小人数でやれると最初考えたが、その後、VTRカメラを頂上にあげて世界最高峯からテレビ映像をとろうという画期的計画に変更したので、ノース・コル以上は登攀隊員八名、テレビ担当隊員二名が最小限必要であろうと計画した。BCからABC（六五〇〇メートル）までのコースは問題ないとして、ノース・コルまでの荷上げ、さらに七五〇〇メートルの北稜のC

5への荷上げが、計画通りいくかどうかが最大のポイントと考えた。それから上は、日本人だけの力で登らねばならないから、長大な尾根道の荷上げに徹することのできる隊員を人選した。

BCとABC間は長い道のりであるが、幸いモレーンがつづいているので、ヤク輸送に依存できる。ヤク一頭が五十キロの荷を運んでくれるが、休養日を入れると一回の荷上げに一週間かかる。三月十四日からはじめて計十回、延べにして一五四頭のヤクが働いてくれて、ABCへの荷上げはほぼ完了した。隊員の方は十五日から行動を開始して、C1（五五〇〇メートル）、C2（六〇〇〇メートル）と中継キャンプに泊りながら高度順化をし、三月二十三日にABCの建設を終った。この期間は天候もよく順調に行動できた。ノース・コルへのコースは中国隊ルートに近いところを通って、二十五日にはじめてノース・コルにたった。このころから北稜は強風の日が多くなって、ルート工作や荷上げには風に相当悩まされた。北稜七五〇〇メートル付近にちょうど風道にあたるのか、すごい風が吹き抜け、C5を張るのには非常に難儀した。強風で行動中止を余儀なくされた日もあったが、北東稜隊は珠穆朗瑪名物の強い風との斗いに耐え抜いた。

ABCで指揮をとっていた浜野副隊長は、ABC入り以来腹具合が悪く、連日食慾がなくて日増しに衰弱していった。斎藤ドクターからきいて私もそれを承知していたが、副隊長としての責務を考えてギリギリまで下山をすすめなかったが、十二日、加藤隊員から容態がかなり悪いという知らせもあり、独力で下山できる限界に近いと判断して、十二日に遂に下山を命じ、代って加藤チーム・リーダーに、しばらくの間北東稜隊の責任をとってもらうことにした。副隊長が隊を離れる前後は北東稜隊が一つの苦境にたった時期である。

中国の高所協力員の人たちがC5まで積極的に荷上に協力をしてくれることになったので、強風の日が多かったが、四月十五日までに予定していた荷の大半をC5に集結することができ、北東稜隊の行動はこれで一つの山を越した。中国側の協力はこれで一応終ることになったが、十五日の夜、ABCで協力員への感謝パーティーが開かれ、こ

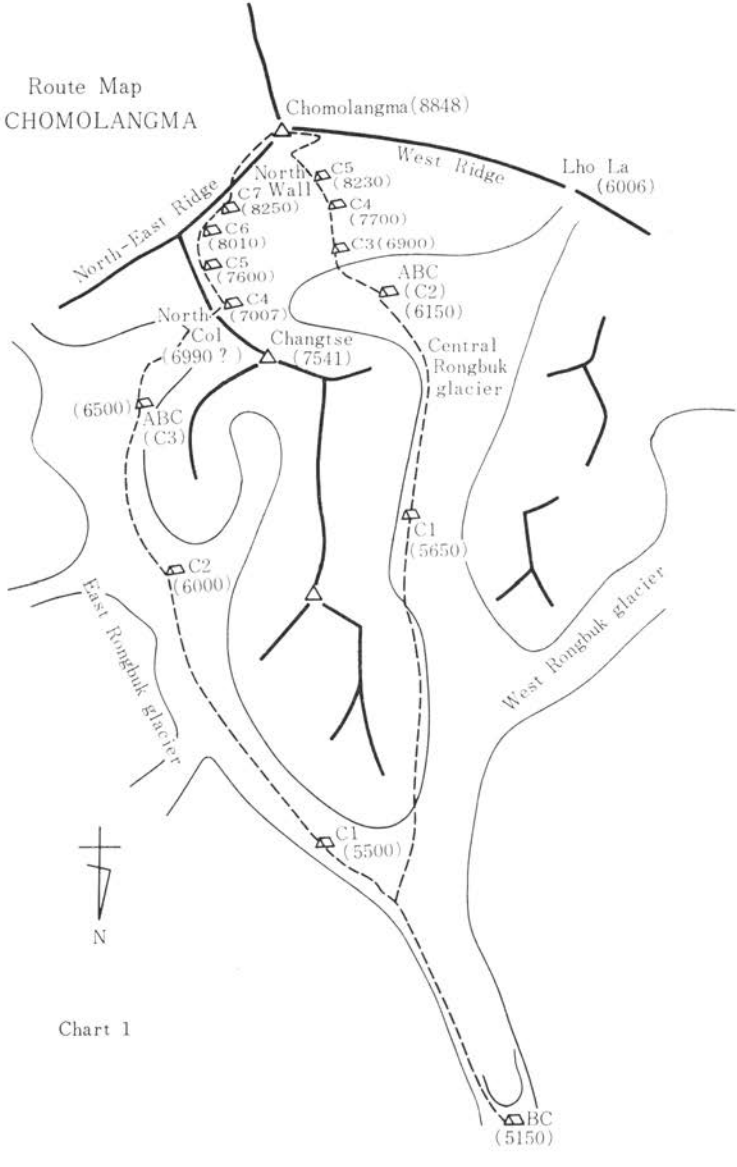

Route Map
CHOMOLANGMA
Chomolangma(8848)
West Ridge
Lho La
(6006)
North-East Ridge
North
C7 Wall
(8250)
C5
(8230)
C4
(7700)
C3(6900)
C6
(8010)
C5
(7600)
C4
(7007)
ABC
(C2)
(6150)
North
Col
(6990 ?)
Changtse
(7541)
Central
Rongbuk
glacier
(6500)
ABC
(C3)
C1
(5650)
C2
(6000)
East Rongbuk glacier
West Rongbuk glacier
C1
(5500)
N
BC
(5150)

Chart 1

れが副隊長の去ったあとの隊の団結を一段と堅いものにした。

北東稜隊の計画はオーソドックスなポーラー・システムに近いものであったが、激しい気象変化のため仲々計画通りにいかず、上部ではルート工作と荷上げとを並行するラッシュアタック的な行動をとらざるをえなかった。ＡＢＣからノース・コルを経てＣ５までの登路は大体氷雪であって、技術的には問題がなく、静穏な日なら能率があがった。十八日から再開した荷上げ期間は、午前は晴れても午後になると小雪がちらつく日がつづいたが、風は比較的弱かった。しかし、Ｃ５から先の北稜では逆層の岩場があらわれ、毎日の降雪で足場は一段と悪くなった。ために登行速度がおちて、Ｃ６は八千メートルを僅かに越えたところまでしか伸ばせなかった。気象情報では、二十一日～二十三日はジェット気流が南下し珠穆朗瑪に接近したときにあたったが、それを予知して行動をおくらせるわけにはいかず、荷上げを強行、強風に耐えがんばった隊員の努力のお陰で二十三日に必要物資の大半（約二三〇キロ）を第六キャンプ予定地に集結できたので、これで第一次登頂攻撃をかける一応の態勢がととのった。

四月二十四日、全隊員は再びＡＢＣに集結して、休養と登頂攻撃の準備に入った。全員が六五〇〇メートル以上の高所で一ヵ月の苦闘をつづけており、疲れが目立ったが、心は充実し燃えていた。二十六日午後、副隊長は全員に登頂攻撃の隊員の役割分担を通報した。登頂隊は加藤以下四名、二十九日を攻撃開始日にきめた。登頂は四日後になるが、この期間の天気の読みが大切である。ＡＢＣをスタートしたら行動を止めることはできない。荒天だからといって上方のテントで計画外の停滞をすると、酸素をはじめ一切の物資が不足して、決定的な失敗となるおそれがある。私はこのとき、つくづく珠穆朗瑪はでかい山だと痛感した。結果として、四月二十九日―五月四日は高気圧下にあって、南北の気圧差もそれほど大きくなく、天気は大きく崩れなかった。朝は晴、午後に雲がでて小雪といったパターンの日がつづいた。幸いにして強風の日がなかった。とくに加藤、中村（進）が八七〇〇メートル付近でビヴァークをした五月三日の夜は、年に何回もないと思われるほど風が弱い夜であった。われわれは最後のところで天気運に恵

まれたのだ。

北稜から北東稜の稜線にどこからうまく出るかが、このルートの一つの重要な鍵であろう。英国隊は、毎回大クーロアール寄りを登り、稜線に出おくれているようだ。中国隊はかなり早く出ているらしい。稜線に出ると下の方は広い尾根筋で登行は楽だというのが、一九六〇年の登頂者であった王富州連絡官の話であった。しかし、今回はC7をつくる日が降雪の翌日で、C6以上のコースが所によってかなりもぐり、また軽い雪が逆層をかくして非常に登りにくい条件になっていた。八五〇〇メートル辺りまでC7をあげる計画であったが、登頂隊、サポート隊が最大の努力を払っても八二五〇メートルまでしかあげられなかった。そこは北東稜の北面であって、稜線には出ていない。これで計画は大きく狂った。

五月二日の夜、C7とBCとの無線連絡で再び計画変更を決意した。すなわち四名の登頂隊を二名（加藤、中村(進)）に減らし、残る二名は第二ステップまで酸素を荷上げするサポート隊にまわってもらうことにした。

C7を三日の朝九時ごろ出発した攻撃隊は、第二ステップまでに想像以上に時間をくい、二人の登頂隊員が頂上に通ずる雪稜に出られたのが午後七時近くになってしまった。サポート隊は第二ステップの下で引きかえしている。BCでこうした状況を聞いていた私は、その日の登頂は無理かと思った。そのとき加藤から、中村（進）のペースがおそく、二人では日のあるうちに頂上にたてそうにないとつげてきた。テレビ隊のサポート隊員に不調者がでて、これまでにもかなりのロードがかかっていたらしい。そのうえ、二十キロを越える荷を背負って、途中で撮影をしながらの登攀である。さすがに強い同君も、加藤のペースについていけないらしい。結局、加藤が単独で上に向うことを許可した。登頂は時間切れ目一杯の午後八時五十五分で（北京時間）あった。加藤は日のあるうちに中村と別れたところまで下り、その近くの雪洞の堀れるところでビヴァークした。中村（進）は加藤の登り姿を一カットとって、第二ステップ下の酸素のデポ地点を求めて独りで下りだした。が、ステップの上でそれ以上の下降行動は危険を感じ、

そこでビヴァークした。この不測の事態に各キャンプは緊張の一夜を迎えることになった。しかし、天気が幸いし、二人共無酸素のつらい夜に耐え、翌朝合流し、自力で下山、四日の午後にC6から救援に向った山下、三谷隊員の出迎えに元気に応えた。

古典的ルートの北東稜は、近代装備と技術とを有するわれわれなら比較的容易におとせると考えていたが、これは甘かった。この長大な尾根に、人間が通れるところはほんの僅かしかない。しかも、年によっては尾根の状況は大きくちがうらしい。決して意図したわけでないが、加藤隊のコースは、北東稜の第一ステップに出るまでは新しいルートを開いたような結果になった。いずれにせよ、この有名な登路から珠穆朗瑪の頂きに立つことができてわれわれは大きい喜びにつつまれた。

北壁の成功

北壁隊は、北東稜隊といささかちがった形の山登りをする。北東稜がオーソドックスであれば、北壁は近代的とでもいえようか。これは純粋の初登攀計画である。テレビは北東稜に集中したので、北壁の方は登ることに専心できることになった。隊員も岩や氷のクライマーを中心に編成してある。かつてエベレスト南西壁を手がけた宮下副隊長が、今度こそは北壁をおとしてみせると熱意こめて作りあげた登攀計画をもって、この長大な壁にたち向った。一見して南西壁より傾斜がゆるいから容易に見えるが、北壁であるが故に気象条件は悪く、逆層の壁が長くつづく。下の方は堅い氷の急な壁で落石こそ比較的少なかったが、少しの降雪によって山の姿は急変し、登攀は決してやさしいものではなかった。

中央ロンブク氷河はモレーンの発達が下の方で終るので、ABCまでヤクを使うことができない。五五〇〇メートルのC1までがヤク輸送で、それから上は六〇〇〇メートルのABCまで全て人力で荷を運ばねばならない。BC入

り早々に中継基地のC1を建設して、三月八日からヤク輸送を開始した（計五回、一二四頭）。三月二十四日には六一五〇メートルのABC建設を終った。北壁のルートは昨秋の偵察のときの試登で、第一の難関と思われる取付点の様子は大体判っていたが、壁の状況は秋のときよりも堅い氷が出ていて悪かった。この氷壁を初心者の中国人協力員に荷上協力をしてもらうわけで、山の状況もさることながら、隊の条件の方がより心配であった。氷壁行動の練習はABC到着後に現場で行なわれたが、勇気ある若手の協力員たちは見事に新しい技術を習得して、荷上協力の実績をあげてくれた。

約一週間で、C3予定地（六九〇〇メートル）までロープが伸び、四月四日には重広、小林、和田がC3に入った。これと併行して、日本人隊員と中国人隊員との混合荷上隊が上のキャンプへの荷の集積に努めた。荒天で行動を中止せざるをえない日もあったが、降雪量が少ないために大きな雪崩の危険はなさそうだった。ただ、いったん広大な氷壁にも吹雪が吹きあれると、身にこたえるかなりの量のスノー・シャワーを浴びるのが、登降中の難点であった。C3から上は一本の白い筋になった岩溝がルートとなる。傾斜は多少ゆるくなるが、上の雪田に出るまで幕営地はなく、C3（七七〇〇メートル）まで非常に長いコースとなる。結局、岩溝上にC4を建設するまでにはさらに一週間を要した（四月十八日）。C4は上部の登攀の拠点となる重要なところで、ここまでの物資集結が順調にいくかどうかが、北壁ルートの一つのポイントであった。きわめて少数の日本人隊員だけで荷上げし、さらに上へのルート工作をつづけることは非常にむずかしい。宮下副隊長からC4の荷上げに中国人隊員の協力が欲しいと連絡をうけた。私はこの要請を是非とも承諾してもらおうと、いささか勢い込んで王富州連絡官に頼んだ。連絡官の見解は協力的であったが、これは北京へ問い合せる必要があるということで、即答は得られなかった。二、三日して北京からOKがでた。これでC4以上のルート工作とC4への荷上げとが併行してやれるようになり、隊の行動が能率よく運ぶようになった。

四月十九日からC4上の大雪田からホーンバイン・クーロアール入口に向けてのルート工作がつづけられ、二十日には北壁隊も八千メートルラインを越えることができた。クーロアールは下部はかなりの幅をもった直線的な溝であるが、途中にアイス・フォールや狭いチムニーがあらわれてルート工作がかなり手間どった。八千メートルを越える高度でかなりむつかしい岩登りと氷壁登攀を強いられた。この難関の突破には、北壁隊々員の力量とチーム・ワークが見事に発揮された。こうした苦闘の結果、八三五〇メートル付近の岩壁の下に、C5予定地がみつかり、四月二十五日にはそこへの必要物資の荷上げがほぼ完了した。北東稜隊と奇しくも相前後して、第一次登頂攻撃態勢がととのったわけである。

BCから北壁の全貌がよく見える。望遠鏡でみているかぎり、C5ができれば登頂はかなり有望と思われた。北東稜と北壁のABCの高度を比較すると、頂上までの高度は北壁の方が約二七〇〇メートル、北東稜は二三〇〇メートルであるが、距離の短い北壁はABC以上のキャンプは三つ、北東稜は四つ作らねばならない。したがって、同日にABCを出発すると北壁隊は一日早く頂上に立てる勘定になる。北壁隊は、足の凍傷が気づかわれる高見を待機させ、重広、尾崎、和田の三隊員で第一次登頂隊を組み、ついで小林、宇部両隊員を第二次登頂隊として、三十日にABCを出発することに決めた。こうなると第二次隊は五月三日に頂上に着くから、うまくいけば北東稜隊と頂上でドッキングができるかも知れない。隊員の努力と調子とを考えると、こんな夢が隊員の間にふくらんでいくのも不思議ではなかった。

四月二十九日、三十日、五月一日と二つの登頂隊の行動は順調に運んだ。いよいよ第一次登頂予定の五月二日である。この日は午前中快晴でBCから北壁が眺められた。望遠鏡やカメラの砲列をしいて、BCは全員が北壁に目を向けていた。しかし、前日の降雪が大量にクーロアールにたまって、C5をたった第一次登頂隊はひどいラッセルを強いられた。結局、ホーンバイン・クーロアールを抜け切らない地点で時間切れになって、アタックを断念した（午後

五時頃)。その少しあとに、第一次隊の後を追ってC5に接近していた小林、宇部が、クーロアール入口の直下で雪崩にまき込まれてしまった。小林のいたところより少し上から発生し、小林も、二、三十メートル流されたが、幸いユマールがきいたのか停止した。しかし、小林より一ピッチ下にいた宇部はこの雪崩をもろに受け、固定ザイルの強度を越えた重量がかかったのであろう、ザイルが切れて一気に二千メートルを落下し、中央ロンブク氷河の取付点の近くまで転落してしまった。

重広隊が引き返すという報告を、トランシーバーで受けて間もなく、宇部隊員行方不明の報せが宮下副隊長からあったとき、一瞬血の気が引いていく思いがした。しかし、私は、ここであわててはいけないと必死に自分にいいきかせた。私は、不幸にして宇部君は助からないとしても、壁に残る四名が無事に下りてくれるように祈った。薄暗い雲の中に全く姿をみせない北壁を望見して、私は「珠穆朗瑪は失敗に終るのではないか」という猛烈な悲観的想念におそわれて、しばらく天幕のベットにねてしまった。北東稜隊の方の最終キャンプが伸びず、やむなく登頂隊の再編成をして、まさに背水の陣で明日アタックをかけようという日に、宇部君の遭難である。五月二日の夜は、われわれにとってまったく最悪の日であった。

だが、北壁隊は見事態勢をたてなおして、五月七日に重広、尾崎の二隊員が最後の登頂隊としてABCを出発した。八日、九日と天気はそれほどよくなかったが、賀集、磯野がサポートを引き受け、九日の夕方C5に入った。翌十日は晴天で、前回同様にBCから北壁が望見できた。われわれは例によって北壁のドラマをかたずを呑んで見守った。残念なことに午後になると北壁は雲の中に没してしまった。しかしそれまでの二人の足どりは意外におそい。クーロアールを抜けてから雪田を西へトラバースして、西稜に抜けるルートをたどったところまでは確認したが、日没が迫っているのに、その後の行動がよく判らない。北東稜のときと同様に胃の痛む思いがつづいた。酸素が切れてからも西稜の難路を登りつづける頑張りをみせて、二人は遂に午後八時五十分、頂上に立った。帰路ビヴァークした二

人は、翌日かなり危険な下降路を無事に下りてきた。とうとう北壁の初登攀が成った。これは大きい成功であった。

登山と科学

ＪＱＥ隊は登山専門の隊で科学研究はやらないことにした。チベットは各方面の科学分野できわめて興味深い地域であるから、科学調査をやりたかったが、隊員枠や登山行動を考えると科学調査を目的に入れる余裕はなかった。ただ登攀隊員の中に、地質や氷河の研究者がいたので、余裕があれば調査を許可することにした。それではＪＱＥ隊は科学と無縁かというと、そうではない。私は以前から、登山の安全性は登山者とその環境である山との間に一定の調和（動的均衡状態）が保たれていれば保障されると考えていた。この調和を確保するには、可変的な登山者の調子と山の状態とを科学的にとらえることによって、かなり可能になる。したがって登山者の生理と山の気象は科学的観察の対象にすべきだという理屈になる。幸い今回は医師隊員が三名参加した。また気象については、京大の中島暢太郎教授と気象庁の協力がえられることになった。そこで、高所生理と珠穆朗瑪の気象を科学的手法で観測し、その結果を登山活動に活用した。

高所生理関係では各隊員に健康手帳をもたせて、毎日、自己診断記録を記入させるようにした。私の経験からしてこれを忠実に守るのは至難であるが、手帳をもたせることが隊員の自己管理に役立つのである。高所における隊員の健康状態を客観的に知るのには主として心電図診断法をとった。出発前、ラサ、ルクズ、ＢＣ、ＡＢＣ等で、全員に近い診断（一九八例）を行った。心電図だけで判断する方法には問題もあろうが、諸般の条件を考えて、この手法に限定した。この結果の専門的な報告は公式報告にゆずるが、全隊員が医師の診断と助言にしたがい、隊全体の健康管理を安全に遂行できた。

気象については、東京で作った珠穆朗瑪付近の五〇〇ミリバール天気図の情報を送信してもらい、これを踏まえて

現地での観測と観天望気によって毎日の天気を考えていった。五〇〇ミリバール天気図は気象庁が日本の天気予報のために作ったものから北緯40度、30度、東径80度、90度付近の四点の気圧の推計値を、毎日東京時間の午後九時の定時で計出し、予報値と実況値とを毎週火曜と金曜にBCに送信してもらった。このデータ処理は中島教授の方法で気象庁で計算し、それに教授の判断を加えたものである。この外に、「ひまわり」の写真から珠穆朗瑪上空の雲を観察して山の天気を推察した結果と、ジェット気流の推定位置などが送られてきた。現地では横山隊員の移動観測とBCの定点観察とを行い、毎日東京に送った。

珠穆朗瑪北面は強い偏西風をまともに受けるので、北東稜ルートでは強風が吹いた。しかし北壁の方は風道の懐にはいるのか、風の方はそれほど問題ではなく、むしろ小雪が嫌であった。総じて逆層帯の多い北壁は、四月中旬から多くなった午後の小雪が登行活動の大きい障害になった。とくにクーロアールにこの雪が流れ込んで予想外の積雪をもたらした。北東稜でも北壁でも最終キャンプ以上の行動に想像外の苦闘をしいられたのは、全てこの小雪のせいだったといってよい。チベット側は降水量が非常に少ないから、雪崩の心配は本来少ないのであるが、われわれの事故の全てが雪崩であったことは全く皮肉である。

（渡辺　兵力）

三、北東稜隊行動日誌

ノース・コルへ

三月八日　中国高所協力員に対する登山訓練。ヤクが予定通りに到着しないため、日程を一日ずらすことにする。

三月九日　甲斐、山下の二名、北壁用荷上げのヤク隊とともに、C1の途中まで往復。中村（省）らは、高度順化

を兼ねてルート偵察を行なう予定であったが、喉の痛み、頭痛など、身体の不調を訴える者が多く、出発を延期する。入山以来、天候が安定せず、いやな風が吹き、土ぼこりがひどい。中国高所協力員の登山訓練を続行。

三月十日　加藤、中村（省）、小原、横山とテレビ班の中村（進）ら五名、BCを発ってC1入り。甲斐、山下は前日と同様の行動をする。本日をもって、高所協力員の登山訓練を終了。新聞班の島田、シガールを発ってBC入り。

三月十一日　加藤、小原、横山はC2の途中まで、ヤクの通過をスムーズにするためのルート修理を行なう。中村（省）は逆ボッカ。三谷C1往復。浜野、西山、神谷は高度順化のため、東ロンブク氷河の出会いまで往復。テレビ班の五名、BCに帰着。

三月十二日　晴。加藤ら三名は前日と同様の作業を行なう。他は全員休養。BCの朝昼兼用の食事は羊のバーベキュー。うまい。

三月十三日　快晴。珍しく風がない。頂上の旗雲が消えている。明方気温、零下二十度。これまでの最低気温である。浜野ら七名、高度順化のため、BC付近の山に登る。加藤ら四名、BCに帰着。

三月十四日　晴のち曇。ヤクに積むための荷物の仕分け、梱包作業。ヤク三十頭、C3に向けて出発。

三月十五日　霧のち晴。ヤク六頭C1へ、八頭がC2に向けてそれぞれ出発。新聞班の島田、体調不良のためシガールに下山。他の隊員は全員休養。C4、C5間の高所協力員に関する日本側行動案について、連絡官張俊岩、管理員王振华よりきつすぎるとの申し出があり、再三話し合ってきたが結論が出ず、持ち越しとなる。われわれの案通りに動いてくれなければ、北東稜の計画を完遂することは難しく、不安が残る。

三月十六日　晴のち曇。浜野ら十一名とテレビ班の中村（進）ら三名、午前十一時二十分、北壁隊宮下副隊長らに見送られ、BCを出発、C1に向かう。ロンブク氷河のモレーン上を歩き、高巻きして東ロンブク氷河に入り、山腹を辿る。午後三時頃、C1予定地（五五〇〇メートル）に到着。全員元気。なおテレビ班の田代ら二名はC1を往復

Plate 1-(a)：チョモランマ，ノース・コルC4より北東稜を望む。
Chomolangma, North-east Ridge seen from C4 at North Col.
(Plate 1-(a)～(f), by JAC Chomolangma Expedition)

Plate 1-(b)：チョモランマ北壁。

North Face of Chomolangma.

Plate 1-(c)：チョモランマ北東稜8300m付近を登る。

Climbing the North-east Ridge at 8300m on Chomolangma.

Plate 1-(d)：チョモランマの夕焼け。

An evening glow on Chomolangma.

Plate 1-(e)：中央ロンブク氷河上6150mの北壁隊前進基地より北壁を見上げる。
Advance Base Camp on the Central Rongbuk Glacier 6150m at the foot of North Wall.

Plate 1-(f)：北壁ホーンバイン・クーロアール上部（上部雪崩横を登る重広と尾崎。下方
C 5 -8230m）。

Upper part of Hornbein's Couloir (Shigehiro and Ozaki climbing side
by an avalanche. C5-8230m seen at the bottom).

し、BCに戻る。

三月十七日　快晴。順化の進んでいる加藤、中村（省）、横山はC2入り。テレビ班の中村（進）ら二名、ヤクで運べないテレビ用機材の荷上げのため、C2を往復。きつい行動である。小原ら七名はキャンプ付近の山に登り、高度順化をはかる。およそ六〇〇〇メートルまで登る。C2の往復をしないのは、同キャンプまでの距離が長く、むしろ体力の消耗をきたすと考えたからである。

三月十八日　快晴のち小雪。C2の加藤ら三名は休養。浜野ら八名は午前十時三十分、C1を出発。高巻きをして高度を稼ぎ、東ロンブク氷河が急激に南に向きをかえるあたりから、両側に見事に発達した氷塔が並ぶモレーン上を辿る。ゆるやかな尾根のような感じである。第一陣の降旗、山下、三谷は午後三時三十分頃、最後尾の神谷は同七時二十分、C2予定地（六〇〇〇メートル）に到着。

三月十九日　快晴のち晴。加藤、中村（省）、横山はC3往復。登り三時間、下り一時間半。他八名は休養。小原が頭痛、降旗は喉の痛みを訴え、甲斐は痔。五〇〇〇メートルに続く高度順化の第二の関門は、このあたりの高度らしい。腰をすえてかかることにする。テレビ班の中村（進）ら二名、C2入り。

三月二十日　快晴のち晴。中村（省）、山下、三谷はC3往復。浜野、西山、降旗、神谷はC3の途中まで登り、高度順化をはかる。加藤ら四名とテレビ班はいずれも休養。せせこましいC1と違って、C2は景色もよく、気持ちがよい。

三月二十一日　快晴。浜野ら十名、C3往復。神谷は途中まで同行。甲斐、佐藤は休養。東ロンブク氷河のモレーンから氷河を辿ると、チャンツェのすそのC3予定地（六五〇〇メートル）に達する。途中、ヤクの血痕をしばしば見る。テレビ班の木村ら三名、C2入り。

三月二十二日　曇のち雪。加藤、中村（省）、横山、山下、三谷の五名、C3入り。小原、甲斐とテレビ班の中村

（進）ら四名、C3往復。西山、降旗、神谷はC3の途中まで往復。浜野、テレビ班の佐藤は休養。雪が降ると、ヤクの行動が制約される。この日、せっかく上がってきた八頭は上方に向かわず、BCに戻る。

三月二十三日　晴。C2、C3間は無線が通じない。甲斐が連絡のため、C3を往復する。降旗の咳がとまらず、また熱があるため、BCに降ろすことにする。テレビ班の中村（進）ら四名、上部撮影のため、C3の途中まで往復。

三月二十四日　晴のち風雪。C3の加藤ら五名、風雪の中で頑張り、六八五〇メートル付近までルート工作し、午後七時二十分帰幕。浜野ら五名と、BCから同行したABC勤務員（コック）二名、C3入り。浜野らは午後三時四十分に到着。西山は五時三十分、神谷は六時。二人とも疲労困憊の様子。本隊の長谷川、新聞班の江本、北川、管理員の王振华と高所協力員十四名、BCを発ってC1入り。降旗、BCに帰着。斎藤ドクターの診断によれば、気管支肺炎とのこと。

三月二十五日　晴。横山、山下の二名、ルート工作のため、午前十時にC3を出発。午後四時三十分ノース・コルに到達し、六時二十分帰幕。C3、C4間の固定ロープ計七五〇メートル。テレビ班の中村（進）ら三名、C3入り。田代ら二名は、C2からC3を往復。新聞班の北川と中国服務員十五名、C1を発ってC2入り。

三月二十六日　霧のち風雪。王振华と高所協力員十四名、C3に到着。BCでの渡辺隊員、王富洲連絡官を交えた話し合いで、C4、C5間の行動については、日本案に同意することに決したとのこと。一安心である。

二月二十七日　晴。加藤ら六名は、ノース・コル上のC4（七〇〇七メートル）への荷上げ。浜野と中村（進）は六九〇〇メートル地点まで往復。新聞班の北川とテレビ班の田代ら二名、C3入り。長谷川は、C2からC3を往復。C3に到着以来、連日強風が吹きまくっている。中国製の大テントがつぶされ、張り直す。小原、テレビ班の佐藤、高所協力員の桑布、調子悪し。

三月二十八日　晴。体調のよい加藤、中村（省）は、強風をついてC4に荷上げ。中村（進）が同行する。他の者

は疲労気味で休養。長谷川と新聞班の江本、C3入り。休養といっても仕事はある。明日荷上げする荷物の用意、協力員に対するユマールの使い方の講習など。BCより連絡があり、近日中に上がるはずのガソリン九缶、酸素ボンベ十二箱が積み残しになったとのこと。四月四日のヤク便で上げてもらうよう依頼する。テレビ班の岩下ら二名、BCを発ってC1入り。

三月二十九日　高曇り。横山ら四名と高所協力員の十二名は、それぞれ十七キロ前後の荷を背負ってC4に荷上げ。午前十時C3出発、午後四時ノース・コルに到着、五時三十分帰幕。協力員の桑布、呉究は体調不良のため休養。

三月三十日　風雪。昨夜来からの風雪がやまず、全隊停滞を決める。中国製大テントに大量の雪が吹き込むため、補修をする。当然のことながら、ヤク隊到着せず。

三月三十一日　快晴。C3では、ノース・コル斜面の雪崩を警戒して停滞。テレビ班の岩下ら二名、C2入り。斎藤ドクターと復調した降旗、BCを発ってC1入り。

四月一日　高曇りのち晴。加藤、中村（省）、C4入り。浜野ら七名と協力員十一名は、C4への荷上げ。新聞班の北川が同行する。長谷川が先頭に立ち、雪に埋まったロープを堀り出して進む。中村（進）が同行する。張祥、桑布、呉究の三名は、体調不良のため休養。斎藤ら二名、C2入り。体調を回復した新聞班の島田、BCに戻る。

四月二日　晴。C4の加藤ら二名は、七三五〇メートル付近までルート工作。長谷川ら六名はC4への荷上げ。中村（進）は荷上げ隊に同行してC4入り。新聞班の江本はC4往復。西山はノース・コルの途中まで。斎藤ら四名、C2よりC3往復。

四月三日　晴のち風雪。C4の加藤ら二名、激しい風雪をついて七五〇〇メートルまでルート工作。中村（進）は途中まで同行し、C3に戻る。ノース・コルから広いゆるやかな雪稜が一旦下り、七五〇〇メートル付近までせり上

がっている。その先は岩場である。

四月四日　晴。強風のため、しばらく待機した後の午前十一時、行動することに決定。長谷川ら五名と協力員十二名、C4への荷上げ。この日までにC4用と上部の物資、計一四三五キロを上げる。テレビ班の田代ら三名、同行して取材。加藤ら二名、C4よりC3に戻る。本日をもって、第一期計画を終了。

強風をついて

四月五日　晴のち高曇りのち雪。斎藤、降旗、テレビ班の新井の三名、C4往復。西山も途中まで同行。

四月六日　晴。前日に引き続き、予定通り全員休養。心電図検査。午後よりミーティング。王振华から、上部のルートについて説明を受ける。戦術の検討に移り、加藤は速攻を、長谷川は慎重論を主張する。結果として折衷案に落ち着く。その内容は以下の通りである。すなわち、C5への荷上げ量と荷上げ能力を再検討した結果、協力員に規定通りの重量を背負ってもらうことにより、日本人隊員の荷上げ回数を減らすことが可能となる。したがって、第二、第三期計画を並行して行なうことができ、それにより、四日の日数減となることから、第一期の遅れを取戻せるというものである。

四月七日　晴。このところ、無風の日が続いている。加藤ら、七名とテレビ班の中村（進）ら三名、王振华と協力員十一名はC4入り。斎藤、小原、降旗、江本、新井の五名、C4を往復。この日、新鮮な野菜と卵を積んでヤク三頭が到着。

四月八日　晴。加藤、中村（省）はルート工作のために先行し、あとを追った山下、三谷、中村（進）と共にC5（七六〇〇メートル）入り。長谷川、横山、甲斐と協力員十一名は、それぞれ十四キロ前後を背負ってC5への荷上げ。降旗と新井はC4入り。

四月九日　快晴。C5の加藤ら五名、強風で動けず。テントを補強して、キャンプを守るために全力を尽くす。その中で、協力員九名はC5直下まで荷上。長谷川ら四名とテレビ班の新井は途中から引き返す。この後、降旗、新聞班の北川、テレビ班の田代ら三名、C3に下る。

四月十日　晴。C5の加藤ら五名、強風をついて出発。逆層のもろい岩場から雪の斜面を進み、右上方を目指すと、再び逆層のスラブが現われる。予想を上回る困難なルートである。悪条件下でよく奮闘し、八〇一〇メートル地点に物資をデポ、C5に引き返す。長谷川、横山、甲斐は、C4よりC3に戻る。

四月十一日　快晴。加藤、山下、三谷の三名は、連日の強風にもかかわらず、C5より前日のデポ地点まで荷上げを敢行。C3の浜野と連絡の上、ここをC6とすることに決定。中村（省）は右手第四指に凍傷を負い、中村（進）と共にC3に戻る。テレビ班の松野、胃痛のためBCに下る。

四月十二日　晴。加藤ら三名、C5からC3に戻る。かわって、長谷川、小原、横山、甲斐、降旗とテレビ班の新井の六名、協力員十一名と共にC3を発ってC4入り。この日、協力員が七五〇〇メートル地点に荷物をデポし、C5まで登らないことについて、C3に到着した王富洲連絡官を交えて話し合う。議定書によれば、七五〇〇メートル以上では酸素を使用させることになっているが、七五〇〇メートルには適当なキャンプ地がなく、また酸素の余裕がないことを説明する。中国側はこれを了承し、七六〇〇メートルまで荷上げを引き受けてくれる。夜、浜野の十二指腸潰瘍が悪化、点滴を受ける。

四月十三日　晴。長谷川ら五名、七四五〇メートル付近まで荷上げし、C4に戻る。協力員十一名は強い風の中を前進し、前日の約速通り、ピストン輸送で七五〇〇メートルの荷をC5まで運び上げる。浜野は中村（省）、西山、ABC勤務員の久辺に付き添われ、C2に下る。

四月十四日　快晴。計画の第二段階に入ってから間もなく、連日強風が続いている。長谷川、甲斐と協力員十一

名、C4からC5に往復して荷上げ。降旗は途中まで。C5のテントがつぶされており、修理をする。この後、横山、甲斐、降旗と協力員七名はC3に下る。浜野らはC2からC1へ。途中、BCに下っていた斎藤ドクター、北壁隊の尾崎、テレビ班の智片の出迎えを受ける。

四月十五日　快晴。協力員三名、C4からC5を往復して荷上げ。その後、停滞した一名を加え、長谷川、小原と共にC3に下る。下に降りた中村（省）もC3に戻る。浜野らはBCに到着。加藤チーム・リーダーと交信。加藤隊、長谷川隊を解体し、選抜チームを新たに編成して、予定通りの物資をC6に荷上げること。C4、C5間の荷上げを、残りの隊員で行なうこと。C6、C7用のテントを、破損したC5用のテントの代わりに使用しないことなどを話し合う。C3では夜、任務を終えて下山する協力員のために慰労会を開いた。なごやかな雰囲気であったとの報告あり。

四月十七日　曇。午後、今後の方針についてミーティング。王富洲以下中国服務員九名、C3を発ってC2へ。体調不良の張祥、桑布はすでに解雇しており、四名の高所協力員をC3に残すこととする。西山、テレビ班の智片、ABC勤務員二名、BCからC1へ。

四月十八日　晴。加藤ら八名、新聞班の江本、テレビ班の岩下ら四名、C3を発ってC4入り。C5の再建とC6への荷上げを目指す。甲斐は痔で休養。西山ら四名、C1からC2へ。王富洲ら九名はBCに帰着。

四月十九日　快晴のち晴。加藤ら八名、それぞれ十五キロ前後の荷を背負ってC4を出発。中村（進）が同行する。C5の再建作業中に風雪が強まり、全員C4に引き返す。西山と勤務員二名、C3入り。

四月二十日　曇のち晴。加藤、中村（省）の二名、C5、C6間のルート整備をするため、一足早くC5入り。C4の他の隊員は休養。テレビ班の岩下ら三名、C3に下る。智片C3入り。

四月二十一日　快晴。風がやんだ。加藤ら二名、荷上げを兼ねてC6迄のルート整備を行ない、C5に戻る。長谷

川、降旗、山下、三谷の四名、C4を発ってC5入り。中村（進）同行。横山は膝を痛めて休養。小原はC3に戻る。

四月二十二日　快晴のち曇。加藤ら六名、C5からC6を往復して荷上げ。中村（進）が同行して取材。横山は、ノース・コル直下のルートを補修。

四月二十三日　快晴。また強風が吹きだした。しかしもう一回の荷上げが是非とも必要である。降旗、山下、三谷はC6を往復。山下はそのままC4に下る。加藤、中村（省）はC5からC3へ。本日をもってC6への荷上げ（二三〇キロ）を完了、アタック態勢が整った。斎藤とテレビ班の松野、BCを発ってC1へ。

登頂成る

四月二十六日　快晴。晴れてはいるが、風は相変わらず強い。心電図検査。斎藤ドクターによれば、かなりの隊員に乱れがあり、とくに長谷川に変調が見られるとのこと。午後、第四期計画の人員配置について発表。アタック隊、加藤、中村（省）、三谷、中村（進）。サポート隊、甲斐、降旗、山下。他に、C5に長谷川、横山が、C4に斎藤、小原が入り、C3には西山、神谷が待機する。

四月二十七日　快晴。全隊休養。東京からの気象予報、横山の意見、神谷のデータなどを勘案し、C3の出発日を四月二十九日、頂上攻撃日を五月三日とすることに決定。

四月二十九日　快晴のち曇。加藤ら七名、新聞班の北川、テレビ班の中村（進）ら三名と協力員三名、C3の残りの隊員、服務員に見送られて出発。C4に入る。テレビ班の木村、松野はBCへ。

四月三十日　曇のち雪。加藤らアタック隊四名と甲斐らサポート隊三名、C4を発ってC5入り。小原はそのままC4に滞在。斎藤、長谷川、横山と新聞班の江本、C3からC4へ。C4の協力員二名、中国科学院から依頼のあった気象器具の取付けのため、C5を往復し、うち一名は北川と共にC3に下る。

五月一日　晴のち曇。昨夜の雪で、珠穆朗瑪はすっかり白くなった。アタック隊とサポート隊、C5を発ってC6入り。

五月二日　晴のち曇。アタック隊とサポート隊、C6を発ちC7建設に向かうも、逆層のスラブの上に積もった不安定な雪のためにピッチ上がらず、予定より約三〇〇メートル低い八二五〇メートルにC7建設を余儀なくされる。C6から前進する場合、直上して稜線に達するルートと、北東稜の斜面を右上方に辿るルートが考えられるが、加藤チーム・リーダーは、直上ルートは固定ロープが必要であり、現在の北東稜隊にはその手持ちも時間的余裕もないことを理由とし、後者を選んだ。午後、北壁の宇部隊員、雪崩により行方不明との報を聞き、ただちに行動中の隊員に伝える。サポート隊は途中で酸素が切れ、午後十時三十分、C6に帰着。疲労はなはだし。夜、C7と交信。予定では四人が一本ずつの酸素ボンベを持ち、八時間以内に頂上を往復するはずであったが、キャンプ位置が低く、それが不可能となったため、北東稜隊の目的、すなわち隊員のうちの一人でも頂上に立つことと、VTRを頂上に持ち上げることを考え、中村（省）と三谷は急拠サポートにまわり、加藤と中村（進）が、二本ずつのボンベを持って頂上を攻撃することとする。C3に撤退することも考えたが、物資集積地であるC5の酸素量が、睡眠中に多量に吸いすぎたため、わずかしかなく、再び攻撃態勢を整えるためにはC3からの荷上げが必要であり、隊員の疲労が心配であること、攻撃時期を遅らせると、さらに大量の降雪が予想されることなどから、攻撃の続行を決意した。

五月三日　曇。加藤ら四名、午前九時C7を出発。主稜線に達する迄は快調なピッチであったが、第一ステップの通過に予想外の時間を要し、午後二時五十分、第二ステップの基部に到着。中村（省）、三谷のサポート隊は任務を果たし、ここより引き返す。午後八時C6着。午後七時二十分、八七五〇メートル地点にいる加藤から、中村（進）のピッチ上がらず、このままでは日没前に頂上に着けないとの連絡あり。単独で頂上を目指したいとの加藤の申し出を了承、中村（進）には、現在地点にとどまるよう指示する。加藤、午後八時五十五分、頂上に立つ。帰路、加藤は

八七五〇メートル地点で、中村（進）は第二ステップ上で、それぞれビヴァーク。この日、降旗、山下は、上に向かった四人のために、酸素ボンベ四本を八二〇〇メートルにデポし、C6に戻る。

五月四日　快晴のち晴。午前八時二十五分、加藤、行動を開始。間もなく中村（進）と合流し、下山を続ける。午後三時二十五分、第一ステップ下で山下、三谷の救援隊と合流。加藤は手足に凍傷を負い、中村（進）は酸素欠乏でほとんど視力を失う。午後十時二十五分、C6に到着。同キャンプの中村（省）、降旗は、キャンプの収容能力の関係からC6を発ってC4に下る。

五月五日　晴のち風雪。激しい風雪をついて、加藤、甲斐、山下、三谷はC6を発ち、C3に下る。中村（進）は、C5を出て七八〇〇メートル地点迄出迎えた長谷川、横山と共にC4入り。斎藤ドクターの手当てを受ける。

五月六日　晴。斎藤ら五名、C4を撤収してC3へ。これで全員がC3に戻った。

五月七日　晴。斎藤ら四名は、C3を発ってC2へ。C3の他の隊員は撤収準備。故宇部隊員の遺体、BCに帰着。ただちに荼毗に付す。

五月八日　曇のち雪。C2より斎藤ら四名、C3より加藤ら八名、それぞれBCに帰着。

五月九日　曇のち雪。テレビ班の佐藤、智片、C3からBCへ。故宇部隊員の碑を、BC近くの小高い丘の上に建立。ヤク三十頭、C3より荷を積んでBCに帰着。

五月十日　快晴のち晴。中村（省）ら三名、C3からC1へ。長谷川、甲斐と協力員三名、C3からBCに帰着。この日BCでは、終日北壁隊のアタックを見守る。

五月十一日　快晴のち晴。中村（省）ら三名、C1からBCへ。これで北東稜隊は全員BCに戻った。北壁アタック隊のC2帰着に歓声がわく。

五月十四日　晴のち曇。故宇部隊員と、中国協力員、王洪宝、ニマザシ、ロランの慰霊祭をすませ、BCを撤収し

てシガールに下る。

（浜野　吉生）

四、北壁隊行動日誌

中央ロンブク氷河の荷上げ

三月八日　曇時々晴。高見、重広以下で北壁の中国高所協力員八名の氷雪技術訓練開始。午前は装備の点検、着脱、午後は近くの凍った滝で登、下降練習。始めて使う二重靴、出ッ歯アイゼン、ゼルプスト、ユマール、八字環に目を輝かせている。スリップした協力員を止めた高見が掌に裂傷を負う。ヤクが五十頭位集まることが確実となる。

三月九日　曇時々晴。重広、高塚以下北東稜隊員の応援を得て中国協力員の訓練。北壁管理要員の陳さんが一九七五年の登山の折かかった凍傷で、左手指を落しロープを握れないことが解り愕然。以後マネージャー役に徹して貰う。宇部、尾崎、和田、北東稜管理要員王振华、協力員十六名と共にC1入り。標高五五五〇メートル。氷塔群のそばのモレーン上に設営。高見と五十キロ平均背負ってヤク二十八頭C1往復。十六時間を要し午前三時BC着。但し一日行動、翌日休養である。

三月十日　晴のち曇。風強し。中国協力員、前日同様訓練。ヤク二十頭C1往復。高塚C1へ。宇部以下C2予定地へ。中国協力員十四名、十キロの荷を背負いC2下のデポ地往復、可成り厳しい荷上げ。翌日より十七キロ背負う。

三月十一日　晴、風強し。中国協力員は四日目の最終訓練。格段の進歩とコーチ陣は喜ぶ。ヤク三十一頭C1往復。宇部、尾崎、協力員十三名とC2往復。C1では荷上げの厳しいこと、休養日の少ないこと等の不満で、隊員と

管理要員の間に感情的対立がある。三日間行動、一日休養の行動計画ではどうしても出来ないとの主張。

三月十二日　晴、風強し。ヤク二十頭C1往復。宇部、尾崎、和田BCへ戻る。

三月十三日　晴。神崎、伊丹、大島（報道）、訓練を終了した北壁の陳管理要員、協力員八名、炊事員一名と共にC1へ。北東稜協力員十一名C2へ。十七キロの担荷で往復六時間余が可能となった。若い中国隊員、殊に西蔵族隊員は全く高度に強く、歩くのも速い。

三月十四日　晴。高見、小林C1へ。神崎ら協力員十九名とC2往復。

三月十五日　晴。重広、賀集C1へ。ヤク五頭C1往復。高見、小林C2往復。

三月十六日　晴。高塚、宇部、和田、江本（北東稜報道）C1へ。重広、賀集、協力員二十一名C2往復。

三月十七日　晴のち曇。高塚、和田、協力員二十一名C2往復。夕方、本隊渡辺隊長以下八名BC入り。皆元気なのに安心。再会を喜ぶ。

三月二十一日　晴。神崎以下隊員十一名通訳謝軍C1入り。愈々BCともお別れ。中国炊事員が日本食を作ることに難点があり、C1以下北壁隊では水つくりから食事全てを隊員自身でやることになる。北壁協力員八名C2往復。北東稜協力員十二名BCに下山。北壁隊の為C1、C2間の荷上げに協力して呉れて有難う。

三月二十二日　曇。BCでは渡辺隊長、宮下、長谷川、王富洲、張俊岩両連絡官、王振华北東稜管理要員を中心に、北壁隊荷上げの反省、北東稜の今後の計画につき延々七時間の会議。C1の神崎以下十一名と協力員八名C2往復。

三月二十三日　晴。宮下C1入り。

三月二十四日　晴のち曇。磯野高度順化の為C1入り。神崎以下隊員、協力員C2往復。高見、宇部、尾崎C2入り。北壁、ノース・コル、チャンツェに三方を囲まれた標高六一五〇メートルの氷河上キャンプ、C2を前進根拠地

（ＡＢＣ）とする。

三月二十五日　晴。宮下以下隊員、協力員Ｃ１よりＡＢＣ往復。高見隊、北壁の取付にルート工作開始。夕方、北東稜隊のノース・コル到着を聞き、そのペースの早さに驚く。

三月二十六日　晴のち曇。協力員八名ＡＢＣ往復。高見隊北壁取付のルート工作。

三月二十七日　曇。強風し。Ｃ１での中国側食糧が大幅に喰込んでいるのを発見、厳重注意をすると共に、再度食糧計画を立てさせ荷上げの手配をする。隊員一日一キロ、中国人は一日二キロと決めていたが、実質は一日四キロを消費している。高見隊は取付にワイヤー梯子と一ピッチ五〇メートルフィックスを固定す。

三月二十八日　晴。宮下以下九名ＡＢＣ入り。高見隊は、五ピッチロープを延ばす。予想以上に落石が多く、北壁に陽が当り始めて二時間後、十二時からの二時間は殊に多くて危険。ＡＢＣは十時半過ぎ陽が当り始める。

三月二十九日　曇のち風雪。磯野第一回目の故国の便りをたくさん持ってＡＢＣ入り。賀集のみ一通も無くガックリ。協力員八名ＡＢＣへ荷上げ。高見隊好調にピッチを延ばす。

三月三十日　曇、風強し。昨夜来の猛風雪に集会天幕つぶされる。再建。全員停滞。

三月三十一日　曇。重広、小林、和田十五ピッチ目の雪稜に達す。

四月一日　小雪。風強し。集会天幕再度壊される。重広以下二十ピッチ目のＣ３予定地六九〇〇メートルに達す。高見、尾崎で中国協力員の為下部氷壁に足場切り。尾崎、落石で左手負傷、下山。骨には異常無い模様だが、はれがひどく当分休養。

四月三日　曇、時々晴。重広、磯野、協力員Ａ隊四名を本番の北壁で氷雪の訓練。仲々気合が入って来る。集会天幕三度目の修復で以後建ち続ける。

北壁クーロアールを登る

四月四日　雪、時々風。岡島（報道班）がＡＢＣに入り、これで北壁隊は宮下以下報道二名を含む隊員十四名、陳管理要員以下通訳、炊事員を含む中国協力員十一名の計二十五名が全員ＡＢＣに集結した。高塚、伊丹、協力員Ｂ隊四名を北壁で訓練。重広、小林、和田隊Ｃ３建設。堅雪の急斜面を削って建てた天幕は、あたかも鷲の巣を思わせる。高見、宇部、Ａ隊四名とＣ３往復。登り六時間、下り一時間。始め不安を覚えた中国協力員も無事氷壁の登、下降が可能なことが解り一安心。張連絡官も協力員の働きに大いに満足、翌日ＢＣに下山することになる。

四月五日　曇。重広隊、Ｃ４へのルート工作。ルートは大雪田にやや斜上している。雪の少し付いたルンゼを登ることに決定。後に日本人クーロアールと命名す。

四月六日　晴のち曇。高見、宇部、尾崎隊Ｃ３入り。中国Ａ隊Ｃ３往復。重広隊、日本人クーロアールを七三〇〇メートル迄フィックス工作。神崎ら四名Ｃ３下まで往復。ＡＢＣ帰幕後、神崎息苦しさを訴え酸素吸入、点滴を行う。

四月七日　晴のち曇。朝、神崎の容態好転するも心臓部に痛みを感じ、日中も酸素吸入を続ける。高見隊七四〇〇メートル迄達す。途中、尾崎、不調の為一人で下山。北壁下で動けなくなり、中国協力員が迎えに行く。殆んど意識なく、酸素を吸わせる。落石負傷後五日目の出動に加え、風邪気味のせいだろう。乾燥した、冷たい空気を吸い込む為、殆んど全員が猛烈な咳に悩まされている。北東稜隊のノース・コルのＣ４を始めＣ５、Ｃ６キャンプ地は北壁側に寄っているのでお互いの交信がよく入り、その動きは手に取るように解る。北東稜隊の荷上げは好調で、もうすぐ頂上を狙える話も聞えてくるのに、当方はまだＣ４予定地迄到達出来ない有様で、深刻な状況である。

四月八日　晴のち曇。朝、神崎の具合が少し良い様に見えたので、賀集ドクターと相談して、ＢＣに下山させるこ

とにする。貴重な戦力の為、一日も早く回復してＡＢＣに再び登って来ることを願う。途中よりＢＣの中国隊員の出迎えを頼んだが、両隊員には辛い長時間の下山であった。結果的にもＢＣ下山が最上策であった。中国Ａ隊Ｃ３往復。段々とスピードがあがり、平均十二キロの荷で登り三時間、下り一時間でこなすようになった。Ｃ３は天幕二張り、八名まで宿泊可能となり、最難関のＣ４への荷上げの拠点となった。高見、宇部、Ｃ４下までルート工作を行う。

四月九日　晴、強風、寒さ厳しい。大雪田の下、日本人クーロアール出口をＣ４予定地と考えていたが、長距離の為仲々到達出来ず、明日は酸素を使ったルート工作隊を出してみることにする。

四月十日　晴。重広隊、行動中に酸素を吸い十時半出発。辛うじて十七時半Ｃ４予定地に着く。標高七七〇〇メートル。五十メートルのロープで二十七ピッチ目の苦闘である。ホーンバイン・クーロアールの入口が真近に見える。酸素を吸って七時間を要するのでは、今後の荷上げは苦しい。さりとて途中に幕営地は無いし、逆ボッカも酸素の消費上不利なので、思い切って少々高さは低いが六九〇〇メートルのＣ３で睡眠用酸素を使用し、翌日頑張ることにする。三人で一分間一リットルと決める。

四月十一日　晴、強風。重広隊、十キロの荷を背負いＣ４へ。前夜の睡眠用酸素の効果抜群、十時に出発十九時始めてＣ４予定地に荷物が到着。二十一時三十分ＡＢＣ帰着。それにしても、七〇〇〇メートルを越す高度で標高差八〇〇メートル、長さ二十七ピッチの天幕間の荷上げは大変。

四月十二日　曇、強風。ここ数日、毎日ＡＢＣよりＣ３へ、中国協力員のＡ隊とＢ隊が交互に荷上げを続けてくれた。明日より中国隊は暫く休養してもらうこととする。

四月十三日　晴、強風。高塚、賀集Ｃ３入り。高見隊、Ｃ４荷上後ＡＢＣへ下る。強い高見も独り前夜の酸素を吸わないとペースが落ちる。夜、かねてより考えていた、中国協力員をＣ４迄荷上に協力して貰う案を、陳管理要員に

打明けた。連日、日本隊員がC3以上で活躍しているのを目のあたりに見ている協力員達は大乗気で、陳さんも下からの突き上げに漸く納得、BCの王連絡官と相談して呉れることになった。六九〇〇メートルのC3で睡眠用酸素を吸い、世界初の北壁を君達自身で登ることは今後の中国登山界の発展にもつながると説き、王連絡官もラサ、北京の登山協会幹部の許可があれば協力したい旨の回答があった。

四月十五日　晴。重広隊C4往復。高塚隊C4往復後ABCへ下る。C4迄は、登り八時間、下り一時間が標準時間か。体力的に一番苦しい地点である。北京よりの返電が来ないので再度BCより催促の電報を打って貰う。

四月十六日　晴。夜、ラサ、北京の登山協会より快諾の返電あり。早速陳さんとC3滞在中の中国隊装備、食糧、酸素等の詳細な打合せを行う。夕食にはBCより上ってきた雷鳥?のスープと焼肉が出て美味。

四月十七日　晴。回復した尾崎がABCに到着。完全に回復してピッチも早く元気。神崎は依然として悪くまだ登れない。高見隊C4へ荷上げ。中国隊六名はC3入りに備え大張切りで準備。

四月十八日　曇、小雪。微風。高見隊、C4に六人用天幕建設。堅雪を削って平らにするのが大変。睡眠用に三分の一リットルずつ酸素を吸う。

四月十九日　晴のち曇、夕方降雪、風なし。尾崎、中国隊二名とC3往復。回復した尾崎の登り二時間二十分の速さに中国側も驚く。前夜酸素を吸った中国隊員三名、酸素ボンベ二本背負って十時間で往復、矢張り厳しいアルバイトだ。高見隊はC4より酸素を吸って三十五度から四十度の傾斜の大雪田にロープを十一ピッチ延ばし、十四時ホーンバイン・クーロアールの入口迄到達。十八時にABCに帰着する。西稜越しに見えるネパール側クームの谷筋、頭上のホーンバインを押し包む様なイエロー・バンドの大岩壁の凄さに感激。

ホーンバイン・クーロアール

四月二十日　曇、風弱し。C4の高塚隊は十時四十分、酸素を吸って前日の高見隊より更にルートを延ばすべく出発。ホーンバインの入口から六ピッチ、八一五〇メートルに十八時五十分着。クーロアールは、始め幅十メートル傾斜三十五度位の堅雪だが、次第に狭くなり、傾斜も四十度近くなって第一番目のチムニーにたどりつく。人間がやっと一人通れる位の、逆層のスラブに雪が少し付いているチムニーは仲々登り難い。乗越した後、二番目の滝の下で引返す。

四月二十一日　快晴、微風。C3、C4間の荷上げをつづける。C3、C4共、傾斜が強い為、少しの降雪は勿論、風で吹き下ろされる雪が天幕の山側に吹溜って除雪作業は厳しい。

四月二十二日　晴、風強し。中国第二陣はC4を往復後C3を経てABCへ下る。二十二時着。本当によく頑張って呉れた。延十二人で二十一本の酸素ボンベをC4に荷上して貰った。隊員の数日分に匹適する。これで登頂態勢迄一挙に近づく。報道の岡島も八千メートルラインを突破しABCに戻る。記事を書く手も一段と迫力を増そう。重広隊、二番目の滝を乗越し、更に八三五〇メートルに達す。

四月二十三日　曇、強風、降雪少し。中国協力員の大半の仕事が終了したので全員休養の為BCに下山。より快適なBCにたまらなく帰りたいらしい。長い間ご苦労様、本当によくやって呉れたと全員で感謝。C3の高見隊強風の為停滞。北壁では丁度七〇〇〇メートル付近が強風帯で雪煙、ブリザードが凄い。重広隊と尾崎八三〇〇メートル迄荷上げ。

四月二十五日　晴のち曇、寒い。宇部、伊丹C5予定地八三五〇メートル迄荷上げ。高見、尾崎C5以上のルート工作で六ピッチ延ばし十九時二十分八四五〇メートル迄達す。三番目の最難関のチムニーを越し、クーロアールの核

心部を抜け、あと上部雪田迄二、三ピッチか。岩は外傾しボロボロしていて、リスが少なく苦労した。昨春のユーゴ隊の残置ハーケン一本を発見。酸素が切れて二時間、よく頑張った。C4帰幕二十二時。ABCでは口ばしの黄色い鳥を落し箱で捉え。ピー子と名付けて飼うことにした。

四月二十六日　晴。宮下以下ロー・ラに遊ぶ。久し振りに見るネパールの山並みに感激。アイス・フォール中を登る2人パーティとウェスタン・クウムの上、ヌプツェ寄りに大型天幕二張りを発見。無線と大声でコールするも応答なし。ロー・ラから見下ろしたクウムのアイス・フォールの悪絶なこと。夜、全員集ったところで五月二日、三日と二回のアタック、各々三名づつの登頂計画を発表。

四月二十七日　晴。登頂計画の詳細を検討。最終キャンプのC5は雪崩、落石を避け、予定より一ピッチ下の八二五〇メートル地点に決定する。従ってC4より二十ピッチ目で、C5となる。C5以上は八四五〇メートル迄八ピッチのフィックスが張られ、これで北壁取付より延七十五本のロープが付いたことになる。又、アタック時には最低四本以上のロープを張って上部雪田迄のルートを確保することにする。

全員の健康診断の結果、高見の右足指の凍傷が芳ばしくない事が判明、愕然とする。第一次隊にと心中考えていた丈にショック。現状では切断の憂いはないが、このまま上部に行けば切る可能性もあり、残念ながら断念する。磯野に少し不整脈がみられたが、他は全員好調。午後、一次と二次の案を入れ換え、第一次隊を重広、尾崎、和田の三人。第二次隊に小林、宇部。C4サポートを賀集、C3サポート伊丹と決定する。昨秋の偵察以来、この北壁の大部分をトップで切り拓いた高見の心情、察するに余りあるが指との引換えは避けたかった。他の隊員達も高見の気持を察して泣く。皆、いい連中だ。

四月二十八日　雲。東京からの長期予報、週間予報、ロンブク僧院跡に居る中国気象協会の気象データは、共に三十日から一日にかけては弱い気圧の谷の通過、五月二日、三日は絶好の登頂日和と連絡を流してきた。

四月二十九日　晴。第一次アタック隊、重広、尾崎、和田、勇躍ＡＢＣを出発。神崎チーム・リーダーを欠いて残念だが、全員、登頂成功を願い送り出す。同日、北東稜アタック隊もＡＢＣを出発した。

四月三十日　晴のち曇。第二次アタック隊、小林、宇部、ＡＢＣを出発。条件が合えば北東稜と頂上でのドッキングもあり得る。重広隊はＣ４へ。

五月一日　晴のち曇、夕方より降雪。マイナス二十四度Ｃ。重広隊Ｃ５入り。Ｃ５は、岩壁に張り付いた安全地帯に建設。十九時天幕内に入る。登頂前夜と言うのに、夕方十八時頃より、久しく降らなかった雪が本格的に降り始め、ＡＢＣの隊長天幕に集った全員イライラする。高気圧下の雪だ。夜の二十四時半雪は完全に止み、月が皎々と照る。積雪は各キャンプとも五センチくらい。

第一次アタック隊の記録

五月二日　晴のち曇、午後より降雪。十八時頃止む。風向が変わり終日東風が吹く。朝六時よりＡＢＣと交信。昨夜降った雪は、時折り吹く風に天幕の横のクーロアールをチリ雪崩となって落下して行くが危険はない。頂上付近に笠雲が掛っているものの微風、好天が予想されるので、八時、アタック決行を決める。気温マイナス十八度Ｃとやや暖い。

九時二十分、尾崎出発。和田、重広、後続す。ノース・コルの横山より、午後には積雪発生との予報。十一時三十分、尾崎、ルート工作の最高点八五〇〇メートルに到着。時には胸までのラッセルを強いられたが意気軒昂。二番手の和田、ややペース遅し。

十三時二十分、和田、尾崎と合流。重広が直下に居るので、オーダーを尾崎、重広、和田に組み替え、上部雪田迄フィックス工作。北東稜側から雲が湧き始め、視界利かなくなる。十五時五十分、更に四ピッチ、ロープを延ばし雪

田直下に達するも、視界が悪くなり、帰路を考え不本意ながら西稜側に回り込むことにする。ラッセルが深く、ペースも遅いが二十一時頃には頂上に立てると考え、そのまま続行。

十六時四十分、頂上岩壁は僅かに見えるが雪が降ってきたので、雪田上では帰りのルートを見失う怖れあり、との重広からの交信に、アタック断念を決意。満タンの酸素ボンベ三本、登攀ロープ他を最高到達の八五五〇メートルにデポして下山するよう指令。残念。

第二次アタック隊遭難

五月二日　小林、宇部、天幕に吹溜った雪を除雪後十一時C4を出発、大雪田の新雪は殆んど吹飛ばされて可成り締っており、歩き易い。十三時四十五分、クーロアール入口着。十四時三十分、ホーンバインに入る。ABCに交信。十七時二十分、直前にトップを交替した小林がC5まであと三ピッチの所で突然雪崩にまきこまれ、二十メートル近く流されたが、無事とまる。一ピッチ下の宇部の姿が見当らない。十七時五十分、登頂を断念した重広隊と連絡がつき、小林と合流して、宇部の捜索をするよう指示する。十八時、雪が止み、ガスも晴れて視界良好。十八時三十分、小林より一ピッチ下でロープが切断されているとの連絡入る。

十九時二十分、重広が小林に合流、捜索を開始。第一チムニーの下にはデブリがあるが、ホーンバインの真下の大雪田上には、ブロックはおろか遺失物も見当らず。二十一時、薄暗くなったので捜索を中止し、全員で埋った天幕を堀り起してC4泊り。此の間、無線の交信、捜索活動に当った小林は非常に冷静、沈着だった。一方、登頂断念のショックにもめげず、重広以下疲れた身体に鞭打っての救助活動には頭が下がる。雪に埋ったC4に泊るより下に降りたかった全員をC4に留め、明日再度の捜索をして貰う。僅か五センチくらいの積雪と思ったのが大きな判断の誤りで、高所で稍々湿った雪が吹溜った時に発生する雪崩に対する危険に考え至らなかった隊長の責任は重い。

五月三日　曇、東風強し。C4の重広隊、C3の伊丹は朝から捜索を再開するも、地吹雪がひどく視界が悪い。一方、ABCでは北壁の取付地点を中心に、ベルグシュルンド帯を捜索。

十二時十分、磯野が北壁を二〇〇〇メートル滑落した宇部君を発見。半ばシュルンドに落ちかかった遺体を、中国隊の協力を得てABCに安置。夕方、賀集医師の検察後、深く堀った氷穴に埋める。われわれがBCに下るまで一緒に居よう。夜、今回の反省と今後についてのミーティングを始めたが、北東稜のアタック隊の安否が気づかわれて中止。午前三時まで集会天幕で無線にかじりつく。辛い一日であった。

五月四日　晴のち曇、降雪。ビヴァークした北東稜の加藤、中村両隊員が十時に合流したので一安心し、昨夜の続きのミーティングを再開。判断を誤った宮下の下での登山を中止するか、もう一度頂上を狙うかを問う。真剣な討議が交わされ、全員再開を希望、計画の再検討に入る。夕方、西堀総隊長、宇部家より激励のメッセージが届く。BCでの撤収日が大体設定されたので、何とか皆に迷惑をかけないようにしたい。

攻撃再開

五月五日　曇のち雪。停滞。五月に入ってから、決まって午後になると降雪、夕方より晴のパターンである。第三次アタック隊に重広、尾崎。サポート隊に賀集、磯野。高塚、小林、伊丹は宇部君の遺体をBCに下ろすことに決める。高見、和田は軽い凍傷。

五月六日　快晴。やっと気分的にも落着きが出てきたが、思い切ってもう一日休養する。北壁に陽が当り始めて二時間後にはチリ雪崩が激しい。又、ABC周囲のチャンツェ南面、ノース・コル下、北壁大クーロアール（ノートン・クーロアール）よりブロックの崩壊が頻繁になり、気温の上昇とモンスーン近しを思わせる。気象予報は、八、九日が風は弱いが曇か雪、十日は晴、十一日から十二日にかけて気圧の谷が通過する、と伝えてくる。

五月七日　快晴、夕方小雪。小林は宇部君の遺体と共にBCに下る。重広、尾崎のアタック隊、賀集、磯野のサポート隊C3に入る。出発に手間取り、北壁の取付き二、三ピッチ目で、ルートの両側にチリ雪崩の洗礼を受ける。間断なく落ちる雪に、二時間立ち往生。十四時登攀再開、十九時C3着。夜、C3からBCの宇部君の茶毗の火が見えた。

五月八日　曇のち小雪。出発を早目にとの指示で九時、尾崎を先頭に磯野、重広、賀集の順でC3を出発。数日来の降雪で少しラッセルがある。C4着尾崎十五時三十分、重広二十時三十分、磯野、賀集二十三時。十八時前より降雪、途端に北壁のあちこちで雪崩発生。四月中には到底見られなかった情景。先着した尾崎は、独りでデポした酸素の発堀に二時間、天幕の堀出しに二時間、更には六人用天幕が落石を受けて破れた穴から降り込んだ雪の除雪に精を出す。やっと到着した重広と天幕内の整理。食事の出来上った二十三時過ぎサポートの二名到着。怒り心頭のABCはサポート隊の奮起を促す。

五月九日　晴のち曇、小雪、弱風。磯野が徹夜でお茶と食事を作り、四時三十分準備完了。七時アタック隊二名出発。ピッチを上げて早目にC5入りを狙う。二日以来、そして昨八日と降雪の度に少しづつ規模の大きくなった雪崩がホーンバイン・クーロアールから出るので、この通過に最大の注意を払わなければならない。九時四十五分、ホーンバイン入口の一ピッチ上に着く。入口付近の積雪は二十センチくらいで柔かかったが、上部は三、四センチの積雪で締っている。十五時四十五分、途中デポしてあった酸素ボンベ等を回収してC5着。天幕も殆んど痛んでいないのが心強い。夕方より可成り湿った雪、連日のことながら気がもめる。夜、すっかり晴れ上り、雪化粧した北壁がギラギラと輝いている。明日のアタックは起床三時、出発六時と打合せる。落着いたC5の重広隊に、BC始め各キャンプより励ましの無線が殺到。二十時半より岸洋子、小柳ルミ子のテープを流し、二十一時就寝。

第三次アタック隊の記録

五月十日　快晴、昼近くガス、小雪、夕方晴。二時三十分、起床。気温マイナス二十八度C。外は晴天の星。三時よりABCと交信。ビヴァルディの「四季」を始め、ミュージックを流す。六時二十分、尾崎、重広の順でまだ真暗な中、懐電を灯けて出発。非常に寒い。七時三十分、頂上岩壁に陽が当る。

八時四十分、ラッセルも少なく、早くも前回の最高到達八五五〇メートルに到着。無風、快晴、絶好の登頂日和だ。九時五十分、軽い食事をとり、酸素も新しいのに取り替えて出発。高見はABCより少し下って、上部雪田でのルートを眼鏡で指示する。十二時、上部雪田中央部を快調に登りつづけるが、次第にペースが落ちる。雪田と見えたが、意外に悪く、外傾したツルツルのスラブ上に雪が二、三十センチ軽く積っていて、アイゼンの爪は岩に迄達し、確保のピンも打てずに苦戦が続く。ガスがかかり始め、上部の視界が悪くなる。

十四時、西稜とのコル八七〇〇メートル着。高見からの報告では、これからはコンテニュアスで行けるだろうとの見通し。しかし、西稜も意外に悪く、隔時登攀が続く。三級の岩場に薄く雪が付き、一ピッチに一時間半も要している。酸素が残り少ない。十六時四十五分、二人とも酸素が切れる。高度八七五〇メートル。身心共に元気なので何時間掛ろうと絶対に頂上へ登りますと、元気な尾崎の声。

十七時五十分、重広より、頂上付近の視界は良好、充分頑張れる、との交信入る。十九時二十分、尾崎より、悪場は全て突破、後は雪の稜線のラッセルのみ、南峰と殆んど同じ高さ、と知らせてくる。「頑張れ！」と全員で応援。

二十時五十二分、四ピッチを一時間掛って遂に尾崎登頂。二十一時二分、続いて重広登頂。尾崎の感激した声、重広の落着いた声、ABCに歓声が湧き上る。帰路は呉々も気を付けるよう、時間は遅くなるが、C5までは是非帰りたいと、元気。あとは無事を祈るだけだ。

二十一時十分、重広、二十分、尾崎、下山開始。登りは全てトップの尾崎、稍々疲れ気味、下りは重広がリードして降る。二十二時二十分、頂上より四ピッチ下。視界が殆んど利かなくなる。二十三時十分、悪場の核心部に居る。非常に寒いが何とか頑張っている。あと西稜のコルまで二、三ピッチだろう。

午前〇時二十分、西稜コル付近着。あと三ピッチ下り、手持ちの一〇〇メートル・ロープで懸垂すれば、酸素デポに着くであろう。尾崎少し疲れる。ＡＢＣでは、ガソリンを焚き、アタック隊を元気づける。小雪が舞い始め、条件が益々悪くなる。一時二十分、未だに正確なコルの位置が解らず、先刻の場所に居るが、最悪の場合はビヴァークもあり得るとの交信。ＡＢＣから、真暗な中、右方へトラバース気味に下降し、ルートを見付けるよう努力せよ、最悪の場合のビヴァーク地も検討するよう指示。

二時十分、先程の所から一ピッチ右下にトラバースした地点の岩棚で、ビヴァークしたいとの交信。「一週間前の加藤さん達に比べれば、今度は二人だし、この高さ（推定八六五〇メートル）で参ることは無いですよ」と、落着いた重広の声に、唯、必ず元気で頑張れよ、としか言えない。以後、定時交信に切換え、最後の焚火を盛大に燃してやる。大島カメラマンが盛んにフラッシュを焚くと、「大島さん、電池が勿体ないよ。大丈夫だから」と、冗談混りの交信もくる。ＡＢＣでは交代で無線の番をし、三十分置きに発信することにする。

一方、Ｃ４の賀集は、上部アタック隊の動きを絶えずＡＢＣに交信し、磯野はＣ３よりＡＢＣへ。疲労の為、ペースが遅く、雪の中二十二時五十分帰着。

五月十一日　快晴のち曇、小雪、風弱し。電池が凍ったのか、寒くて駄目なのか、二人共寝てしまったのか、ＡＢＣからの三十分置きの交信に全然応答なし。七時十分、重広より、「今迄電池を暖めていた。ＡＢＣよりの交信は全部聞えていました。下降ルートが判明したので、これから下ります」と、元気な声。あの野郎、聞えていたのか、ひとに気を持たせやがって……不眠のＡＢＣに歓声と罵声がとぶ。

十時、C4の賀集に、サポートの為、酸素を持って上に登って貰う。十時二十五分、アタック隊、酸素デポに着く。尾崎が可成り弱っていて、自分が何処に居るか解らない様子、と重広より交信。十一時三十分、意外に元気な足取りの尾崎、C5着。少憩の後、下降にかかる。遅れて重広C5に入り、酸素を吸って一寝入り、食事。ゆっくり下降開始。十二時頃より、ホーンバインの雪崩激しくなり、尾崎独りで岩蔭に退避。賀集も、四ピッチ登った岩場で待機。

十五時、雪崩のおさまったホーンバインを、尾崎、重広の順で下降。十六時、尾崎、賀集と合流、二十三時間振りに酸素を吸う。十六時三十分、尾崎、賀集C4着。十七時十五分、重広C4着。酸素を毎分三ミリットルづつ吸って二時間寝た後、ABCに下る。疲れているだろうが、もう一ふんばりして貰う。尾崎、重広、共に元気に、懐中電灯を灯け、小雪の舞うABCに二十四時二十分着。全員感激の再会。

五月十二日　晴のち曇、夕方より小雪。前夜二時半頃まで、食事をしたり騒いだりして寝たが、朝六時起床、直ちにABCの撤収作業に取り掛かる。酸素欠乏と雪盲の尾崎を連れ、磯野、宮下先発。全ての装備、食糧を片付け、全員十時にABCを後にする。

尾崎は殆んど目があかなくなったので、C1からは元気な応援の中国隊員四名に交代で背負って貰い、二十時三十分BC着。最後尾の宮下、高塚は、小雪の中二十三時過ぎ到着。此の十日間の睡眠不足と疲労に全身の力が抜ける思い。全隊員の再会を祝う。一人、宇部チャンの居ないのが淋しい。

五月十三日　晴時々曇。北壁隊の健康診断を行う。重広、高見の心電図に全く異常が現われていないのに驚く。一晩酸素を吸い、点滴を受けた尾崎も、急速に回復、夕方には目も見えるようになった。撤収作業に大忙し。

（宮下　秀樹）

五、おわりに

こうして、たいへん多くの方々の理解のある御協力によって、ＪＱＥ計画は実現した。とくに、隊が動きだしてからの中国側の協力振りは予想以上であった。チベット自治区の喬加欽副主席などは、まるで自分の登山隊を遇するような気持で、新鮮な食糧を山へ特送する労をとって下さった。われわれが珠穆朗瑪の頂きに立つことが出来たのは中国の人々の真剣な行動の助力が得られたからである。約三ヵ月に近い山の生活ではあたかも日中合同登山のような山登り気分が味合えた。

幸いにして、われわれは目的としていた二つのルートに足跡を残して登頂に成功した。各隊員一人残らず、それぞれの役割を果し、毎日毎日に全力を出しつつ、たのしい山登りを行ってきた。私はこのような立派な隊員と恵まれた隊の責任者を務めさせてもらったことを心から感謝しなければならない。

最後に、王洪宝、ニアガシ、ローラン、宇部明の四氏の霊に対して、珠穆朗瑪隊を代表して、厚く御冥福を祈り、筆を擱く。

（渡辺　兵力）

付記（一）　隊員名簿

(1)　本部隊長　渡辺兵力（65）
　　医師　斉藤惇生（50）

(2)　北東稜　副隊長　浜野吉生（42）
　　リーダー　加藤保男（31）

隊　員　中村省繭（37）、小原　俊（34）、長谷川良典（32）、横山宏太郎（32）、甲斐邦男（32）
降旗義道（31）、山下松司（30）、神谷雅行（29）、三谷統一郎（23）
医　師　西山正二（32）
(3) 北壁　副隊長　宮下秀樹（48）
リーダー　神崎忠男（39）
隊　員　高塚武由（37）、高見和成（34）、重広恒夫（32）、宇部　明（31）、小林利明（31）
伊丹紹泰（29）、尾崎　隣（24）、和田昌平（26）、磯野剛太（26）、賀集　信（30）
(4) 報道　［読　売］　島田公博（42）、江本嘉伸（39）、岡島成行（35）、北川敏孝（39）、大島則之（32）
［日本テレビ］　岩下莞爾（44）、木村静雄（42）、中村　進（33）、田代啓史（29）、佐藤幸一郎（27）
新井明博（27）、松野　豊（23）、智片健二（21）

付記（二）　中国登山の経費について

今回の登山は、予想はしていたものの、それを上回る費用がかかった、北京から五千キロも離れた辺境のチベット自治区での登山とは云え、矢張り非常に高い感がするのは否めない。その価格が如何なる基準で決定されたかは知らないが、社会主義体制下の価格決定の事情の一端は窺いしれよう。

以下、参考までに単価を列記したが、この単価は飽くまでも一九七九年七月時点の日本山岳会登山隊宛のものであり、八〇年には既に一部の単価の改訂が行われている。尚、中国での物価が上昇気味であること、及び中国登山を希望する各国登山隊の数が多いことを考えれば、今後も余程しっかりした資金計画を立てる必要があろう。但しチベット地区以外の例えば四川、新疆両省での登山は可成り割安にいくものと思われる。

（注）単位＝元　一九七九年七月現在

一、固　定　費

㈠（入山料、高度により決定、偵察隊、ルート別に支払う。）　四、〇〇〇

㈡ 撮影権料、（本隊のみ）　二五、〇〇〇
㈢ 道路保全料、（最奥部落より、偵察隊は別途）　一〇、〇〇〇

二、各種手当

㈠ 連絡官、通訳　一日　三二
㈡ 管理要員、高所協力要員（五千m以上稼動の服務員）　〃　二九
㈢ BC勤務員（コック）、運転手、ヤク運送工　〃　一六

三、滞在費　〃

㈠ 北京地区（通訳、市内交通費を含む）　一日　九〇
　但し　北京飯店のみ　〃　一〇五
㈡ 成都地区　〃　九〇
　但し　次回より空港↔市内交通費は別途　〃
㈢ ラサ地区　〃　二五〇
　但し　昨年の偵察隊は　〃　四〇〇
㈣ ルクズ地区　〃　一二〇
㈤ シガール地区　〃　四四
　前記は中国服務員の滞在費も同額である。尚、病気入院時の宿泊代も同地区の滞在費と同額である、

四、食費

㈠ BC以上隊員、連絡官、通訳、高所協力要員　一日　一八
㈡ BC勤務員、運転手、ヤク運送工　〃　一〇

五、交通費

㈠ 北京、ラサ往復飛行機代　五八八
　同中国服務員　四九八

(ニ) 同手数料（四回）　八

六、輸送費

(一) 人員輸送費

(イ) ジープ代　km当り　二・二一

停車費一日　六四

(ロ) バス　km当り　六・四

停車費一日　二〇〇

(ハ) トラック　km当り　四・八〇

停車費一日　一八〇

注　片道空車の場合は距離料金の半額、ラサ、ルクズ間三八〇km、ルクズ、シガール間二七〇km、シガール、ロンブクBC間一一〇km

(二) 隊荷輸送費

(イ) 天津→北京　屯当り　二〇〇

同右手数料　二〇

(ロ) 北京→ラサ（鉄路、陸路）　屯当り　三、〇〇〇

(ハ) ラサ→BC　屯当り　二、五〇〇

(ニ) ルクズ→BC　屯当り　一、三〇〇

但し　四屯車一台に二・五屯迄積載可能で、一台分を二・五屯と換算

(三) 空輸料

(イ) 北京→ラサ　kg当り　五・八八

(ロ) 北京→成都　kg当り　二・二六

(ハ) 成都→ラサ　kg当り　三・二二

(二) 北京→成田　　kg当り　　三・五三

前記に各十%の手数料が加算される。

注　手数料は中国服務員の行う事務手続、連絡、市内運搬、積込、受入等の全てのサービス料を含む。

(四) ヤク運送費　　一日当り　　八〇

平均五〇kgの荷を担ぎ、集、解散に四日分を支払う。尚、休養日は行程によるが、北壁C1へは一日行動、翌日休養、北東稜は登路三日、降路二日、休養二日を要した。又、負傷、疲労等でヤクが死亡した時、一頭一〇〇〜三〇〇元を要した。

七、燃料費（ガソリン）一立当り　　〇・七六

（チベット地区ではガソリンのみ）

薪は非常に高価であり、木炭は今回不使用だったがkg当り〇・四〇元（偵察隊）

八、保険料

(一) 生命保険

(イ) 連絡官、通訳、管理要員、高所協力要員等　　四八、〇〇〇×二%　　九六〇

(ロ) 勤務員、運転手、ヤク運送工　　三二、〇〇〇×二%　　六四〇

(二) 傷害保険　中国服務員全員　　一〇、〇〇〇×一%　　一〇〇

前記各保険料に十%の手数料が加算される。

九、保管料　一ケ、一日当り　　〇・八〇

一〇、関税

入国消費物資に対し約十%、郵便税、手数料等が含まれるがその基準は詳細不明。

一一、装備費

中国服務員用の装備は隊員と同程度（同じ）の物が要求されるが、帰国時にそのまま支給するか、返還を求めるかは登山隊の自由意志に委されている。尚、中国製の装備は購入も借用も（約半分から三分の一位か）可能であるが、中国独特の

物もあり充分注意する必要がある。特に毛糸のズボン下、裏起毛のナイロン手袋等は必需品の感がする。

主な装備の単価は下記の通り

(一) 購入費

(イ) 高圧鍋（大、三〇名位） 四七三

(ロ) 登山靴（高所用） 一七六

(ハ) アイゼン（八本歯） 一六九

(ニ) 毛皮靴（低所用） 三五

(ホ) 毛糸ズボン下 八四・八〇

(ヘ) 裏毛ナイロン手袋（五本指） 一一・三一

(二) 借用費

(イ) 大型BC天幕、窓付、二重、十五名位 七〇四

(ロ) 羊毛マット（一人用） 一三・二〇

(ハ) 大型ガソリンストーブ（炊事用） 五六七

(ニ) 折たたみベッド 二三・一〇

以上経費について略記したが、現地では北京段階で予測出来ない出費も考えられ、予備費は多少多めに考慮する必要があろう。尚、登山隊経費は、申請書の付属書類にもある通り登山隊到着前にその概算額を払い込み、帰国時に北京で精算することになっている。

（渡辺　兵力）

編者注・1　〈珠穆朗瑪（チョモランマ）〉いうまでもなく、チョモランマはエベレストの中国語の呼称であるが、本稿は中国側からのエベレスト登山報告であり、本遠征にはチョモランマが正式な呼び名として使用されたので、本稿でもそれに従った。

編者注・2　『山岳』第七十三年、「中印両山岳界を訪ねて」西堀栄三郎　参照。

プマリ・チッシュ登頂（一九七九年）

佐々木孝雄

はじめに

北海道山岳連盟（以下道岳連）に海外登山委員会が発足したのは他府県に遅れて一九七四年五月のことであった。委員会は当面道岳連内の海外登山計画に対する審議、推薦等のいわば事務処理機関としての機能を果したが、他面道岳連の究極の目的である、より高くより厳しい山への登山活動を、側面的に促進する役割を必然的に持つことになった。

一九七五年十月、委員会は海外遠征の長期計画を立案し、諸種の事情を勘案した結果、その実施時期を一九七九年と決定した。その線にそって、一九七六年より有志によるヒマラヤ登山研究会、一九七七年には準備委員会が発足したが、同年十月山岳決定小委員会はカラコルムハイウェイの解禁を前提として、七〇〇〇メートル級の未踏峯のひしめくヒスパー山塊に目標をしぼり、㈠プマリ・チッシュ（七四九二メートル）㈡ユクシン・ガルダン・サール（七五三〇メートル）㈢クンヤン・チッシュ東峯（七四〇〇メートル）㈣ブラルング・サール（七二〇〇メートル）㈤ヂュトマル・サール（七三三〇メートル）の順に五つの未踏の希望山名を決定した。この間加盟団体長の推薦による参加希望者は十数名にのぼったが、一九七八年四月、実行委員会が発足する頃には十二名の隊員にしぼられ、一九七九年一月二十五日付で、幸運にも第一希望のプマリ・チッシュに待望の登山許可がおりる運びとなった。こうして、道岳連の推薦選抜によって編成された初めての海外遠征隊は、四月十四日先発隊を成田より送り出すことが出来たのであった。

インダス渓谷をゆく

五月二十三日観光省にアワン氏を訪問して登山期間中の多面

にわたるブリーフィングを受けた。その際、ギルギットへのフライトが長期欠航する場合、陸路を経由しても良い事を知り、プマリ・チッシュに隣接するクンヤン・チッシュ北峯にむかう北海道大学隊と共に、同氏より通行許可を受けることが出来た。この時点でギルギット、スカルド方面のフライトは二週間も欠航し、我々の宿泊していたミセスデービスホテルはフライト待ちのたまり場であった。五月二十六日には隊荷輸送のトラック、翌二十七日は隊員の便乗するワゴンがギルギットへ向け出発出来たのは、予期しない幸運であったといえよう。

車は市街地を抜け郊外の静かな畑地を抜けると丘陵地帯にかかり、やがて道路は勾配を増し六〇〇〇フィートの Badal 峠への登りとなる。猛暑のラワルピンディから僅か数時間のうちに約五〇〇〇フィートを登り切ると吹く風はさすがに冷たく、軽装で出掛けたことがくやまれる。我々のワゴンは不幸中の幸か峠を過ぎた地点でエンジントラブルを起こし、エンジンストップのまま峠を下り、停車地点からは、走行中のジープに拾われて、夕闇のせまる頃 Buttgran に着いた。

翌日も故障がちのワゴンは峠道を更に下って、Thakot に着く。濁流うずまくインダスの渓谷に、チャイナブリッジと呼ばれる壮大な鉄橋がかけられている。猫のひたいの様な河岸段丘に部落が続き、頭上遥かにそびえる裸山の急斜面には放牧用の小屋が点在し急勾配の小径がきざまれて、この道を上り下りする人達のたくましさと生活の実態をうかがい知る思いであった。Basham を過ぎると再び未舗装の山道となり、ぐんぐん高度を上げる。Patten は一軒の茶店があるばかりで、周囲には大麻が群生し、広い河原には軍隊のヘリポートが設備されていた。これより約二時間がこの幹線の核心部で、道路は川床より二〇〇メートル程の高さの懸崖を切り開いて作られ、道幅のせまい大小の石ころを敷きつめた悪路には更に所々に崖くずれの跡が残されており、我々は車の後押しをしなければならなかった。ここを通過する車は、スペアのプロペラシャフトを持参しているとの事であった。スリルに満ちたドライブもここで終りとなり坦々とした道をたどる。待望のバルチスタン平原に下り切った頃、彼方の夕空に聳えるナンガ・パルバードの姿が印象的であった。我々の場合、この六〇〇キロメートルのルートに、トラックでは二日半、ワゴンでは丸二日を要することになったが、通常、車、道路共にトラブルのない場合は十数時間とのことであった。

キャラバン

五月二十八日ギルギットに到着した我々は買い物等で一日を過ごし、五月三十日十一台のジープに隊員と三トンの隊荷を積載してナガールに向った。ギルギット・フンザ間のカラコルムハイウェイは殆んどがアスファルト道路であったが、フンザか

らヒスパー河に入ると事情は一変した。河岸の丘稜に作られた一車線の道路はジェットコースターの様な上り下りであり、左右に急角度に曲る度に車体の一部が崖縁からはみ出して、息をのむ連続であった。ギルギットから約七五マイル、四時間、フンザからは小一時間であった。

ナガールのミール（土侯）の邸宅の中庭に幕営した我々は翌日からポーター雇用の交渉に入った。アワン氏から一日六〇ルピー以上は支払わない様にとの話があり、またカラコルムハイウェイのチャルトで休養中のナガールのミール、Shaukat Ali氏を訪問した際、同氏も六〇ルピー位でしょうと言っていたにもかかわらず、現地の地方行政官を含む住民達は、支給品なしで一日八〇ルピー、リターンは行きに要した日数分だけ一日二〇ルピーを支払う様要求してゆずらず、ギルギットの特別警察の長官 Buzurg Shah 氏までも来村して交渉に当って戴いたにもかかわらず、結局のところ住民パワーに押し切られて解決に達したのは六月四日夕刻であった。かくしてキャラバンの第一日目は夜間の行進となった。

一二〇余名のポーターと三トンの隊荷はナガールの台地を過ぎバルタル氷河を渡った。やがて日は沈み闇夜の行進と変った。崖縁をけずって作られた山道は所々で岩なだれが散発した。危険な個所で隊員はライトでの誘導を繰返したが、突如おそった岩なだれはポーターの一人をふっとばした。前腕骨折の重症であった。ポーターの三分の一は岩陰にうずくまり動かない。ポーターを残してキャンプ地 Huru に着いたのは翌日午前二時半であった。五日、早朝に追いついて来たポーターをまとめて出発、ヒスパー河の渡渉では御多聞にもれず手間どって三時間のロスの後通過。この日も十数名のポーターは途中でダウンし、最後尾が Hispar 部落に着いたのは午後十一時三十分であった。

六日は態勢立てなおしの為、休養とする。七日は、この最後の部落を後にしてヒスパー河を右岸に渡る。サイドモレーン上の放牧地をゆったり進んで昼頃に Fulolinkish に着いた。八日、この日も前日の様にのんびりしたキャラバンでクンヤン氷河に折れ、早々に Brumbad に着く。昨日今日と半日行程であった。キャラバンは残すところ二日であったが、二日分の賃金を支払う条件で明日中に消化することをポーター達に約束させる。九日、六時に出発、クンヤン氷河に入ってモレーン上を歩き、チプールの台地から支流のガレ場を渡り、最後はトリボール氷河の大波小波のモレーン帯を上り下りして、夕刻 Brumpal に着いた。この地点はトリボール氷河出合いの台地で高度は四二〇〇メートル、大小の沼に囲まれた絶好のキャンプであったが、ベースキャンプは更に四キロメートル上部の予定であり、ポーターが帰った今は、必然的に仮ベースキャンプとせざるを得なかった。

PUMARI CHHISH

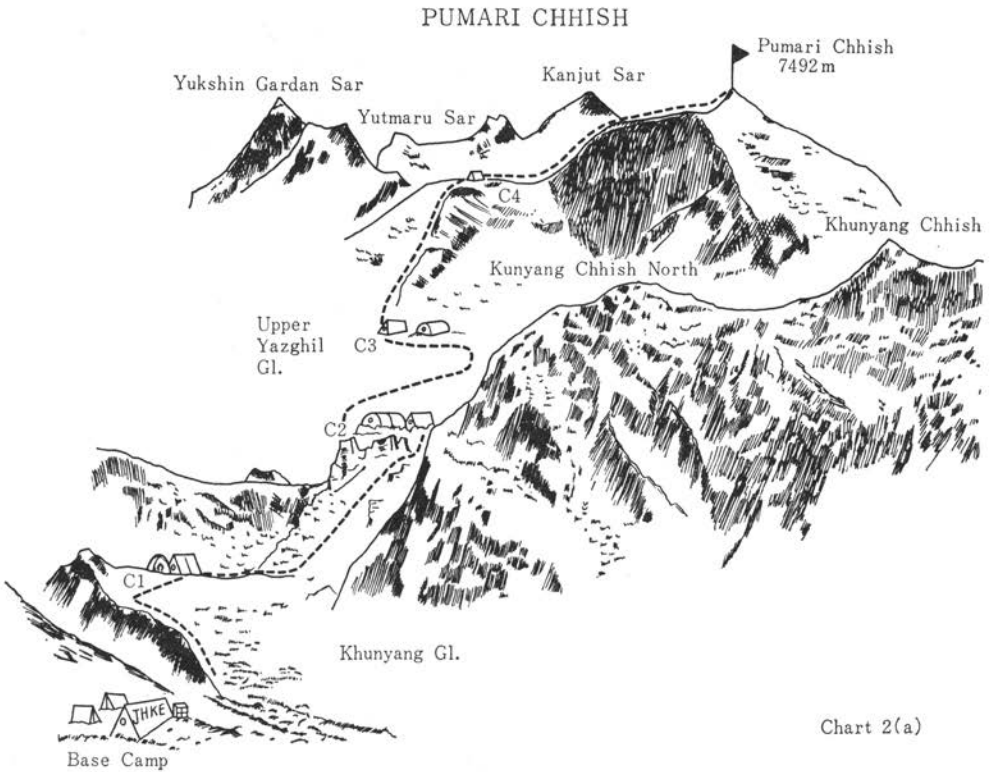


Chart 2(a)

アッパーヤズギルへ

仮ベースキャンプ地に到着した翌六月十日、上部のブラルングサール出合いのベースキャンプ予定地へのルート偵察が行なわれた。台地からクンヤン氷河に渡るベルグシュルンドには梯子がセットされ、氷河中央部のモレーン帯を数時間進んで予定地に到達した。ルートは大小の起伏に富み窪地に入りこむと見通しが悪くなる為、要所要所にはケルンが積まれた。翌十一日より一人三十五キロのボッカが続けられ十九日には二・五トンの物質がベースキャンプに集結した。ベースキャンプはクンヤン氷河の右岸、ブラルング氷河出合いの四三〇〇メートルの台地上に設営されたが、豊富な水量を持った沼とお花畑に囲まれた決適な地点であった。

六月二十一日既にC1の荷上げを始めていた北大隊のルートをたどって上部偵察、二十二日より本格的な荷上げが始まった。北大隊のC1は四八〇〇メートル、きっちりとした高所順化と休養のパターンを守る北大隊に対して、仮ベースからベースキャンプの建設に至る迄十日間の遅れを取った我々は、北大隊のC1を通り越し五三〇〇メートルの雪面をC1と決定した。高度差一〇〇〇メートル、往復距離約十六キロメートルはいささかきついアルバイトであったが、三キロメートルの氷河上の登行を除けばルートは雪面の連続であったのがせめてもの救いであった。しかもベースキャンプへの荷上げによって高所登山の初期における順化が順調に終了し、上部での活動に大きなプラスになったのは幸いであった。

六月二十三日C1が建設された。C1はディスタギル・サール、クンヤン・チッシュ北峯を結ぶ稜線に囲まれた内院の平坦な雪面にあり、右手（東側）はクンヤン・チッシュ北峯とアッパーヤズギル氷河から落ちる氷壁、正面（北側）および左手（北西側）は雪、氷、岩のミックスした壁であり、右手の氷壁との境にアッパーヤズギル氷河に達するやや傾斜のゆるいアイスフォールが立ちはだかっていた。このアイスフォールは既に北大隊が試登して最上部のセラックス帯に危険性があるとの情報を得ていたが、二十八日その事の確認の為のトレースが行なわれた。このアイスフォールの最上部とアッパーヤズギル氷河との間には幅数十メートルにわたるセラックス帯があり、それぞれのセラックスの崩壊の可能性は時間の問題と思われた。二十九日、北大隊が既に五ピッチ試登した右手の氷壁に取りつき、平均斜度六〇度、六〇〇メートルの高度差を持つルートに八〇〇メートルのフィックスロープをセットして、七月一日アッパーヤズギル氷河に抜け出ることが出来た。

七月四日C2への荷上げを終えた二隊員はアッパーヤズギル氷河を東へ一キロメートル強進み、初めてプマリ・チッシュを望見して北稜上の雪面が頂上まで続いているのを確認した。キ

ャラバンを始めてちょうど一ヵ月目であった。七月五日、アッパーヤズギル氷河の西端、クンヤン・チッシュ北峯西稜取付き点にC2が建設された。

C3へのルートは、広い氷河をゆるやかに登りゆるやかに下る、何の困難もない平担な雪原であった。危惧されたクレバスもない。

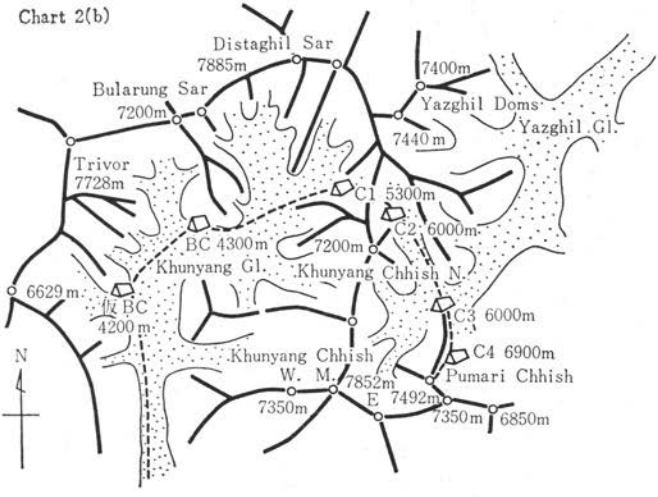
七月九日、プマリ・チッシュ北稜に二キロメートルとせまる雪面にC3が建設された。高度は六〇〇〇メートルである。ヤズギル氷河源頭に近いこの付近から、クンヤン・チッシュ本峯、東峯、ヂュトマル・サール、カンジュト・サール、ユクシン・ガルダン・サールが手に取る様に見え、そして北方には無数とも思えるチベットの山々が霞の彼方に続いていた。

登　頂

七月十日から北稜の工作が始まった。平均斜度五〇度、高度差九〇〇メートルの、下部は氷壁、上部は雪壁のルートに、三つの班が交代で工作を続け、五日後の十四日、六九〇〇メートルのコルにC4が建設された。この日、第一次アタックに予定された四名中二名は、更に上部北稜上の七〇度におよぶ雪稜に三〇〇メートルのフイックスロープをセットして、明日にそなえる。翌十五日、リーダー横山英雄、南功一、大橋政樹、千葉茂樹の四名は午前二時C4を出発、午前六時に七三〇〇メート

Route Map to PUMARI CHHISH

Chart 2(b)



ルの岩峯に達した。これより先はゆるやかな雪稜を進み、頂上直下で一〇〇メートルのフィックスをセット、不調の南を全員で激励しつつ、午前十一時五十分、遂に頂上に立った。

翌十六日、第二次アタック隊のリーダー小笠原進、千葉良正、林千里夫、管野三知博、白石光雄の五名は、第一次隊と交代でC4入りし、更に管野、白石は一次隊のルートをたどって七三〇〇メートル付近にビバークし、高所経験の幅を一層広めることになった。七月十七日午前二時、C4を発った二次隊は途中ビバーク組と合流して順調に進み、午前七時四十五分全員頂上に到達した。短かい感激の後に頂上を去る頃、十二日間も晴れ上った空はようやく悪天の徴しを見せ始め、C4を撤去してC3に戻った時には雪模様となり、もはやプマリ・チッシュを望むことは出来なかった。

△記録概要▽

隊の名称　一九七九年北海道山岳連盟カラコルム遠征隊

活動期間　一九七九年五月～八月

目　的　プマリ・チッシュ初登

隊の編成　隊長＝佐々木孝雄（50、医療）、副隊長＝小笠原進（40、渉外）、隊員＝横山英雄（37、食糧）、千葉良正（35、庶務渉外）、苅谷勝利（34、装備）、広岡賢治（32、記録）、南功一（30、輸送）、林千里夫（30、輸送）、管野三知博（30）、白石光男（23、会計）、大橋政樹（27、食糧）、千葉茂樹（22、装備）、連絡将校＝ナザル・アバス・アワン（NAZAR ABASS AWAN）大尉。

行動概要　五月十八日先発、本隊ラワルピンディに集結。二十八日ギルギット着。三十日ナガール着。六月四日ナガールよりキャラバン開始。六月九日クンヤン氷河のブルンパル（四二〇〇メートル）に仮BC設営。六月十九日ブラルング氷河出合にBC設営。六月二十三日C1を五三〇〇メートルに設営。七月五日六〇〇〇メートルにC2設営。七月九日アッパーヤズギル氷河東部、プマリ・チッシュ北稜取付手前にC3六〇〇〇メートル設営。七月十四日北稜六九〇〇メートルコルにC4設営。七月十五日横山、南、大橋、千葉の第一次アタック隊プマリ・チッシュ初登。七月十七日第三次アタック隊小笠原、千葉、林、管野、白石登頂。七月十九日全員BCへ。七月二六日ナガール着。

公式報告書　『プマリ・チッシュ登頂』北海道山岳連盟　一九八〇年二月十日発行

クンヤン・チッシュ北峰（一九七九年）

越前谷幸平

出発までの経緯

北海道大学山岳部がチャムランに遠征隊を送ったのは、一九六二年のことである。以来、一九六五年頃にダウラギリ山群の七〇〇〇メートル級の未踏峰への遠征計画が立案されたが、陽の目を見ずに終った。七〇年代に入り、七六年が北大一〇〇年、山岳部五〇周年にあたることも相俟って、以前よりの懸案となっていた厳冬期八〇〇〇メートル峰登頂計画の検討が成されるようになり、再び、海外遠征に対する部内の熱は高まって来ていた。その一環として七〇〇〇メートルの未踏峰ラプサンカルボ登頂が計画された。しかし、繰返し交渉を行ったものの、ネパール政府に未踏峰解禁の意向が認められなかったため、計画の対象を当時新たに解禁されたガルワルヒマラヤへと変更し登攀隊員三名の小パーティをトリスルへと派遣した。しかし税関トラブル等に時間を費し、さらに異常降雪のため、実際の登攀に入る前にこの計画は中止の止むなきに到った。この遠征計画が思わぬ結果を招いたため、厳冬期八〇〇〇メートル峰登頂計画は一時棚上げの恰好になったが、若手を中心に七〇〇〇メートル峰登頂の再検討は進められていた。その過程でカラコルムをも検討の対象に含めるようになった。

カラコルム山域の問題点は冬期の降雪がネパールヒマラヤに比して多いことであり、厳冬期登頂、七〇〇〇メートル級の未踏峰の登頂の何れを優先するか、論議が湧いたが、高所経験者を育成することが第一と考え、目標はカラコルム、季節は夏とすることに決めた。これらの検討が行なわれていく間に、七八年にカラコルムの未踏峰ドレフェカル（六四四七メートル）の計画が現役部員の間で進められ、首尾よくほぼ全メンバーによる同時登頂が行なわれ、若い層の意気を示した。

七九年度の隊は、部内の海外登山研究会により組織され、先ず隊が決定し、それから目標の決定が成された。既に、北海道山岳連盟がカラコルムへの遠征を決めていたため、山域が重複しないように残された幾つかの未踏峰中より山の選択を行ない、最終的にクンヤン・チッシュ北峰が選ばれた。我々より僅かに遅れて申請した関西学院大学隊にも御理解を戴き、七九年四月に同峰の登山許可が取得された。

その後、部内の事情もあり、この隊は北大山岳部山の会を挙げての事業としてではなく、有志による個人海外山行として行なわれることになったが、ともあれ、部内の有志から多大な支援を受け、本隊は先行した越年隊員の待つパキスタンへ向け、五月十五日、成田を発った。

アプローチ

隊員全員がラワルピンディに揃ったのは、五月二十一日であったが、七九年は特にパキスタンの北部地域への飛行便の運行状況が悪く、入山の遅れることが予想されたため、相前後してパキスタン入りしていたプマリ・チッシュを目指す道岳連隊と共同でトラックとミニバスを雇い、カラコルムハイウェイ経由でギルギットへ向かうことにした。道岳連隊とは、入山経路だけでなくベースキャンプから登攀ルート上の北方のコルまで同じルートを辿り、互いに励まし合いながら行を共にすることになった。

五月二十六、二十七日と分けてラワルピンディを出発。カラコルムハイウェイは前年の六月に開通してはいたが、インダス河沿いの大断層地帯を貫いて走っているため、補修を繰り返さなければ機能を果さず、特に五月中は常時不通個所があったという。三十時間余りかけてギルギットに到着、ナガールへと向かうためにジープを雇用し直し、五月三十日、ギルギットを発って四時間程でナガールへ着いた。

噂を聞きつけて三々五々集まって来たポーターを相手に連絡将校は賃金の交渉を始めたが、ポーターは初めから、レギュレーションの二倍額を主張し、その根拠はインフレが進み物価が高騰しており前年度の日本隊もその額を支払ったからというものであった。ルプガルサールへ向かう西独隊も同様の要求をされ戸惑っていた。三隊で交渉を進めたが、駐在の行政事務官もポーターの言い分が正しいことを我々に説得しようとするのみで、レギュレーション通りを主張する連絡将校達と鋭く対立し、激昂した若い連絡将校が掴みかかろうとする一幕もあった。翌日、西独隊は交渉に見切りをつけポーターの言い値で先に出発することを決めたらしく、交渉の場から姿を消した。前ギルギットの地方弁務官に相談した結果、特高警察を派遣して、治安の維持に当らせるとの指示があった。仮病を装う行政事務官の駐在所を、特高警察の一隊が包囲し、周辺の風景には

およそぐわない騒然とした状況が出現した。交渉は再開されたものの、権力を背景として、中央政府の出したレギュレーションを全うしようとする連絡将校と、政権交代以降の顕著な物価昂騰に苦しむ地方の実態を顧みることなしに、旧態のままのレギュレーションを押しつける中央政府に対する批判の態度を崩さない事務官の間で、果てしない議論が続いた。これは謂わば現在のパキスタンの内政の側面であり、これらの主張の間にあっては、我々は部外者であり隊の立場をも代弁する連絡将校にその責の大部分を委ねざるを得なかった。交渉は思わしい様には進まず、終に全く状況が改善しないのを見てとった連絡将校は、非合法なことではあるが、と前置きした上で我々がポーターの言い値通り支払って出発する方が良いと思うという申し出をして来た。彼の努力が並み外れたものであり、既に交渉開始から一〇〇時間近くたった末に出された結論であれば、隊としては辛いことではあるが認めざるを得なかった。

六月四日夕方、すっかり見慣れたウルタル東面の大岩壁を後にしてキャラバンが始まった。翌日、ヒスパーにてポーターの一部を入れ替え、ことさらに日程を延ばそうとするポーターを宥めながら六日目にクンヤン氷河上に仮のベースキャンプを設けた。当初は更に奥の四三五〇メートル地点までキャラバンを行ないベースキャンプを建設する予定だったが、予算の関係からポーターはここで解雇し、約半日行程のベース予定地までは隊員のみで荷上げすることにした。実働六日目、六月十七日に約一・二トンの隊荷の輸送は終了し、正面にクンヤン・チッシュの主峰と北峰が望まれ、背後にはトリボールとブラルングサールが聳える、サイドモレーン上の沼の畔にベースキャンプが出来上がった。

登　攀

登攀を予定されるルートは半分以上が可視され、見えない部分も航空写真等でおよその見当はついていたので、此の時点で第一次のタクティクスが決定された。即ち、C1よりC4までの各キャンプ間の高度差は六〜七〇〇メートルとし、登攀活動を各々のキャンプ建設をもって終わる三つの段階に分け、各段階の終了時点では全隊員が所定の高度に順応し、かつその段階での最高キャンプに必要な物資が荷上げされ、またさらに上部へのルート工作も順応促進の為にもある程度なされるべく、登攀活動をコントロールすることとしたのである。また各段階の終了時には必ず低所のキャンプで二日間の休養を取ることとした。このシステムは登頂まで、ほぼ全うすることができた。

C1は六月十九日、クンヤン氷河の最奥で北峰のバットレスを迂回している支氷河沿いの岩棚上に設けた。C1までの登りは、氷河上を三キロ程歩き、傾斜の緩いアイスフォールの中をジグザグにルートを求め、次いで支氷河の側面の尾根を三〇〇

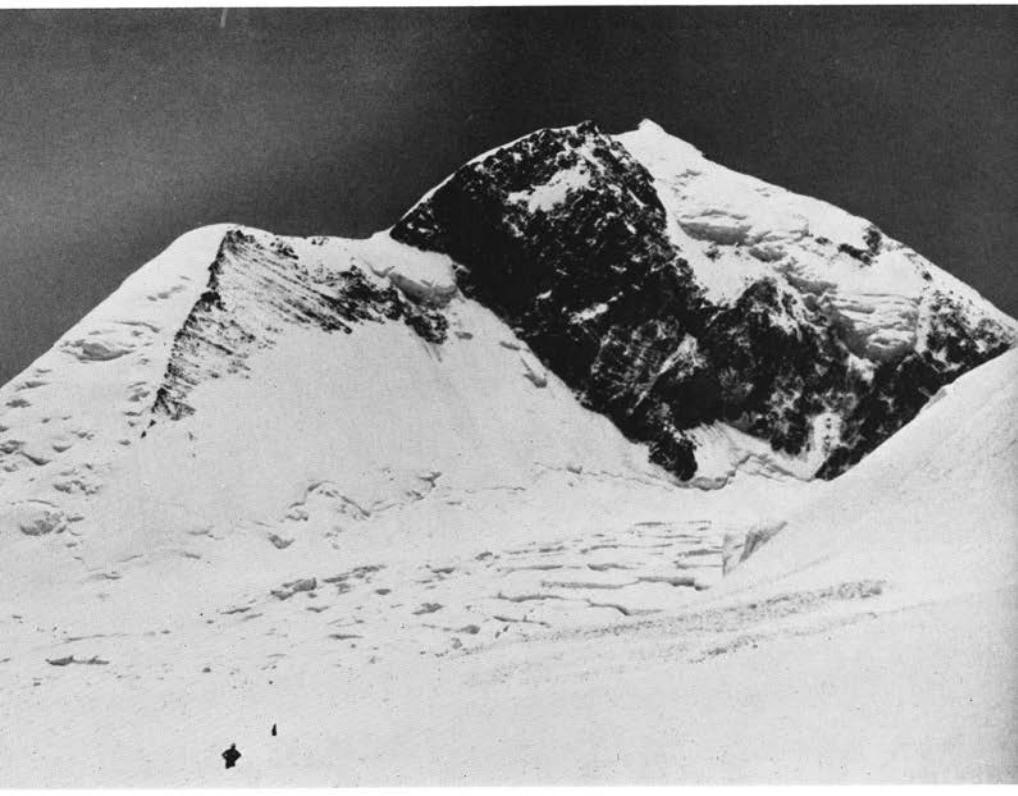


Plate 2-(a)：上ヤスギル氷河中間部より望むプマリ・チッシュ。

Pumari Chhish seen from in the middle of Upper Yazghil Glacier.

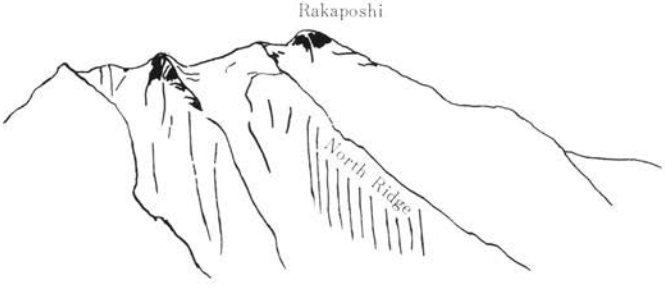
(Plate 2-(a) & (b), by T. Sasaki)

Plate2-(b)：プマリ・チッシュ頂上付近よりユクシン・ガルダン・サールを望む。
Yukshin Gardan Sar seen from near top of Pumari Chhish.

Plate 3-(a)：BCより望むクンヤン・チッシュ北峰。
Khunyang Chhish North Peak seen from BC.
(Plate 3-(a)～(b), by K. Echizenya)

Plate 3-(b)：7000m地点付近より望んだクンヤン・チッシュ北峰頂上。
Summit of Khunyang Chhish North Peak seen from C. 7000m.

Plate 4-(a)：カラコルム・ハイウェーより望むラカポシ北稜。
Rakaposhi North Ridge seen from Karakorum Highway.



(Plate 4-(a)～(d), by E. Ohtani)

Plate 4-(b)：ラカポシC2より見た北稜と頂上。

Rakaposhi North Ridge and the top seen from C2.

Plate 4-(c)：ラカポシ北稜C2付近。

Rakaposhi North Ridge, near C2.

Plate 4-(d)：ラカポシ北稜6500m付近の岩壁部。
Rock wall at 6500m of Rakaposki North Ridge.

メートル程登るものであったが、尾根の部分は膝下位の積雪が残っており、ヒドンクレバスが数ヶ所にみられたため、安全確保のためロープを仮設した。C1よりC2までは尾根を挟んだ広い緩かな雪面の連なりで、一ヶ所もフィックスを要することなく、荷上げの帰りには尻滑りを楽しむことも出来た。

C2からはクンヤン・チッシュ北峰とディスタギル・サール間のコルが間近に望まれたが、コルへのルートは予想以上に悪く感じられた。可能性のあるルートとしては、北峰よりの傾斜五〇度位の滑らかな氷壁、及びさらに奥に位置するアイスフォール帯の中のリッジ状の部分が考えられた。

六月二十三日より本格的にコルへの活動を開始した。偵察の結果は、氷壁ルートは気温上昇によりピンが浮いてしまう為ビレーポイントに不安があり、また遮るものがない為、降雪時には雪崩の危険が大きく、他方アイスフォール帯はセラック崩壊の恐れがあり、大いに判断に迷う所であった。我々はまずアイスフォールの中のリッジにルートを延ばすこととし、六月二十七日にコルへ抜け出るルートを完成した。

コルへの出口の門の様になった所は、上部氷河から剝離したセラックが層状に屹立しており、その上に不安定なスノーブリッジが形成されていたが、他の箇所は全て五〇メートル以上もあるオーバーハングした氷壁に遮られており、やむをえずこのセラックからセラックへとスノーブリッジ伝いにルートを伸ば

Route to KHUNYANG CHHISH NORTH

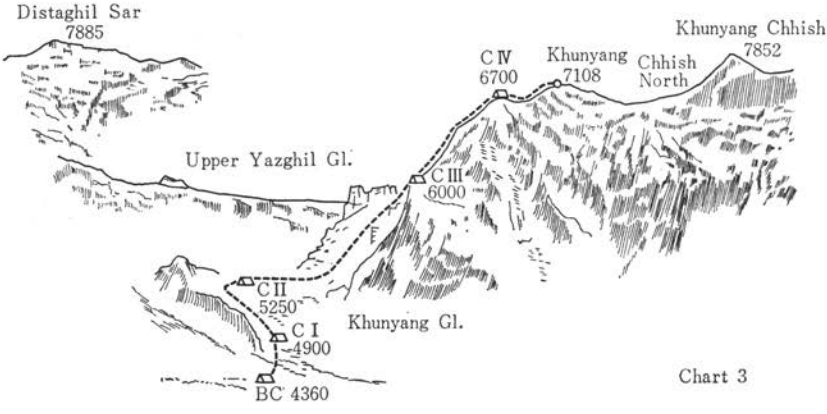


Chart 3

したのである。

コルの上部には広大な雪原が拡がっていた。我々はコルの西端にC3を建設することにした。しかし、その第一回目の荷上げの帰りのことであった。小さな雪崩が発生し、危うげにかかっていたスノーブリッジのひとつが、崩壊してしまったのである。長いワイヤー梯子やジュラルミン梯子を携行していない我々にとって、この崩壊は致命的であった。セラックからセラックへと飛び移らなければ通過出来ぬ以上、このルートは荷上げ用には使用不能となったのである。

他方、道岳連隊は当初我々が二〇〇メートル程試登した氷壁ルートを引き継いで伸ばし、この前日にコルへ達するルートを切り拓いていた。やむをえず我々は、このルートを有難く使用させて戴くことにした。こちらはビレーポイントのハーケンを打ち直して使用すれば、セラックの崩壊に比べて安全度は高く、気持ちの好いルートであった。七月四日、一日の降雪停滞の後、荷上げを再開し、結局コル上にC3を建設したのは七月七日のことであった。

コルからはさらに東に辿って北峰からコルへのびる東側の稜線を偵察したが、取付きに到るまで三キロ程歩かねばならぬ為、予定通り北側の稜線を登攀ルートとすることにした。この稜線は四十度位の勾配で、象の背のような広い雪面で始まり、一部岩稜を混えて北峰の肩へと突き上げていた。岩稜部分に五〇〇メートル余りロープをフィックスし、肩を抜けた頂上稜線上の小さなコルにC4を設けた。

登　頂

頂上稜線上では二五〇〇メートルの高度差を持つ西壁から吹き上げる風が、午後になると決って強まり、フィックスを張る操作を遅らせた。当初のタクティクスの予定ではC4が確保された後、一度C2へ降りることにしていたのだが、C2からC3を越えて一日でC4まで到達した場合は翌日の登頂に疲労が残る恐れがある上、天候が悪い周期に入りつつあり、C2からC3へのルートが降雪の為使えなくなることが懸念された為、C3に留まったまま頂上へ向かうことにした。

七月九日は晴天であったが風が強いため停滞とし休養にあてた。翌十日C3を出てC4から先の岩混じりのナイフリッジにフィックス工作の後、全員でC4に入った。

七月十一日、前日のフィックスの最終点から、胸を突く急な雪稜を八人交代でラッセルを続けるうち傾斜が落ち稜線も広くなってきた。頂上直下に着いて一服し、若い順に隊列を整え一気に頂上に達した。C4より四時間、午前十時十五分であった。ゆったりとした気分で眺める周囲の山々は、我々の足下のピークよりも高くはあったが、長く苦楽を共にした仲間が全員揃って談笑しながら眺めればやはり無上の物であった。持参し

た凧は風を受けて高々とカラコルムの空に舞った。

七月十六日、ベース撤収。登る前には半ば雪に埋もれていたベースキャンプの周辺は、色鮮やかな花に覆われていた。往路のキャラバンとは打って変わって、飛ぶようにして下って行くポーターの後を追いながら、振返って見たクンヤン・チッシュ北峰の姿は、既に遠く小さく雲の上にあった。

振り返って

今回の登山において特に気を配った点は、全員の均質な高度順応ということであった。その為には順応の遅れている者については、荷上げ負荷を軽減する一方で、ルート工作は徹底して全員が均等に行なうようにした。その裏には、荷上げ＝疲労負荷とルート工作＝運動を伴った低酸素負荷（馴化負荷）とは全く異質のものであるという認識があった。また登攀活動を数段階に分け、各段階の終了時には必ず各人の順応の程度を合わせるべく努めた。その結果、全員同時登頂に成功したと考える。

未だ未熟ではあるが、将来の冬のバルンツェ隊により低温と強風に関する知見の集積されるのをまって、より大きな試みに着手したいと思う。

＜記録概要＞

隊の名称　北海道大学山岳部・山の会カラコルム登山隊

活動期間　一九七九年五月～七月

目　的　クンヤン・チッシュ北峰の初登頂

隊の構成　隊長＝越前谷幸平（31）、隊員＝下沢英二（30）、石村明也（26）、花井修（27）、高橋仁（25）、小泉章夫（22）、志賀弘行（20）、入川真理（21）、連絡将校＝イクラム・アームド・カーン（29）

行動概要　六月四日ナガールよりキャラバン開始。六月十日仮ベースキャンプ着。六月十七日ベースキャンプ建設（四三五〇メートル）。六月十九日C1建設。六月二十七日クンヤン・チッシュとディスタギル・サール間のコルに到達。七月七日コル上にC3（六〇〇〇メートル）建設。七月十日C4（六七〇〇メートル）建設。七月十一日全員でクンヤン・チッシュ北峰に登頂。七月十二日ベースキャンプ帰着。七月十八日フンザ帰着。

ラカポシ北稜（一九七九年）

大谷映芳

はじめに

カラコラムにありながら、日本から数日もあれば、その素晴らしい山容をのぞむふもとの村に着くことができる。そんな山が、一九五八年の初登頂以来登られていないなんて不思議なくらいだった。私たちは、この魅力的な山に未踏のルートから登頂した。

ラカポシ峰七七八八メートル、別名「真珠の首飾り」。ギルギットの町の近く、フンザ河から六〇〇〇メートル近くの高度差をもって、ひときわ高く聳える純白の峰は、ティルマンをはじめ、古くからフンザを訪れる探検家、岳人たちを魅了してやまない山であった。私たちの目標としたラカポシ北稜は、平均斜度四〇度で頂上まで一気につき上げている、けわしく長大なリッジである。過去三回、西ドイツ隊、ポーランド隊が攻撃を仕掛けた。ヘルリッヒコッファー率いる西ドイツ隊は、一九七一年と七三年の二回、北稜からの登頂を試みたが、岩と氷の難ルートに加えて天候も悪く、六三〇〇メートルまで達して引きあげている。

ベースキャンプまで

隊員六人にドクター、これが私達の隊構成である。ヘルリッヒコッファーの隊に比べれば三分の一の数だ。しかし、平均年令二七歳、若さに自信はある。大学山岳部のOBは卒業すると山から遠ざかる者が多いが、私たちのメンバーは、冬の穂高滝谷、谷川岳、あるいはヨーロッパアルプスなどでトレーニングを積んできた。早稲田としては、実に九年ぶりの海外登山である。六月四日日本を発った。

ラワルピンディで先発の山下、大杉と合流、登山準備を進

め、六月七日カラフルに色彩りされたトラックでギルギットに向け出発する。荷物と隊員を乗せたトラックは、インダス川ぞい四〇度を越す灼熱のカラコラムハイウェイを走る。完全舗装のこの道路は、雨による土砂崩れなどで時々通行止めとなるが、夏季はその心配はなく、全く快適だ。このハイウェイの開通により、陸路ギルギット方面に入る登山隊が多いようで、ラワルピンディで時間を無駄に過ごすこともなく効率が良い。

六月九日未明、ギルギット着。食糧の買付けのため三人を下ろしたトラックは、三時間後にはラカポシのふもとの村グルマットに到着した。標高は二〇〇〇メートルである。日本を出てからわずか六日目のことである。隊員もあまりの早さにとまどっている様子だ。ここでは、かつてこの村のラジャだったハッサン・マディーンの世話になった。彼の家の一部とハイウェイわきにある倉庫を提供してもらう。この倉庫は後になってすべてのキャンプと無線連絡が可能で、ベースハウスとして最適であった。

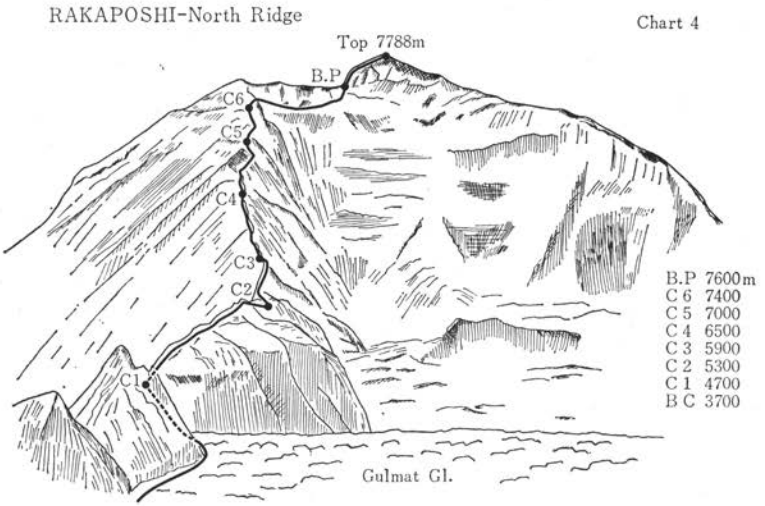
グルマットからのラカポシは、圧倒的に頭上にかぶさり、北壁の凄絶さに目を奪われる。北壁の中に私たちの目指す北稜が真直ぐに頂上に突き上げていた。

六月十二日、グルマット村で集めたポーター三〇人と共に、BCへの荷上げを開始する。私たちもポーターと同じ、三〇キロ近い荷を担ぎ、体調を取り戻そうと頑張る。BC付近は、雪が消えると羊や牛などの格好の放牧場となるため、グルマット氷河から流れ出る沢ぞいに、しっかりした道がBCまでつけられている。私たちは三日間、この道を往復した。キャラバンの必要のなかった私たちにとって、BCへの往復は体ならしに役立った。もちろん一日でBCに入ることも可能であったが、予算の少ない登山隊にとって、ポーターにかかる保険の掛け金を安くおさえるという意味もあった。

三七〇〇メートルにあるBC予定地はまだ雪の中で、ポーターはその下一〇〇メートルの所までしか登ってくれなかった。仕方なくトレーニングと割り切り、約三トンの荷を一日かけて、隊員とハイポーターでBCまで上げる。六月一五日、待望のBCを建設することが出来た。BCは谷の中にあるものの、氷河からはずれた小さな台地の上にある。雪崩の危険は全くなく、北稜全体を見渡たせる絶好のキャンプサイトだ。フンザ河をはさんで、バツーラ山群がラカポシと競うがごとく聳えている。天候も落ちついてきたようだ。いよいよ登山活動開始である。

登攀活動開始

当初考えていた私達の作戦は、北稜上に六つのキャンプを設け登頂を狙うというものであった。登山期間は五〇日間。隊を三つに分け、ルート工作には常に二名が当り、残りの隊員とハ



イポーターは荷上げに当ることとした。六四〇〇メートル付近の岩壁帯、見るからに悪そうなナイフエッジの連続、それらを含め、北稜の核心部は五〇〇〇メートル当りから始まる。そのためにはまず、しっかりしたアドバンス・ベースキャンプが必要不可欠であり、C2をそれに当てた。C2への荷の集結を登山活動の第一段階と考え、C2の建設に力を集中し、あわせて五〇〇〇メートルラインの高度順化を計ることにした。

北稜のコルと呼んだC1までは、グルマット氷河の右岸、クレバスの少ない部分を選びながらルートを延ばす。ハイポーター達はすこぶる元気で、隊員が追いつけない程の馬力で登り続ける。氷河の状態は良好だが、氷河の中の登高は、早朝は快適なものの、日が当りだすと雪は柔かくなり、膝までもぐる。その上、強烈な日の照り返しで日中の氷河の中は灼熱地獄さながらである。

C1予定地は、コルとはいうもののスノーリッジになっており、大きく雪を削りとってどうにかテントを張った。C1からは、急な雪稜がつづく。相変らず強い陽射しと柔かい雪に悩まされたが、フィックス・ロープは着実に張られ、岩場にはワイヤ梯子がかけられ、C2手前のプラトーまで順調にルートは伸ばされた。

そして、プラトーの先の小ピークからルートの全貌を初めて眺めることが出来た。ピークの影になり見る事の出来なかっ

た、雪をのせた鋭い岩峰群が鋸歯状に数キロにわたり続いている。直線距離にして五〇メートルほどのC2予定地までにも、両側が切れ落ちた岩稜上に、今にも崩壊しそうな雪が乗ったコブが連なっていた。とり合えず仮C2をプラトーに建設し、C2へのルート確保に努めた。不安定な雪を切り崩してのルート工作は、日本の山では味わうことの出来ないものであった。自分の乗っている雪が今にも崩れ落ちそうで、ヒヤヒヤさせられた。まる一日かけて、どうにか快適なC2予定地に到達することが出来た。

核心部の登攀

C2からいよいよ核心部の登攀が始まる。剣岳の「カニのハサミ」に似ている鋭い岩峰、複雑に張り出した雪庇の連続するナイフリッジ、四〇度を越す氷のリッジ……。

フィックス・ロープは、ほとんどベタ張りの状態だった。靴がやっとのるだけの不安定な足場、出歯のアイゼンで蹴っても突きささらない固い氷、バランスを崩そうものなら、二〇〇〇メートルはふっ飛ぶであろう、一瞬たりとも気を抜くことの出来ないルートであった。

また、西ドイツ隊の縄梯子やフィックス・ロープが、六年間の風雪に耐え、雪と氷の中から顔を出していた。ベークライトをステップにした、長さ二〇メートルもある頑丈な縄梯子。ガッチリとダブルに張られた、六ミリのフィックス・ロープ。岩に残されたアイゼンの爪あと。様々な種類のロックハーケン。すべてが、彼らの苦闘を物語っていた。

この頃になると、隊員やハイポーターの間に頭痛、下痢などの不調を訴える者が出てきた。もちろん高度の影響にもよるが、晴天による連日のオーバーワークがたたったようだ。原因不明の熱を出しながらも、常にトップに立って活躍していた大杉がとうとう倒れてしまった。C1で回復を待ったが、一向に熱は下がらず、井上ドクターに付き添われてBCに下った。その後ギルギットの病院に入院したが、一週間後にはカムバックしてきた。やはり高度が影響したのであろう。

しかし、小人数の隊にとって、一人でも隊員が欠けるのは大きな痛手だった。その上、ハイポーター達にも、疲労の上に北稜に対する恐怖感が加わってか、下山を要求する者が多くなって来た。期待する所の大きいハイポーターではあったが、もともと山が好きで登山を行っている訳ではない。仕方なく要求を聞き入れると、はるかに見える自分たちの村に元気よく下って行った。再び登って来た時は、野菜や肉を上げてくれて大変助かりはしたが、各キャンプへの荷上げが大分遅れてしまった。

ルートの伸びは遅くなったものの、フィックス・ロープはすき間なく張り続けられた。七月八日、五九〇〇メートルにC3建設。細い氷のリッジを三メートルほど削り取って、やっと四

人用テントを張ることが出来た。リッジの上に頼りなげにのっかっている感じだ。ここからも、急峻なナイフリッジが続く。「出ベソ」だの「乳首」だのと呼んだ不安定な雪のコブ。垂直に近い氷の斜面をトラバースしたり、コブをだましだまし乗っ越したりして、悪いルートを進んだ。

七月十三日、六五〇〇メートルにC4が建設された。ここからは、最後の難関と考えられていた岩壁帯が、私たちの行手を拒むかのように間近に眺められる。しかしこの難関も、七月十六日、児玉、山下が突破。難かしい岩と氷の二〇〇メートルの壁をわずか一日で登り切った。C5予定地までまだ遠いが、核心部はようやく終わったといってよい。あとは、高度をかせぎ登頂態勢を作るだけだ。

七月十四日、西の空から大きく雲が広がってくるのを見た。天候が崩れ出す前ぶれだ。翌日には六〇〇〇メートル以下で、入山以来初めて、降雪をみた。上部キャンプでは風雪による停滞の日も出て来た。

グルマット村のハッサン達も、登頂を急げと無線を通して助言してくる。ラマダーンが近いという。ラマダーンに入れば、イスラム教の熱心な信者であるハイポーター（この頃は二人になっていた）は下山してしまうというのである。イスラム教徒でも旅行中であればラマダーンは適用されない訳だが、ラカポシは彼らの村の中にあるため、旅行中と見なされないそうだ。全く予期していないことであった。

この巨大なリッジに隊員の数はわずか五人。不安な要素は多くあるが、あせらずじっくり、やれるところまでやってみようと確認する。

登山活動に入って早くも一ヵ月が経過した。登りも下りも気の抜けないルート、好天による連日の行動、隊員の顔には、疲労の色が隠せなくなってきた。岩壁帯を突破したものの、C5建設が遅れている。天候の悪化も手伝い、あせりも若干出てきた。C4への荷上げも思うように進まない。ラマダーンを待たずしてハイポーターが一人下山し、残りはたった一人になった。C4への一週間分の食糧とギリギリ最少限必要な物質の荷上げに力を注ぐ。この一週間で登頂態勢をつくることにする。

七月二十三日、C4に隊員五人集結。二十五日、C5を七〇〇〇メートル地点に建設することが出来た。ここまでフィックス・ロープは六〇〇〇メートル使用した。しかし、この日の行動に無理があったためか、隊員二人が高熱と雪盲により行動不能になる。残りの三人で、C6へのルート確保を急ぐ。この時幸いにも、ギルギットの病院に入院していた大杉が、カムバックし、C3に陣どり、C4への荷物補給に当たってくれた。

C5のすぐ上は、五〇メートル程の垂直のアイスクリフとなっており、出歯アイゼンとダブルアックスで登り切る。あとはゆるやかな雪稜が頂稜のジャンクションまで続いている。ラッ

セルが多くなった。C6予定地までとても遠く感じられる。

七月三十一日夕刻、児玉、服部のサポートを受け、大谷、山下がジャンクションから二つ手前のピークの影に張ったC6（七四〇〇メートル）に入る。頂上まであと四〇〇メートルと迫った。いよいよアタック態勢は整った。しかし、C6から頂上まで北稜を忠実につめ、雪庇の張り出した頂稜をルートに選ぶのは、時間的にも無理である。さらにもう一つのキャンプとルート工作が必要であろう。私たちには、それだけの余裕はもうすでになかった。C6から直接北壁上部に出て、頂上岩壁の基部まで上り気味にトラバースする最短距離のルートしかない。傾斜はかなりきついが、二ヶ所程アイスクリフの乗越しがある程度で何とか登路が見つかりそうだ。天気も安定してきており、雪崩の心配もない。

登　頂

八月一日、大谷、山下は風の弱まるのを待って、六時半C6を後にする。天気は晴れ。絶好なアタック日和だ。四〇メートルのロープ二本と、若干の登攀用具、最悪の場合のビバークを考えて、燃料と食糧をやや多目に持参する。テントを出てからすぐに、堅雪と氷のトラバースに入る。スタッカットで慎重に通過。予測していた通り、キーポイントは今にも崩壊しそうなアイスクリフの通過であった。氷の状態の良さそうな所を、ダブルアックスで、あるいは氷の裂け目やバンドを腹ばいになりトラバースしたりして、何とか乗り切った。ビルディングのような巨大なアイスクリフの下の通過、雪庇の落下した形跡のあるルンゼの横断など、緊張の連続の中をただひたすら頂上岩壁へ向かう。最後の大雪面は意外にも雪は柔らかく、膝までのラッセルに悩まされた。

頂上岩壁も、下からはただ一枚の黒い岩にしか見えなかったが、その威圧的な表情の細部を現わしてきた。茶や緑の美しい色の岩で構成された岩壁だ。北側は二〇〇メートルほど垂直に切れ落ち、雪を全く付けていない。やはりルートは、西に延びるリッジにしかないようだ。

最後の雪面を、辛棒強く交替でラッセルを続ける。いよいよ岩壁の下に走るクレバスにぶつかった。雪が柔かく、慎重に通過したためかなり時間がかかり、岩壁基部に到達した時には、午後四時を過ぎていた。ビバークを決定する。取り付きから五メートル下、バグロッド谷側の斜面に雪洞を掘る。二人がどうにか横になれる雪洞ではあったが、寒風が一晩中吹き込み、眠れぬ夜を過ごす。

八月二日、晴れ。凍ついた靴を暖め、チョコレートを溶かした湯を飲み、六時リッジに取り付く。北壁側のリッジ通しに登れば傾斜はゆるいが、手をかける岩はすべてはがれてしまう。また、手袋が裂ける程岩かどは鋭い。やむを得ず南面の比較的

岩の固い部分を攀じる事になるが、リッジから離れる程、傾斜が急になる。その上逆層気味で、バランスクライミングを強いられる。まず、バグロッド側の三メートル程のトラバースから始める。岩はもろく、段ボールの紙のようにはがれてしまう。きかぬハーケンを頼りに大谷が強引にトラバースに移った。その途端、ハーケンが抜ける。雪洞の上を飛び越え、一〇メートルほど雪面を滑落した。山下の確保で無事止まる。ここで幸運にも、容易にリッジに移れるルートを発見し、難なくリッジまでトラバースし、登攀再開。

快晴ではあるが、風が強い。二ピッチ、四級程度の登攀を続ける。ロックハーケンと、スノーバーでピンをとる。垂壁を山下はユマールで越える。ここから上部は、傾斜はいくらか落ち雪まじりの岩場が続く。グルマット側も時々のぞくことが出来る。不安定な雪の残る南面側の岩場をスタッカットでゆっくりと登る。酸素不足はそれ程感じない。睡眠不足と空腹に非常に悩まされたが、午後2時、ラカポシの頂上に立つ。登山活動に入ってから、実に四七日目、長い道のりだった。一ヵ月前登頂に成功したポーランド隊のケルンを見つける。キャンディーが一袋そえてあった。

頂上からは、バツーラ山群、ヒスパーの山々、遠くにはK2も望まれる。全く素晴らしい見晴らし台だ。各キャンプからの喜びの声が、トランシーバーに飛び込んでくる。グルマット村にいるハッサンや村人達の祝福のメッセージが入る。最高の瞬間だ。

一時間程頂上にとどまり、下山にかかる。気を抜けない下降がつづく。最後の二ピッチは、垂壁をアプザイレンで下る。ビバーク地点に着いた時は六時を過ぎていた。天気もあと一日くらいもちそうなので、無理をせず、雪洞に入る。燃料もほとんど使い果たし、食糧も昼食パックの残りがわずかにあるだけだ。再び寒くてみじめな夜を過ごす。しかし、登頂出来た喜びに、心は幸せだった。明けて三日、どうにかC6にたどり着く事が出来た。

下　山

第六キャンプに入った日と、アタックの三日間だけがウソのように良く晴れた。翌日から雪が降りはじめた。降雪の中のつらい下山が開始された。湿った雪がステップを埋める。フィックス・ロープにぶら下がったり、リッジの上にまたがったりしての下降がつづく。ガスに視界を遮られ、雷までが鳴り出す。せきたてられいじめられての、さんざんな目にあった下山であったが、無事八月七日全員がC2で顔を合わせた。そして翌々日、撤収に上がって来てくれたハイポーター達と共にBCに下山した。BCは雪もすっかり消え、羊たちの遊ぶ、目にしみる緑の中に赤や黄や青の花の咲き乱れる、一面のお花畑に変わっ

ていた。

終りに

こうして、私達の山登りは終った。九年ぶりだが、決して何がなんでも登頂というきばった山登りではなかった。山の好きな仲間が集まる中で、いつの間にか計画が進み、ヒマラヤへ一歩近づこうとしたまでだ。七七八八メートルは決して小さな山ではない。しかし、パーフェクトではないが酸素を使わず、小人数でそれなりの成果を上げることが出来た。

＜記録概要＞

隊の名称　稲門山岳会カラコラム登山隊一九七九

活動期間　一九七九六月～八月

目　的　ラカポシ（七七八八メートル）北稜からの登頂（北稜の初登攀）

隊の構成　隊長＝大谷映芳（32）、隊員＝山下松司（29）、児玉茂（26）、東秀機（27）、大杉直芳（25）、服部正弘（26）、医師＝井上敏克（32、群馬大学OB）

行動概要　六月九日グルマット着、六月十五日グルマット氷河上にBC建設（三七〇〇メートル）、北稜登攀を開始し、十九日C1（四七五〇メートル）、二十五日C2（五三〇〇メートル）、七月八日C3（五九〇〇メートル）、十三日C4（六五〇〇メートル）と各々建設しルートを伸ばした。

七月二十五日C5（七〇〇〇メートル）建設。七月三十一日C6（七四〇〇メートル）を建設しアタック態勢が整う。八月一日アタック隊（大谷、山下）C6発、頂上岩壁基部七六〇〇メートルでビバーク。八月二日登頂。その夜は前夜のビバーク地泊。八月三日C6帰着。八月九日、全員BCに下山。

スカムリ峰登頂（一九七九年）

亀井　正

はじめに

横浜山岳会は創立五〇周年の記念事業として、一九七九年、カラコルムへ登山隊を派遣し、無事パンマー氷河の奥に聳えるスカムリ峰の初登頂を果した。以下はその記録である。

尚、本隊の派遣に先立つ、一九七七年、私は偵察を目的として同地域に入った。その時は、パンマー氷河を遡り、ドレンマン氷河との合流点より、ドレンマン氷河とチリング氷河を分ける尾根に登り、五〇〇〇メートル前後のピークに立った。そのピークからはスカムリ峰を正面に望むことが出来、同峰の登頂可能性につき充分に確認し帰国した。

探検小史

計画当初、私達はスカムリをカムリと呼んでいた。吉沢一郎氏によれば、"SKAMRI"と書いてはいるが、チベット語の呼び方では"S"を発音せずに、カムリと呼ぶのであろうと言われたとのことであったからである。カムリとはチベット語で「雪の山」を意味するという。事実ほかの山に比べても、真白に染め上げられた美しい山であった。また、バルティ語では、"SKAMPO"（乾いた）、"RI"（山）となるがこれは実際の姿とは大きな隔たりがある。またシプトンはその著書『地図の空白部』の中では"FANGS"と呼んでいるが、東面から見たその南北に切れ落ちた山容が、正に牙のように見えたのであろう。

その後名称については、現地でポーター達に尋ねるとスカムリという答が返ってきた。そこで、現地での呼び方が適切であると思い、スカムリ峰の呼び名を私達はとることにした。

数少ない記録を辿るとまず最初にゴドウィン・オースティン

が一八六一年の探検で、パンマー氷河を遡行しノバンデ・ソバンデ氷河まで達し探査を行なっている。一八八九年にはF・ヤングハズバンドがその第二回目のカラコルム行に於てサルポ・ラッゴ川に入り、パンマー・ムズターグの北面の巨大な一支流氷河を探検し、この氷河をクレバス氷河と名付けた（現在はその源頭部の山群の名をとりスカムリ氷河と呼ばれている）。

一九二九年、スポレトー公のひきいるイタリア探検隊がバルトロ氷河源頭部及び旧ムズターグ峠よりサルポ・ラッゴ氷河を下り、シャクスガム渓谷を調査した。この時の隊員の一人であるA・デジオはこの地域を去る前、パンマー氷河よりドレンマン氷河に達しその周辺を踏査し、源頭部の際立った二峰をSkamriそしてBobisghirと命名したが二峰とも正確な標高は未だ不明であった。

そして一九三七年、E・シプトン隊がK2北面及びアギール山塊の測量を目的とした探検を行なった際、スカムリ氷河をも探査している。このシプトン隊は帰途三隊に別れ、J・オーデン以下四名はクレバス氷河より五四七五メートルのコルを越えノバンデ・ソバンデ氷河に入り、パンマー氷河を下りアスコーレに帰還した。

以後長い間、この地域に入った隊は無く、一九七五年にチョクトイ氷河からシム・ラを越え、ビアフォ氷河へ抜けた群馬岳連隊、及びその逆コースを辿った日本山岳会東海支部隊の記録があるのみである。そして一九七七年の私の偵察行となった。

ベースキャンプまで

先発一名が五月十一日に、十八日には本隊六名が日本を立った。しかし、その後むせ返る熱さのラワルピンディに、私達はリエゾン・オフィサー変更の為、十五日間も足止めをくわされたのである。六月二日になりようやくカイセル・ラシッドなる三十才の空挺部隊大佐が紹介された。日本で連絡を受けていた者より大男で、用意して来た装備は皆小さいが、我慢してもらうことにした。この日程の遅れに対しては今後のこともあるので観光省へ厳重な抗議を行なった。

六月七日、イスラマバードを発ちスカルドに入る。レストハウスに空部屋がなく、バルトロホテルに泊まる。新しい絨毯が敷き詰められた、さしずめ上高地の帝国ホテルといった、パキスタンきっての高級ホテルが登山基地に出現した訳である。予算に合わぬ為、次の日からバザールに買出しに行き、バスルームで自炊という有様であった。

日程の遅れを取り戻そうといくら焦ってみても、地方行政官によってジープの出発日からポーターの雇用まで全てが決められる以上、やむをえない。挨拶の為、イギリス風の花が咲きみだれた綺麗な官邸に地方行政官を尋ねた。広い部屋に通され、貫録のある白髪の行政官が現われた。私達の隊の事、日本の女

性の習慣などを語りながら、珍らしいパキスタン料理に舌つづみを打った。来客者名簿には偉大な先駆者の名前がつらなり、憧憬の地を踏んだ印として全員感激して署名した。

強い日差しの中、さわやかな風が吹きぬけるバザールは「アリの祭」で賑わっていた。ポーターの食糧を購入し、一八〇〇キロの荷を八十二個に分け、準備を終えた。

六月十二日、ボングラに向けジープとトラクターで出発した。チョゴルンマ氷河に入るつり橋が掛けられ、砂漠の中にボ川がうねうね流れている。ボングラには、ポーターが集まっており、さっそくキャラバンが開始された。その日のうちにダッソーに着き、小さな学校に泊めてもらう。

深い谷間に重々しく雲がたれこめ、ブラルド川の流れが灰色に濁り滔々と流れている。チャボまでは天気がもったが、翌日は朝から雨が降っていた。谷沿いに進むと先日もポーターが落ちたという難所にかかる。足先からザラザラと崩れた土砂は流れの渦巻く谷に砂煙りを上げながら落ちていく。ポーター達は祈りを捧げながら渡ってくる。

雨もあがり峠を登りきると、目の前が開け、遠い山々が見えて来た。青の空に照りつける太陽、その下に広がる土色の世界に緑のオアシスが点在している。チョンゴの村に入る時珍しい橋を渡った。両岸から組まれた木が徐々にせり出し、中央で結ばれており、荒削りされた木材の様子から見ると最近掛けられたようだ。

翌日、朝陽にまばゆいばかりにマンゴ・グソール（六二八八メートル）が輝いていた。村を二つ通過してアスコーレ着。

二人の娘と出合う。今まで通り過ぎて来た村の娘とは着ている物がおよそ違う。ボタン、ファスナー、ビーズ、宝具などで飾ったハンチングの様な幅子をかぶり、裾にいくらか刺繍がほどこされた、ダブダブのワンピースを着ている。腰紐がゆるめにかけられ鈴がチリンチリン鳴っている。そしてそのうえなお派手な柄のモンペをはいている。このスタイルはどこから来たものだろう。快活な笑顔で迎えてくれた。

ポーター五名を解雇し、翌六月十六日ビアフォ氷河を横切りコロホンに着いた。

コロホンでブラルド川の流れと別れ、デュモルド川に入る。道は一層悪くなり泥で固めた様な山々がおおいかぶさってくる。シンスターは台地状の所にカルカがあり、断崖から滝が落ちている。そこに私達は二日過ごした。

六月十九日、パンマー氷河の上を進み、チョクトイ氷河の手前でスカムリ峰を見る。白く染まった三峰はまるで大海原に浮ぶ島のようである。翌日はパンマー氷河を横断しチリング氷河手前まで進んだが、横断途中はまさしく嵐の海が凍り付いたような所で、大波小波を登ったり下ったりの二時間であった。

六月二十一日、いよいよベースキャンプ入りと張り切る。氷

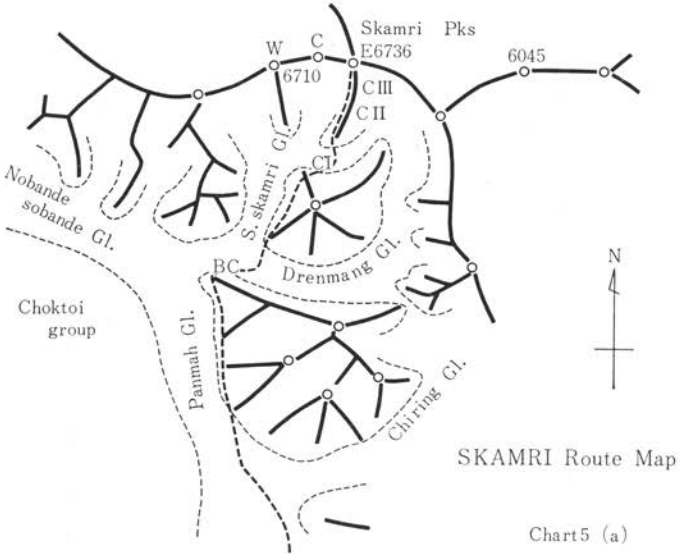


Chart 5 (a)

河も上部に来ると氷のハイウェイといった感じで、平らで綺麗に弧が描かれた表面が果てしなく続く。十一日間のキャラバンを終え、四三〇〇メートル付近のサイドモレーン上にベースキャンプを建設した。

いつしか吹雪となり、震えながら賃金の支払いを済ませ、コックとキッチンボーイを残し全員を帰す。

遠く人里離れた山ふところ、とうとう我々だけの世界となった。俗世間を遮断するかの様に吹雪はいつまでも続いていた。

登山開始

六月二十四日、二手に分れ、ドレンマン氷河とスカムリ南壁より落ちる氷河（南壁氷河）を偵察する。当初ドレンマン氷河を巻き込み東峰南稜を東面から登る予定であったが、この偵察により南壁氷河の状態も良くCIを近くに設けることができるので、南壁氷河をルートとすることにした。

翌日、荷上げをかねて再度偵察を行う。地図上では東峰南稜は末端にピークをもち中間にコルを作っているが、実際は南稜は南壁氷河により絶ち切られており、末端ピークは独立峰であった。南稜の本当の末端は、ピラミッド状の壁（ピラミッドフェース）になっており、頂上までのルートが見渡せるその対岸にCIを作ることにした。後にはいつ崩れるとも知れぬ巨大な氷の塊が引っ掛っている。荷上げを繰返し六月三十日、上部

ルート工作のため野神、福田がCⅠ入りした。

翌日、二名はCⅡへのルート工作を行う。クレバスが縦横に走る南壁氷河を横断し、高度差五五〇メートルのピラミッドフェースの西側の雪壁にルートを伸ばすが、高度順化不足とプレイカブル・クラストに足をとられ、三日を費やしたが、ルートは思う様には伸びず一旦BCに下る事にした。

BCの裏山に全員でピクニックに行くと、BCに着いた当時は一面雪におおわれていたが、今は緑の草原となり小さな花が咲いていた。

七月四日、再びスカムリに向う。ルート工作の末四〇〇メートルのロープを固定し、七月五日ピラミッドフェースの上に抜け出た。最後の二〇〇メートルは五〇度の氷壁でピオレ・トラクションで登る。ここに荷を集積させる（五二五〇メートル）。西を見るとチョクトイの針峰群、その後にラトック、バインター・ブラック等が見え、東方にはサルポ・ラッゴ氷河が雄大にどこまでも続いていた。この集積所への荷上げが、前進基地としてのCⅡを作る上にも、最も重要だったが、また最も苦しい戦いとなった。

早速、ピラミッドフェースより上部のルート工作を開始する、ヒドンクレバスが多く、起点としていたCⅠが低い為、ピラミッドフェースを登るのに時間がかかりすぎ、思うようにルートが伸ばせない。そこでピラミッドフェース上の集積所に天幕を張り、仮CⅡとし、亀井、福田、三ツ元が入り、ルート工作にあたることとした。

七月十一日、仮C2を出た三名は、ヒドンクレバス帯を縫うようにして、BCからも見え問題となっていた二〇メートルの氷壁の下に達した。迂回ルートは時間もかかる上にクレバスの危険が大きい為、直登することにする。七月十一日、二〇メートルのワイヤーバシゴをこの氷壁にセットし、氷壁上にCⅡを建設した。七月十三日、天候が悪くなりだしたのでBCまで下る。

BCでの一晩が明けてみると、全員体がむくんでいた。女性などは顔がふっくらとして若返った様にみえる。柴田女医が全員に利尿剤を飲ませる。

七月十五日登攀再開、亀井、福田、三ツ元が出発し、翌日、残り四名がBCを出た。

十七日、CⅡより先行の三名がルート工作に出る。緩斜面を二〇〇メートルばかり登ると、五メートルほどの氷壁に突き当った。アブミを四本固定し乗り越す。岩の露出した尾根状の所を過ぎ、セラックと岩壁との間にできた、クーロワールに入る。六〇度近い傾斜の底無しの井戸の様な所だ。登り切ると緩傾斜帯となり、結局三五〇メートルのロープを固定してCⅡに帰った。CⅠから野神、青柳が登って来て、CⅡは五名となった。十八日は吹雪の為停滞した。

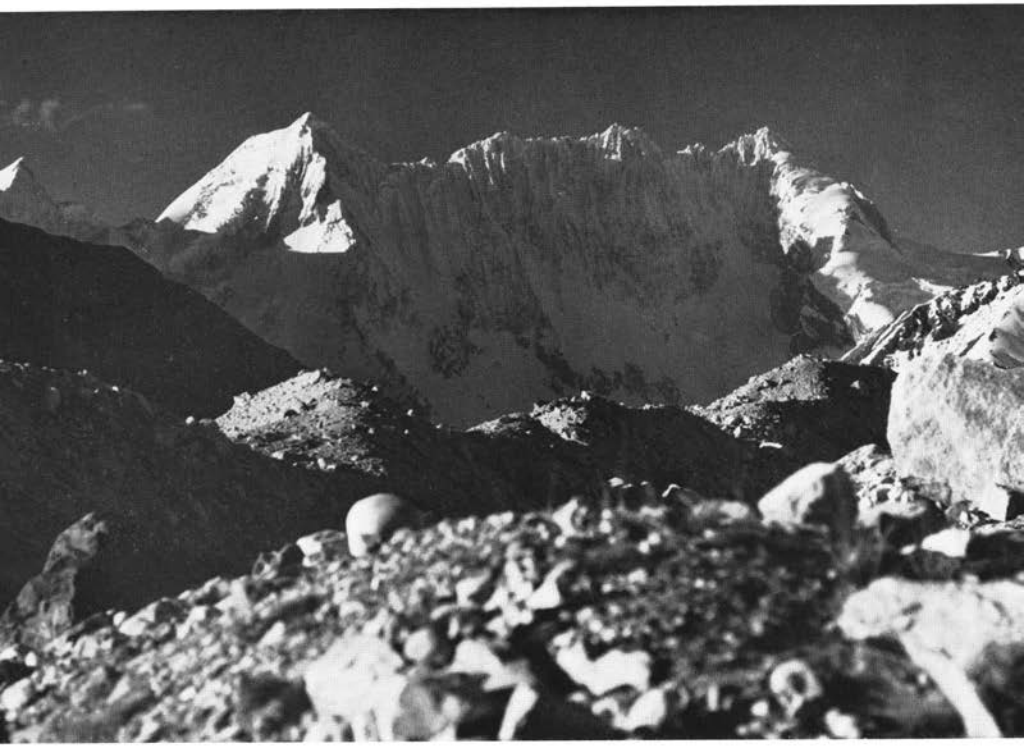


Plate 5-(a)：スカムリ峰南面—右から東峰（6736m），中央峰，西峰（6710m）。
Skamri Peaks from south-from right, East Peak (6736m), Central Peak, West Peak (6710m).

(by T. Kamei)

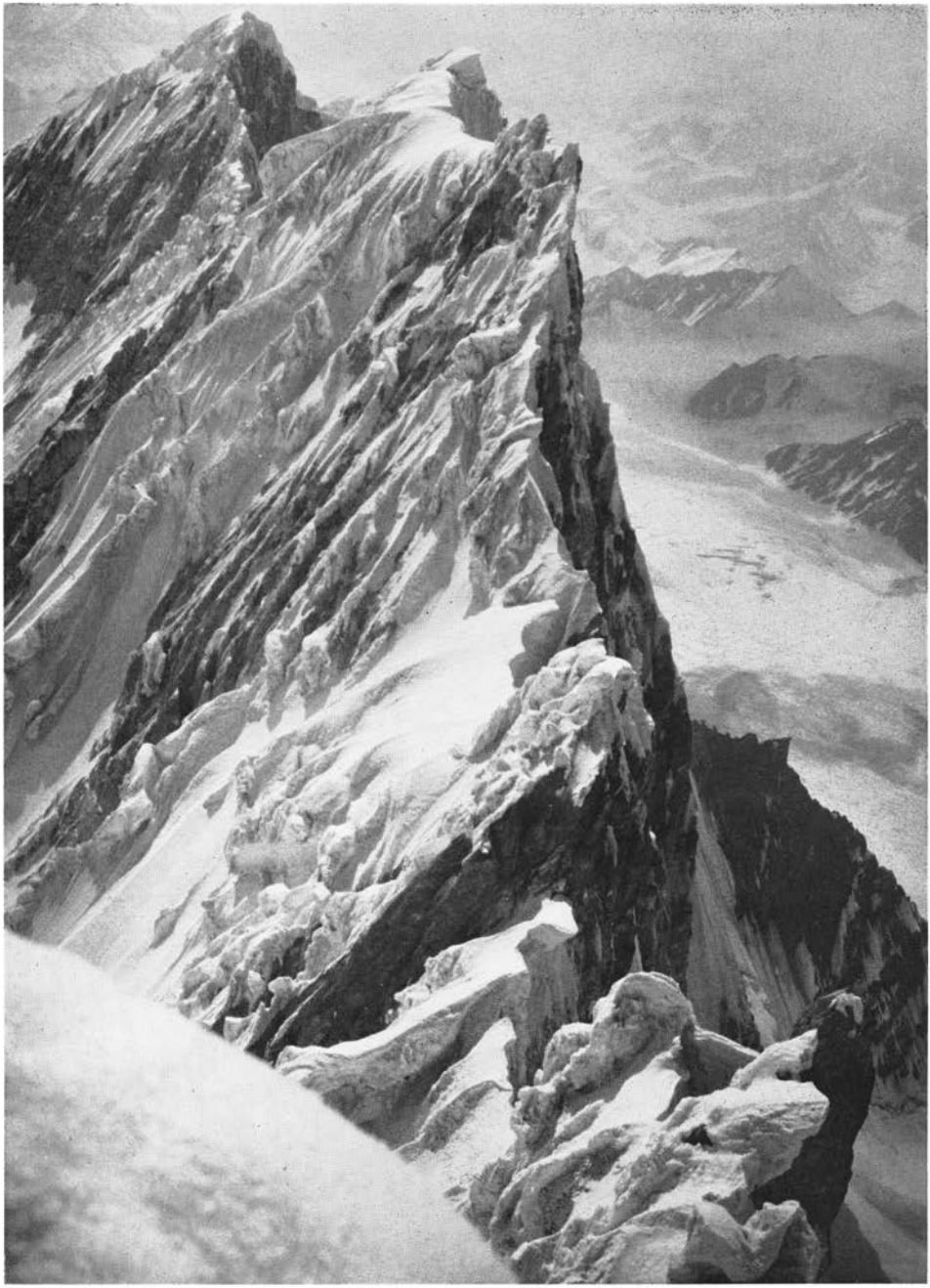
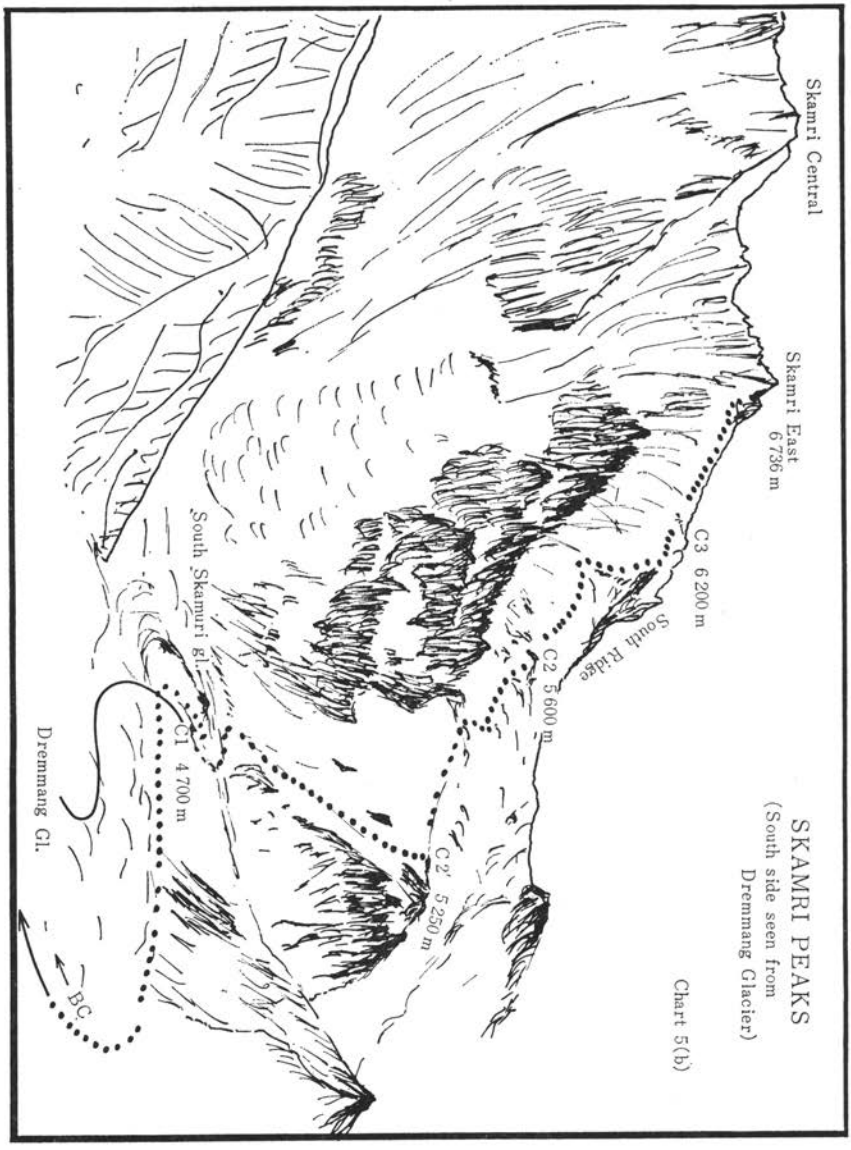


Plate 5-(b)：スカムリ東峰頂上より中央峰と西峰を望む。右下はスカムリ氷河。
Skamri Central and West Peak seen from the top of Skamri East.

(by T. Nogami)


SKAMRI PEAKS
(South side seen from
Dremmang Glacier)
Chart 5(b)
Skamri Central
Skamri East
6 736 m
C3 6 200 m
South Ridge
C2 5 600 m
C2' 5 250 m
South Skamuri gl.
C1 4 700 m
Dremmang Gl.
BC

七月十九日、CⅢ設営に五名が向う。一昨日に張ったフィックスロープの終了点より、さらに高度差で一〇〇メートル程登り、セラックの横にCⅢ（六二〇〇メートル）を建設して、野神、福田が入り、サポートの他の三名はCⅡに下った。

七月二〇日、再びCⅡの三名は個人装備と残りの荷を持ちCⅡを出発した。予定ではCⅢの二人はこの日もルート工作でアタックはまだ無理と考えていた。クーロワールを過ぎるとスカムリの頂上が見え、野神、福田が頂上直下をゆっくり登っている。雲がどんどんスカムリの上を吹き抜け、二人の姿は時々消えてしまう。時間はどんどん過ぎ不安になる。二時間あまりも待っただろうか、一時二〇分、トランシーバーの雑音をさえぎり、感激の初登頂成功の声が入ってきた。

「おめでとう、よく頑張ったな」

雲の切れ目から頂上に立った二人の姿が点のように見えた。止めどもなく涙が流れ出してきた。

頂上をめざして

野神の手記

七月二〇日、四時に起きるが風もほとんどない。二人共食欲は無いがコンディションは上々である。

出発の準備をして六時隊長と交信する。無理をせずルートを伸ばし、登頂出来るようであれば行けとの指示であるが、今日中に登頂すべく、フィックスロープ二〇〇メートルとハーケン類を持ち出発する。

CⅢを出るとすぐクレバスが現われ、スノーブリッジになっている所を何とか乗越そうとするが、雪がグズグズの為不安定この上ない。雪をだましながら越すと広々とした大斜面となる。

適当にクラストした斜面を快調に進む。途中大きく口をあけたクレバス三ヶ所を、スノーブリッジを利用して突破して行く。

小休止をしてルートを検討し、頂稜コルに突上がるルンゼ状の所を目指し、約四〇度の斜面を登ることにした。

岩場基部でアンザイレンして登るが部分的にホールドが細かく、またコル右側のアイスビルディングより氷塊が落ちて来るので緊張する。

岩場を過ぎ、氷のクーロワールをピオレ・トラクションで突破してコルに出る。コルより中国側をのぞくと、氷河まで一気に一五〇〇メートル、ズバッと切れ落ちている。ナイフリッジを一歩一歩慎重に進み、肩に達してふと下を見ると、CⅢで亀井、三ツ元、青柳の三名が我々の動きの一挙一動をジッと見守っている。

肩よりますます細くなったナイフリッジを馬乗りになって進もうとするが、霜柱の様な雪に身体が沈み動きがとれない。やむなくパキスタン側にトラバースのルートを求める。

霜柱とつらら状の氷で出来た約六〇度の斜面にピッケルを深く刺し、ハンマーで払いのけ削りながら一歩一歩進むが、足場が時々崩れ、一瞬心臓が止まる思いだ。もしスリップしたら一〇〇〇メートル以上も垂直に削り落ちた死の空間へのダイビングとなる。必然的に動きは慎重になり、時間のみがおそろしく早く過ぎて行く。

必死の思いでトラバースを終えて堅雪の壁にたどり着いた。堅雪の壁を登ると視界が開け頂稜に抜け出た。頂稜は細い雪稜に小さなダブル雪稜が出ており、中心を歩かないと安心出来ない。

C3を出発して七時間余り、苦しかった登攀の末、午後一時二〇分、ついにスカムリの最高峰に達した。早速、隊長と感激の交信をかわし、高曇りで眺望はきかぬが、パノラマの記念写真を撮り、なごりはつきぬ頂上を後にした。

下　山

夕方五時すぎに無事二名はCⅢに帰着、そのままCⅡに下った。第二次アタック隊の亀井、三ツ元、青柳はCⅢに残る。

七月二十一日、息苦しく寝られないでいると雪が降る音が聞こえ始めた。明け方には吹雪と変り、十時まで待ったが一向に天候は好転しない。頂上への気持を振り切るのにずいぶん時間がかかった。下ることに決めCⅢは放置し、最小限の荷物をまとめ、吹雪の中をCⅡまで下った。

二十二日、CⅡを撤収しCⅠに下降する。一度もBCから離れなかったリエゾンとキッチンボーイまでがCⅠまで迎えに来てくれていた。二人は抱きついて喜んでくれた。全員でBCに下る。

それから二日間は、雨と雪が激しく降り、私達の頂上への気持はおさまり、無事成功した喜びが再び私達を大きくつつんだ。

ポーターがBCに登って来るまでの間を利用して、ノバンデ・ソバンデ氷河の探検に行く。この長い氷河の終わるスカム・ラがガスの中に見える所まで行き、BCに帰った。

七月三十日、迎えのポーター達が来た。都会への行進が始まった。

△記録概要▽

隊の名称　横浜山岳会カラコルム登山隊

活動期間　一九七九年六月～八月

目　的　スカムリ峰（六七三六メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝亀井正（31）、隊員＝野神哲夫（32）、福田納利雄（26）、三ツ元三郎（29）、青柳知子（39）、柴田敦子（42）、古沢宣子（43）、リエゾン・オフィサー＝カイセル・ラシード（30）

行動概要　六月十二日スカルド発。六月二十一日ドレンマン氷河上BC（四三〇〇メートル）着。六月三十日CⅠ（四七〇〇メートル）建設。七月十日仮CⅡ（五二五〇メートル）建設。七月十二日CⅡ（五六〇〇メートル）建設。七月十九日CⅢ（六二〇〇メートル）建設。七月二十日野神、福田、スカムリ峰初登頂。七月三十日BCを撤収。八月五日スカルド帰着。

仮報告書　『スカムリ峰（六七三六m）初登頂報告』

〈山岳第七十四年・記事の訂正〉

「ゲントⅡ峰登頂」（一二二ページ）の記録概要欄に〝ゲントⅡ峰（七三四三メートル）の初登頂〟（一二七ページ）とあるが〝第二登頂〟と訂正する。

同峰は、一九七七年のオーストリア山岳会のクライミング・グループ創立五十周年記念隊によって、初登頂された。初登頂は六月二十八日、隊長のクラウスブルックナー、アクスト、ブレナー、ホラト、プッヒャーの五人によって成された。尚、同隊はゲント北東峰と呼んでいる。

ラトックⅢ峰（一九七九年）

寺西洋治

はじめに

私達広島山の会は一九七五年に創立二十五周年記念行事の一環として長年の夢であったヒマラヤ遠征を計画した。当初カラコルムのウルタル南壁に目標を置き、ヒマラヤでの岩壁登攀の夢を果そうと思っていたが、フンザ一帯が閉鎖され、やむなく「幻の山」として注目されていたカンピレ・ディオールに目標を変更した。初登頂の幸運には恵まれたものの、我々が目指していた岩壁登攀とは異質の山であっただけに、その夢は捨てがたく、その後四年間厳しい登攀への可能性を求め更に精進を重ね来るべき遠征に備えた。そして今回、にわかに脚光を浴びてきたビァフォー氷河山群に目を向け、その奥深く聳える未踏の岩峰ラトックⅢ峰に精進の成果をぶつけてみることにした。このラトックⅢ峰はその独特の美しさとは反対に厳しい岩壁登攀が要求される山であり、また一九七八年原真氏の率いる日本山岳会カラコルム学術登山隊が、隊荷の遅れによる日数のロス、登攀中のアクシデント、悪天候等により岩壁部二〇〇メートルを残してやむなく敗退しているだけに、一層ファイトが湧きあがってきた。また、我々と時を同じくしてビアフォー・カラコルム登山隊もラトックⅠ峰に挑戦することになり益々登攀意欲が湧きあがってきた。

ベースキャンプまで

日本を出発して丁度二週間目の七月十五日スカルドに飛ぶ。燃料、食糧の購入、ポーターの雇用、ジープの手配等キャラバンに入る前の最後のチェックを行った。十八日未明、トラクター一台、ジープ二台でボングラに向い、そこからキャラバンが始まった。ヒマラヤの大自然のだいご味を満喫しながらブラル

ド川沿いにキャラバンは進み最奥の村アスコーレではベースキャンプ用の蛋白源として鶏五羽、山羊二頭を購入した。アスコーレを過ぎるとビアフォー氷河上の静かなキャラバンとなり、大きな音をたてて崩れる氷河と足もとでピシッ、ピシッと氷河にヒビが入る音とが無気味にその静寂を破る。やがてバインター・ブラックが姿を見せ、続いてラトックⅢ峰が青空の中に弧高を誇るその美しい山容を我々の前に現わした。ラトックⅢ峰の見えるバインター・ルクパール氷河の左岸四六〇〇メートルにベースキャンプを六月二十五日設営する。

登攀活動

六月二十六日、昨夜ビアフォー・カラコルム隊の晩さん会に招待され夜更かしをしてしまったので、寝たと思ったら、もう朝が来ていた。登攀活動の最初の重要な仕事であるBC設営は、原真氏の助言通り高い所に置くに成功した。次は約八〇〇KGの荷物をスノーキャップ（五七〇〇メートル）迄、短期間に荷あげする事だ。その為、最初予定していた二名のハイポーターを四名に増員した。装備は隊員のものを貸すこととする。森、高見、佐田友、と共にC1予定地に偵察に行く。出発が遅れ雪がゆるんでいるので足をとられ、エネルギーを消耗する。二日酔いの体には、こたえる。第一アイスフォール帯に入り込むがルートが判りにくくはかどらぬ為、アイフォール帯の基部迄引き返す。氷河の中央突破はやめスノーキャップから派生している尾根の末端の壁の基部よりルートを求める。このルートならば比較的容易に氷河盆地迄行けそうだと判断し偵察を終った。

二十七日、早朝出発がベターと三時半起床、四時出発の予定だったが、お茶が出来ておらず、待っていたら少し出発が遅れてしまった。氷河上はさほど歩きにくくはない。ハイポーターのテスト日とあって飛ばしに飛ばす。一度の休憩だけで昨日のデポ地に着き荷を付け加えた。さらに壁の基部を進み五一〇〇メートル地点にC1地を決定し荷物をデポの後、BCに下る。

二十八日、今回の遠征では全員揃っての休日は持たない事とし、またチームも作らず、その時の状況によって誰とでも組替えをする事にした。四〇〇KG近くの荷がC1にあがる。ポーターから、キャプテンを通し、荷上げの荷が重いしポーターペースで歩きたい旨の話があったので、C1迄は二〇KG、C2までは十五KGと決めた。

二十九日、昨日の昼前、ラトックⅡ峰に舞いあがる雪煙を見たが、変な雲を呼び今朝の悪天をもたらした。早朝出発予定を一時中止したが、暫くすると少し青空が見えてきたので、「行け。行け」とC2建設に森、高見、奥平を追いたてた。結局好天にはならず、ぶ厚い雲が垂れ、雪が舞う。彼らの行動は、ゆるんだ雪に足をとられ強まった風に吹かれて大変だった。我々はいつも午前中に荷上げを終え、午後はBCでゆっくりくつろ

ぐ事にしているのだが、この日は五時前になって、やっと帰って来た。

三十日、キッチンのムサは横着者で、起しに行かないと起きないので、また出発が遅れてしまった。いよいよスノーキャップへのルート工作に森、高見、奥平がかかる。私は北村と共にC1への荷上げをする。今日はポーターペースで写真を撮りながら、のんびりと登る。北村とポーターは荷上げ後、直ちにBCへ下る。上部とトランシーバーの交信をすると、十二時頃にはC1へ下るとの事なので、大きなシートをとり出し雪をばらまいて水をつくったり、荷物の整理をしたりする。彼らはスノーキャップ迄ルートを伸ばし、ポーターによる荷上げも充分可能だという朗報をもって十一時半頃下ってきた。高見はそのままBCへ勢いよく下って行った。あまりに暑いのでハイピーシートをフライにし、テントとの中間にシュラフを置いて暑さを遮断し、テント内のマットを取り除き、底に這いつくばる。少しは暑さが違うのだが何とも滑稽な姿に我ながらおかしくなる。

七月一日、ポーターは全員休日。森、奥平と共にC2へ荷上げをする。C2迄のルートは殆んど雪ということなのでアイゼンを着けて出る。盆地から第二アイスフォールへ。押し出されてひっかかった感じの何万トンもありそうな巨大な氷塊が、降って来そうな氷河の左のルンゼを登り、バインター・ルクパール氷河源頭の大盆地の雪田へ出る。かなり長い登りだ。スノーキャップにダイレクトに通じる雪壁にルートをとるため、盆地をトラバースし、スノーキャップ下へ出る。五〇メートルザイル一本がフィックスされたルンザ状の所を登る。すごい高度感が出てくる。ここでやっと一回目の休憩をとる。岩の下を左に巻き大岩の上に出ると更に傾斜は増す。横埋めのスノーバーの所をトラバースし、雪庇の弱点からスノーキャップへ出た。やっと眺望のきく所に出た。気分爽快だ。頂上手前の大ピナクルが目の前に見え、手が届きそうだ。八時の交信の後、暫く休憩して下りにかかる。アイスハンマーが埋め込んである所をスノーバーに変えながら下る。下りは実に速い。P・P（ダンラインロープ）も太目のものを使えば安心してぶらさがれる。テントの前がいやに散らかっているので、よく見ると、からすの羽根が落ちていた。ラーメン二〇袋程を食い荒していたが、他の食料は無事だったので一安心する。

二日、奥平と共にC2入りする。C1より荷上げして来た森は調子が悪いといって早目に下って行った。二人には広すぎるダンロップのテントの中でジュースやお茶を飲み、少し横になる。一時半C3へのルート工作に出かける。スノーキャップより見上げると覆いかぶさってくるようなラトックⅢ峰の南東壁は、首が痛くなる程、切り立っている。そのためか頂上を近く感じる。スノーキャップからあがっている雪稜の右にルートをとり、そのまま雪棚へと一二〇メートルのぼす。傾斜はさほど

急ではないが、何しろ五七〇〇メートル地点、チョイチョイとかけ登るわけには行かず、ヒイヒイいいながら登る。ここで昨年のJAC隊とは異なった、我々の新ルートは終りである。今日のルート工作はこれ迄とし、正面のJACルートのザイルを掘りおこしながらC2に帰る。頭がガンガンするので、明るいうちからシュラフに入り込む。

三日、昨夜はすごい風が吹き、早朝迄テントをバタつかせていた。その風も弱まりラトックⅢ峰の頭にも日が射してきたので六時出発。昨日掘り起こしたフィックスザイルへと向う。ユマールをセットしながら高さへの序曲を奏でる。JAC隊のルートに導かれ右上気味に登るが、高度のせいか体の動きが思うに任せない。二〇〇メートル程登った所にナイロン一〇ミリを一本デポし先を急ぐ。雪壁にルートをとって登ると壁にぶつかり、基部を右にトラバースし、オーバーハングを越えると、特徴あるこぶ岩の右に出た。顕著な尾根をまわり込むと、C2はもう見えない。広いルンゼを登りつめると、出っぱった尾根の肩に出、そこをC3予定地とした。安全性の高い生活が出来そうだ。帰途はルンゼの中や岩壁帯のJACのロープを掘り起こし、状況を見て張り替えを行った。外観は何の損傷も見られない部分が多かったが、やはり一年を経過しているので不安である。十二時にC2に帰りつく。思ったよりルートが伸び、これなら短期間に勝負がつきそうだ。

五日、上部キャンプ確保のためC2からC3への荷上げにポーターを使う事にし、四名の中より二名を選び、C2入りさせる。C2・C3間のルートも、一ヶ所ワイヤー梯子をセットすればポーターでも充分こなせる。六日、高見、佐田友はC3を建設。昨日選んだ二名のポーターと共にC3へ荷上げをする。ポーターは腕力にまかせて登って行くが、ユマーリングはどうも不安らしい。ワイヤー梯子の所でポーターの一人ハミッが何やらもたついていると思ったら、足元から何か落ちて行くではないか。片方の靴とアイゼンが氷河の中へと吸い込まれて行った。アイゼンが梯子にひっかかるので、アイゼンをはずそうとして、靴迄ぬいでしまった様だ。仕方がないのでC2迄下ろし、靴の都合をつけBC迄下ろした。もう一人のポーターのフセンはC3迄立派に荷上げをしてくれた。彼はポーターの鏡だ。

七日、昨日C1入りしたキャプテンが更に上部の様子を見たいというので、ポーターと共に同行する。彼は軍隊仕込みで速足だが、技術的には少々不安がある。それでも思ったよりスムースに行動出来、七時四十分にはC2に着く。C4へのルート工作をする高見、佐田友が切り立った壁に挑む姿が、よく見える。「ホーレ」とコールすると、元気な声が返ってくる。キャプテンも照れ気味に真似をする。一気にBCに下り、二名の解約したポーターの賃金の計算をし、証明書を渡す。一歩一歩、

Plate 6-(a)：ラトックIII峰，C1より南東壁登攀ルートを望む。
Latok III, SE wall seen from C1. (by Y. Teranishi)

Plate 6-(b)：ラトックIII峰，上部岩壁のルート工作。
Latok III, climbing upper wall. (by Y. Teranishi)

Plate 6-(c)：ラトックIII峰，1979年7月15日C2(下部雪原上）より頂上アタックに向い，最後の岩壁を攀じる。 Latok III, climbing last rock to the top. C2 seen on snow field below.
(by K. Takami)

Plate 6-(d)：ラトックIII峰，頂上へ至る雪壁を登る。
Latok III, climbing snow to the top. (by Y. Teranishi)

↑ **Plate 7-(a)**：
ラトックⅠ峰BCよりラトック連峰を望む。左よりⅡ，Ⅰ，Ⅲ峰。
Latok Ⅱ, Ⅰ, Ⅲ (from left) seen from BC of Latok Ⅰ.
(Plate 7-(a)～(d), by T. Shigehiro)

← **Plate 7-(b)**：
ラトックⅠ峰，Ⅰ・Ⅲ峰間のクーロアールを登る。
Couloir between Ⅰ and Ⅲ.

Plate 7-(c)：ラトックⅠ峰，岩壁登攀の核心部。
Latok Ⅰ, the most difficult pitch.

Plate 7-(d)：ラトックⅠ峰，25ピッチ目6500m付近を登る。
Latok Ⅰ, the 25th pitch at 6500m.

Chart 6

LATOK Ⅲ
South-East Face Climbing Route

頂上へと近づいて行く。高見、佐田友はC4予定地（六五〇〇メートル）に達した。C5が必要かどうか、微妙な位置である。早く上部が見たいという焦りが出てきた。

八日、C4予定地へ高見、佐田友が荷上げをした。

九日、森、高見、奥平でC4へ荷上げをし、キャンプ地の切り開きをする。オーバーハングの始まる基部の所で、テラスがないだけに大変だ。明日は一名増員してほしいとの事なので、佐田友を予定する。ハミッと共にBCよりC2入りしたが、写真を撮る余裕もないほど調子が悪い。テントの風通しをよくし、明日へのスタミナを取り戻すため、のんびりとする。

十日、佐田友は朝になって調子が悪いというので、私が代りにC4に向う。C3よりは傾斜が一段と強くなり、荷を背負っての氷のルンゼやオーバーハングの厳しい登攀を強いられる。ハーハー、ゼェーゼェ、いいながらも四時間でC4に着いた。キャンプ地の切り開きは大変は難作業だ。氷をカッティングしながら地ならしするのだが、一振りでオンザロック一杯分の氷しかとれない。切れ味のよいシモンが大活躍した。気の遠くなる様な作業の末、やっと畳一枚分程切り開きテントを張る。腕がパンパンに腫れてしまった。C2が豆粒程にしか見えない。すごい高度感である。C3へ奥平と共に下る。フセンはC2より荷上げしてきて、C4に行きたいと言う。しかし、ここ迄きてハイポーターに事故でもあったら大変なので、説得して明日C2に下ろす事にした。しかしファイトのあるポーターで、頼もしい限りだ。

十一日、森、高見は最大の難関に挑む。奥平と共にC4迄荷上げをする。C2のメンバーは調子が悪いのか、荷上げをしてこないので、状況を見にC2迄下る。

十二日、上部岩壁のルート工作に奥平を加える。オーバーハングにルートを伸ばしながら一歩一歩頂上に近づいて行くのが、下から見える。八時の交信で「明日のルート工作で、ひょっとするとそのまま登頂できるのではないかと思う」と言ってきたので、「はっきり頂上へのルート工作をした後、アタックしてくれ」と返答する。C2のメンバーの調子はやはり悪く、全員登頂を目標にしていたが、これほど上部のメンバーと力の差がひらいてしまっては仕方がないと思う。

登　頂

七月十三日、いよいよ頂上アタックの日だ。しかし朝から雪が散らつき心配だ。C4をスタートした三名は頂上めざし頑張っている。私はC3の北村と共にC4へ荷上げをする。天候は少しずつ悪化して行く。上部といつでも連絡がとれる様にトランシーバーをオープンにしておく。

「十時に岩壁は終った。これから三人で頂上に向う」

と、連絡が入ったので、C4に待機していたが、二時間たって

も何も連絡が入らない。正午過ぎ薄暗いガスの中に、空中から降ってくる様に高見が下りてきた。残念ながら今日のアタックは矢敗だ。明日も好天は望めそうもない。風のうなりだけが、やけに激しくなった。我々の登頂を阻もうとするラトックⅢ峰の最後のあがきだ。

十四日は終日、雪と風が激しく、停滞したが、BCは降っていないとの事、この悪天も長くはあるまい。夕方頃から雲が切れ、明日への期待で眠れない夜を過す。

十五日、快晴、無風。今日を逃しては、カラコルムの天候の周期からしてアタックする日はないと、登頂の決意を固める。午前六時、C4の森、高見、奥平に加え、C3より私もアタックを試みる。朝が早いとフィックスロープをいつも氷漬けの中から掘り出さなければならず大変なので、昨日は、氷漬けにならない様工夫しておいた。おかげで今朝は最高のロープコンディションである。C4に着いた時、先発の三名のラストがユマーリングをしているのが見えた。テントの中で氷を溶かしお茶とビスケットを流し込む。三十分後、全てのチェックを済ませ、腹に力を入れて出発する。先行する三名の姿はもう見えない。呼吸が楽なのでユマーリングも平地と同じペースだ。リズムで登るのだから苦労はなく、ぐいぐい高度をかせぐ。この高度感は実に素晴しい。体は岩から離れロープに命を託しているだけに、まさに生と死が隣り合わせの状態だ。喜びと恐怖とが複雑に心の中で交錯する。一五〇〇メートル下の氷河盆地がはっきり見える。やがて広い肩の雪田に出てホッと一息ついた。今日は最高のコンディションだ。後は頂上まで高度差百五十メートルの雪壁が碧空に浮かびあがり、頂上の輝きがまぶしい。十一時三十分ついに頂上に立った。一時間前に頂上に立った三名は、眼前に拡がった大パノラマに目を転じながら、写真を撮っていた。暫く頂上で初登頂の気分をかみしめながら写真を撮り、十二時頂上を後にする。

おわりに

今回いろいろの経緯から、やむなく隊長という大任を引きうけざるを得なかっただけに、無事故で初登頂に成功し、その任を曲りなりにも果すことができ、やっと終ったという思いが強い。色々と事故の起りやすいヒマラヤで、何事もなく、念願の攀が成功したのは、やはり日常通りの山行をヒマラヤでも行う岩壁登事が出来たためであろう。その結果、ラトックⅢ峰よりさらに厳しい岩壁登攀も可能ではないかという夢を持つ事が出来た。更に精進を重ね頑張りたいと思う。

〈記録概要〉

隊の名称　広島山の会カラコルム・ヒマラヤ登山隊一九七九

活動期間　一九七九年六月～七月

目　的　ラトックⅢ峰（六九四九メートル）の初登頂

隊の構成　隊長＝寺西洋治（33）登攀リーダー＝高見和成（34）隊員＝森栄（40）北村清和（30）佐田友啓壮（29）奥平直樹（27）リエゾン・オフィサー＝ナシーム・ハイダ・マルク（24）

行動概要　6月16日ラワルピンディ発。18日スカルド発。25日バインター・ルクパール氷河の左岸四六〇〇メートルにBC建設。29日C1（五一〇〇メートル）建設。7月2日C2（五七〇〇メートル）建設。6日C3（六一五〇メートル）建設。10日C4（六五〇〇メートル）建設。13日森、高見、奥平頂上アタックするも悪天の為失敗。1日悪天の為停滞。15日森、高見、奥平、寺西ラトックⅢ峰初登頂。20日BC撤収。26日スカルド着。29日ラワルピンディ着。

報告書　『LatokⅢ 1979』（一九八〇年一月二十三日発行）

ラトックⅠ峰遠征を終って

高田直樹

成功したにしろ、失敗したにしろ、遠征隊に関する分析は、すべて結果論である。ぼくはそう思っています。だから、いかにも科学的な装いで行われる因果関係の分析は、時に、実に馬鹿げた結論を引きだすことがあります。

というようなことを充分承知したうえで、なおかつ、ラトックⅠ峰隊の分析を試みたいと思うのは、一つには、今の山の世界で、行ってきました、登れました、では何とも芸のない話であると考えること。また、テクニカルなデータを披露してもあんまり意味はないし、第一、ぼく自身、むろんベースのお守りをしていたのではないにせよ、頂上に立ってはいない以上、それはぼくの任ではないと思うのです。

そして、さらには、ラトックⅠ峰を目指した、〈ビアフォ・カラコルム隊〉が、あんまり前例のない隊であったと考えるからであります。

何のトラブルもなく、しかも成功裡に終った隊であっても、すんでしばらくの間は、色々の雑然とした思いが錯綜して、思考は一種の混沌の中にあるのが常のようです。遠征が終って、約一年が経過した今、ようやく、少しは客観的に、自分達の隊のことが考えられるのではないかと思う訳です。

『岩と雪』七一号の TO FOREIGN SUBSCRIBERS には、次の如き記載があります。

—And it may be a success by new kind of a mountaineering party in Japan

ぼくは、だから、ここで、では、どこが、どういう風に、「ニュー・カインド・オブ」であったのか、それを考えてみたいと思う訳です。

一、プロジェクト・チームとしての登山隊

登山を目的とする人間集団は、本来的に、プロジェクト・チーム的な色彩を持っているはずです。ところが、現実には、そうした事が明確な隊はあまりなかったのではないか。これは、遠征隊に於ては、その構成員の目的が、多岐に亘っているからだと思います。もちろん、みんな頂上に登りたいという一点では一致してるとしても……。もちろん、最初から、ベースキャンプで満足する、あるいはある高度に達したら、それでいい、という人がいるのは論外としての話です。

遠征隊は普通の場合、日本における山岳集団、山岳会やあるいはそれに類するものによって構成されてきました。それはいわゆる中根千枝のいう「場の理論」による集団、平たくいえば、「おなじ釜のメシ」集団にすぎず、その遠征は山に場を貸りた一つの旅行にすぎない、人数の大小に関係なく、理念的には、トレッキングと同列だといえる、と思うのです。

誤解があっては困るのですが、ぼくは、ここで、プロジェクト・チームだけが遠征隊で、他はちがうといっている訳ではありません。またプロジェクト・チームとしての遠征隊だけが成功するといっている訳でもありません。

プロジェクト・チームとしての隊は、当然、セレクト隊、選抜メンバーということになり、そして、普通の場合「混成隊」となります。

これまで、「混成隊」は成功しないもの、内輪もめを起すもの、という定説ができあがっていたようです。どうしてそうなったのか。

これまで「混成隊」の指導者がとったポリシーは、次の二つではなかったかと、ぼくは考えます。一つは、「混成隊」にその場限りの付け焼刃的「同志意識」を作ろうと試みたり、短かい準備期間に大急ぎの合宿をしつらえ、山岳会的「結社意識」を期待したりします。このどれも、全て疑似幻想にすぎませんから、厳しい高山の現実に直面すると崩壊して当然で、メンバーは、思い違いのいらだちをぶっつけ合うことになります。

また、上層部がメンバー個々に、秘かに、「君だけに期待している」みたいな感じのささやきを行う。このやり方は、日本的風土によく合っていて、うまくゆきそうな気がします。でも、これまで、うまくゆかなかったのは、きっと「秘話式トランシーバー」がなかったからだと、ぼくは考えています。

ところで、こうした形の「混成隊」は、すでにもう、プロジェクト・チームとはいえないことになります。

もう一つの「混成隊」ポリシーの形は、はっきりと、会員登頂を唱ったり、強いものが登頂できるとして、登頂チャンスの公平化のタクティックスをとる。この場合、全員登頂というのは、見込みによるウソをついている一種のサギ的要素がある。

それと、こうした場合、「混成隊」はプロジェクト・チームというより、一つの「コンペ集団」となって、アクシデントの確率は高まる。エベレストの国際隊がいい例のようです。このような混成隊の決定的なデメリットは、メンバーが、最後の突込みに備えて、エネルギーを温存し、お互いに競争相手をうかがうという状況が生じて、一向に荷上げがはかどらないということになる点です。

そして、成功しても、失敗したときはなおさら、こうした競争相手、いわば敵としてのメンバー同志には、冷やかなものが残ることになるでしょう。

さて、プロジェクト・チームとしての〈ビアフォ・カラコルム隊〉はどうであったか。

プロジェクト・チームというものは、まず、人間関係において、またその他あらゆる発想においても、あいまいさのない明快なものであり、かつドライなものでなければならないと考えました。

これは、目標の山の設定、隊員への呼びかけに於ては、ほぼ貫けたようです。ただ一人の隊員に関しては、少々原則をはずれたと思われるふしがあり、このことのあやまりは、後に事実となって示されたように思います。もう少し明確にすれば、参加不参加の決定は、神経質なまでに、相手の判断にまかせねばならないということです。

電話を心当りにかけ、目的、期間、費用等を話していた頃、一人の人は、こんなことを言って、ぼくに忠告してくれました。

「やっぱりこういう話は、じかに会って、酒でもくみ交しながら、やられた方がいいと思いますよ。みんなそうするんですよ」

しかし、ぼくは、そのやり方自体を忌避していたのですし、そうしないと来れないような人は、こっちも必要としていなかったのです。だから、この忠告を、ぼくは「ありがとう」と素直に受けとっておきました。

いま考えてみて、私たちの遠征隊は、プロジェクト・チームであったとしても、完全なものではなかったし、それは未完のプロジェクト・チームであったといえるでしょう。ただそうした方向性と志向を持っていたということは、はっきりしているといえます。

でも、本質的に、遠征隊は、プロジェクト・チームであり続けられるのか。とくに、苛酷な自然条件の中で、四六時中、生命の危険におびやかされるような空間において……。

これは、遠征期間中に、だんだんと、ぼくの心に発生した問題でした。

二、母性原理と父性原理

唐突なタイトルで恐縮ですが、この二つの対立概念は、遠征期間中に、ぼくの頭に漠然と浮かび、帰国後しばらくして、かなり明確になったものです。

明察な諸氏は、すでにご承知と思いますが、母性原理とは、没契約的、包容的、許容的な母の愛の様な考え方であり、父性原理は、反対に、契約的、区別的、競争的、価値判断的な切り捨て原理といえます。

ところで、少し話がそれるようですが、近代日本は、父性原理を軸に発展してきたといえます。でも、それまでの日本は、母性原理を基底にすえており、この母性原理を貫くための権力者として家長があり父権が存在していました。戦後、父権は消滅したものの、企業等には、終身雇用制、年功序列制に見られる如く、母性原理は厳然と生きているようです。

ある言い方をすれば、前近代的ともいえる母性原理を温存し、父権原理との日本独自のバランスを按配したところに、近代日本の発展があったともいえると思うのです。

ところが、山登りの世界では、リーダーシップとパーティシップとか、メンバーシップと、フォロアーシップというような極めてバタ臭い父権原理に基づく概念導入がなされました。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトというような舌をかみそうな考えが、喜々として語られ、それが現在に形を変えて生き残っているのではないかという気がするのです。

「山登りは個人に属する」と考え、極めてヨーロッパ的な父権原理的発想で、海外登山に出掛けても、もともと「個人」の存在を許さない日本の風土に育った日本人であってみれば、すぐに馬脚が現われてくるという訳です。

さて、〈ビアフォ・カラコルム隊〉の場合、ほとんどのメンバーが、海外登山の経験者でした。そうした経験を通じて、自分がどういう状況でどうなるかということを予測できる人間が多かったし、彼等においては、外国経験を通じて、ある程度、「個人」の確立が行われていたようです。

そして、隊編成の始めから、明らかに父性原理的発想に基づくプロジェクト・チームとしての隊であることを感じ取っていたと思われます。

ぼくは、遠征が、和気あいあいと遂行できるとは、全く考えませんでした。むしろそうしたムードは百害あって一利なしと思っていました。そうした見せかけのチーム・ワークと呼ばれるようなものは、どうでもよいと考えていました。

もし、ピンディあたりのホテルの食堂で食事をしている私たちの隊を見た人がいたら、その人はきっと、なんと冷ややかな隊で、テンデンバラバラなチームか、と思ったことでしょう。

登攀活動を開始すると、隊員は興味ある行動を示しました。

一日の行動が終ると、各々、物理的にも精神的にも自分だけの場所に閉じこもる傾向を示したのです。肉体よりもむしろ神経をすりへらすような登攀が終った時、再び立直るためには、一人になるのが一番だったようです。とても、談笑のうちに回復するというような次元のものではないと思えました。それに、打ちひしがれている自分を人に見せたくないという気持が働いたのかも知れません。

ぼくは隊長として、慰労に気を配るべきだったかも知れません。しかし、そんなことはあまり効果があるとは思えなかったし、ぼく自信まいっていて、自分がしゃんとしていることだけで精一杯でした。

ぼくは、荷上げに関しては、自己管理をするように申し渡してありました。自分の持てるだけ持って荷上げせよ、という訳です。もし、トータルとして存定量が上がらなかった場合は、ボッカ量の割り当てを行うことにしていました。結果、そうする必要はなく、予定通りの荷上げができました。

でも、これは、皆が均等に持った訳では決してなく、誰かの分を誰かが肩代りして、余分に持上げていたことになります。

トイレットペーパーばかり上部にあがったという、ぼくの過去の遠征隊での荷上げ自己管理の失敗は話しておきました。

「あんな奴はベースにおろせ」という要請が、あまり持たない隊員に関してあった時、「なんにも上がらんよりましではないか」となだめたのは、隊長としての母性原理の行使でありました。そのため、だれもつぶれず、全員頂上に向えたのだと思うのです。

今日の海外遠征登山に於て、隊の編成過程にあっては、父性原理にのっとり、遂行段階では日本の伝統的思考である母性原理を、うまい具合にからませてゆくのが、最もいいやり方ではないか。結論的にそういえるような気がしています。

三、メンバー相互の呼称

「混成隊」の場合、メンバーがどう呼び合うかは、一つの重大な問題であると考えていました。なぜならば、高所登山というフィールドに於ては、登攀能力のみに限られない、総合的能力が必要とされ、そうした実力序列は、否応なしに、全メンバーの眼に明らかとなります。そして、そうした序列を反映するのが、呼称であると考えていたからです。

基本的に、名前でよんだり、ニックネームをつけたり、あるいは「ちゃん」づけにするようなことには、賛成できませんでした。それは、安直に、擬似親近感を醸成するのみで「個人」の消滅につながるのではないかと考えていたのです。

別の推論をやってみましょう。AとBがいて、Aの方が実力が上だとBは思っている。しかし、Bはその事実を認めたくないし、またAに、「ぼくは君が上だと思っている」ということ

を示したくないとします。この場合、Bは、「Aさん」と呼んではいけないのです。たとえ、Aが「Bさん」と呼んでいたとしても、この時に現われる呼び方が、「Aちゃん」ではないのでしょうか。

遠征登山に於ては、実力の序列は、それが自然なものならばあった方がよいと思います。例えば、トップを決める場合にも変な張り合いが起る危険も少ないのではないかと思うからです。「ちゃん」呼称は、無意味に序列づけを混乱させます。

そんな風にぼくは考えていたので、準備段階で、「そんな幼稚園みたいなことは止めよう」と提案しておきました。結論として、「ちゃん」呼称はなかったようです。ほとんどの隊員は、すべて、「さん」呼称で呼び合っていました。ぼくの場合は時として、「隊長」と呼ばれることがあった様です。ドクターは「ドクター」でした。

ぼくが隊員を呼ぶ場合は、時として、呼びすてにすることもありました。これは、親近感をもった時には、そうなったようです。終始、呼びすてにしたメンバーも数人ありましたが、これは、この遠征に最初の段階からかかわったメンバーに対し、その事を明確にするためにそう呼んだのです。

四、終りに

いずれにしろ、ラトックI峰は、ぼく個人の見解ですが、一つの実験登山隊によって登られたと考えています。

実験登山隊でありましたから、正直いってたとえ成功しなくても、ぼくとしては、それなりの成果はあったのだろうと思います。まあ、失敗していれば、こんなことを仰仰しく述べると、世間の失笑を買うことになったのでしょうから、やはり成功してよかったのでしょう。

パキスタン放送のインタビューで、「これまでの隊が全て失敗していた山に、なぜ成功したか」という質問が出た時、ぼくは、つたないウルドー語で次の様に答えました。

一つは、これまでの隊が見出せなかったルートのラインを見つけたこと。二つ、メンバーは、みんな経験があり極めて強力であった。三つ、アラーの神が、常に我々と共にあったからだ。

いってみれば、成功とは何とも単純なことなのかも知れません。

△記録概要▽

隊の名称　ビアフォ／カラコルム登山隊1979

活動期間　一九七九年五月～七月

目　的　ラトックI峰初登頂

隊の構成　隊長＝高田直樹（43）、登攀リーダー＝重広恒夫（31）、隊員＝松見新衛（32）、奥淳一（31）、遠藤

甲太（30）、武藤英生（29）、中村達（29）、渡辺優（29）、城崎明（22）、医師＝五藤卓雄（34）

行動概要

六月十日バインター・ルクパール氷河上四六〇〇メートル地点にBC建設。南壁右寄りのピラーにルートを取り、途中二ヶ所の中間デポを設けて六月二十日C1（五五〇〇メートル）建設。六月二十一日雪崩によりC1が流失した為、以後はBC・C1間の第二デポをC1として使用した。六月三十日（五八〇〇メートル）建設。その後核心部である七〇メートルの垂壁を二日間を費して突破し、七月八日C3予定地（六三〇〇メートル）に到達。C3予定地はテントを張るだけのスペースがなく、ビバークを繰り返すこととする。七月十五日南壁上部のアイス・キャップに達し、C3（六五〇〇メートル）建設。七月十七日重広、松見、渡辺の三隊員により第一回アタックを試みるが、ロープの不足と天候の悪化でに引返す。七月十九日同じ三名にて再度アタック、新雪と頂上直下のスラブに苦労しながら十九時四十五分初登頂に成功。七月二十二日第二次隊の三名（武藤、遠藤、奥）と重広がC3より第二次登頂を果す。

テラム・カンリⅢ峰（一九七九年）

花田澄人

出発まで

一九七二年、アフガン・ヒンズー・クシュに初の遠征をし、六千米峰のヴァリエーション・ルートからの全員登頂をものにした弘前大学山岳部及び山の会（OB会）は、当時印パ戦争の故にあきらめざるをえなかったカラコルムでの登山活動の夢を抱き続けていた。その間、若手OBは個人的にあるいは他の遠征隊の一員として、アラスカ、ネパール、インドでの登山経験を積み上げてきた。

一九七六年夏、花田宅に集った十名のOB、現役部員は、七八年度に遠征隊を出すべく目標となる山の選定に入った。大学山岳部として、また来るべき八千米峰への手掛りとして、七千米級未踏峰へと焦点をしぼり、ゲントⅡ峰（七三四三メートル）、テラム・カンリⅢ峰（七三八二メートル）、アプサラサスⅢ峰（七二三六メートル）、リモⅠ峰（七三八五メートル）と、カラコルム東部の山々が検討されていった。七七年夏には登攀隊長の佐藤正がラワルピンディに飛び、アワン氏と交渉。隊員達の胸に、カラコルムは着々と現実のものになりつつあった。

しかし七八年三月、在日パ大使館からの連絡はゲントⅡ峰への登山許可を、関西学生山岳連盟OB会隊と弘前大学隊の二隊に出す、という到底納得のゆかないものであった。三月末上京した花田と佐藤正は関西隊の小林隊長と会談し、その結果潔くゲントⅡを譲歩し、彼等の成功を祈って別れることとした。私達は翌日からテラム・カンリⅢ峰に照準を定めた。

キャラバン

六月一日、カパルーを出発する。隊員十二名、リエゾン・オフィサー、ポーター一五三名の大部隊。隊荷は約四トン。未だ

水量の少ないシャヨーク河を対岸のサリンへ。今年は融雪が遅いのだろうか、おかげで高巻きも迂回もなく、キャラバンは快適に進む。ウルセからダンディ・ラを越えてサルトロ河に下った。対岸の扇状地に広がるタガスの村の緑が見事である。タガスでは村の有力者に招待されて昼食を馳走になった。

ポーター頭オラム・ラスールの統率力は抜群で、キャラバンは順調である（事実、アリブランザで彼が引き返すまで、ポーター・トラブルは一件もなかった）パロワ、パリットと幕営して、六月四日最奥の村ゴマに着く。翌五日いよいよビラフォンド谷に入った。連日の快晴で隊員も真黒に陽焼けしている。かなりきつい登りを四時間半でギャリ着。緑の萌え始めた気持ちよい草地である。ここでレギュレーションどうりのレストとし、二泊する。夜、ポーター達の歌と踊りに隊員も飛び入りしてのファイヤー・ダンス。発電機を回して工藤が8ミリに収める。

六月八日ナラム着。ここまではモレーンの上であるが、これから先は氷河上の氷と雪だけの世界になるので、約七十名のポーターを解雇することにし、賃金の支払いを始める。首に懸けた木札を回収しながら一人一人に日当を小額紙幣で渡し、こちらの帳簿に拇印を押させる。数ヶ月の生活費を一週間で稼いだポーター達はニコニコ顔で下山していった。

高度障害の出たらしいリエゾンも、これ以上の高所に怖じ気づいたのか、コックを連れてゴマに下るといいだした。隊員達とどうもシックリゆかなくなっていたお目付役だから、願ってもないこととゴマで待ってもらうことにした。

九日、十日と二日間で四七〇〇メートル地点まで荷上げをした。快晴に恵まれてここまでは計画どおりに進んできたが、峠越えに二十四人のストロング・ポーターを残してラスール達が下っていった後、彼らに寝袋、靴、靴下、手袋の支給を始めたら、支給品に対する不満をならべて、一時は「全員が帰る」といいだした。結局は四人の不平分子が下山し、残りのポーターには羊一頭、マッチ、食糧を支給する。

ビラフォンド・ラからBCへ

翌十一日、リーダー格のフセインが、突然「帰る！」といいだして仲間三人と下山した。意志がよく通じないので詳しくは判らぬが、支給したケロシンの量が不服だったようだ。十六人に減ってしまったポーターと隊員で、ビラフォンド・ラへの荷上げが開始された。最初に高度障害が出て頭痛で苦しんでいた長谷川も、十四日からは復調して戦列に加わる。その夕方、ゴマのアブドゥルが九名のポーターと上って来た。これでビラフォンド・ラへの荷上げもはかどるだろう。

ビラフォンド・ラに隊荷が揃ったのが六月十八日。この日、ロロフォンド氷河を下った先行の岡、長谷川、野々村、黒滝

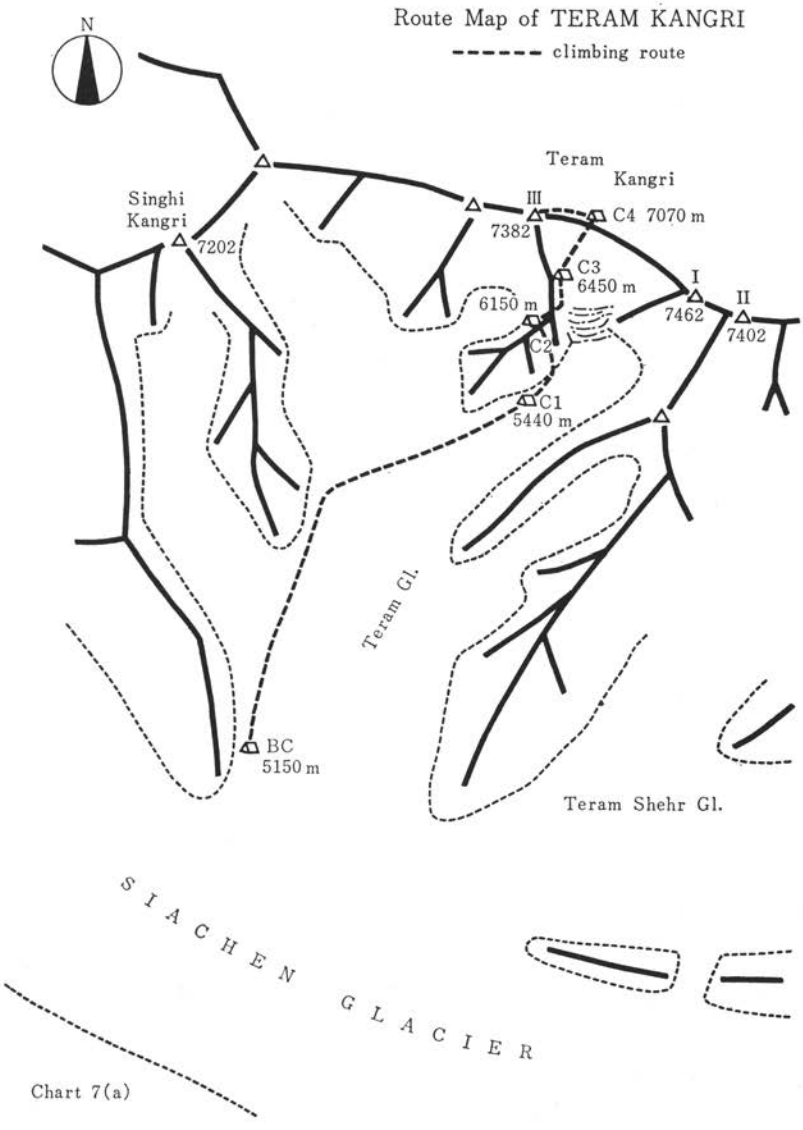

Route Map of TERAM KANGRI
climbing route
N
Teram
Kangri
Singhi
Kangri
7202
III
7382
C4 7070 m
C3
6450 m
6150 m
C2
I
7462
II
7402
C1
5440 m
Teram Gl.
BC
5150 m
Teram Shehr Gl.
SIACHEN GLACIER

Chart 7(a)

は、スキーとスノーバーで組み立てたソリで荷を下ろし、左岸約五二〇〇メートル地点にロロフォンド・キャンプを張った。翌日から二十名のポーターと隊員でビラフォンド・ラからこのロロフォンド・キャンプへ隊荷の輸送を開始した。偵察の岡と黒滝はシァチェン氷河を横断してBC予定地に達し、腰までのラッセルに苦闘して十五時間振りに帰幕した。

二十二日、工藤、岡、野々村がBC予定地に出発。

二十三日、シァチェン氷河上キャンプまで荷を下ろしたポーターがストを起したが、今日の特別日当として一〇〇ルピー、明日からは七〇ルピー払うことでどうやら決着した。比較的協力的な十名のポーターと、とかく不平不満の多い十名のポーターを切り離して使うことにする。前者はBCからシァチェン氷河上のキャンプの逆ボッカ、後者はロロフォンド・キャンプからシァチェンのキャンプへの荷下ろしに従事させて、シァチェンのキャンプに隊荷が集結した時点で解雇することとした。

シァチェン氷河は、横断にかかると、起伏が多く、しかも腰までのラッセルがあり、また幾筋かの氷河上の流水を渡らねばならなかった。

BCは六月二十七日建設された。テラム内院氷河とシァチェン氷河が合流する地点からモレーンを三十分ほど登った場所である。

BCから上部キャンプへ

BCからは、右からテラム・カンリⅡ峰、Ⅰ峰そしてⅢ峰へと続くテラム山群の南西面が眼前に展開する。特にⅢ峰から北西に延びてシンギ・カンリに連らなる稜線から垂直におちる南壁は、すさまじいばかりで雪もついていない。静岡大隊、東北大隊、神戸大隊などの資料をもとに、当初私達は、六四〇〇メートルのカール・ボーデンから内院氷河に落ち込んでいるアイス・フォールにルートを採る作戦を考えていた。

しかし、七月五日、C1（五四四〇メートル）から偵察に出た工藤、日光からの報告は「早朝からブロック崩壊があり、ルートとしては使用できない」というものであった。すでにⅢ峰から派生している南稜の東面直下にC1を建設したいま、全く異ったルートを求めてのキャンプの移動はロスが大きすぎる。

私達は南稜に直接突きあげているクーロワールにルートを採ることにした。不安定な雪の上にスノーバーとフイックス・ロープでルートを延ばし、六十度を越す氷壁をつめて、南稜上の六一五〇メートルにC2が建設されたのは七月十一日であった。すでに前日、C1までの荷上げに協力した最後の十人のポーターも帰してしまった。これ以上は危険な荷上げに彼等は使用できない。

左右が雪庇になっている痩せた稜線上のC2から、眼前に切

り立った雪のピークが二つ。それを越えるとさらにスノー・ドームへの登りがあり、不安定な雪が台形状に切れて、ずれ落ちてひっかかっている。二つのスノー・ピークを私達は、手前のものを〝ネコの耳〟奥のものを〝トラの耳〟と呼んだ。

長期にわたる荷上げルートの確保のために、ルート工作の工藤、野々村、石井は、スコップでL型にステップを切ってフィックス・ロープを張り、徐々にルートを延ばしていく。

荷上げは、ルート工作と並行してBCからC1へ、C1からC2へと間断なく続けられていたが、クーロワールを荷上げしていた長谷川が右脛に落石を受けて裂傷。佐藤正、鹿内、野々村に付添われてBCに下った。野々村はBCで早速外科医の腕を振って傷口を縫合する。

〝ネコの耳〟〝トラの耳〟の難所を越えて、C3（六四五〇メートル）は七月十七日建設された。

高所順化は比較的うまくいっている。あとは事実上のABCとなるC3に、どれだけの資材と人員を送り込めるかが、勝負の分れめだろう。

しかし、十八日の夜半から雪になった。すでに晴天は二週間続いていた。隊員の休養を考えれば、一日二日の沈殿も骨休めだ。

だが、降雪は二十五日まで続いた。C3は工藤、岡、野々村、黒滝、丸井、石井の六名。C2は佐藤孝、日光。C1には花田、鹿内、長谷川。そしてBCは登攀隊長の佐藤正が一人で頑張っていた。雪に降り込められても、テントの雪を払い、埋ったフィックス・ロープを掘り起して一週間が過ぎた。

二十六日、待望の快晴。各キャンプは一斉に動き出す。C3からはC4へのルート工作、C2の二人はC3へのルートの点検、C1の三人はC2への荷上げ、BCの佐藤正は上部キャンプへそれぞれ適切な指示を与える。

二十八日、テラムI峰からIII峰への国境稜線にC4（七〇七〇メートル）が建設され、工藤、野々村、石井が入ってアタック態勢が整った。

アタック

二十九日の朝、三十センチの降雪を見た。C4の三人は前日のデポ地点まで下って、カメラ、食糧等をあげる。鹿内、日光はC3へ。これで三次アタックまでの人員が、ABC以上に入った。

翌三十日、C4の三人が第一次アタックに出発した。

この時、私達には誤算があった。静岡大の報告書等から判断して、テラム山群は南面は切り立っているものの、北面（中国側）は緩やかな斜面が頂上まで続いているものと、早計にも考えていたのである。だが実際には、中国側もシンギ氷河まで、一〇〇〇メートルはスッパリと切れ落ちて、痩せた国境稜線

は、カミソリの刃のように頂上まで続いていた。

時々雪の舞うガスの中を、工藤、野々村、石井の三人は、固定ロープを張りながらジリジリとルートを延ばしていった。各キャンプはトランシーバーをオープンして快報を待つが、アタック隊からはなんの送信もない。

十時五十五分、かすかに「登頂…」の声が入るが、間もなくこれは同じ日にシア・カンリに立った、京都カラコルム五大氷河隊のものと判明した。

十五時十五分、待望のアタック隊からの送信が入った。

「朝七時から行動を開始したが、痩せ尾根と雪庇にはばまれて、高距約七十メートルを残して引き返す」

第一次アタックは失敗に終った。

三十一日の朝、C4で眼を覚した野々村は、せまいテントの中で工藤、石井の顔がはっきり見えないという。左右の焦点が合わないのだ。トランシーバーの連絡で、眼科医でもある黒滝は高度障害による強度の眼底出血であろうと判断し、同じように障害で頭痛の激しい石井と野々村を、下部キャンプにおろすよう提案した。代りに岡、丸井がC4に入り、長谷川、佐藤孝はC2からC3へ上った。

八月一日、第二次アタックの工藤、岡、丸井は午前五時三十分、C4を出発した。二時間で前日の最高到達点まで達した。その先に鋭くとがった岩峰群が三つある。二つ目の岩峰に達し

Chart 7(b)

TERAM KANGRI
—Climbing route—
Sketch by S.HANADA

た時、高度計は七三〇〇メートルを示した。さらにもう一つの岩峰があり、一旦落ち込んだ稜線の向う側に、雪をかぶったピナクルがある。どれが一番高いのか判断がつかない。

「下から我々の姿が確認できるか？我々の立っている岩峰と、さらに奥のピナクルの高さを下から判断してくれ」

岡の声がトランシーバーを通して入ってくる。C2の私は双眼鏡で眼をこらすが判断できない。BCの登攀隊長は、ピナクルまで行って確認することを指示した。しかし、この日は固定ロープとハーケンが不足で岩峰から引き返さざるを得なかった。

二日、快晴が続いていた。前日第三次アタック隊としてC4入りをした長谷川、日光、石井は行動を開始したが、強風のため稜線での登攀活動が続けられず、C3に下る。C2を撤収して、花田、鹿内、佐藤孝が野々村をかばいながらC1に下った。

八月三日、もうC4、C3には一両日分しか食糧が残っていない。事実上これが最後になるであろう第四次アタックの工藤、岡、黒滝は、少しずつ明るみ始めた東の空を背にC4を出る。氷点下二十五度。

第二岩峰から六メートルの第三岩峰まで二時間を費やす。正午である。そして眼の前の雪のピナクルに挑む。岩にへばりつく氷をけずってハーケンを打ち込んだ。頂上は三メートルほどの雪のドームであった。十三時四十五分、三人は頂上に立った。黒滝の声がトランシーバーに飛び込んでくる。

「やりましたよ！すごい！K2もガッシャーもリモも中国の山も、全部見えます！」

遭　難

八月六日、C1のテントの中で、頂上に立った三人と、C3でサポートした長谷川の四人が眼を覚した。他の隊員BCに集結していた。

「今夜は残りのウィスキーで乾盃だ」

午前八時の交信に工藤が出た。BCからはテラム内院氷河は一ヶ月前と様相が変っている、氷河上の数本の川は幅が大きくなり、水量も多いので、できるだけ上流で渡って下るように、と指示をした。

C1の四人は十四時三十分出発、指示どおり内院氷河を横断して最後の川に達した。そこはシンギ・カンリから延びている尾根の末端部にあたり、そこから内院氷河の右岸沿いにBCまで、約一時間である。最初に黒滝が飛び越えて、続いて長谷川、最後に工藤が越えたが、岡だけが川を越えずにそのまま川沿いに下った。長谷川の前方一〇〇メートル程を黒滝、後におくれて工藤、そして川をはさんで、対岸を平行して岡が歩いていた。長谷川の左斜め、視野の中に岡が見え隠れしていたが、

十六時十分、長谷川の視野を赤い色がすうっと動いた。無意識に岡の姿を探したが、見えない。黒滝、工藤を呼び、三人で川沿いに走ったがどこにも見えない。四〇〇メートル程下流の氷河湖を探すと、岡の個装袋を見つけた。岸に引き寄せ、上流に引き返す。川にかかっているスノー・ブリッジに踏み抜いた穴らしいものを発見、長谷川はピッケルを立てて目印にした。陽が翳り、これ以上三人では無理と判断してBCに下った。十八時二十五分のことである。

報告を受けたBCでは、花田、佐藤正を中心に今後の対策を考え、翌朝九人で捜索にあたることにした。登頂の喜びは一瞬にして悲嘆に変った。

翌七日、遺体は氷河湖の水面下に沈んでいるのが発見された。しかしその日は収容できず、湖岸に供物をそなえてBCに下った。

八日、再び現場に向う。その朝、佐藤正、工藤、野々村、長谷川が、一刻も早く本国への連絡すべくBCを発つ。現場に向った六人はザイルで遺体を引きあげ、佐藤孝が検死。頚椎骨折による即死であった。

遺体は新しい衣類に着替えさせて、日章旗、隊旗を胸の上にひろげ、寝袋に包んで再び氷河期に葬った。

八月十二日、BC傍の尾根の上に、私達は二本のスキーに彼の名と隊の名を刻み、ケルンをつんだ。

＜記録概要＞

隊の名称 弘前大学カラコルム遠征隊

活動期間 一九七九年五月～八月

目　的 テラム・カンリⅢ峰の初登頂

隊の構成 隊長＝花田澄人（45）、登攀隊長＝佐藤正敏（39）、隊員＝鹿内善三（37）、工藤光隆（31）、岡正範（30）佐藤孝充（30）、野々村修（30）、長谷川哲夫（28）、黒滝淳二（27）、日光健司（27）、丸井亮（21）、石井学（21）、リエゾン・オフィサー＝モハメッド・アリ・アクタル大尉（26）

行動概要 6月1日カパルー発。6月4日ゴマ着。6月1日全隊荷をビラフォンド・ラに上げる。6月2日BC（五二〇〇メートル）を建設。7月7日C1（五四四〇メートル）を南稜直下に建設。クーロワールにルートを採り、7月11日C2（六一五〇メートル）を南稜上に建設。7月17日C3（六四五〇メートル）を建設。7月28日C4（七〇七〇メートル）を国境稜線上に建設。8月3日午後一時四十五分工藤、岡、黒滝が九時間の行動後、頂上（七三八二メートル）に立つ。8月15日　本隊BCを撤収。18日ゴマ着。22日カパルー着。

ROUND 5 GLACIERS IN KARAKORUM 1979
by Kyoto Karakorum Club

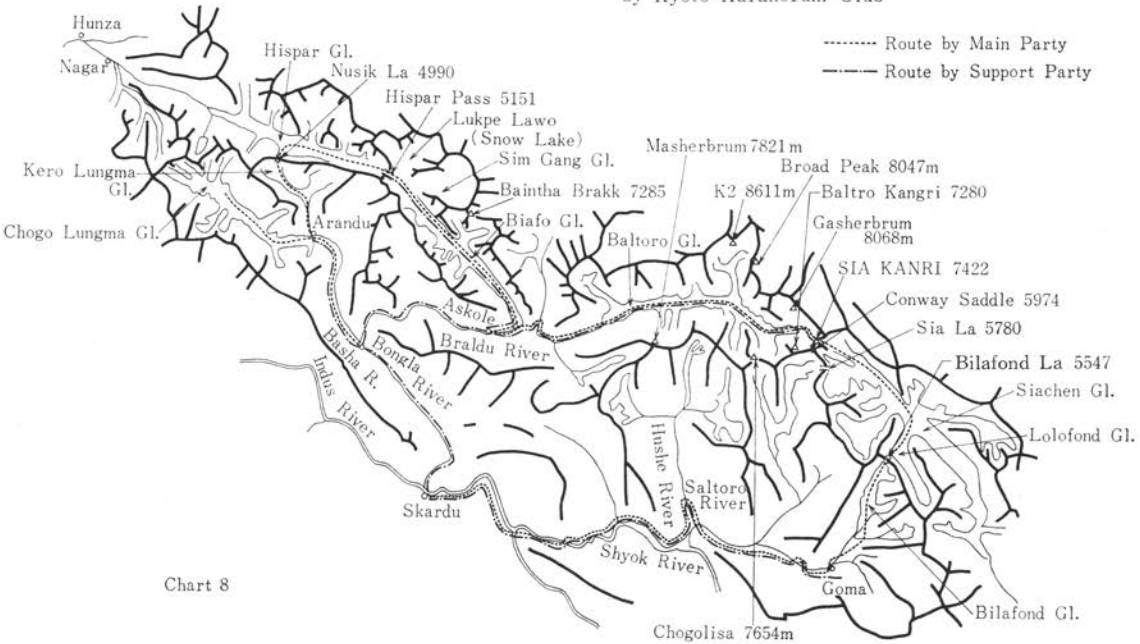


Chart 8

五大氷河踏査とシア・カンリ登頂（一九七九年）

平岡誠一郎

計画の発端と許可の取得

この計画の母体は、ヒンズー・クシュ、カラコルム会議であった。同会議では研究課題の一つとして、カラコルムの主な氷河を踏査する計画が検討されていた。K2登山計画のため一時中断したが、K2登山終了後、林原等一部の会員によって研究が再開された。これに、動植物を中心としたヒマラヤの自然を写真により記録するべく進められていた水越の撮影計画を加え、実現への第一歩が踏み出されたのである。

当初、この計画はトレッキングとして一九七八年に申請をしたが、連絡将校の不足を理由に不許可となり、林原が訪パとして直接担当官に会って交渉したが、結局許可を得る事が出来なかった。

このため、一九七九年の計画についてはシア・カンリ登山を加え、日山協の協力を得てシア・カンリ登山隊として申請した。しかし、シア・カンリ登山のアプローチとして五大氷河を歩くことを、パキスタン当局が許可するかどうかが問題であった。シア・カンリ登山の為には、このようなアプローチは必要ないからである。そこで、一九七八年十二月に林原が再度パキスタンに飛んで観光省の担当官と会い、この計画の意義を理解してもらうべく事前の説明をした。

この努力が稔ったのか、一九七九年一月、五大氷河をアプローチとするシア・カンリ登山の許可が下りた。ただ当初予定していたフンザからヒスパー氷河へ入るルートは許可にならず、アランドウからヌシク・ラを経てヒスパー氷河へ入るルートに変更となった。

チョゴ・ルンマ氷河とヌシク・ラ越え

五月二十一日にボンラを出発した隊は、二十四日、チョゴ・ルンマ氷河の舌端を西に望むアランドウに到着。本隊（林原、小林、水越、高橋、ゴハールシャー）は二十七日からチョゴ・ルンマ氷河の踏査を始めた。行動中はずっと降雪が続き、三十日ボロッチョ氷河との出合付近でやっと晴れたものの、ライラ、ハラモシュ、スパンティーク、マルビティン等を数時間望見するに留まった。

チョゴ・ルンマ氷河では野生動物が多く見られた。アイベックス、マークホール、大鷲、狐等々。チョゴブランサでは夕食時、大熊二頭がテント間近まで来て驚かされた。

これは他の氷河には見られない特色であった。他の氷河では僅かにビアフォ氷河でマークホールの群を、遠く氷河両岸の山腹に見かけた程度であった。また同氷河のサイド・モレーンで熊の足跡を見たが、ポーターの話では水を飲みに来るマークホールなどを襲うとのことなので、山腹に棲息しているものと思われる。

六月二日、アランドウに戻った本隊は休養の後、三日、いよいよヌシク・ラ越えに出発した。途中のケロ・ルンマ氷河はヴォリューム感に欠け、かなり衰退している様子が判る。昔は地元の人達もヌシク・ラを越えていたらしいが、今は登山隊が通過するのみで、全く使われていない。前記のような氷河の衰退や地形の変化で、一般の人には越えることが困難になったためだろう。

ヌシク・ラは一九七八年に東京志岳会隊が日本人として始めて越えており、我々は隊長の杉本氏に会って貴重な意見を聞かせていただいていた。氏の話によると、ポーター達は峠を越えられず、三分の二は帰ってしまい、残った三十人を降すのに、フィックスド・ロープを使って一週間かかったとのことであった。我々はポーターは峠までの荷上にのみ使い、峠越えは隊員とハイポーターとで行うことにした。従って荷は最小限に留めサポート隊がバインター或いはヒスパー・パスまでサポートするよう計画した。

果してポーター達は雪の多いことを理由に、ヌシク・ラどころか、カルナップ氷河手前で逃げ帰ってしまい、隊員がヌシクラまでピストン輸送をするという事態になってしまった。

苦しい行動の末、六月十一日にヌシク・ラを越え、ハイガツム氷河へ降り立った。担ぎ切れない荷は梱包して、フィックスド・ロープを使って滑り落した。

ヌシク・ラは南側は緩い雪原だが、北側は急激に切れ落ち、雪庇が大きく発達していて常に崩壊の危険があった。当初の予想を上回るかなり厳しいルートであり、安易な峠越えではなかった。

ヒスパー氷河からビアフォ氷河へ

ハイガツム氷河へ降りた隊員は、腐った雪に悩まされながらヒスパー氷河へ向い、ヒスパー氷河との出合、遠くヒスパー・パスまで見渡せる左岸の尾根にテントを張った。

そこには大きなケルンがあり、フンザのハイポーター、ゴハールシャーの話によると、シャンバールという英国人と行動を共にして、ヌシク・ラで雪崩に呑まれたポーター達の墓だという。ビジールのポーター達で、三十二名中三十名が死亡したとのこと。事実とすれば、かなり大きな事件なので、帰国後我々も調べ、また諸先輩にも教示を仰いだが、それらしき事件や英国人は、過去の文献の中に見付けることが出来なかった。

ゴハールシャーの話そのものも、自分の経験ではなく父親からの伝聞なので、小さな事件が増幅されたのかも知れない。しかし、ケルンがあることは事実であり、今後の調査によっては探険史上見落された新事実が発見出来るかも知れない。

そのケルンの傍に泊った翌日から悪天が始まり、天候が回復してヒスパー・パスへの行動を開始したのは、十五日の早朝であった。

このあたりのヒスパー氷河は何本もの川が流れ、中央の歩き易い白い帯状の部分に出るのに非常に苦労した。高度が上るにつれ氷の状態も良くなり、歩き易くなったが、陽が昇るとズタズタの雪となる為、毎日午前二時に起床し，雪の締っている早朝に歩くという行動が続いた。

六月十八日、風の全くない、照り返しの暑いパスに着く。パスにはサポート隊のテント跡があり、六月十五日に到着したとのメッセージが残されていた。

サポート隊（平岡、梅村、栗田、宮下、二上、スルタン）は本隊出発後アランドウからボンラに戻り、六月一日、ポーター一三八名と共にアスコーレへ向い、四日に同村着。六日にヒスパー・パスに向って出発、十五日にパスへ登ったが、悪天のため日程の遅れた本隊とは合流出来なかったのである。

ヒスパー・パスから大きく口を開けているクレバスを右に左に避けながら下山。十九日、バインター着。ここで待機していたサポート隊員二名と合流、二十一日にアスコーレに到着した。

ビアフォ氷河は下流ではクレバスも多く、モレーンも輳輻しているが、バインター付近から上流は平らとなり、一般の人が想像するような白い氷の河となる。それは立教大学理岳会の高橋氏の言ったように、まるで飛行甲板のようである。

シム・ガンが流れこむ源流部分は氷原状となり、いわゆるスノー・レイクである。スノー・レイクについてはルクペ・ラオをそれとしたり諸説があるが、素直に見たとおりに従えば、コンウエイの記述のとおり、シム・ガンがその名に相応しい。

「われわれの前には、雪の盆地というか湖のようなものが横

たわっていた。この湖は、北から東へ白い山稜で取り巻かれ、南には一連のみごとな針峰が並び、その中の最も高いオーガー（ogre　人食い鬼）は、二日前から峠の上に顔を出しわれわれをじっと見つめていたものである。

雪の湖の真中から、雪のように白い幾つかの島山が、その基部を埋めて立ち並び、白い水でもあるかのように、限りない湾や入江となってその間に食い込んでいた。」（吉沢一郎訳『カラコルムの夜明け』）

全くこの描写は適確で、見事にこの風景を現わしている。特に夜半、月明りの中に静まり返ったスノー・レイクと、その周りに島のように浮んでいる山々は全く幻想的な眺めであった。

バルトロ街道

本隊、サポート隊合流後、休養と準備に二日間を過した後、二十四日、ポーター百十名と共にアスコーレを出発、バルトロ氷河へと向った。

ここからコンコルディアまでは、いわゆるバルトロ街道で、毎年多くの登山隊やトレッキング隊が、多勢のポーターを引き連れて往来する。氷河とは言うものの、所々にアイス・ピラミッドが頭をもたげている他はモレーンに覆われている部分が多く、その上絶えず人が往き来している有様は、文字どおり街道である。千名を越すポーターを連れた登山隊が通る時など、恰も大きな村が移動するかのようだった。

この人臭さに満ちたバルトロ氷河も、コンコルディアを過ぎて南東に向う本流に入ると静けさを取り戻す。正面にバルトロカンリを、右手にチョゴリザを見ながらのキャラバンは、トランゴ・タワー、ムスターグ・タワー、マッシャーブルム、そしてK2と、いわばバルトロ街道の名所旧跡を見るキャラバンとは違って、まだまだ新鮮さがあった。バルトロ・カンリ山麓から東にアブルッツイ氷河を遡り、南ガッシャーブルム氷河との出合、五〇三〇メートルのBC予定地点に七月四日到着。四十五日間の長いキャラバンだった。

シア・カンリ登頂

七月五日にBCを建設した我々は、六日から愈々登山活動を開始した。BCからコンウェイ・サドル（五九七四メートル）までは、一日行程としては少々きついので、氷河の奥にデポ地（五三〇メートル）を作り、順応を兼ねて荷上げをすることにした。以後、順調にルートを伸ばし、コンウェイ・サドル上にC1を建設、七月十六日にはC2を建設することが出来た。翌十七日には、林原、高橋が六八〇〇メートルまでロープをフィックスして、頂上へのルートが開けてきた。

そこで一旦、全員BCへ降りて休養をとった。以後の行動は

BCのテント・キーパー三名がC1に入り、一日遅れて後発の四名が頂上へ向うことになった。

ここまでは順調に進んでいたが、二十一日から二十四日まで雪が降り続き、C1で七名が釘付けになった。C1では一メートル以上の積雪があった。

二十六日は、七名全員で腰から膝位のラッセルを昼過ぎまで続けて、やっとC1とC2の中間点まで進み、荷の一部をデポしてC1に戻る。翌二十七日にやっとC2に着いたが、テントを堀り出し器材を整理するのに、午後一杯かかった。C2より上部のフィックスド・ロープは雪に埋れるか、雪崩で流されてしまっていた。C2に全員泊る。

二十九日は、小雪で視界のきかない朝であった。出発するのをためらって、しばらく様子を見ていたが、コンダス氷河やバルトロ・カンリが時々見えてきたので上部に向う。前日は降雪のために、我々が豆腐と言っている大きな雪壁の下までしか行けなかった。僅かに残るトレールをたどって、交代でラッセルを続ける。雪壁の下を左へトラバースして、雪壁の無くなる所にC3を建設。林原、高橋、水越はC2へ下る。

三十日、午前一時起床、三時半に出発。本日はC3より四名（小林、宮下、二上、ゴハールシャー）C2より三名（林原、高橋、水越）が頂上へ向った。雪面にアイゼンをきかせて、ヘッドランプの光を頼りに上部へ向う。曇天で視界は悪い。II峰とIII峰の中間の稜線に出た所では極端に悪くなり、ツェルトをかぶって一時間ばかり天候の回復を待つ。

やっと動けるようになると、今度は膝から太股位のラッセルが待っていた。コンダス側の山々がガスの間に見えてきた時、我々はI峰とII峰との間の雪原の中にいた。まだ主峰は見えず七一〇〇メートルの所で主峰の左手の稜線が現れ、そしてガスが流れて頂上が見えた。

十時五十分、頂上に立った。頂上からの視界は悪いが、十六ミリ映画や写真を撮影し、ガスの切れ間に、周りにここより高い所がないのを見て、下山にかかる。我々の後、C2から出発した三名も登頂した。

（宮下勝彦記）

シアチェン氷河へ

コンウェイ・サドルからシアチェン氷河へのルートは、シアカンリの中腹部の緩傾斜帯を行くことにした。当初計画していたサドルからコンダス氷河への下降は、それ自体かなり厳しい上に、バルトロ・カンリ東面からの大きな雪崩を何度か目撃していたので、余り気の進むものではなかった。

中腹のルートはシア・カンリの登山活動中に概ねの様子を把握できたし、バルトロ・カンリ側からの観察によっても、それを裏付けることができた。問題はぐずつく天気であり、限りある食糧であった。「連中、アスコーレに着いたかな。鶏、どっさ

り食ってるんだろうな。」話はこんなことばかり。「あと十日」という言葉が流行した。あと十日頑張ればゴマに着く。

シアチェンへ向ったのは八月八日。C2地点から約百メートル下降してルートに入った。小さな尾根の乗越しから、水平に近い雪原、深くはないがラッセルの連続。最後にアイス・ブロック帯を通過してシアチェンの流域に飛び込んだ。クレバスも少なく、一日で事は終えたが、誰も通ったことのない所を通って来たのだと思えば、やはり嬉しい。後はこの氷河を下るだけだ。灰色の雲間に山を眺めても、「シンギ・カンリかな？」などと地図を広げる余裕すら出て来た。インスタントであれ、コーヒーも美味い。ただし、難関はその後にあった。

翌九日は降雪。

その翌日も重苦しい雲が垂れこめていた。しかし、もう食糧事情が滞在を許さない。とにかく歩かなければと出発したが、シア・ラの下でクレバス帯に捕まってしまった。氷河の合流と屈曲によるものであろう。氷河はズタズタに引き裂かれ、クレバスは網の目のように発達し、おまけにそれが雪に覆われているから始末が悪い。たいていは足を踏み抜くか、腰で止る程度であったが、時々はザイルのお世話にもなった。何よりも体力の消耗が甚だしい。

翌朝二時半起床、風雪。よくしたもので、餅の入ったラーメンを食べ終ると、風は弱まった。しかし、早朝ならば雪が締っているだろうという魂胆は見事にはずれ、相変らずの穴堀り稼業である。苦闘十時間の末、ようやくこのクレバス帯を脱出、シアチェン氷河の本流に出て、アスタヌーン・フラッドで水びたしになった雪原に幕営した。全員疲労困憊。ぼたん雪が舞う。

八月十二日、雪の化粧は取れて、ハイウェイとも呼びたい裸氷の道である。そして、素晴しい朝焼け、ゲント、シェルピ・カンリ、サルトロ・カンリ……、それらの前景としてホーク（六七五〇メートル）の尖峰が輝く。やがて青い空に変った。雲はそれとは相容れぬ白さで浮んでいた。しかし、風だけは今迄のものとはどこか違っていた。それは正しく秋風。「もうお帰り」と、いつまでもモタモタしている私達を促すような、そんな風だった。ゴマ迄あと三日の行程であった。

（二上純一記）

おわりに

我々の隊は、出発前に資金面その他で様々な紆余曲折がありそれに時間と精力のかなりの部分をとられ、調査の充分な準備が出来なかった。

このため、一応五大氷河のトレースとシア・カンリの登頂には成功したものの、踏査という点では不満が残った。やはり事前に充分な準備をしなければ、この種の踏査は完全に行なえない。折角の機会を充分に生かすことが出来なかったことを反省

する次第である。

〈記録概要〉

隊の名称　京都カラコルムクラブ　シア・カンリ登山隊

活動期間　一九七九年五月～八月

目　的　チョゴ・ルンマ、ヒスパー、ビアフォ、バルトロ、シアチェン各氷河の踏査とシア・カンリ（七四二二メートル）の登頂

隊の構成　総指揮＝餌取定三（48）隊長＝林原隆二（29）隊員＝小林利明（30）水越武（41）平岡誠一郎（49）梅村宗孝（45）栗田次男（33）宮下勝彦（32）二上純一（27）医師＝高橋純一（30）連絡将校＝M・シャキール・カーン大尉、ハイポーター＝ゴハールシャー、スルタン

行動概要　五月二十一にスカルドゥからジープでボンラへ。直ちにキャラバン開始。五月二十四にアランドウ着。五月二十七日～三十日、本隊はチョゴ・ルンマ氷河踏査。五月二十八日サポート隊アランドウ発。ボンラを経て、六月四日アスコーレ着。六月十五日ヒスパー・パスに達するも本隊到着せず、六月十八日アスコーレへ戻る。本隊は六月十一日ヌシク・ラを越え、ヒスパー氷河へ。六月十八日ヒスパー・パス着。六月二十一日アスコーレ着、サポート隊と合流。六月二十四日アスコーレ発。七月四日BC地点（アブルッツィ氷河と南ガッシャーブルム氷河との出合五〇三〇メートル）着。七月七日コンウェイ・サドル上にC1（五九一〇メートル）建設。七月十六日C2（六四三〇メートル）建設。七月三十日小林、宮下、二上、林原水越、高橋、ゴハールシャー、シア・カンリ（七四二二メートル）登頂。八月二日サポート隊はスカルドゥへ向け帰途につく。本隊はシアチェン氷河へ向う。八月四日小林、二上はバルトロ・カンリⅢ、Ⅳ峰登頂。八月八日シアチェン氷河へ入る八月十三日ビラフォンド・ラ着。ゴマ村を経て八月二十一日スカルドゥ着。

パスー峰登頂（一九七八年）

新名　進

はじめに

一九七七年七月、防衛大学校山岳会は、翌七八年、パキスタン山岳会と合同でカラコルム、パスー（七二八四メートル）へ遠征隊を派遣することを決定した。八月には、隊長、隊員も決定した。しかしそれからが大変であった。よく一般の方法から、「自衛隊はいいですな」と言われるが、実際は我々も一般の方々と同じ苦労をしたのである。

特にパキスタンとの合同ということもあって、宗教、習慣等の違いを考え始めると、我々の頭はパズルと化した。また六名の隊員の内三名は北海道勤務者であった為、実質的な準備は、在京の福楽、新名、湧井を中心に進められた。装備、食料の調達、パキスタン大使館、外務省、防衛庁との接渉、費用の問題等々、本当に顔面蒼白になる程のてんてこ舞の内に、準備期間は過ぎていった。

出　発

とにかく種々様々の問題を覆い隠すか、知らんふりをしながら、一九七八年五月一日、先発の福楽、山田が日本を発った。五月十五日にはヤクザの観光旅行よろしく、本隊が羽田を出発した。御存知の様に、我々は自衛官である為、髪は短く、眼光鋭く、かつ服装のセンスがゼロという次第なのである。

同日夕刻、パキスタン山岳会長ミルザ氏、バット少将、観光省のアワン氏等一行の出迎えを受けて、パキスタンの地を踏む。夕刻先発隊の福楽、山田は下痢のため、ゲッソリやせこけて、ミセスデイビスホテルに横たわっていた。翌日からはイライラするパキスタン側との細部調整が待っていた。日程は示してくれるが、万事一向に実現しないのである。しかし、飛鳥建

設の遠藤氏の御助力を得て、事務処理も次第に進んでいった。

BC建設まで

準備も一通り整い、後はギルギットへ出発するだけとなったが、その日がなかなかやってこない。理由は簡単、パキスタン側隊員が集結していなかったのであった。

ようやくパ側の正式隊員が決定した翌日の五月二十九日、ギルギットへ入った。荷物はカラコルム・ハイウェイ経由来る予定であったが、土砂崩れの為、一日遅れた。

このカラコルム・ハイウェイの建設には中共軍とパキスタン軍が当っていた。建設用機械には日本製のものが散見される。ほぼ完成してはいるが、常に土砂崩れ、鉄砲水により橋の崩壊の危険があるという。

ギルギットよりパスー村までジープを利用して入った。

六月四日、いよいよキャラバンを開始した。荷物が十個程オーバーしたものの、我が隊にはフンザ国王の甥に当たるシェラ・ハーン大尉がいるので強い。ポーターの人数を増やすことなく、十個の荷物は適当に分配され、キャラバンはスタートした。

ポーター達の年齢は十五才から六十才位までと様々だが、六十才位でも六十キロ近い荷を背負って「ホイ、ホイ、ホイ」と掛声も勇しく氷河を渡っていく。その夜はパスー氷河を横断した処で幕営となった。

翌六月五日、予定の地点より下になるが、四一五〇メートル地点にBCを建設した。そこは七四年の日本隊がBCを設けた地点であり、ポーター達が先へ進むのを拒否し、さすがのシェラもお手上げだった為、やむなくBCとしたような次第である。

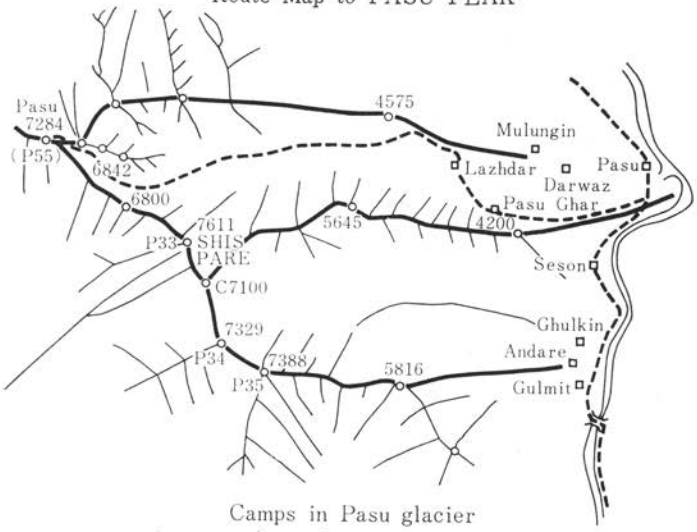
登攀活動

翌日、直ちにC1をアイスフォール手前、三十分の地点に設営した。C1では連夜、氷河の崩壊音で睡眠が妨げられたが、パ側隊員の一人などは泣き言を言いつつ、BCへ下っていった程だった。

アイスフォールは高度差約九〇〇メートル、隊長自ら先頭に立ちルート工作を続けた結果、フィックスロープ八〇〇メートル、アルミ梯子六本、ワイヤー梯子二本を費し、突破するのに七日間を要した。待望のC2がアイスフォール上に建設されたのは六月十九日のことであった。

引続きC3へのルート工作及びC2への荷上げが開始された。C2からはシスパーレと六八四二メートル峰が眼前にそびえ、パスーは、六八四二峰の後に隠れて未だ見えない。六八四二峰とシスパーレの間には二つのアイスフォールがあり、その中央に一本の雪稜が伸びている。我々はこの雪稜をC3へのル

Route Map to PASU PEAK



Camps in Pasu glacier

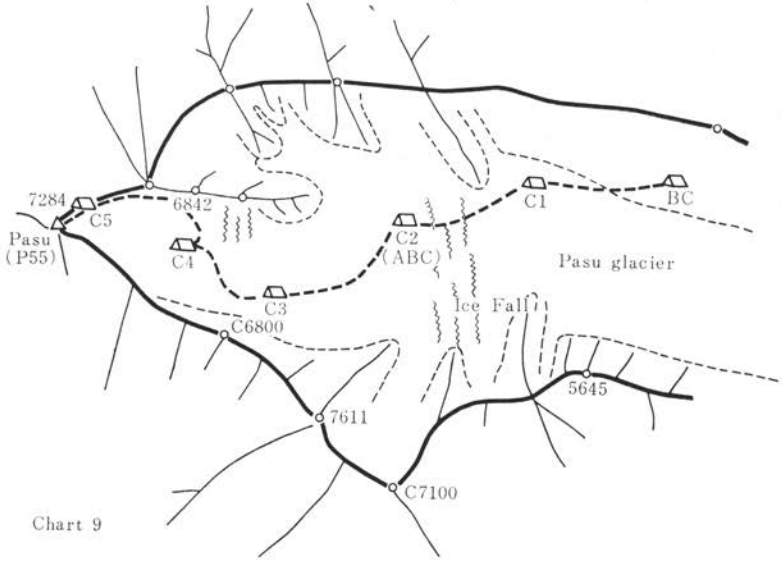


Chart 9

ートとした。

連日の快晴の為、隊員の日焼けは激しく、雲が欲しいというグチが出る。ひたすら雪稜にルートを伸ばし、五六〇〇メートル地点に六月二十三日、C3を設けた。ようやくパスーが望まれる。

C4へのルートは六八四二峰とシスパーレのコルに求めるべく取られたが、アイスフォールに行く手をはばまれ、六八四二峰寄りに修正、アイスブロックの崩壊の危険のあるルンゼをつめることとした。このルンゼには我々の通過後、案の上、大規模なブロック崩壊が発生した。六月三十日、ルンゼをつめ、上部雪原に出てC4（六五〇〇メートル）を建設した。

登　頂

いよいよパスーの頂上は手の届く処まで来た。我々は八名の隊員をこのC4に集結し、C5建設、さらに頂上攻撃に専念することとした。隊長を除き全員、高度の影響で相当参っている。連日の行動食は、乾パンと果物、それに水だけである。食欲はなく、ひたすら水分の補給にのみ努める。

C5は、七月二日、パスーと六八四二峰の間の稜線上、六八四二峰直下の台地状の雪原に建設された。八名がC5に入ったが、食料は三日分しかない。連日の好天もそろそろ崩れそうな気配である。頂上アタックは、早速、翌日実施されることになった。

七月三日、フィックス用ロープ一五〇メートルとザイル一本を携え、六名がC5を出た。雪質はサンクラストしているが、その下はザラメ状であり、歩きづらい。しかし、氷じゃなかったのは幸いであった。約六十度の雪壁を登る。

フィックスロープを全て使い果たし、先のことを心配し始めた頃、突然、先頭を行くシェラ・ハーンが叫んだ。

「タイチョーサン、ピーク！」

彼は何度も叫んだ。

彼は以前にK2隊にリエゾン・オフィサーとして参加したことがあったが、その時はサミッターとはなっていない。今回は常に先頭に立ち、ラッセルをし、ルート工作を続けてきた。そうして彼はピークを踏んだのである。二児の父親であり、軍人であり、フンザ王国の貴族である彼は、隊長の命令には我々があきれる程忠実であり、努力家であった。隊長と彼は、二人の人間がやっと立てる七二八四メートルのピークの上で、手を取り合って泣いた。

七月四日、天候悪化の兆の雲が現われた為、第二次頂上攻撃は中止し、撤収を開始した。アイスフォールのルートは、約一週間誰も通ってはいなかったが、非常に荒れていた。このルート補修にまる一日を費し、全員がBCに集結したのは七月六日のことであった。BCに到着するやいなや雨が降り始めた。そ

れから二日間、雨の為、BCに停滞したが、何と我が隊の幸運であったことかと今にしても思う。

＜記録概要＞

隊の名称　防衛大学校山岳会パスー峰登山隊

Japanese-Pakistani Services Expedition to Mt. PASU in 1978

活動期間　一九七八年五月～七月

目　的　パスー初登頂

隊の構成　（日本側）隊長＝安藤千年（34）、隊員＝福楽勘（30）、新名進（27）、湧井鋼一（27）、山田周（26）、井上正人（26）、（パキスタン側）副隊長＝マンズール・フセイン（30）、隊員＝シェラ・ハーン（27）、イナット・ワリ（28）、エティシャン・アンワル（24）、モハムド・イスマイル（30）、サアド・ターリック・スディギ（37）、医師＝フェイズ・アマン（27）、連絡将校＝アジュマル・カーン（28）

行動概要　六月四日パスー村発。五日BC建設。六日C1（四二五〇メートル）建設。十九日アイスフォールを越えてC2（四九〇〇メートル）建設。二十三日C3（五六〇〇メートル）建設。三十日C4（六五〇〇メートル）、七月二日C5（六九〇〇メートル）を建設。七月三日六名が登頂。

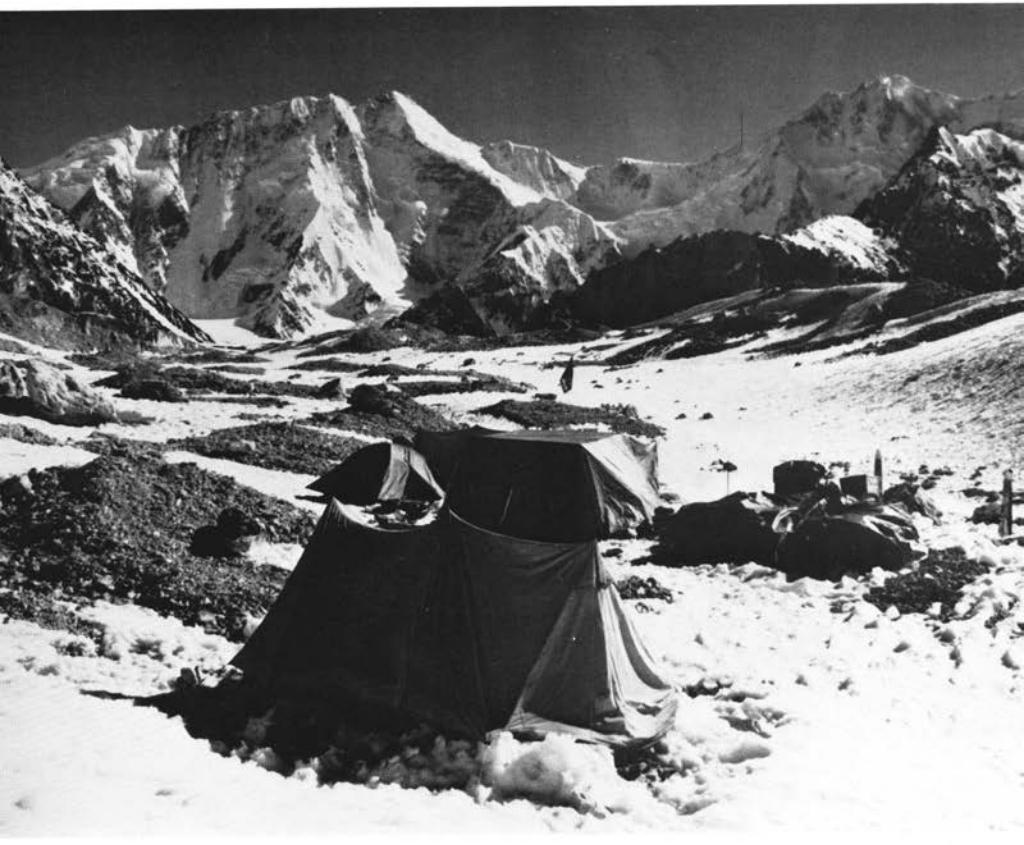


Plate 8-(a)：BC（5200m）よりテラム・カンリ山群を望む—右よりII峰（7402m），I峰（7462m），III峰（7382m）。

Teram Kangri seen from BC (5200m), from right II (7402m), I (7462m), III (7382m).

(Plate 8-(a)~(c), by S. Hanada)

Plate 8-(b)：テラム・カンリC2よりシアチェン氷河対岸にロロフォンド氷河を望む。
Lolofond Glacier from Teram Kangri C2.

Plate 8-(C)：シアチェン氷河よりシア・カンリ（中央）とホウク（左）。
Sia Kangri and Hawk (left) from Siachen Glacier.

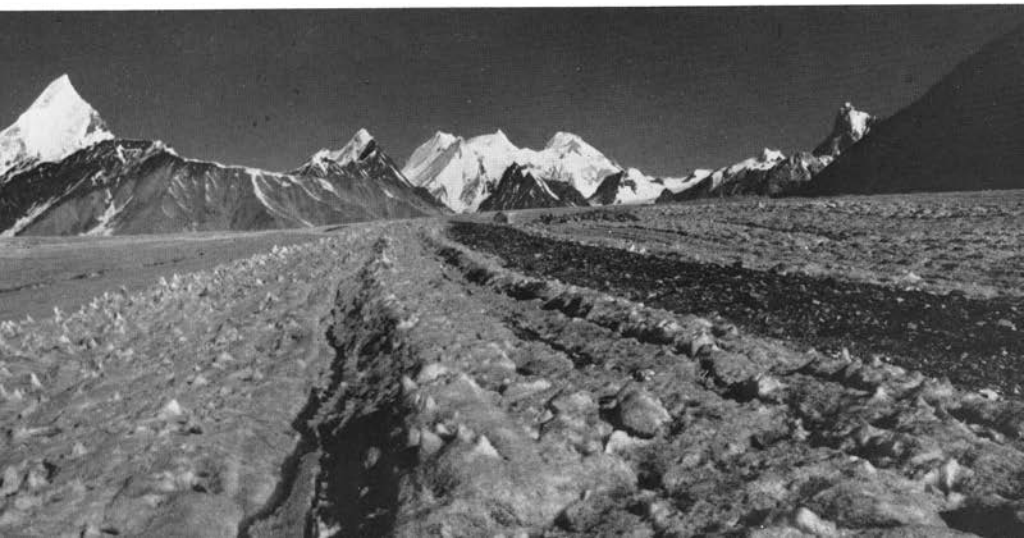


Plate 9-(a)：バルトロ・カンリIV峰よりシア・カンリ登頂ルート。
Sia Kangri seen from Baltro Kangri IV.
(Plate 9-(a) & (b), by J. Futagami)

Plate 9-(b)：シアチェン氷河への下降路（上の写真A点より）。
Descent to Siachen Glacier (from Point A in the above photo).

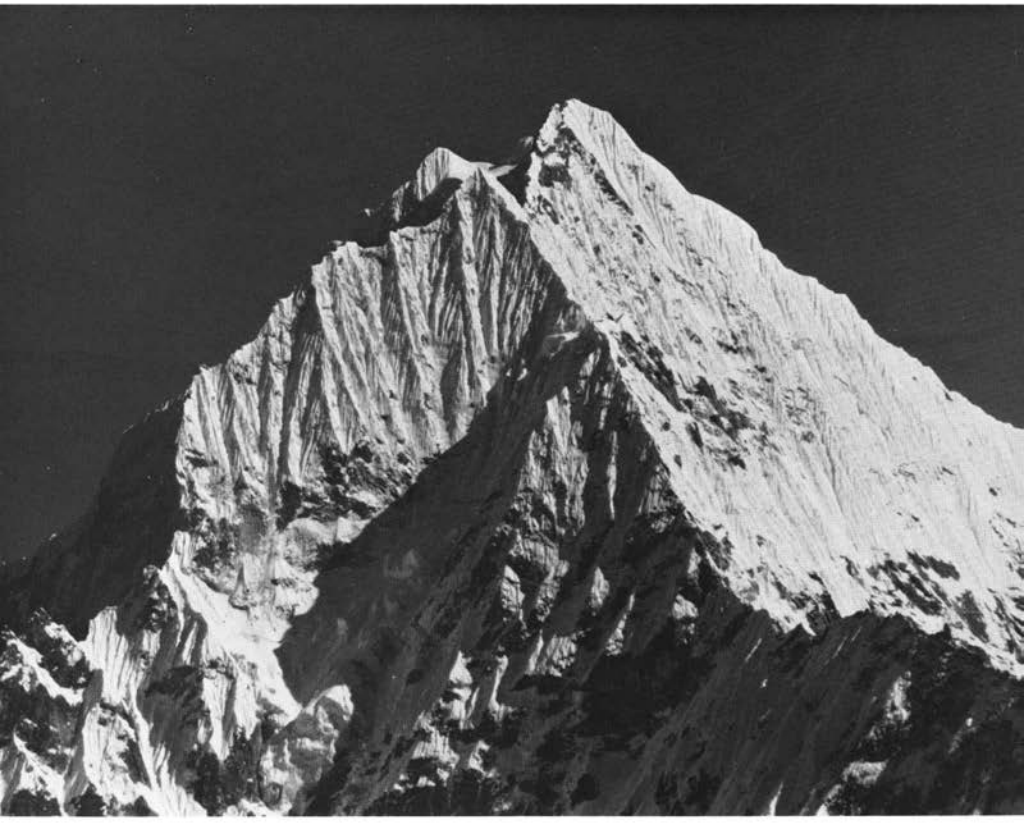


Plate 10-(a)：ナムチェ・バザールから見たタムセルク。右側の雪壁が南西壁。

Thamserk from Namche Bazar. South-west face seen on the right.

(Plate 10-(a)～(c), by T. Kimura)

Plate 10-(b)：BCから見たタムセルク南西壁上部。左のコルへ登り稜線伝いに登頂。
Thamserk SW face seen from BC. Reached the col on the left and traversed the ridge to the top.

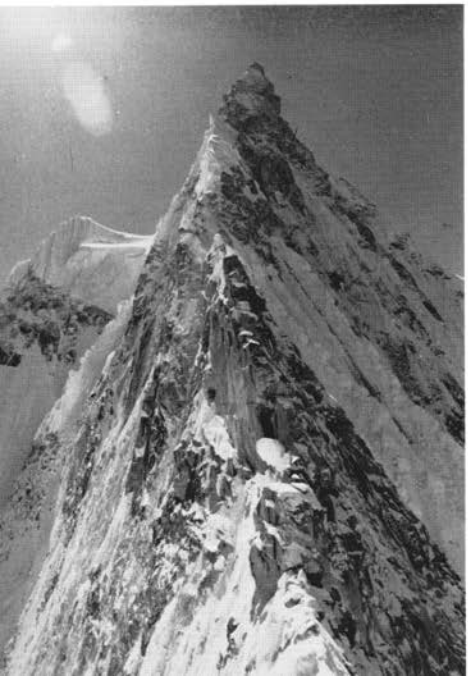


Plate 10-(c)：
C2（6400m）から，頂上直下のロックピーク（中央峰と命名，6600m）。
The Rock Peak (Named "Central Pk" 6600m) seen from C2 (6400m).

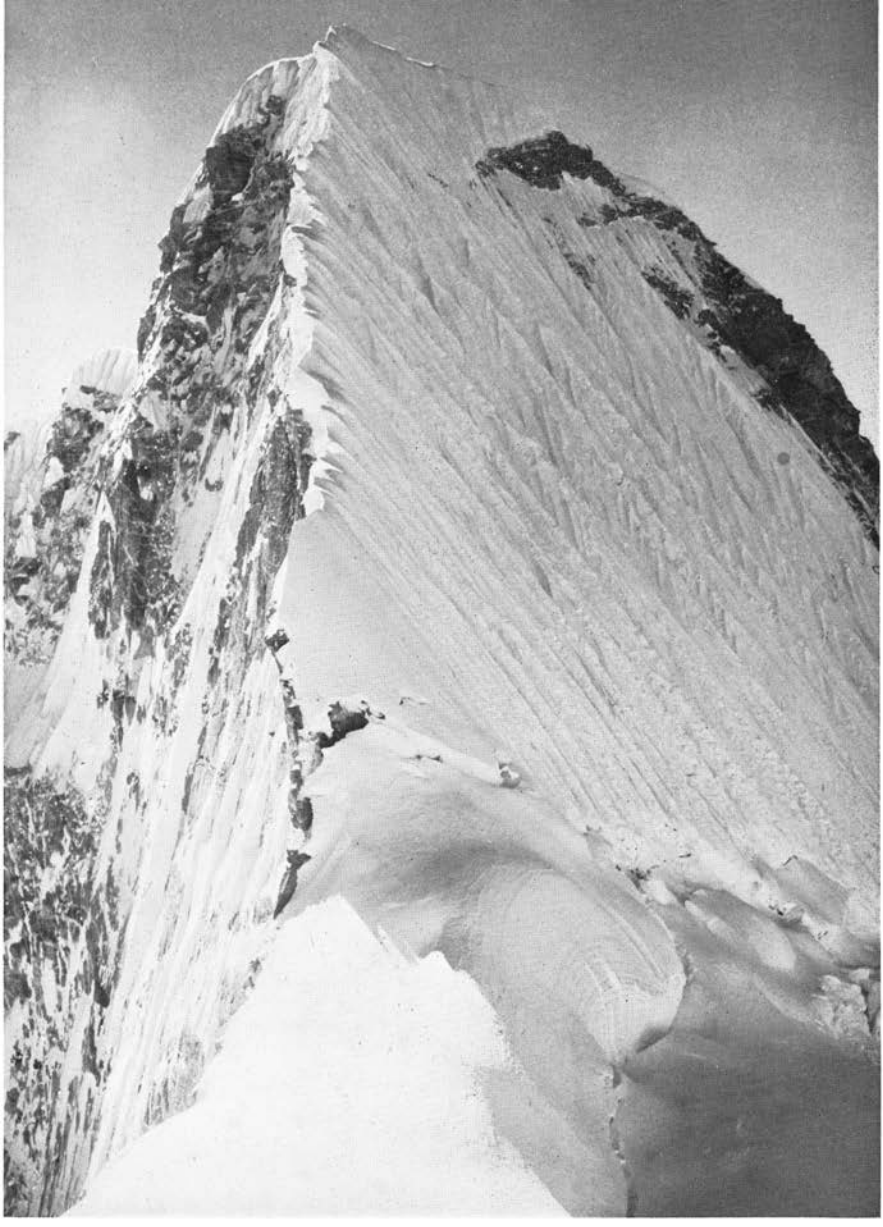


Plate 11-(a)：カンテガII峰から主峰頂上へつづく稜線。左側が北壁。
Kantega, the Ridge extending from Kantega II.
North wall seen on the left.

(Plate 11-(a)～(d), by K. Takeuchi)

Plate 11-(b)：カンテガ頂上からII峰を見る。
Kantega II seen from the top of Kantega.

Plate 11-(c)：カンテガ頂上直下の雪稜。
Snow ridge to the top of Kantega.

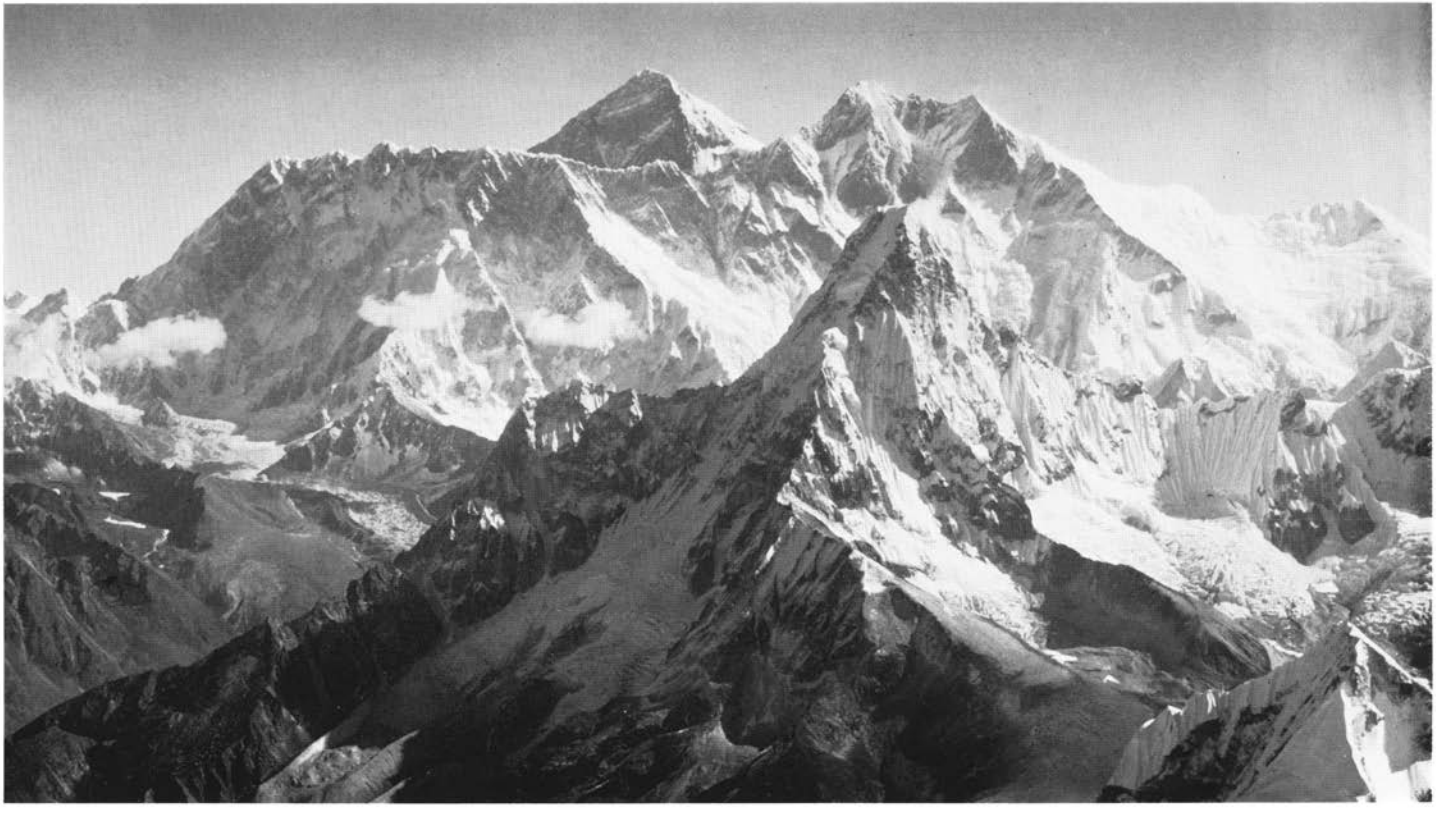


Plate 11-(d)：カンテガよりエベレスト、ローツェを望む。中央手前にアマ・ダブラム。

Everest, Lhotse, and Ama Dabram (middle front) seen from Kantega.

タムセルク南西壁（一九七九年春）

木村　武

出発まで

日本エクスペディション・クラブ（J・E・C）は、山崎金一君を中心として、ヒマラヤのバリエーション・ルートへのライト・エクスペディションを目的に、一九七七年、同人として組織された。メンバーは、東京を中心に、富士宮、名古屋、岐阜に広がっていった。そのため単一山岳会に比べるとコミュニケーションは難しく、それだけのんびりした、よくいえば自由な組織であり、悪くいえばまとまりのない組織でもあった。いまやヒマラヤ遠征もシェルパ・レス、アルパイン・スタイルが中心とはいえ、個人のヒマラヤへの情熱だけではトレッキングが精いっぱい。個人のエクスペディションは、卓越した少数のクライマーを除けば、不可能というのが現実であった。だから、いつかはヒマラヤへと思っていたぼくに、突然、山崎君から電話があってJ・E・Cによるヒマラヤ遠征の誘いがあったときには、渡りに舟と参加を決めた。

メンバーはぼくが最年長で、ほかはすべて二十代の若いメンバーだった。そして七八年夏には谷川岳で合同トレーニングを行なったのだが、ヒマラヤ遠征の具体化は容易に進まなかった。

七八年二月、ネパール政府はヒマラヤの新たな解禁峰を発表、山崎君から新解禁峰のリストに含まれていたタムセルク遠征の提案があった。早速、資料を調べた結果、南西壁に目標を決定したのは三月下旬。急いで都岳連、日山協の推薦を受け、外務省にアプリケーションを提出したのが四月下旬であった。

ルート決定にしても豊富な資料があったわけではなく、細貝君のシャンボジェ近くから撮った斜めの西壁の写真と、一九六四年、ヒラリーの南稜からの初登頂の記録が唯一であった。あ

とは山崎君を始めとするメンバーのヒマラヤへの情熱で、難しい議論もなく簡単にルートは決まった。ほかの遠征隊に比べると至極あっさりしたもので、のんびりした準備だったが、手続きはスピーディだった。

ところが、夏を過ぎても一向にネパールからの遠征許可通知がなく、すでに山学同志会のタムセルク北壁に許可が降りたことを聞いた。のんびりした準備の報いと半分あきらめかかったところへ、山崎君の知人であるエクスプレスハウスのランジャン氏が来日、絶好の機会と、我々の遠征許可の督促を観光省に働きかけてくれるように依頼した。しかし、それでも一向に許可通知がなく、ほぼあきらめかけていたのだが、十一月に入りランジャン氏とネパール政府からの許可の電報を受け取り、うれしいやらびっくりする中でいよいよ本格的な準備に入った。

机上の準備プランはすでに完成していたので、時間がないわりには任務分担も決まってスムーズに準備に入れた。例によってのんびりムードで、ほかの遠征隊のような緊張感がないので、心配になるぐらいだった。

しかし、暮も押し迫ったある日、隊長に予定していた山崎君が一身上の都合から突然不参加となった時点で、急激に緊張感が生まれた。だれもが山崎君の隊長と、遠征の成功を疑っていなかっただけに、大黒柱が抜けたとまどいと、そしてチームワークの乱れや遠征への不安が同時に生まれたことは事実であった。

そして年が明けた七九年一月中旬、メンバー中最年長のぼくが総隊長を任され、隊長を岐阜の木村智氏が努めることに決定した。順調に回っていた歯車が停止し、再び回り出した三月十二日先発隊が出発した。

カトマンズ

カトマンズの空気は、やたらうまかった。小さな飛行場に夕方到着して、タラップから降りた時の第一印象であった。

カトマンズは緯度は南で熱帯地方に属するが、標高一三〇〇メートルの高地で、日本の霧ヶ峰高原や上高地と同じくらいである。

カトマンズの朝は、ランニングから始まった。六時に起床して、準備の体操をすませ、ホテルから、市の中心部である、王宮を通り坂道を登る五㎞ぐらいのコースである。日中は太陽が強くて走れないが、朝は、膚寒いくらいで、菅平で走っているような気分で、とても気持が良い。午前中は、役所との遠征の手続や、食糧の買い出しでつぶれてしまうが、午後は、バザールへ遊びに行った。観光客にとっては、治安が良く、温和で、親切なネパール人は、旅を楽しませてくれた。

カトマンズの生活水準は三十年ぐらい前の日本と同じくらいで、ネパール全体では、明治、大正の日本と同じくらいであ

る。後進国と呼んでしまえば、それまでだが、ビスタリー（ゆっくり）が合言葉のネパール流儀になれてしまえば、何の不自由もなく、タイムトンネルをくぐって、我々が知らない日本の昔に帰ったようで楽しくなる。

シェルパとイエティの世界

三月二十七日、カトマンズからピラタスポーター（十八人乗りプロペラ機）で標高二七〇〇メートルのルクラへ。一時間の飛行で朝八時に到着。ルクラからチモアまで歩いて四時間。

チモアは標高二九〇〇メートルのエベレスト氷河から流れているドウドコシ川とタムセルク氷河から流れこんでくるキャンシングシャール川の合流点で、深い渓谷の山ひだに作られた十軒ぐらいのシェルパの部落である。

萩行さんは5年前にインドからネパールへきて、三年前からチモアに住んでいて、年齢は五十歳を少し過ぎた、熱心な仏教徒である。彼が日本を棄て、ネパールの奥地に住むようになった動機は、うかがい知る由もないが、農園とロッジを経営しながら、夜は周辺のシェルパの子供達を集めて夜間学校を無報酬で運営している。ローソクの明りで五〜十五歳ぐらいの子供を二十名くらい集めて、英語、数学、絵、などを教えている。

シェルパの夜間学校で、五日程先生をしたが、子供達の勉強意欲が強く、夜七時頃から始まって二時間の予定が、大てい一時間ぐらいのびて、終了するのは十時過ぎであった。ローソクの明りを頼りに、ちびた鉛筆で算数の問題に取り組む姿は、真剣そのもので、ヒマラヤの大自然の中で、この子供達が成長して、次の時代をもっと進歩させるような気がしてならなかった。

シェルパの世界は、神話の世界でもあり、その主人公はイエティ（雪男）であった。

ある時、ベースキャンプでサーダーと夜遅くまで話しこんで、終ってからたき火を消して、天幕に帰り寝ようとシュラフにもぐりこんだ時、突然天幕が大きな動物によってゆさぶられた。ビックリして外へ出てみると、サーダーも天幕から飛び出してきていて、その顔は、恐怖でゆがんでいた。

「今のは何だ」

と聞くと、彼は

「イエティが出た」

と言ってふるえていた。

「一緒に探そう」と言っても山では勇敢なサーダーも「いやだ」と言ったきり一歩も動かず、やむなく、恐る恐る天幕のまわりを探したが何も見つからず、寝袋に入った。

もしも今度きたら武器を何にしようかと考えながら眠りこんだら、天幕のヒモを切られた。外は月も星もない真暗やみの中、みんなでやっと出てみたが、何も見えない。

突然一人の隊員が何かに背中をつかれて「ギャー」と叫んで倒れた。

本当にイエティがでたのかと、瞬間、背すじがゾォーッとなり寒気がした。

あわててライトをまわすと、遠くへ黒いヤクが二頭走っていくのが見えた。

天幕の中でふるえているサーダーを呼んで、「今のはヤクだ」と説明しても、なかなか納得せず「イエティがいるから明日下山する」と言われてよわってしまった。

朝すぐに起きてサーダーとイエティの足跡を探したが、見当らず、新雪の上にヤクの足跡を見つけて、ようやく下山することを思いとどまらせることに成功した。

シェルパにとってヒマラヤの山々は昔から、神々の住む山で、信仰の対象であり、神聖な霊魂であり、山に住むイエティは神聖な山を守る悪魔であり、侵入してくる人間を襲う、恐ろしい番人であり、決してさからってはならない超人であった。現代人が失ってしまった神話とロマン、空想の世界が、シェルパの世界では、今だに生きているのをまのあたりにして、我々を文明社会の人間といい、彼らを原始社会の人間と区別していたことが、ばからしくなってしまった。大自然のリズムに適応して暮らしながら、神聖な山と恐れるイエティを持つ、シェルパの方が、我々の文明よりもはるかに空想力が豊かで、人間的な生活を楽しんでいるようであった。

四、五〇〇メートルのBCへ

チモアの快適な生活に別れを告げ、ポーター十五名とヤク四頭に荷物を乗せ、タムセルクのキャラバンを開始する。急な尾根をあえぎながら、登りはじめると、三十kgの荷物をかつぐシェルパと私物だけの小さなザックをかつぐ我々の差は、あっという間に拡がり、シェルパのしっかりした足取りに目をみはるばかりであった。先に着いて、天幕を張り終り、たき火をおこし、すでにティの準備をして我々の到着を待つシェルパ手際の良さにびっくりした。朝もまた六時頃には「バラサーブ、モーニングティ」という声で起された。日本の山ではいつも食当をやっていた若い隊員も、とまどい気味であったが、ようやくヒマラヤを実感しているようだった。

尾根は次第に急傾斜になり、それまで目を楽しませてくれたラリグラスの花や、高山植物もなくなり、ハイ松のヤセ尾根を過ぎると、岩稜伝いの細い道となった。荷物を運ぶヤクを見守っていると、牛みたいに鈍重な姿に似合ず、カモシカのような軽快な足どりである。

BCには二日のキャラバンで到着。標高四五〇〇メートル、カルカになっている石小屋の跡にBCを設営した。正面タムセルク南西壁、左にタムセルク西稜、右にクスム・カングルの東

面を望む快適な場所である。十四年前のヒラリーのBCは、五〇〇〇メートルのモーレンの上にその跡が残っていた。

長大なヒマラヤヒダにルートを決定

BCからながめた南西壁は、南稜と西稜に囲まれた巨大なヒマラヤヒダの氷壁である。ヒラリーの登った南稜のクーロワールを除けば、タムセルクの頂上六六二三メートルからダイレクトに落ち込んでいる中央稜か、西稜のコルに突き上げている左のヒマラヤヒダのリッジが登攀可能な唯一のルートに思えた。

出発前の東京でのミーティングでも、この二つのルートのいずれかにする計画を組んでいたので、想像を絶するような難ルートには見えなかった。しかし、BCから中央モレーンに登り、詳細にルートを偵察すると、大きな違いがあった。頂上からダイレクトに落ち込んでいる正面ルートは高度差千八百メートルぐらいあり、中間にハングぎみの巨大な岩壁帯があって、上部と下部を分けている。またキャンプ地に適した雪田やテラスがなく、上部のヒマラヤヒダは、傾斜の強い硬い岩と青氷で構成されており、雪崩の心配はないが、アイス・ハーケンやロック・ハーケンが不足する可能性もあって全員登頂という目的にも適さないため、断念した。

左ルートは西稜の岩峰に突き上げているスノーリッジと、ルンゼ、クーロワールのコンタクトライン沿いにルートがとれ、安定したキャンプ地も作れそうで、我々のルートに決定した。しかし、千六百メートルの長大なヒマラヤヒダのリッジは快適なルートとはいえない。また正面ルートと比べると雪崩の心配もあり、細心の注意を必要とするようだ。

BCから見上げる南西壁のヒマラヤヒダは、神秘的で、美しく輝いていた。しかし、明日からの登攀を考えると、美しさに酔うより、期待と不安の方が大きかったのである。

想像以上に苦しい青氷のリッジ登攀

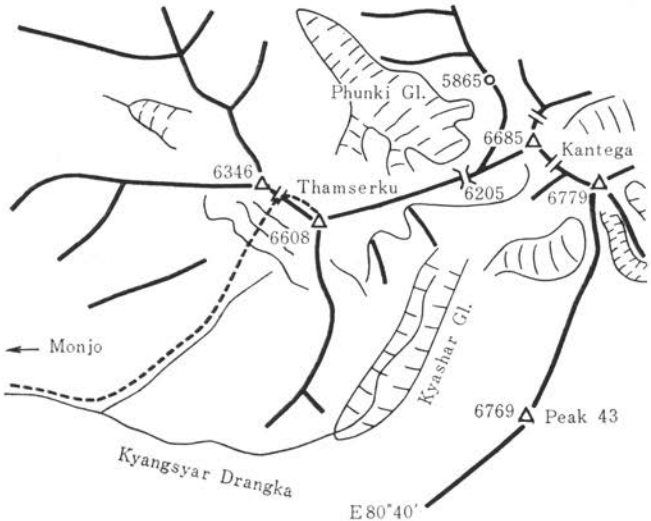
BCからモレーンのガラ場を登って四時間の所にABCを設けた。タムセルク南西壁の取付点で、小高いモレーンの台地となり、凍った池から水もとれ、雪崩の心配もない快適な場所である。BC、ABC間の登高が4時間という短時間ですんだため、物資の荷上げ、補給、隊員の休養はスムーズに進行した。

ABC、C1間は、高度差四〇〇メートル。ザイルピッチにして十五ピッチとコンティニュアス二五〇メートル、さらに取付までの傾斜の弱いアイス・フォール帯四〇〇メートルであった。

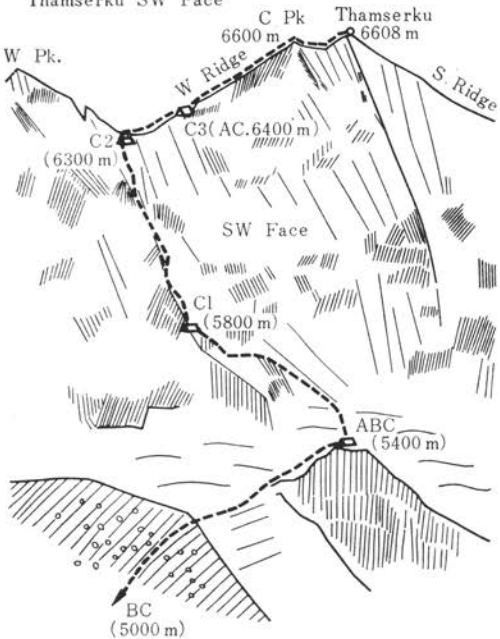
二〇〇メートルの雪壁を登り、一〇〇メートルの雪田を越え、五〇メートルのルンゼをトラバースして、リッジに取付く。そして、リッジとルンゼのコンタクトラインに沿ってルートを拓く。下部の雪壁は雪も適当に締まり、登攀も楽であっ

Chart 10

Route to Thamserku



Thamserku SW Face



た。中間のルンゼはときおり雪のブロックが落ちていやらしいが、Ⅲ級程度の斜面である。上部リッジはヒマラヤヒダ特有の雪が凍った細いリッジでいやらしいが、ピッケルとアイゼンがよく食い込み、Ⅲ級程度の技術で登れる傾斜である。

C1は、ヒマラヤヒダの氷のリッジを削り、四月六日に設営した。比較的安定したテラスで、予想よりも安全なキャンプであったが、高度五八〇〇メートルは壁の真中にいる緊張感があった。ABCとC1の登高時間はフィックス工作後は、三〜四時間であった。C1までのルート工作は六日間を要した。

C1〜C2間は高度差五〇〇メートル、ザイル・ピッチ三十三ピッチ、岩壁と氷壁、クーロワール、雪稜がミックスして困難なルートであった。C1のテラスから氷壁を下り、ルンゼを二ピッチほど登り、スノーリッジに取付く。最初の核心部は大きな滝を持つ第一岩峰で、岩壁と氷壁のミックスしたⅣ級のルート、五ピッチを要した。

次の核心部は第二岩峰。二〇〇メートルぐらいの大きな滝が青く凍り、その上をスノーシャワーと、ときおり落石が飛ぶという悪条件である。ルートは、スノーシャワーに脅やかされながら、左側のアイス・リッジに取付き、滝を左へ回り込んで第二岩峰のフェースに取付く。Ⅳ級の岩壁を二ピッチ登るとオーバーハングにぶつかり、アブミを使用して抜ける。岩壁は花崗岩で硬く、太陽を浴びると灰色に美しく輝き、氷壁とスノーリッジに慣れた手には懐しいロック・クライミングの感触を与えてくれた。

Ⅴ級の壁を越えるとヒマラヤヒダの氷のリッジが待ちかまえていた。最高の核心部は、長大なクーロワールと、硬く凍りついた氷壁だった。クーロワールは絶え間ない上部からの雪に洗われ、氷はうす青く輝いていた。スノーバーを四本打ち込み、二〇〇メートルの氷壁をダブル・アックスで素早く抜けることが至上命令であった。しかし、六〇〇〇メートルの高所でのダブル・アックスはさすがに苦しく、想像以上に困難な登攀の連続であった。手が届きそうな近さに見える西稜が、大きななぐさめになってくれた。

このクーロワールを抜けて、C2への氷壁はさらに五ピッチ続いた。傾斜は最大となり、C2のテラスは青氷のリッジを削り、かろうじて四人が泊まれる傾いたキャンプ地となった。C2は西稜直下のリッジで、高度六三〇〇メートル、C1〜C2のルート工作は十二日間を要し、四月十八日に設営を完了した。C1〜C2間の登高時間はルート工作完了後十〜十五時間を要し、ときにはビバークの必要もあった。

ここまでで南西壁の登攀は終了し、後は頂上へのアタックが残された。フィックス・ロープは一九〇〇メートル、スノーバー五本、アイス・ハーケン三〇本、ロック・ハーケン六〇本、ボルト三〇本を持っていったが、この時点でほとんど使い果た

し、手元にはフィックス一〇〇メートル、スノーバー二本、ハーケン五本が残るのみであった。

南西壁は全ルート岩と氷の登攀が続くため、荷物はできるだけ軽量化した。行動は四人パーティとし、二人は先行してルート工作を行ない、残りの二人はフィックスを利用して荷上げというように役割を分担し、スピードアップを図った。しかし、四月十日以降の悪天候と、予想以上の悪壁に阻まれ、予定よりも時間がかかってしまった。

不安定なルートが続く頂上への道

四月十四日の作戦会議で、木村智、細貝、後藤、楢木の四人を第一次アタック・パーティと決め、十九日の登頂を予定したが、C2の建設に手間取ったためアタックを中止する。登頂予定日は過ぎてしまったが、登頂の断念は少しも思い浮ばなかった。

第一次アタック・パーティが失敗した後、私は林、加茂、水谷のメンバーで第二次登頂にアタックした。四月二十日、早朝の好天を利用して、C2を出発、六四〇〇メートルの西稜まで一〇〇メートルの氷壁を快調に登り、ついて念願の西稜へ飛び出した。初めての人間を迎えた西稜は、北と西の天空にひかれた細いクモの糸のようなナイフエッジで、綱渡りをする人間を振い落そうと身がまえる、ダモクレスの化身に思えた。しかし目前に展開するエベレスト、ローツェ、プモリ、マナスル、ダウラギリの白い神々のパノラマは、危険も疲れも一気にふきとばしてくれた。

ナイフエッジを慎重に進む、左側の北壁からアイスハーケンの音が聴こえてきた。山学同志会の北壁隊が三〇〇メートルぐらい先で氷壁に悪戦苦斗している。コールをかけると、彼らのコールがかすかに稜線まで返ってきた。一ヶ月前にルクラで別れて以来の再会に感激する。

一日目は四〇〇メートルのフィックスザイルを工作し、例によって天候が悪化したため、C2に帰る。二日目頂上目前の二〇〇メートルのロックピークに挑むが、ハーケン、フィックスザイルが底をつき、すでに食料、燃料も不足し、アルパインスタイルで登頂するか、下山か迷う。三日目は朝から吹雪に襲われた。

登頂だけを目指していた一人のクライマーから隊員の安全を考える隊長として、私の立場は一変した。多分この登頂を断念すれば時間切れで、再度アタックする時間的余裕のないことは、装備、食料の面からはっきりしていた。しかし、我々が下山すれば、下のパーティにもう一度登頂のチャンスがあった。士気旺盛な隊員に登頂断念を伝えるのはつらかったが、決断を下した。

吹雪が小康状態になった所でC2を出発するが、一〇〇〇メ

ートルの氷壁の下降は、奈落の底に向かって、足を踏み出し、身体が垂直に落ちていく錯覚にとらわれた。午後に入ると、吹雪はいよいよ激しくなり、視界はゼロ、手と足は感覚を失い、フィックスザイルは氷に埋り、懸垂に使用するザイルは、ハガネのように固くなってしまった。黙々と真っ白な世界を、物体のように凍って下降する状態は、極限の精神状態となった。すでに吹雪は、一刻のゆうよも与えなかった。夕方に入ってもC1は見えず、ヘッドライトを頼りに、沈黙の世界をもくもくと下降が続く。人間の生きる本能と、不安に耐える、精神力の強さを、とことんまで味わった。二十一時、ようやくC1に到着。何も食べずにきた空腹と疲労感がいっぺんに襲ってきた。

そしてC1で二回目の作戦会議を行なった結果、第三次アタック隊として木村智、細貝を決定。サポート兼アタック隊として後藤、楢木が最後のアタックを行なうこともあわせて決定した。

C2から垂直の氷壁を五〇メートルで西稜に達する。西稜からタムセルクのピークまでは細い氷のリッジ、鋭い針峰群と、二〇〇メートルぐらいの大きなロック・ピークが待ちかまえ、BCからの偵察で予想した以上の困難なルートであった。すでにフィックス・ロープ、装備も尽きていたため、全員登頂は断念して木村智、細貝の二人でアルパイン・スタイルによるアタックとなった。

稜線の登攀は、C2からロック・ピーク（中央峰と命名）までが高度差三〇〇メートル、ザイル・ピッチにして二十三ピッチとコンティニュアスで七〇メートル、岩峰と雪稜、数ピッチの氷壁で構成され全般的に悪いルートであった。Ⅲ級以下のピッチは三ピッチあっただけで、ほとんどのルートはⅣ級以上であった。アブミを使用したピッチも六ピッチあった。中央峰から主峰までの登攀は高度差がほとんどなく、不安定なナイフエッジ、雪庇、キノコ雪、氷壁と複雑な要素を持つ七ピッチの登攀であった。

四月二十六日、C3設営。岩峰を三ピッチ前進し、スノー・コルにツェルトを張る。

四月二十七日、中央峰の凹角、氷壁、逆層のスラブが続く岩壁を抜け、カンテを回り込んで十六時四十五分、ピークに到着、ビバークする。この中央峰の登頂は初めてであり、実質的な登頂成功とする。

四月二十八日、五時三十分に出発し、雪稜を七ピッチ登り、八時十五分、主峰に登頂。木村智、細貝栄の二人。さらにC3に第四次アタック隊として後藤、楢木の二人が待期したが、天候悪化のため、上部キャンプを撤収しながら下山した。

頂上への道は、険しく、当初の全員登頂には失敗したが、全員が南西壁を登り二人の隊員が登頂に成功したことにより、次のヒマラヤのピークに向かっての道がさらに大きく開かれたこ

と思う。

△記録概要▽

隊の名称　J・E・Cタムセルク遠征隊
（日本エクスペディション・クラブ）

活動期間　一九七九年三月～五月

目　的　タムセルク南西壁登攀（ライト・エクスペディションによるヴァリエーションルートの登攀）

隊の構成　総隊長＝木村武（トロイデ山の会、37）、隊長＝木村智（登攀倶楽部岐阜、33）、隊員＝細具栄（八雲山の会、29）、林端彦（南稜会、26）、後藤秀昭（南稜会、25）、早川孝（南稜会、26）、加茂孝（南稜会、25）、樽木幸三（登稜会、22）、水谷雄二（登攀倶楽部岐阜、22）

行動概要　三月二十七日カトマンズ発。三月三十日BC（四五〇〇メートル）設営。四月一日ABC（五四〇〇メートル）設営。四月六日C1（五八〇〇メートル）設営。四月十八日C2（六三〇〇メートル）設営。四月二十六日C3（六四〇〇メートル）設営。四月二十六日登頂。

カンテガ北壁（一九七九年春）

竹内孝一

はじめに

カンテガはネパール・ヒマラヤの東部、クンブ・ヒマール山群の中にあり、このクンブ・ヒマールの登山基地であるナムチェバザールの東に位置する。アマダブラム、タムセルクと並んで、エベレスト街道を飾る美しく困難な峻峰の一つである。カンは「雪」テガは「鞍」を意味するが、その名のごとく馬の鞍のようなスカイラインをもった山であり、その北面は手のほどこしようのないほどすっぱりと切れ落ちている。

一九六三年六月、E・ヒラリー率いる遠征隊はこの南面からその頂上を勝ちとった。その十七年後、我々は、困難ではあるがすばらしい登攀ができるであろうこの北壁に照準を定め、主峰、二峰間のコルに直線的につきあげるダイレクトルート、もしくは長く美しいスカイラインを持って主峰につきあげる北東稜ルートよりの登頂を目指し、少資金、短期間、そして五人のメンバーによる計画に乗り出した。

アプローチ

同じ時期に一緒に準備を進めてきたタムセルク隊の仲間達とルクラで別れたのは、三月二十九日のことであった。三日間を要する四六〇〇メートルの峠越えに始まる、合計八日間のアプローチの始まりである。ルクラから峠を越えるまでは、距離的には一日歩けば越えられそうであるが、これに三日間かけることは、我々のこれからの登山活動に大きな意味を持っていた。即ちここを利用して、うまく順化できれば大いに有利なのである。峠を越えれば、ルクラと同高度のイヌクーコーラへと再び下る。そして、五三〇〇メートルのBCまでの高度を再び稼ぐ。つまり、四〇〇〇から五〇〇〇までの高度順化を二回する

ことになる訳だ。その結果、ジャヌー北壁を経験している湯田隊長は高度順化の要領を知っているのか、何の問題もなくBC入りすることができた。先にBC近くまで下見に来た先発隊の石橋、本藤も、BC入り直前に風邪をひき、ターナまで三日間下ることはあったものの、高度順応には何の問題もなかった。初めての高度を体験するドクターと私は、峠越えの二日目より激しい頭痛に悩まされた。しかし、峠を越え三八〇〇メートルのイヌクーコーラへ下るうちに頭痛は消えていった。そして、イヌクーコーラでは両岸のメラピーク、クスムカングル、目前のP4を仰ぎ見ながらすばらしい気分で歩くことができた。だが、再び高度を上げるに従ってまた頭痛に襲われ、結局、BC直前で、風邪の本藤と私は、ターナへと下り、二日遅れで歩いて来るドクターと一緒になり、三日間をこの四三〇〇メートルのターナで過した。

北壁へ

BCを本来の予定地（五三〇〇メートル）に移したのは、我我がターナからもどってきた翌日、四月十日だった。というのは、キャラバン最終日に雪となり、四〇人のポーターは動けなくなりBC直前五一〇〇メートルに荷物は集結されていたからだ。そして、我々と、三人残したポーターでBCへの荷上げをする。このBCからは、カンテガは目前にどっしりと構えてい

Route Map to KANTEGA

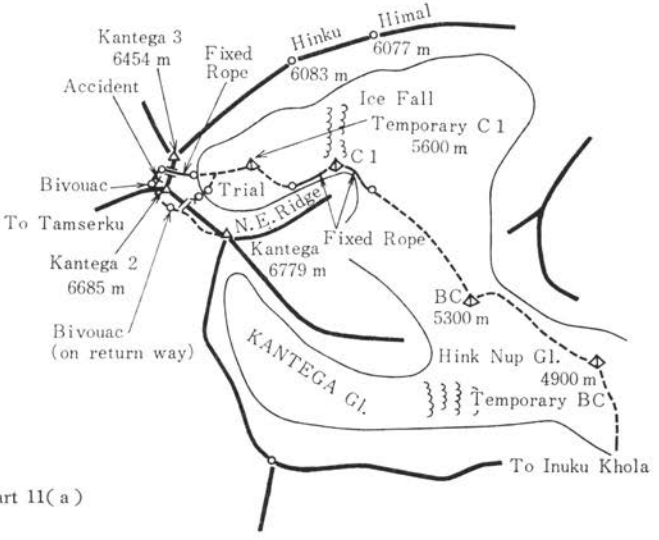


Chart 11(a)

るが、北壁は北東稜に阻まれて見ることはできない。

BCで全員が顔を合わせた。我々が休養している間ずっと動き続けていた湯田隊長と石橋は、もう真黒に日焼けしている。隊長より「ルートの一つに考えていた北東稜は無理と判断した。C1予定地までのルート工作は既に完了している」との話を聞く。

四月十三日、北壁内院の雪原にC1を建設、以後荷上げ、上部ルート工作と二人ずつに分かれて三日間動く。

北東稜は上部に顕著なオーバーハングが二つあり、下から見ると短く見えるが、なるほど期間内では登れないだろうと思った。雪原はかなり広く、北壁がぐるりと囲んでいる。主峰から切れ落ちた壁は、垂直に近く、手懸りはほとんどなさそうだ。壁からは、日が当たれば、氷、石、天気が悪ければスノーシャワー、と常に落下物がある。我々の狙っている主峰・二峰間のコルに登るルートは、下部は雪が付いており、傾斜も緩い。上部はオーバーハングが続いているとしても、その間を縫ってゆけば何とかルートは伸びそうだった。

しかし、四月十五日、わずか三ピッチの試登の末、我々はこのルートから追い返されてしまった。この日私は湯田隊長の確保で、スノーシャワーの降り積もったデルタから三ピッチ目のミックス壁をピッケルとアイスハンマーをホールドにして登っていた。空が暗くなり、雪がちらつき始めたとたん、スノーシャワーの総攻撃をくらったのである。滝に打たれているかの如く、スノーシャワーは私の体を壁からひきちぎろうとする。体をすぼめ、ピッケルとアイスハンマーを力いっぱい握りしめていた。数分後スノーシャワーは収まったが、私の体は壁の一部のように真白である。こんな所に、もたもたしていたら再び襲われるだろう。ザイルを固定して、取付に降りてきた時、ガタガタ震えていたのは寒さのせいだけではなかった。

ルートの再検討をするために四月十六日、全員がBCに下った。そして登頂の可能性があるルートとして、二峰と三峰のコルに突き上げるクーロワールを話し合った。

「あんな雪崩の巣のようなルートは登りたくない」（本藤）

「クーロワール上部も悪いし、そのコルからのルートが見当たらない」（石橋）

「登頂できなくても、クーロワールより壁を登りたい」（私）

「カトマンズに早く帰りたいから、早く登頂してくれ」（ドクター）

さまざまな意見が出たが、隊長は「日程的に余裕はない。クーロワールの危険性はわかっているが、側壁ぞいにルートは作れるはずだ。二峰、三峰間のコルから上は、南面からの写真によると広い雪田が主峰間のコルまで続いている。明日より四人でC1へ上がり、クーロワールへのルート工作に全力投入する。クーロワール内は、退却時の為にフィックスを行なう。C

1は、クーロワール取付に近い所へ移動する」と決定した。

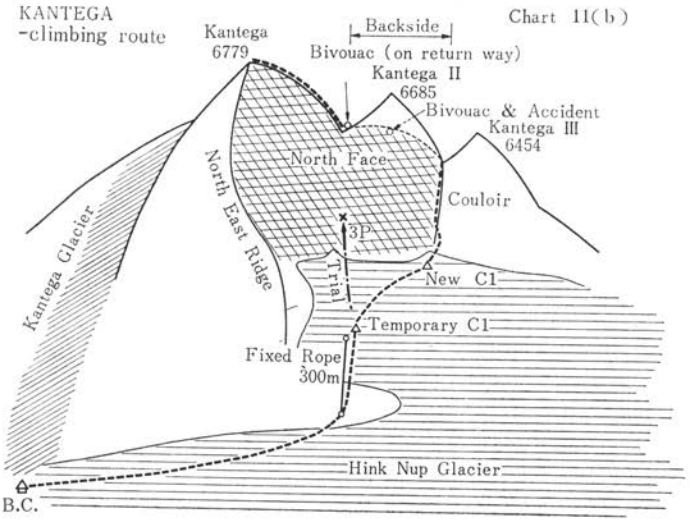
次の日より、クーロワールのルート工作が開始された。フィックス用ザイルが足りない為、北東稜のすそと、北壁の三ピッチのフィックスを回収する。そしてC1の移動を行なった。さらに次の二日間で、高度差七〇〇メートルのクーロワールの三分の二にフィックス工作を完了した。クーロワール内は常に氷雪が流れている。ルートはこれを避け、二峰側の壁伝いに伸びていった。六〇〜七〇度の氷壁はさほどの難しさはない。この二日間のルート工作ののち、いよいよアタックの日を迎えた。

登　頂

四月二十日、ツェルト一張、コンロ二台、ガスカートリッジ、トランシーバー、八ミリザイル二本、ハーケンをそれぞれ分担し、食料は各自三日分を持ち、六時C1を出発する。

前日のフィックスを最上部までユマーリングし、ここより再びコルまでザイルをフィックスしてゆく。上部へ行くに従って傾斜は増し、クーロワールは狭くなる。コルに出たのは、午後の一時になった。

このコルからは、広い雪田が主峰・二峰間のコルへと続いていた。陰険な北壁から開放された我々は、太陽の恵みを目いっぱい受けて、のんびりと主峰・二峰間のコルに向かい、二峰の西面をトラバースするようにラッセルしてゆく。二時間歩き、



雪田が大きく階段状となったクレバス地帯にぶつかった。ここなら、先ほどからの強い風はしのげるだろうと、さっそくビバークに入る。天気は良いが、西から吹きつける風は強く、一度ツェルトをかぶるともう外へ出る気はしなかった。

四月二十一日、今日中にこの場所へ帰れることを確信し、ビバーク道具は一切残し、登攀具、トランシーバー、八ミリ、国旗を持って六時出発。ビバーク地より二〇〇メートル左に行った所に、この段状部分を越えられる所を見つける。まず石橋がここに四〇メートルザイルをフィックスする。続いて私が登っていく。そして石橋と私は、そのフィックスを残し先行する。

八時、主峰・二峰間のコルに着いた。主峰へのリッジは、ヒマラヤヒダのコブと北壁側への雪庇で飾られていた。後続の湯田隊長と本藤はまだ来ない。ザイルの回収にでも手間取っているのだろうか。

我々はザイルを結び、まずリッジ取付にあるクレバスを通過することから始めた。飛び越えられない為、クレバス内に一旦下り、狭くなった所からリッジに取付く。最初はダブルアックスで快適であったが、上部へ行くに従って雪庇とコブの乗越しには神経を使う。

もう何ピッチ登ったことだろうか。数えていたピッチ数も忘れてしまった。稀薄な空気に激しい息をゼーゼー言わせながら、急峻な氷雪壁をピッケルとアイスハンマーをホールドに、ただひたすら頂上へ立つことだけを考えながら黙々と登る。目前にある頂上がガスで見え隠れする。最後のピッチは石橋が先に登る。私は頂上への一歩一歩を八ミリに収める。

石橋は頂上に立った。私が続く。ビバーク地を出てから八時間、午後二時十分だった。何の感慨もない。ただこれ以上、登る斜面がないだけだ。しかし後続がこないことが心配であった。トランシーバーでBCへ登頂の知らせを伝えると「おめでとう」の返事が返ってくる。写真撮影をし、三〇分後頂上を後にした。

主峰・二峰間のコルに着いた頃には、既に日は落ち吹雪となってしまった。後続の二人にも合うことなく、そしてビバーク地へ戻ることは不可能となりコルで雪洞ビバークに入る。ビバーク道具のない我々は、どうにか体が収まる程度の雪洞を二時間かけて掘った。

翌朝、風雪と寒気の中で眠れない一夜を過した我々は、朝日が体を暖めてくれるまでは動く気がしなかった。一晩中、凍傷を恐れて爪先を動かそうと努めてはいたが、朝方の眠気には勝てなかった。下山後、二人の両足の親指は真黒に変色し、治るのに二ヶ月もかかった。

アクシデント

昨日フィックスした地点まで戻り、我々は初めて隊長と本藤

がクレバスに落ちたことを知った。石橋のセットした四〇メートルのフィックスザイルを回収しながら登っていた隊長が足にからまったザイルをどけようとしたとたんスリップし、ザイルの先端のスノーバーにセルフビレーを取っていた本藤も続いて八〇メートル下のクレバスに落ちてしまったのである。

幸運にも隊長は足首を骨折しただけで、クレバスの底に座り込んでいた。本藤は、背骨を打ったものの、事故直後、クレバスから脱出しビバーク地に戻っていた。

石橋と私は、隊長を引張り上げるべく救出を試みたが失敗、現状での救出は無理と判断し応援を求める為に、本藤と私がBCに下ることにした。

四月二十三日、キッチンボーイに、カトマズ在住の会の先輩、高久氏宛、事故が発生しヘリコプターの出動が必要である旨の手紙を持たせて下らせた。隊長のけがの具合からして、クーロワール内の下降は無理と判断、その為に、事故地点からのヘリコプターによる吊り上げを考えていたのである。しかし、二十六日ヘリコプターはやってきたが、ネパール軍隊のパイロットと同乗して来た同会の坂下氏の説明では、ヘリによる救出は不可能とのこと、なんとしても自力でクーロワールを下りてもらわなければならなくなった。

一方、クレバスの底にいた隊長は、二十三日石橋の助けを借り、四時間がかりで外に出ることに成功していた。救援に向かっていたドクターとサーダーも二十六日夜、彼らと合流、ドクターはさっそく治療に当たった。骨折の箇所は、カートンボックスで作った副木で固定された。

四月二十七日、隊長はBCに帰って来た。顔はやつれ、声も出ない隊長であったが、その顔はこの一週間苦しさ耐え、あのクーロワールを下ることのできた精神力と体力の強さを物語っていた。

四月二十八日、隊長、本藤、私は、ヘリコプターでBCを後にし、一時間後には、カトマンズの暑い空気に触れていた。

〈記録概要〉

隊の名称　山学同志会カンテガ北壁登山隊

活動期間　一九七九年三月二九日～五月二日

目　的　北壁クーロワールからの登頂

隊の構成　隊長＝湯田一男（30）、隊員＝石橋真（26）、本藤平康（25）、竹内孝一（24）、医師＝丸山洋（30）

行動概要　三月二十九日ルクラよりキャラバン開始。四月十日、五三〇〇メートルにBC設置。四月十三日、北壁内院にC1設置。三日間ルート工作を行なう。四月二十日、C1よりビバーク道具を持ちアタックに向かい、一ビバークの末、石橋、竹内が登頂した。

ニルギリ中央峰（一九七九年春）

青木正樹

はじめに

私たち「松山商科大学ネパール・ヒマラヤ学術登山隊一九七九年」のニルギリ中央峰登山については、この隊の直接の母体である松山商科大学山岳会の池田悟会長が、計画書の趣意として書いた次の一節がすべてをつくしているように、少なくとも私には思われる。

「地方大学の山岳会にとって、ヒマラヤやカラコルムは永い間、遠い憧れでしたが、この度のヒマラヤ行は、憧れを現実にひきよせるべく脈々と蓄積された経験と、いつかは必ずという執念にも似た登山意欲が、結実したものといえます」

つまり私たちにとっては、要は、ネパールでもインドでもパキスタンでも、とにかく広義のヒマラヤ山脈のいずれかの峰に、松山商科大学として登山隊を送り出すことが、まずは先決であって、目指す山がニルギリ中央峰であるか否かは、どちらかというと、どうでもよいことだったのである。

このようなことを書くと、なんとまあ大時代的なことを、と思われるかもしれない。しかし四国といういわば日本の辺境に身をおく私たちにとっては、それは大時代的でもなんでもなく、まさに現実であった。すなわち四国で初めてまとまった形のヒマラヤ登山隊が組織されたのは、ようやく四年ほど前に高知県山岳連盟を母体にしたネパール・ヒマラヤのラムジュン・ヒマール隊が嚆矢であったのである。この事実から、いくらかは理解いただけるかもしれない。

もちろんこうした事実は、登山のいわゆる実力といったものとは、それほど関係はない。日本アルプスに出かけるのにさえ、海を渡って遠征しなくてはならないという情勢は、今も昔も変わらないとしても、登山技術の習得といった面では、現在

では、地方というハンディキャップはほとんどないからである。しかし、いざ海外登山隊を組織しようとすると、地方であるが故の様々な制約がとたんに顔を出してくる。

第一に、メンバーがなかなかそろわない。すぐれた登り手には、中央志向的な傾向が、どうしても出てくるからだ。たとえエヴェレストとかK2とかを目指す大登山隊の驥尾に付するなどというような発想からではないにしても、なんらかの形で本州と関わりがあった方が、海外へ行ける機会は多い、とは誰しもが考えることだ。

第二には、当然のことながら金と暇の問題がある。個人負担金にしろ寄付金にしろ、地方は中央に比しては金に縁が薄いし、二箇月も三箇月もかけてヒマラヤまで物見遊山に行けるような良い御身分の人種となると、そのような人種の存在を考えることすら、四国的な発想では難しいのである。

人と山と

そうした一般的な情勢のなかで、幸か不幸か、私たち松山商科大学山岳会をめぐるここ一、二年の情況は、ヒマラヤを現実にひきよせようとしても、おかしくないような雰囲気となってきていた。個人的な欲求には目をつむって、松山商大山岳会と心中してくれそうなOBが、何人かはそろってきたのである。

しかしそれでも、最終的なメンバーが決るまでには、金と暇の問題もからみ、様々に紆余曲折があった。幸い金の面では、私たちが標榜した大義名分のおかげかどうか、大学や同窓会の後援を得ることができ、思いもかけない多方面、多くの方々から賛助を受け、個人負担金を大幅に軽減することができた。

しかし、暇の問題となると、ことは容易ではなかった。最終的なメンバーは、山岳部長でもある教員一名、学生二名、OB三名、医師一名ということで、どうにか行かせてもらった教員はともかくとして、OBのうち二名は会社勤めをやめた。医師もまた一流病院を袖にして、同行してくれたのであった。

以上のような次第であるから、私たちの場合は人がそろいそうだから山のことでも考えようか、といったところが実情だったのである。まさに、目指す山がニルギリ中央峰であろうとなかろうと、それは、どうでもよいことなのであった。とは言うものの、対象を選ぶ上での条件はあった。

そう度々足を運べるヒマラヤではないのであるから、できればメンバー全員で頂上に立ちたいのが、人情というものである。一人か二人が頂上に立つために他は縁の下の支えといったような山行なら、やらない方がまし、という訳だ。ただ、私たちの隊はその構成の経緯上、メンバーの年齢も、実質的な登攀能力も千差万別であった。文字通り高嶺の花である八〇〇〇メートル級の大物はともかくとしても、心からの満足感を得られるようなヴァリエイションも、ちょっと手が出にくい。かとい

って、トレッキング許可で登れるような山で[註]、なんとなく面子がたたないような気がする。

ニルギリ中央峰は、そうした前提をもとにあれこれと物色し、あれこれと申請してはふられたあげく、最後に許可になった山であった。したがって、許可を取得した一九七八年九月の時点での私たちのこの山に関する知識は、極めて一般的なものでしかなかった。

ニルギル南峰を目指していた信州大学隊の初登頂成功のニュースを知ったのは、その直後のことである。私たちは早速信州へと遠征し、ニルギリ東面の状況について教示を受けたり、写真やルート図を提供していただいたりした。こうして得られた情報が、いかに私たちの行動の支えとなってくれたことか、あらためて謝意を表させていただきたく思う。

目的と登り方

ニルギリ連峰はほぼ南北に峰を連ねている。したがって中央峰を目指すのに、北面から北峰経由で、あるいは南面からは南峰を越えたりすることも考えられる。しかし私たちは信大隊と同様に東面からの接近に的をしぼった。カリ・ガンダキ側の西面も、難しさの追求という点では魅力はあるが、まずは中央峰の初登頂、そしてできることなら全員登頂を、前提として、この西面は敬遠することにした。

登り方も、隊の構成メンバー、およびその目的からおよそは決まる。若い連中にはいささか気の毒ではあるが、今はやりのアルパイン・スタイルとか、シェルパレスとかも見送らざるをえない。なにしろ私たちの隊は、七名から成っているものの、一名は医師であり、一名は休暇の都合でキャラヴァン中だけの同行ということになっていた。結局、実働メンバーは五名ということになるが、うち一名は四十も半ばのロートルであり、若手OB二名、学生二名を主力に、なおかつ実働メンバー全員が登頂するには、三名ほどのシェルパの力を借り、いわゆる極地法で、固定綱も駆使する登り方にならざるをえなかった。

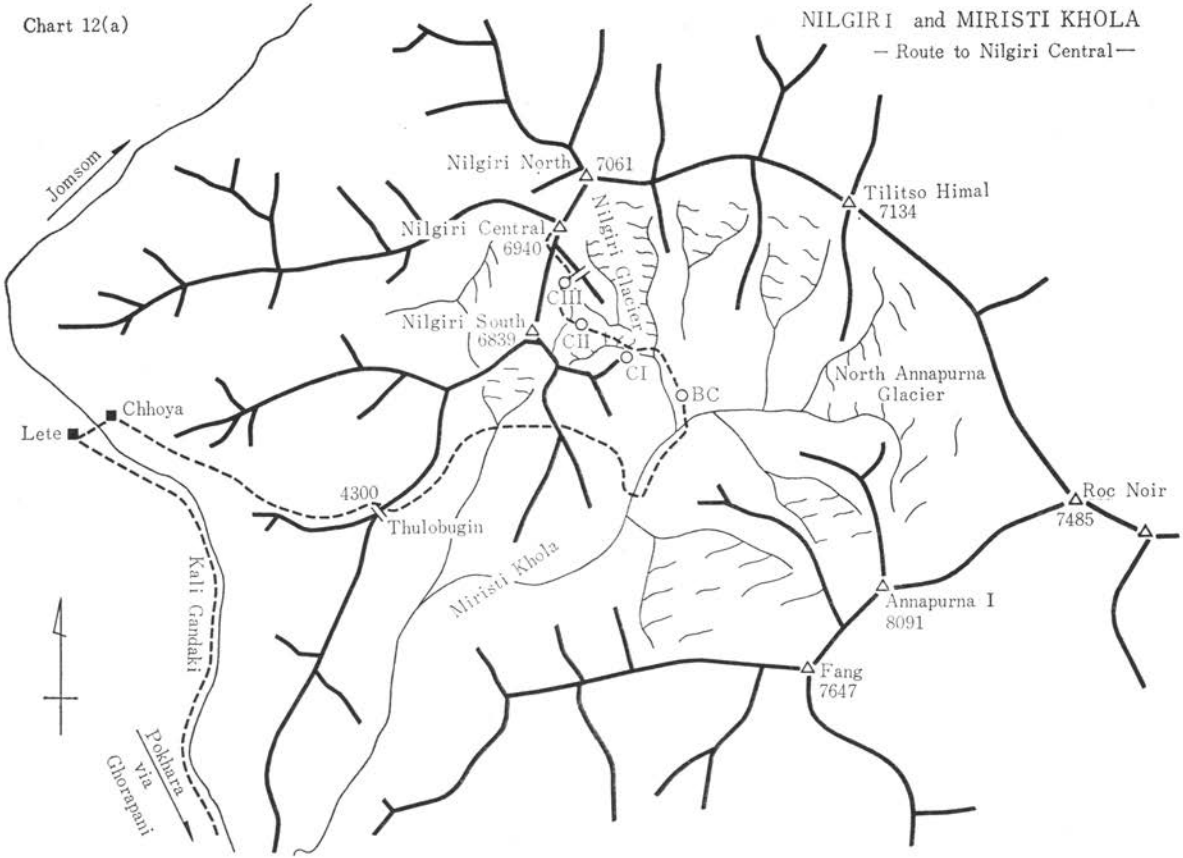
ルートもまた、主稜線直下の大雪田までは信州大学隊のそれを踏襲することにした。ニルギリ連峰の東面は、アンナプルナの北面とともに、カリ・ガンダキの一大支流ミリスティ・コーラ源頭の一部を構成しているが、ニルギリ連峰直下のニルギリ氷河は、中央峰のやや南から落ちる南東稜によって、二股に分けられている。信州大学隊はこの南東稜の左手のいわば左俣にあたる氷河を登って上部の大雪田に出た。

この雪田は中央峰と南峰とのちょうど中間に位置し、西に大きくふくらんだ主稜線と、中央峰の南東稜と南峰の東稜とによって、東に開いた馬蹄形状に三方を囲まれている。信州大学隊はこの雪田から南峰の東稜に向かったが、私たちはそこから中央峰の南東稜に向かうことになる。信州大学隊は東稜上の六二

Chart 12(a)

NILGIRI and MIRISTI KHOLA

— Route to Nilgiri Central —



五〇メートル地点に最終のC3を設けているが、私たちも南東稜上のほぼ同高度のところに見られる顕著なコルにC3を設けることになろう。

信州大学隊から得られた情報等によって、私たちが想定したニルギリ中央峰の登り方は、以上のようなものであったが、実際にはおよそ次のような問題があった。

問題点とその決着

第一に、目指す東面のミリスティ・コーラ源頭に達するために越えなくてはならない、悪名高きトゥロブギン乗越があった。標高四三〇〇メートルのこの乗越の前後の斜面は雪が付くと悪く、信州大学隊もポーターのストライキに悩まされた。私たちとしては、春の訪れの早からんことを神に祈るのみであった。

だが、一週間近いキャラヴァンの後、三月二十九日にチョヤの部落にたどり着いた私たちを待ち受けていたのは、雪で真白になったトゥロブギン乗越へと続く斜面であった。充分な数のポーターを確保することは、絶望的であった。何日か前に発生した滑落死亡事故も、ポーターたちの尻込みをさらに輪をかけたものにしていた。

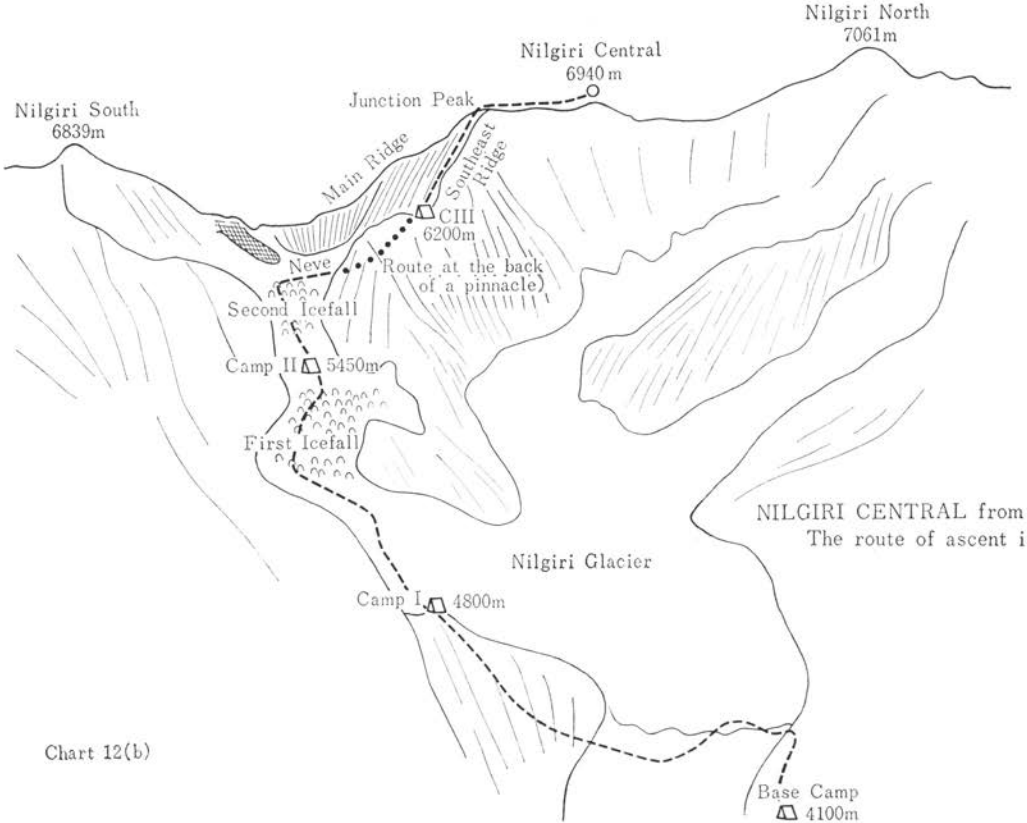
結局私たちは、辛うじて得られた数名のポーターを頼りに、隊員三名とシェルパ等をトゥロブギン越えで先発させて、ベースキャンプ予定地を探らせ、残りの隊荷とメンバーとは、費用の点には目をつむって、ヘリコプターに頼ることにしたのであった。

第二に、BCはニルギリ氷河の左岸台地に設ける予定であったが、それゆえに氷河に入り込むためにはニルギリ氷河を横断せねばならなかった。

氷河の末端を、上部に乱立するセラックやブロックの崩壊、あるいはティリッォ・ヒマール側からの雪崩やルート・ファインディングに気をつかいながら、結構ながながと横断することは、かなり神経にこたえたが、よくしたもので、通り易そうなところは自ずと決まってくるらしく、氷のルンゼに半分氷漬けとなった固定ロープを発見したりした。

C1は、こうしたニルギリ氷河の横断の後、四月十日に設けられた。BCからの標高差は七〇〇メートルあまりだが、氷河までの登降があるので実際の登降差はもっと大きく、距離もかなりあるため、シェルパ連中は露骨にイヤな顔をし、C1への荷上げは十五キロ以内にしてくれとゴネたことであった。

第三に、そして、これこそが登頂の成否の鍵をにぎっていると思われたのが、当の支氷河を構成している上下二段のアイスフォール帯であった。セラックやアイスビルディングが林立し、クレヴァスがやたら口を開けたこのアイスフォールの突破には、信州大学隊も大分手をやいたらしく、提供された克明な



NILGIRI CENTRAL from South-east
The route of ascent is marked

Chart 12(b)

ルート図からも、その苦闘の様がしのばれた。

とりわけ、下部のアイスフォールがいやらしく、通過不能のクレヴァスや、荷上げには不適当なアイスビルディングに阻まれて、右往左往させられた。おまけに、ブロック雪崩を懸念しながらも、背に腹は変えられないと、技術的な容易さから最終的に採用した南峰寄りのルートでは、案の上シェルパたちがブロックの崩壊に襲われた。被害が軽い打撲傷程度ですんだのは不幸中の幸いであったが、精神的なショックは予想外で、事故の発生した四月二十四日以後五月四日のC1撤収まで、シェルパたちがC1以上に登ることはなかった。

第四には、上部の大雪田より南東稜に取り付いてからの稜の状態が気がかりであった。ドカ雪にでも見舞われた場合には、動きがとれなくなる恐れも多分にあったのである。

私たちの行動中の天気は、午後になるとほとんど決まって悪化し、定期便のように雷鳴が轟き、降雪をみたが、ありがたいことに翌朝はたいてい青空の下に朝日が顔をのぞかせ、懸念されたドカ雪に見舞われることはなかった。

しかし稜そのものは、傾斜はそれほどきつくはないものの右手はスッパリと切れ落ち、リッジは氷の上に雪塊が付着したような状態で不安定極まりないものであった。ルートは勢い左手の斜面をたどるようなことになるが、その斜面も氷の部分が支配的で予想外に悪く、果たしてC3に上げただけの装備でルート工作が完了できるかどうか一時は不安になった。結局のところ、私たちは最後までツキに恵まれていたのであろう。九ピッチほどのロープを固定し、装備の類がほとんど底をつきかけた頃から、稜の傾斜はゆるやかになり、後は幅の広い雪面が主稜線とのジャンクション・ピークを越えて、頂上まで続いているだけであった。

おわりに

山が山、メンバーがメンバーなので、ごくありきたりのものとなったが、最後にいわゆるタクティクス的な面について一、二触れておくと、C1（四八〇〇メートル）の設営およびC2（五四五〇メートル）への偵察とルート工作は、専ら高度順応のための行動とし、その間はできるだけBC（四一〇〇メートル）まで下ることを原則とした。

またC3（六二〇〇メートル）から頂上（六九四〇メートル）へのアタックは万全を期して二パーティにわかれ、第一隊は最小限の携行装備で登頂に専念し、第二隊の三名は支援隊として一応の露営用具を携行して後続し、できたらそのまま頂上も目指すことにした。

結果、第一隊はその日のうちに頂上を踏んでC3に戻ったものの、第二隊のC3帰着は翌々日のこととなったが、実働メンバー全員の登頂という念願は、達成することができた。

△記録概要▽

隊の名称　松山商科大学ネパール・ヒマラヤ学術登山隊一九七九年

活動期間　一九七九年三月～五月

目　的　ニルギリ中央峰（六九四〇メートル）の初登頂（南東稜より）

隊の構成　隊長＝青木正樹（44）、隊員＝重松圭三（37）、柚山潤一（29）、坂田興一（28）、浜田俊郎（23）、津田泰男（22）、医師＝板野徹（28）、リエゾン・オフィサー＝M・P・アディカリ（39）、サーダー＝ツェリン・フィンゾー（26）、シェルパ＝アン・ババ（42）、アン・ツェリン（27）、ベースキャンプ要員＝ミンマ・ドルジェ（23）他七名

行動概要　三月二十三日ポカラ発。二十九日チョヤ着。四月四日ニルギリ氷河左岸台地にBC（四一〇〇メートル）設営。十日ニルギリ氷河左俣下部平担部にC1（四八〇〇メートル）設営。下部アイスフォールに手こずらされたが二十日左俣氷河のど真中にC2（五四五〇メートル）設営。上部アイスフォールは比較的順調に登り、主稜線直下の大雪田から南東稜上の顕著なコルに出て二十五日C3（六二〇〇メートル）設営。三十日、二パーティにわかれて頂上アタック、第一隊の坂田、津田は登頂後C3に戻り、第二隊の青木、柚山、浜田はジャンクション・ピーク直下で幕営、五月一日登頂、二日C3に戻る。四日BC帰着。

ガネッシュ・ヒマール（一九七九年秋）

——Ⅱ峰・ラプサン・カルボの登頂——

小倉英郎

ガネッシュ・ヒマール——この山群の名が私達の間で語られ始めたのは、今から八年以上も前のことであった。ネパール・ヒマラヤの山なみの中から特にこの山群に目を付けた理由は、当時、この山群が未解禁であり、しかも、近々、解禁されるといううわさが流れていた事による。この山群中の一峰、ガネッシュⅣ峰は、よく晴れた日にはカトマンズ市内からでも確認できるほど近い距離にあるが、一九五五年のスイス・フランス合同隊のⅠ峰登頂以後、同山域の入山が禁止されたという事情が、この山群を神秘的なものとしていたのである。

当時、Ⅰ峰を除く全ての山が未踏峰であったが、Ⅱ峰（ラプサン・カルボ、七一五〇メートル）を目標の山に選んだのは、この山がこの山群の未踏峰では一番高い山であったという単純な理由によるもので、実際、私達の力で登れるかどうかという事は余り考えていなかった——というより、判断すべき材料を持っていなかったという方が正しいであろう。私達が入手できたこの山の写真といえば、ゴザインクンド付近からの東西の写真か、アンク・コーラからの南面のものだけであった。

一九五四年の日本山岳会隊の北面からの写真にラプサン・カルボらしき山を認めることはできたが、私の眼には北面～西面のガネッシュ山群は一様に逆層の登り難い山に写った。いずれの写真も、ルートを検討するには少々遠過ぎるものばかりだったが、『岳人』に掲載された五百沢智也氏のガネッシュ・ヒマールのスケッチとその解説は、唯一、私達を勇気づけてくれた資料であった。しかし、当然のことながら、五百沢氏のスケッチにもチベット側からのものはなく、いきおい私達の目は東面～南面に集中することとなった。そして、このことが、あとになって私達に大変な試行錯誤を強いることになるのである。

一九七三年プレ、当時現役部員であった北原、川口と共に、

私はラプサン・カルボの偵察に出かけることになった。私達三名の任務は、登攀そのものの可能性を探ることのみならず、解禁の見通しをもつかんでくることであった。未解禁峰を試登すること自体、現在では許されないことであるが、当時はネパール政府もこの種の隠密行動を黙認してくれた良き時代であった。それどころか、あわよくば許可の内諾を得てこようとさえ、私達は考えていたのである。何ら政治的手腕もなく、一片の紹介状も持たぬ私達であったが、一九七〇年日本山岳会東海支部隊の、マカルー解禁に至る精力的活動の経緯に強く刺激されていたということもあった。

処女峰との出合い

四月二十一日、北原と私はラプサン・カルボのサンジェ側側壁を登っていた。その日、四七〇〇メートルのBCを出発した私達は、下部セラック帯を突破し、クレバス帯を抜け、上部の広大な急斜面へ出たのであった。どこまで登るというあてはなかったが、二人の心の中には〝Ⅱ・Ⅴ峰間のコルまで〟という暗黙の了解があった。そこに展開されるラプサン・カルボの勇姿をつぶさに観察することにより、私達はささやかな満足感を得ようと思っていたのである。

しかし、限られた日数しかなかった私達は、殆んど高度順応らしい順応もできないままに登っていたので、登攀は信じられないほど遅々として、苦痛に満ちたものであった。深い雪の中を二〇歩歩いては立ち止まり、二〇回粗い呼吸をして休むといった状態であった。

タイム・リミットはとうに過ぎてしまった。コルに到達する見込みは、もはや全くなかった。トップでラッセルをしていた私は疲れ果てて、北原と交代した。彼は気力だけで歩いている。私はザイルに結ばれたまま彼のあとに従った。

登っては休むという行為を何度繰返したであろうか、突然、彼が立ち止まった。私達の頭上には見覚えのある巨大なセラックスが張り出していた。私はここがコル直下、約二〇〇メートルの地点である事を知った。高度差二〇〇メートルは今の私達には絶望的な数字であった。高度計の針は六一〇〇メートルを示していた。それが最高到達高度であった。決して高いとは言えないが、私達は今まで誰も来たことのない所まで登って来たのだ……。

不充分な高度順応のまま高度差一四〇〇メートルを一気に登降したことは無謀と言われても仕方のない行動であったが、ヒマラヤ初見参の私達の力量はその程度のものだった。カトマンズに戻った私達は、外務省に日参したが、やはりガネッシュ解禁の見通しは全く立たなかった。私達はある種の充実感と一抹の失望を胸に帰国した。

再びサンジェ氷河へ

岡山大学山岳会は、一九七五年にネパールへ遠征隊を派遣することをすでに決定していた。従って、目標の山はダウラギリV峰に変更され、私達は首尾よくこの山の初登頂に成功した。しかし、遠征準備、実行の期間を通じて、私達三人の胸の片隅にはラプサン・カルボへのほのかな思いが存在し続けた。そして、その思いを遂げるチャンスは意外に早く訪ずれた。

一九七七年八月、ガネッシュ・ヒマール解禁の報が私達の所へ届けられ、七九年秋にネパールとの合同隊を組んだ私達の隊に同峰の許可が下りたのである。

私達の隊は、大森武生（42）隊長以下、小倉英郎（33）、北原孝（29）、前田光康（23）、江口真二（22）、横尾信（21）、ネパール例隊員＝ペンバ・チェリン（36、ターメ）、ミンマ・テンジン（23、ターメ）、黒田治久（27、カトマンズまで、先発隊員）で構成された。

私達がガネッシュ・ヒマールの内院、サンジェ氷河へ到着したのは、一九七九年の九月十二日であった。六年前、もう二度と来ることはないかもしれないと思った山へ、私達は再びやって来たのだ。

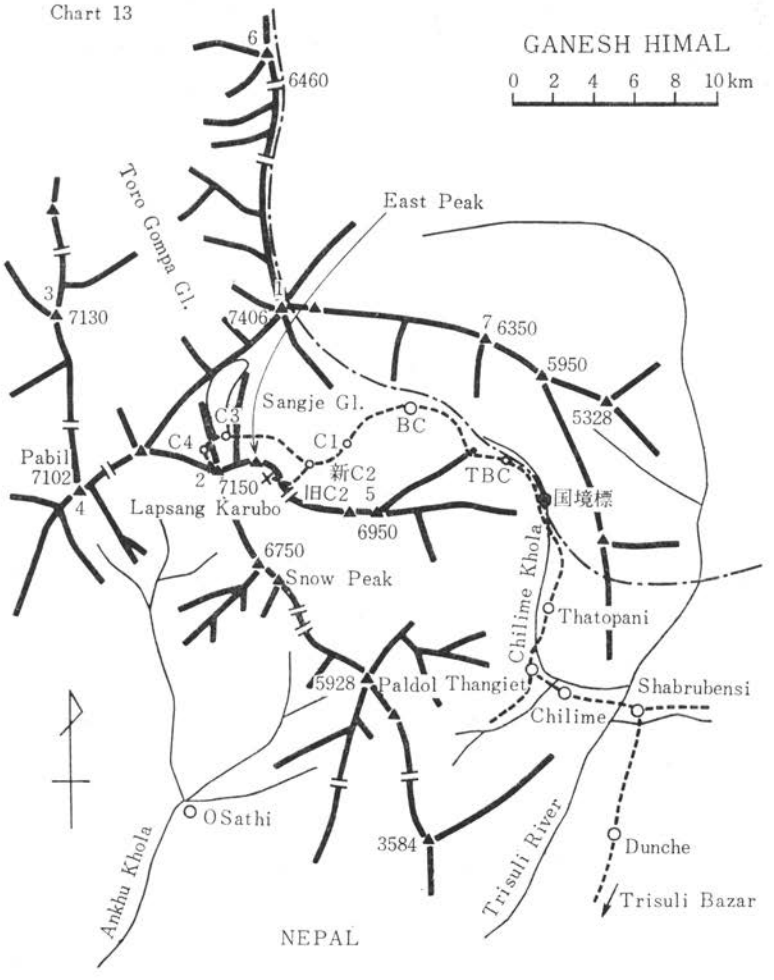
登攀活動開始

BCはサンジェ氷河源頭、四七〇〇メートルに建設された。眼前には目標の山、ラプサン・カルボが威圧的にそびえ立ち、左手前方にはV峰がそのグロテスクな山容を見せていた。そして、右手頭上から主峰が堂々たる貫禄でサンジェ氷河上に横たわり、後方は美しいヒマラヤひだで装われたVII峰によってさえぎられていた。それは中国領の山とは信じられないほど近い存在だった。

予定ルートの南東稜に取付くためには、まずII・V峰間のコルにかかる氷河を登らねばならない。七三年のプレは比較的簡単に登れたのであったが、ポストの今は大きなクレバスにより氷河は寸断され、一癖も二癖もあるルートに変貌していた。ここで私達は予想外のフィックス工作を強いられ、実に十日間の日数と二〇〇〇メートルの固定ロープを消費してしまった。

二十四日、氷河上のルート工作もいよいよ大詰めとなった。今日は何としてもC2予定地のコルへ達したい。上部セラック帯を抜けるとあとはコル直下の広大な段状の斜面だけとなった。約三時間、足元とコルだけを見ながらの懸命のラッセルを続け、一四時三五分、待望のコルに到着した。高度は六三〇〇メートルだった。西側は二〇メートル程度の氷のリッジによってさえぎられており、チリメ・コーラの左俣を見下ろすことはできなかったが、コルそのものは設営に好適な雪原となっていた。

Chart 13



Route for Lapsang Karubo by Okayama University Expoclition 1979

ところで頂上は？　南東稜は？　頭上に続く南東稜を見上げたとき、私は驚きを禁じ得なかった。それは私達が南面からの望遠写真で検討してきたものとはあまりにもかけ離れていた。南東稜は予想以上に長大で、コの字型に曲がって頂上へ続いていた。そして、岩と氷のミックスされた急峻なナイフ・エッジの上には登攀不可能を思わせるキノコ型の氷塔が数個乱立していた。これは遠過ぎると、私は思った。

二十六日、コル上にC2が建設され、南東稜のルート工作が始まった。最初、稜線上にルートを伸ばすが、早くも登攀困難な岩峰にさえぎられ、下降。試行錯誤を繰返しながら、結局、サンジェ側岩壁にルートを開拓していった。どの程度のスピードでルートが伸びるかということが問題で、十月中にルート工作を完了する必要があった。

南東稜ルート断念

三十日、稜線に達し、翌十月一日、稜線上のルート工作を開始した。先発のペンバ・チェリンとアン・ペンバの二人がクレバスのある稜線を登っていった。ここからいよいよナイフ・エッジとなる。上部稜線は左側へ雪庇の出た危なっかしいナイフ・エッジ、ブロックの崩壊でかぶりぎみとなった雪壁、一〇〇メートル程度の岩壁と続いて、さらに左に大きくカーブしてノコギリ状のスカイラインが頂上へ向かってのびていた。黒々としたラプサン・カルボ南壁は荒々しいその全貌をむきだしにして、私達の頭上を圧していた。

ここでトップを代わった私は、リッジの内部がブレイカブルで稜線に立つことができないので、やむなく、ピッケルで雪庇を叩き落しながら進んだ。何回目かの一撃で数十キロはあろうと思われる氷塊が、音もなく左側のガスの中へ消えていった。私はこのまま前進を続けるべきかどうか迷った。いつの間にか、左側から湧き上がってきた灰色のガスが南東稜全体を包み込んでしまい、危険な登攀をつづけるにはあまりふさわしくない状況になってしまった。

予想はしていたものの、余りにも早い挫折であった。一目散に下ってしまったシェルパ達のあとを私は一人、よろよろと下り始めた。南面は絶望的だと思いながら。

登頂ルートを求めて

十月三日、協議のうえ北東面の可能性を探ることに決定した。四日、南東稜の固定ロープを撤収、C2を六一〇〇メートルに降ろした。

北東壁は、高度差約一〇〇〇メートルの一大氷壁であり、サンジェ側から見上げたラプサン・カルボの山容そのものを形成している。無数に刻み込まれたヒマラヤひだと、所々に露出した鋼鉄のような岩壁が、いやが上にも挑戦的な印象を見る者に

与える。

私達が第二案として考えていたルートは、この北東壁の右端へあばら骨のように食い込む一本の急峻なリッジ（北東稜）であった。ただ、このリッジのつき上げている主稜線（南東稜）上には雪庇が張り出しており、これを突破してスカイラインに立つのは相当のアルバイトになることが予想された。しかし、北東稜の上部、北側には三角形のプラトーが見えており、ここにC3を作れば、上部ルートの偵察基地としては好都合と思われた。頂上はもう少し奥にあるという予想が私達にはあったが、BCから見上げてそれがどこにあるのかわからなかったのである。

しかし、ともかく北東壁直下の大トラバースを敢行した私達は、八日、北東稜に取り付いた。稜線上は雪がブロック状に連続しているため、左側のヒマラヤひだの中をルートに選んだが、堅雪、氷、岩のミックスで極めて快適であった。二日間のルート工作で高度差三〇〇メートル、一五ピッチを消化し、プラトーに達した。

十三日、C3（六三〇〇メートル）を建設。翌日より、北原、横尾がトップを切って上部へのルート工作を開始した。しかし、C3からの観察でも、頂上がどこにあるか確信が持てなかった。ラプサン・カルボ北面からガネッシュI峰に続く稜線上には、氷河台地や二重山稜が形成され、その複雑な地形は登頂ルートの決定を極めて困難なものにしていた。

十四日、上部の偵察から戻った北原よりの報告がはいった。「本日、C3上部の谷に登り、ラプサン・カルボ東峰からの稜線を観察した。この稜線の形は南面からの南東稜のスケッチに酷似している」と。いつになくうわずった彼の声が何よりもこの重大性を物語っていた。同じ稜線を裏と表から見ることによって、私達は始めて、オリエンテーションがついたのである。そうすると谷の右側の稜線（北稜）に取付けばよい。無論、この稜線の頭が頂上であるという保証はないが、いずれにせよ登頂ルートは決定された。

十六日、北原隊のあとを受けて、私と江口、ペンバ・チェリンの三名で北稜のサンジェ側側壁にルート工作を行なった。五〇～六〇度の雪壁を四ピッチ登ると、完全な氷となる。傾斜七〇度以上と思われる氷壁を二ピッチ直登、懸垂氷河に頭上を押さえられ、左へトラバース、そして再び直登二ピッチで稜線へ出た。やはり、頂上への道になることはほぼ確実のように思えた。

初登頂成る

十八日、私とチェリン、ダワの三名で北稜上、六九〇〇メートルの雪壁にC4を建設した。氷を削りとって作られた二畳にも満たない小さなスペース一杯にテントを張った。やがて夜の

とばりが降り始め、はるか彼方にBCの灯が小さく、チカチカと見え始めた。満天の星である。高度七〇〇〇メートルの冷え込みはさすがに厳しく、寝袋にもぐり込んでも背中から寒さがゾクゾクと上がってくる。時折、聞こえるカリカリ、バキバキという氷河の割れる音を背中に感じながら、浅い睡眠をむさぼった。

翌十九日は全くの快晴だった。今日はルート工作の予定である。八時三〇分出発。C4からいきなり傾斜七〇度の雪壁を登ることになる。堅雪にアイゼンの出歯を蹴り込み、ダブル・アックスで快適に登る。ザイルが四〇メートル一杯に伸びると、急に傾斜が落ちた。もうあまり困難な所はなかった。時折出くわすヒドン・クレバスにだけ注意していればよかった。

小一時間も登ると、右側に屏風のようにそそり立った山が見えてきた。私は直感的に、この山はガネッシュⅣ峰であると確信した。左側には東峰からリッジがせり上がってきている。頂上は意外に近い、と私は心の中で思った。持参した二〇〇メートルの固定ロープは使い果してしまったが、もうここからは必要なかった。

ほんの一〇〇メートルも登ると、頂上につづくらしい斜面が視界一杯に迫ってきた。先行していたチェリンとダワが二〇メートルほど上へ駆け上がり、突然、手を振った。

「サミット！　サミット！」

二人は子供のように無邪気にはしゃいでいる。時計は十一時九分を指していた。あっけない幕切れであった。

「サーブ、旗は持って来たか？」

日ネ両国旗と岡山大学旗をザックの中から取り出すと、彼らは躍り上がらんばかりに喜んだ。今日はルート工作だと言っていたので旗は持っていないと思っていたのだろう。

頂上は幅五～六メートル、長さは二〇メートルほどあり、端から端まで歩かねば周囲を見下ろすことはできなかった。東の端に立つと、極めて急峻なナイフ・リッジが東峰に続いているのが見えた。そして、それは東峰から急激に高度を下げながら、V峰とのコルへ続いていた。その稜線上には雪庇の張り出した小ピークが連続していた。それが南東稜の全貌であった。もし、この稜線の登攀を続行していたら、十月中に頂上へ達すことは、まず不可能であったろう。

西方にはⅣ峰の頂上がわずかに低く、白い頭をだしている。西稜もやはり相当厳しそうだった。北方にはⅠ峰、Ⅲ峰が並び、はるか彼方にはチベットの山なみが果てしなく広がっていた。私達は確かに頂上に立っていた。

十月二十六日、私達は全員、BCに下った。四十日間、身近に生活してきたガネッシュの山々ともこれでお別れかと思うと、去り難い思いであった。雪稜や氷壁には寒々とした冬が訪

れようとしていた。ラプサン・カルボの稜線には雪煙が舞い上がり、神々しい程美しかった。

△記録概要▽

隊の名称　岡山大学山岳会ネパール合同学術登山隊

活動期間　一九七九年八月～十一月

目　的　ガネッシュ・ヒマールⅡ峰（ラプサン・カルボ）七一五〇メートルの初登頂

隊　員　本文参照

政府連絡官＝バル・カマル・シャキャ（24、ネパール警察）

サーダー＝パサン（38、タクシンド）

ハイ・シェルパ＝ダワ・ノルブ（25、ターメ）、アン・ペンバ（28、ヤワ）、テンディ（23、タクシンド）、ロウ・シェルパ四名、コック一名、キッチン・ボーイ二名、メイル・ランナー二名

行動日誌

8月22日　カトマンズ集結。

29日　トリスリ・バザールよりキャラバン開始。

9月2日　チリメ・コーラ最奥の部落、タトパニ着。

8日　サンジェ氷河右岸にTBC（四五〇〇メートル）建設。

12日　サンジェ氷河源頭にBC（四七〇〇メートル）建設。

14日　登攀活動開始。

16日　C1（五五〇〇メートル）建設。

26日　Ⅱ・V峰間のコルにC2（六三〇〇メートル）を建設。

30日　南東稜ルート断念。

10月4日　C2を六一〇〇メートルに降ろす。

6日　北東壁へ転進。

13日　北東稜北側のプラトーにC3（六三〇〇メートル）を建設。

18日　北稜上にC4（六九〇〇メートル）を建設。

19日　小倉、チェリン、ダワの三名、登頂。

20日　小倉、前田、江口、テンジン、テンディの四名登頂。

21日　北原、横尾の二名登頂。

26日　BC撤収。

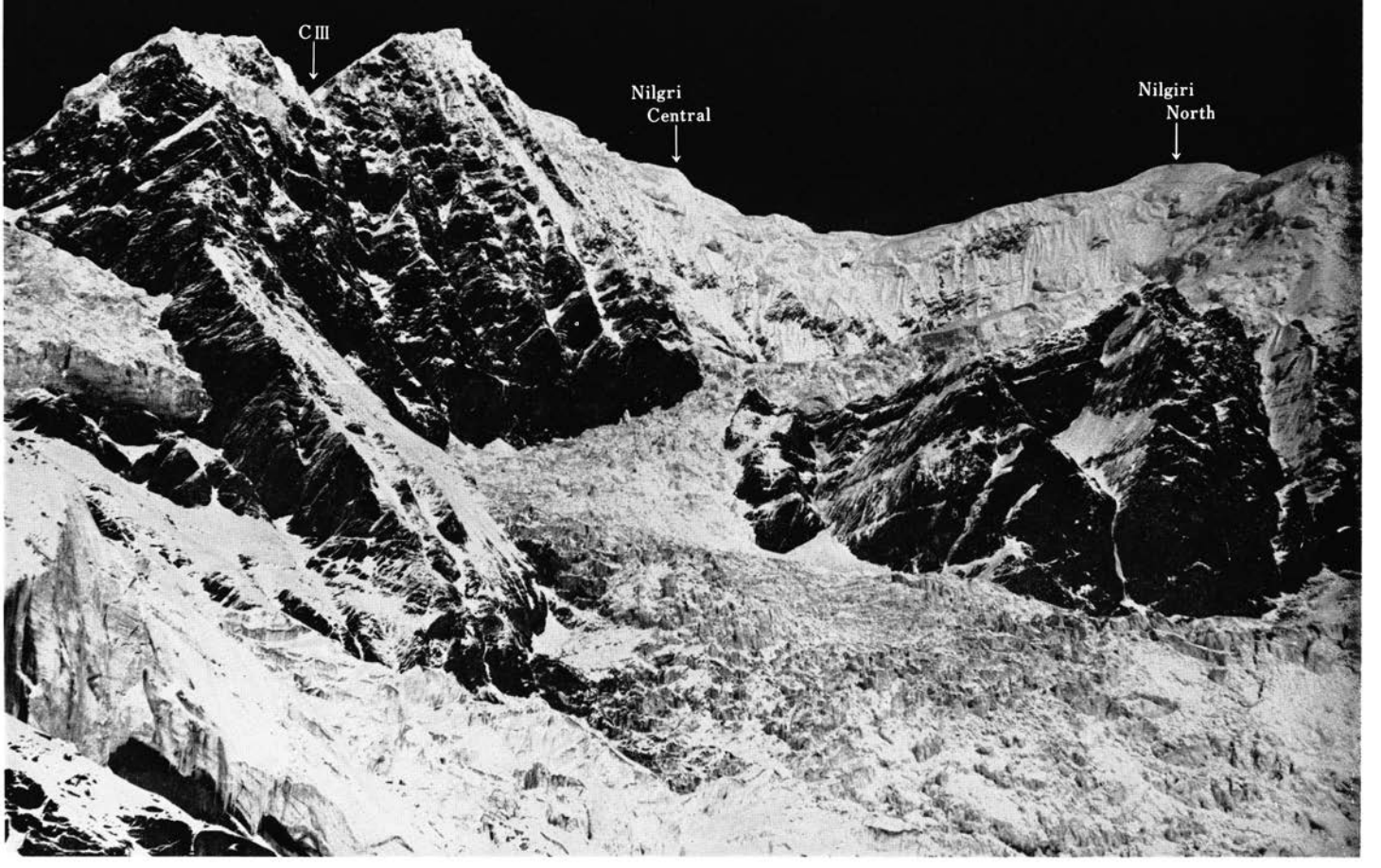


Plate 12-(a)：ニルギリ氷河とニルギリ中央峰（左）及び北峰（右）。

Nilgiri Central and North, Nilgiri Glaciar on the front. (by J. Yuyama)

Plate 12-(b)：
ニルギリ中央峰南東稜。CIIIの上部稜線。
South-east ridge of Nilgiri Central above CIII.

(by J. Yuyama)

Plate 12-(c)：ニルギリ中央峰CII付近より望む，アンナプルナI峰とファング。
Annapurna I and Fang seen from CII on Nilgiri Central.

(by Y. Tsuda)

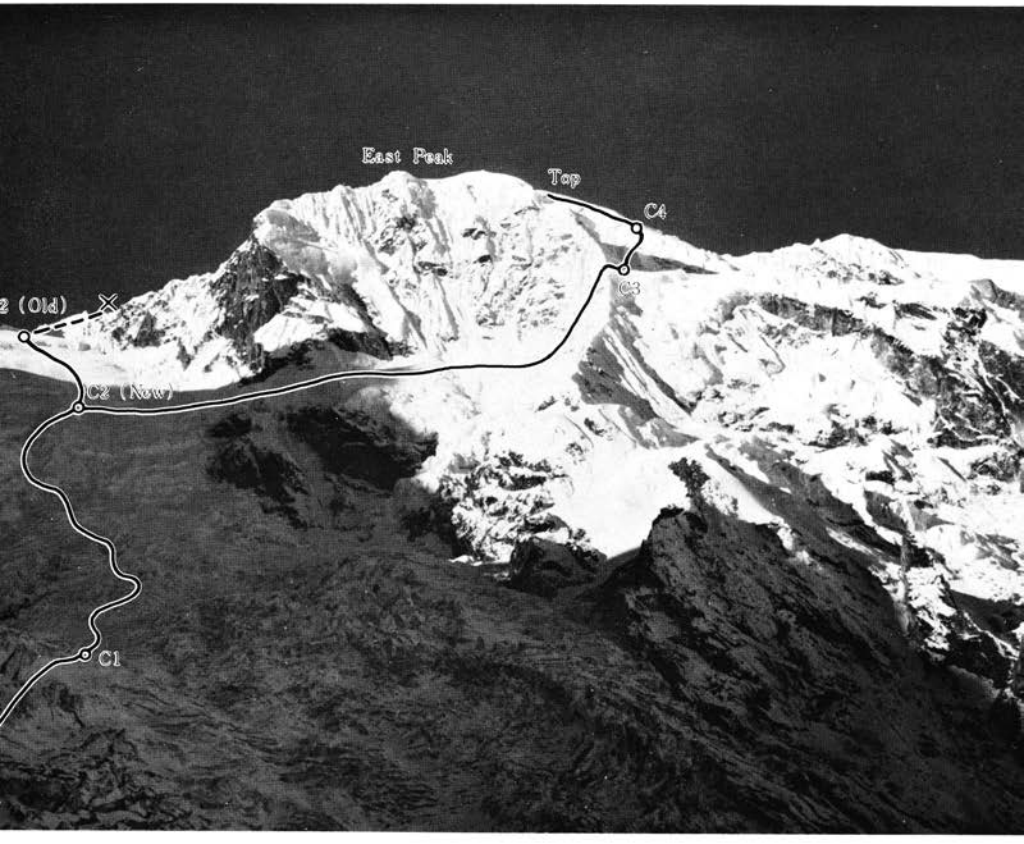


Plate 13-(a)：ガネッシュ・ヒマールII（ラプサン・カルボ，7150m）の東面，登頂ルート。
Ganesh Himal II (Lapsang Karubo, 7150m), climbing route on the east face.

(by H. Ogura)

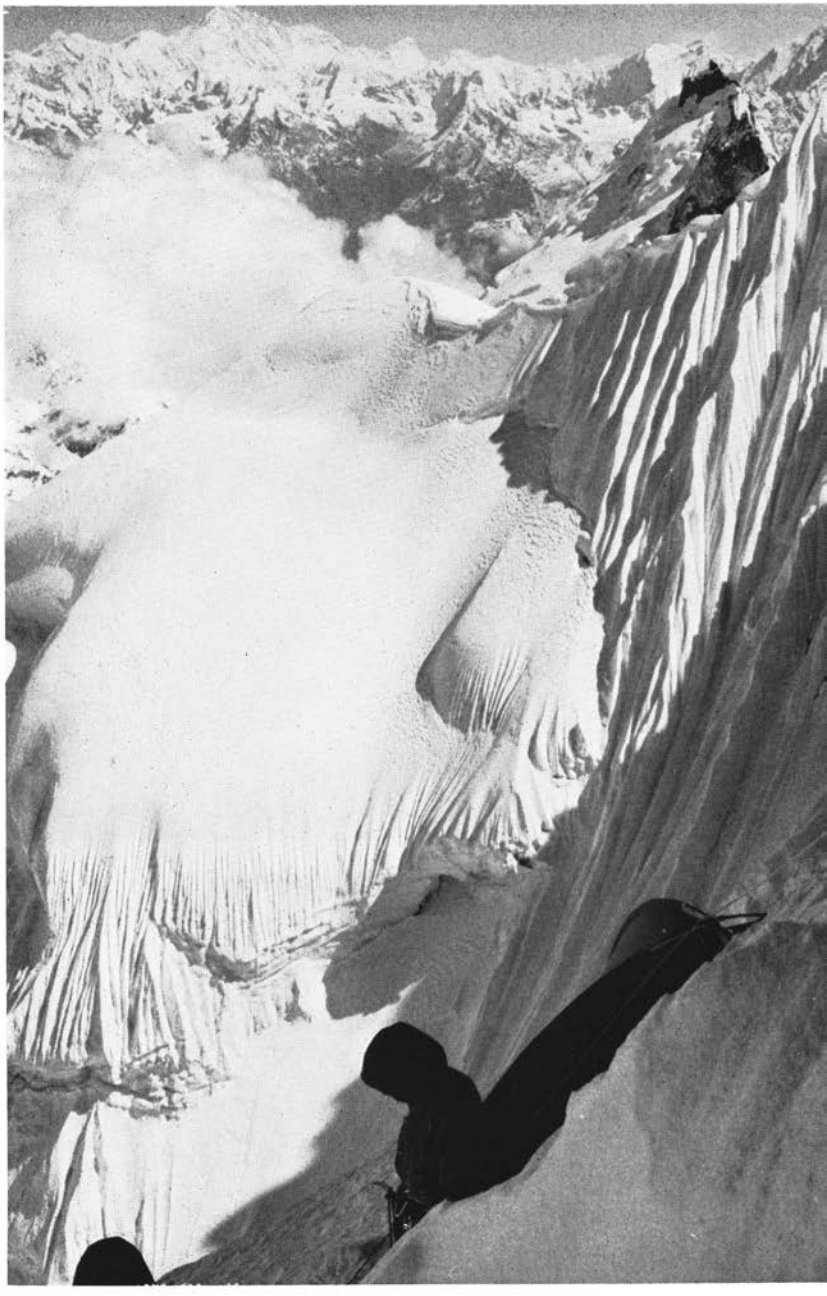


Plate 13-(b)：ガネッシュII北稜上のC4（6900m）。

C4 (6900m) on the North ridge of Ganesh II.

(by H. Ogura)

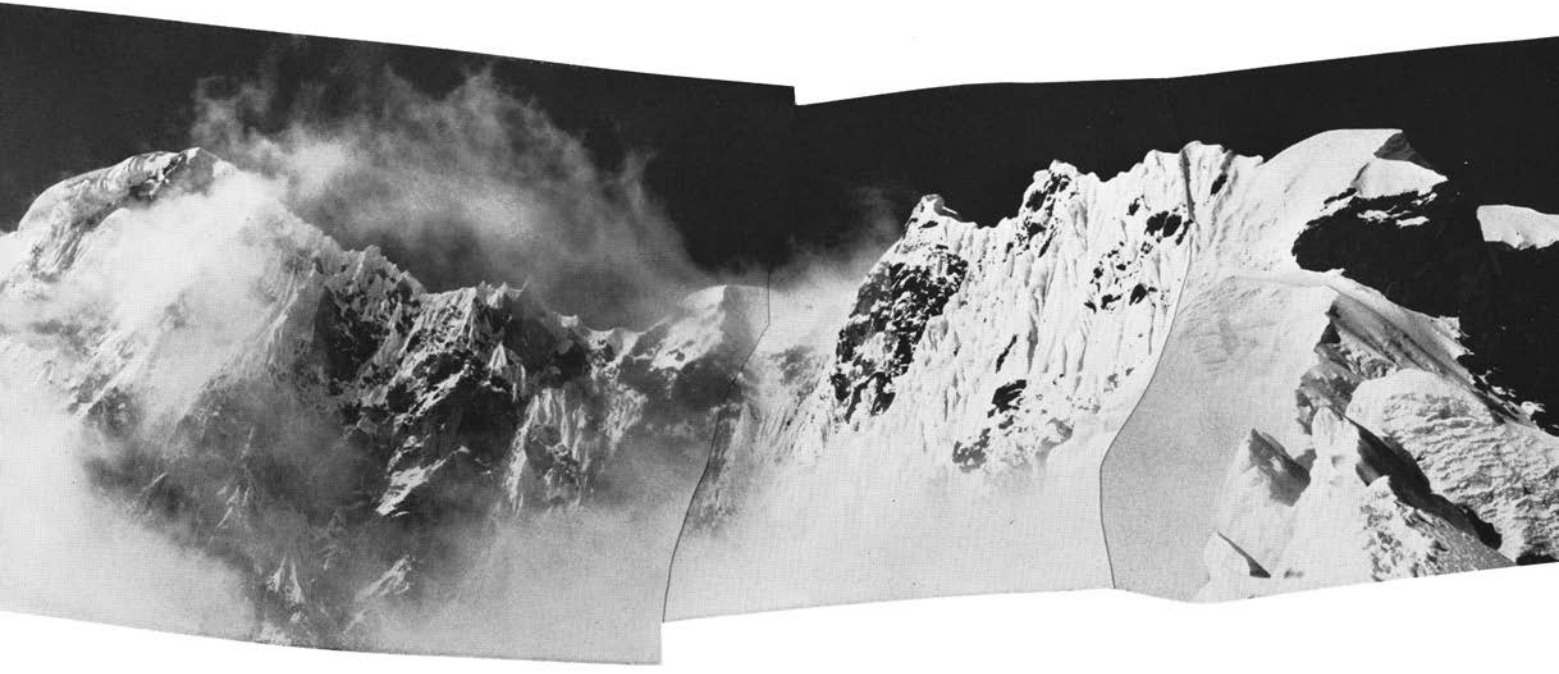


Plate 13-(c)：ガネッシュII南東稜。左端にガネッシュII頂上。

South-east ridge of Ganesh II. The top seen on the left.

(by M. Yokoo)

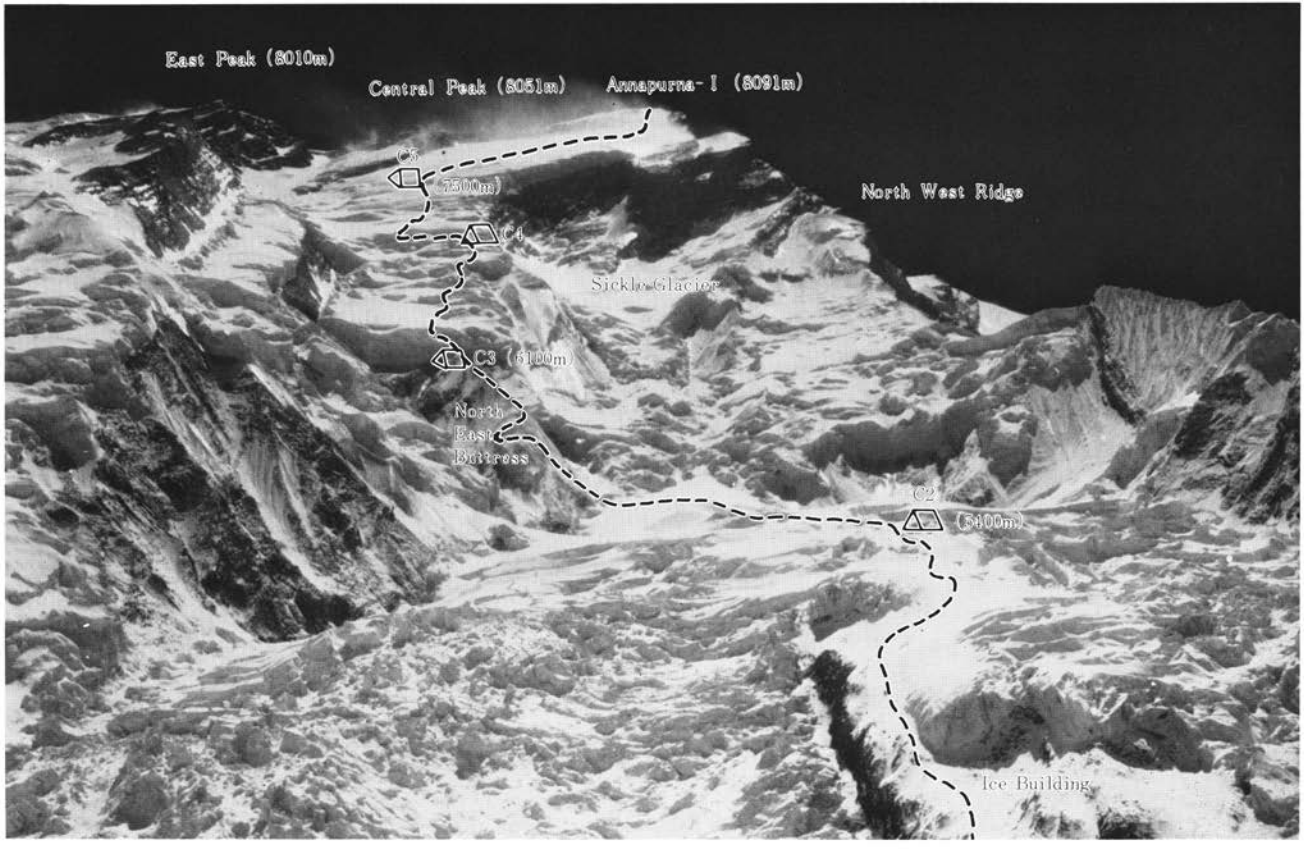


Plate 14 ：アンナプルナＩ峰北面全景（C1-4900mより望む）。
North face of Annapurna I seen from C1 (4900m). (by Y. Kubota)

Plate 15-(a)：ブラマーⅠ南東稜スノーピーク（5800m）からのシックルムーン。

Sickle Moon from snow peak (5800m) on South East Ridge of Brammah I.

(Plate 15-(a), (b), by K. Denda)

Plate 15-(b)：ブラマーⅠ C2(4900m) から見たブラマーⅠ南東稜とピナクル群。右は北東稜。
Brammah I-South East Ridge (left) and North East Ridge (right) from Brammah I C2 (4900m).

アンナプルナⅠ峰（一九七九年春）

――北東バットレスの登攀――

静岡県山岳連盟

静岡県山岳連盟は創立二十周年の際、トウィンズ遠征を計画したが当時のネパール情勢急変の為止むなく中止となり、雌伏十年、細々と続いたわずかな灯が三十周年を期に再び燃え上がり、ヒマラヤへの夢を具体化した。その間、ヒマラヤはじめ海外を目ざした団体も県内に在ったが、いずれも県の総合的なレベルアップには繋がらず、私達はヒマラヤへの道を先人に一から教えてもらわねばならなかった。三十周年の記念登山に相応しい、しかも七〇〇〇メートル級の登頂可能な山という要望に対し、準備委員会は、検討の結果、八〇〇〇メートルを僅かにこすアンナプルナ一峰を第一目標とし、岳連から承認された。早速申請した一九七八年ポストは、すでに他隊に発給済みとのことで、改めて申請した一九七九年プレの登山許可の報を手にした時は思わずホッとした。

（久保田保雄）

北アンナプルナ氷河

BCからの上部は二段の大アイスフォール帯が行手を阻み、二段目のアイスフォールの上はセラックとクレバスの迷路になっている。アイスフォールは時に鈍い音をたてて崩壊し、安全な登路を見い出すことはなかなか難しい。テイリツォ・ピークからロック・ノアールに続く大障壁は、一気に北アンナプルナ氷河に切れ落ちている。一段目のアイスフォールは大障壁の基部を巻くように登り、上部の台地に出る。小さなガレを下って氷河上に出て、距離を稼ぐと、二段目のアイスフォールに行手を阻まれる。左手の岩稜間の小ルンゼを登り、詰まった所を右にトラバースし岩稜を登る。この岩稜には雪が張り付き、六十度程の斜度もあってロープを二五〇メートルフィックスする。更にアイスフォールの上を目指して右上し、アンナプルナの北

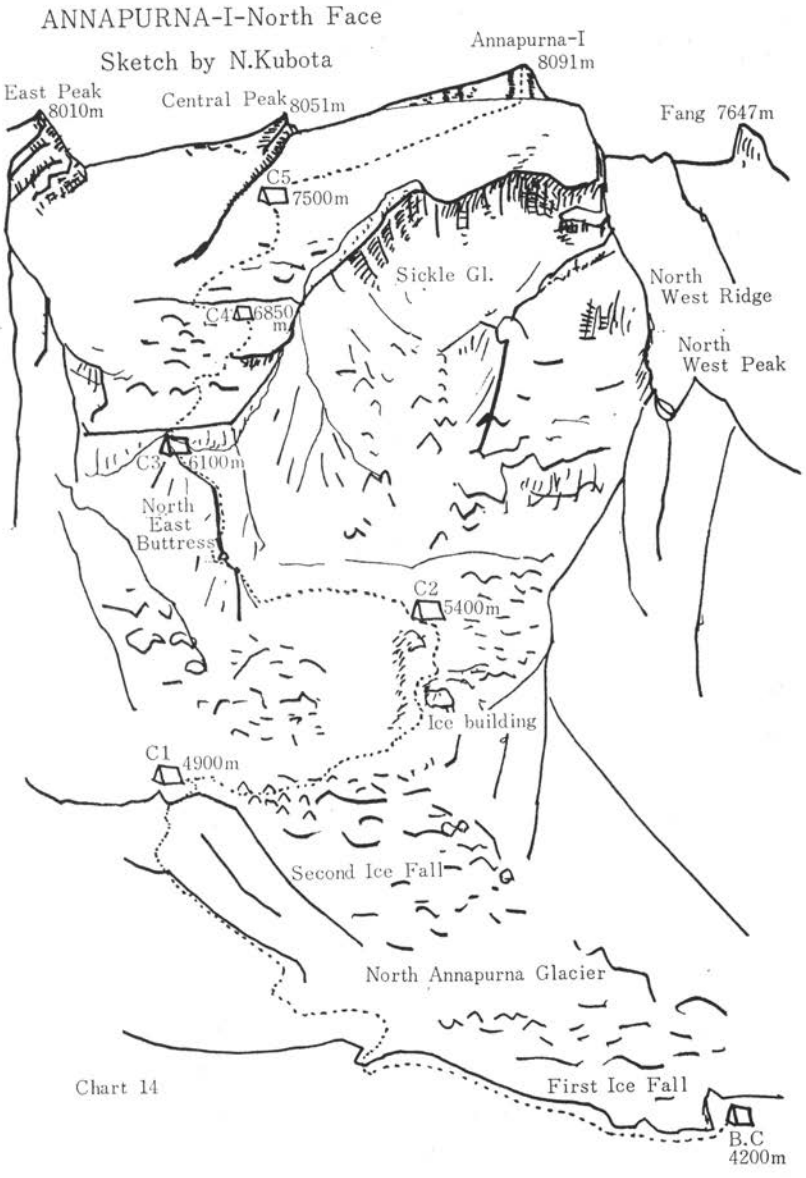

ANNAPURNA-I-North Face
Sketch by N.Kubota
Annapurna-I
8091m
East Peak
8010m
Central Peak 8051m
Fang 7647m
C5
7500m
Sickle Gl.
North
West Ridge
C4 6850
m
North
West Peak
C3 6100m
North
East
Buttress
C2
5400m
Ice building
C1 4900m
Second Ice Fall
North Annapurna Glacier
First Ice Fall
B.C
4200m

Chart 14

面が真正面に見える四九〇〇メートルのサイドモレーン上にC1を設営した（三月二十九日）。

キャラバンで遅れた日数を取り戻すため、ポーターのうちから若い七人をC1への荷上げに雇う。C1までは多量の積雪があり、運動靴では危険なため、隊員のキャラバン用の靴を集めて貸与した。天候は午前中は晴れ、午後雪に変る繰り返しで、荷上げは毎日ラッセルを強いられた。BCからは北西稜に遮られ、雪煙を上げる頂上部分しか望見出来ない。C1に荷上げを終えた隊員は、アンナプルナの北面と相対して一休みする。堂堂たる北面が、城壁のような鎌氷河と北東バットレスを従えて立ちはだかっている。何かアンナプルナの北面にいることが信じられないような神秘的感激の一時である。

C1からは、セラックとクレバスの迷路を抜けて平坦な氷河に出る。ヒドン・クレバスに注意しながら対岸の巨大なアイス・ビルディングを目指して進む。アイス・ビルディングの左を登り、鎌氷河からの雪崩にも安全な五四〇〇メートル地点をC2とした。四月八日、テント四張りのアドバンス・ベースとしてのC2を設けてから、登頂へのキーポイントとなる北東バットレスの登攀に備え全員がBCに下り休養した。

北東バットレス

C1への荷上げが完了した時点で、七人のポーターのうち六人を解雇し、一人だけはチョーヤからの食糧の買付けに残した。彼はテンリコと呼ばれ、ネパール人としては背が高く、体付きも頑強で、しかも大変温厚な性格で皆から愛された。隊長をBCに残し、登攀隊員九人を三人と六人に分け、ルート工作隊と荷上げ隊とし、それぞれC2、C1に四月十一日に入った。

C2の風のない日中は、暑いくらいだ。早暁頂上の雪壁が黄金色に輝き始める頃、C2以下はまだ朝もやの中に眠っている。西のニルギリやティリツオ・ピークにも黄金色の陽がさすと、やがてC2にも眩しい光がこぼれてくる。陽が昇り雪面がキラキラ輝く正午頃より、ミリスティ・コーラから雲が湧きはじめ、やがて白い霧が覆われると、雪が降り始める。この頃になると、荷上げに出ていた隊員はそれぞれに戻って来る。一寝入りし、「ディナー」の声で起き上がり、カマボコテントで食事をし、テントの外に出ると、もう真暗闇だ。羽毛服のフードを被って寒さを耐えながら見上げる空は、すでに霧は去って、星が一面に輝いている。一日の記録をつけ、シュラフに潜り込むが、寒さと明日への期待と不安で眠れない。これがC2の一日だ。

四月十二日、いよいよ北東バットレスのルート工作が始まった。北東バットレスは、鎌氷河の左に位置し、標高差約六〇〇メートルの急峻な氷の尾根である。C1から観察すると、時お

り上部のブロックが崩壊し、雪崩となって、一日に何度となく尾根の左右を落下する。尾根の取付きまでは、鎌氷河の真下をトラバースしなくてはならず、雪崩の危険を回避することが出来ない。登頂の成否はここのルート工作と荷上げにかかっていた。田中、滝田とシェルパの二人のルート工作隊は、昨秋のアメリカ隊のフィックスロープを氷の下に見い出し、それに添ってバットレスの右側から取付いた。下部の氷壁は垂直で、アイゼンの爪が数ミリ引っ掛るだけという堅さだ。氷と岩のミックスを登り、二段にわかれた氷壁を左右にさけるようにして雪稜に出る。

午後から雪が降り出し、フィックス工作とラッセルにヘトヘトになって、尾根上のコルにたどりついた。雪崩の危険があるので、そこに、雪洞を堀りビバークする。せっかく登ったルートもコの字型に二回も水平トラバースするのではとても荷上げに使えそうもない。そこで、翌日フィックスロープを回収することにした。その日も午後から天候が崩れ、コルで二回目のビバークを余儀なくされた。コルから回収したザイルを、下りながらストレートに張り変えた。

コルからC3予定地までかなりの距離があるので、コルをデポ地とし、テントを一張り設営し、荷上げとC3のルート工作を並行して行った。毎日のように午後から天候が崩れ、雪と雷に悩まされ、数ピッチづつしかザイルを伸ばすことが出来ない。四月二十七日についに六一〇〇メートルのC3予定地までのルート工作を完了した。

C3のテントサイトは、氷の尾根を切り開いて作ったが、テント二張りがやっとのスペースしかない。トイレもザイルをつけて行くほどだ。しかし、C3からの展望は素晴らしい。北西稜の花キャベツはそのヒマラヤ壁に麗人の装いをみせ、その彼方にはダウラギリI峰が特徴のある錘型の姿を見せている。すでにニルギリやティリツォ・ピークと肩を並べているようにも見えるが、実際にはまだ一〇〇〇メートル近くも低い。

キャラバン中、トロブギン峠の通過に日数を要し、隊員も積極的に輸送に加わったことが、高所順応に好い結果をみせていたが、六〇〇〇メートルをこすC3では、隊員もシェルパも高度の影響を受けはじめた。頭痛や食欲不振を訴える者が多くなり、休養する者も出た。技術的に困難な北東バットレスでは、一人の荷上げ量も減り、登頂予定日も迫って荷上量の変更を余儀なくされた。取り敢えず二パーティ六人が登頂出来るよう計画を変更した。

登　頂

北東バットレスは一〇〇メートル近い氷壁に行き当り終っている。壁とはいっても中はグスグスで、体がスポスポはまってしまい、クレバスに落ちるようで気味の悪い所もある。ここを

乗越すと広い雪のスロープとなり、所々でセラック帯が行手を阻んでいる。ルート工作隊はC2からの指示で、右に左にセラックを回り込み、C4（六八五〇メートル）に達した。隊員とシェルパの頑張りで、アタック用の荷がC4に上がり、C5予定地（七五〇〇メートル）も確認され、一部の荷がデポされた。

登頂予定日は五月五日と決まり、メンバーも滝田、田中、ペンパ・ノルブ、ペマと決定した。アタック隊は五月四日C5に入る。酸素は睡眠時、毎分〇・五リットルずつ使用したが、翌朝ペンパ・ノルブが体調を崩し、ペマと一緒に下った。滝田、田中はアタックを六日と決めたが、今度は滝田が高度の障害を受け、六日の午後C4へ下った。

七日C4からペマをC5に上げ、八日快晴無風の好天に恵まれ、田中とペマはアタックに向った。ゆっくりした足どりで頂上を目指し、十二時十分山頂に立った。トランシーバーから「頂上に着いた」という田中の感激した声が飛び込み、各テントは登頂成功の報にこおどりした。第二次のアタック隊を出すには、隊員もシェルパも疲れ過ぎていた。残念だったが一回のアタックで打切ることにした。

（滝田博之）

△記録の概要▽

隊の名称　静岡県ヒマラヤ登山隊

活動期間　一九七九年二月～六月

目的　アンナプルナⅠ峰（八〇九一メートル）北面、北東バットレスからの登頂

隊の構成　隊長＝八木公信（58）、副隊長＝石川和勇（44）、医師＝田辺恵造（45）、登攀隊長＝滝田博之（37）、隊員＝久保田保雄（35）、海野博之（34）、粒沢修司（32）、三ッ井孝（31）、工藤定雄（31）、田中成三（30）、森田好茂（27）、渡辺勝宏（26）、L・O＝シャンガール・プラダン（24、警部補）、サーダー＝ペンパ・ノルブ（30、ナムチェ）、以下シェルパ10名

行動概要　2月20日、本隊カトマンズ着。3月6日ポカラよりキャラバン開始。3月12日チョーヤ。3月26日先発隊BC着。3月28日全隊荷BCに集結（四二〇〇m）。4月7日C1建設（四九〇〇m）。4月13日C2建設（五四〇〇m）。4月25日北東バットレス上の雪稜にC3建設（六一〇〇m）。4月28日C4建設（六八五〇m）。5月4日C5建設（七五〇〇m）。5月8日田中、ペマの2名登頂。5月14日BC撤収。5月26日カトマンズ着。

キシュトワール・ヒマラヤ（一九七九年）

――シックルムーンとブラマーI峰――

伝田克彦
竹中昇

はじめに

気持ちの良い緑の谷、ナント・ナラを溯ること二日。眼前に白銀の峰が現れる。ブラマーIの支峰、ブラマーズワイフだ。そのワイフの陰からブラマーIの頂が見え、正面にアイガーの岩壁が見えるようになると、そこが標高三五〇〇メートルのサッタールチンである。九月一日、私たちはこの広々とした緑の放牧地にベースキャンプを設営した。草原のわきの樺と柳の間に設けられたこのベースキャンプに次に戻った時は、素晴らしい黄葉の中であり、さらに三度、ここに戻った時は淡雪の中であった。

私たち、JAC学生部第六次海外登山隊は、一九七九年秋、インド最北部に近い、ジャンム・カシミール州にあるキシュトワールヒマラヤを訪れた。二つの頂、シックルムーン（六五七四メートル）とブラマーI（六四一六メートル）を登るためである。

キシュトワールヒマラヤは、七千メートルを越える山は持たないが、岩と氷に鎧われた六千メートル峰がしのぎを削ってそびえる、魅力あるヒマールである。私たちは、この山群を代表する二つの頂を選び、インド登山財団（IMF）の許可を得ることに成功した。

シックルムーンは一九七五年、インド隊により、またブラマーIは一九七三年、クリス・ボニントン、ニック・エスコートらの英印合同隊により初登頂がなされている。しかし、シックルムーンはその北面からのルートにより、ブラマーIは南面から南東稜をルートとして登られており、私たちが登路に選んだ

ブラマー氷河側からの登攀は未だ試みられてはいなかった。

両峰とも、ブラマー氷河からの登攀はより魅力のあるルートとなるはずであり、それこそが私たちが求めていたものであった。

シックルムーン南東稜

九月二日、シックルムーンに向けての登高が開始された。重いキスリングを背負ってブラマー氷河を溯る。すでにポーターはいない。隊員のみによる荷上げである。

サッタールチンからアイガーの裾まで続く気持ちの良い放牧地を過ぎると、歩きにくいモレーンの上に出る。標高四〇〇〇メートル地点に、荷物の集積地となるABCを設け、さらに氷河をつめ、最奥部の四二〇〇メートル地点に第一キャンプを建設した。

テントからは、六四一五メートルの前衛峰の岩塔が望める。途中、尾根越しにちらとその姿を見ることのできたシックルムーンの頂は、そのかげになって見えない。この前衛峰の乗越しが、登頂の正否を決めるかぎとなることは間違いなさそうだ。

岩塔から右にのびる南東稜には、二つの懸垂氷河がせり上がっていた。私たちは、試登の後、C1から見て左方の懸垂氷河を登路とすることに決めた。

九月七日から、ルート工作が開始された。懸垂氷河右岸の標高四八〇〇メートルの雪の台地に第二キャンプを設け、そこから氷河をトラバース、標高五七〇〇メートルのモンクスヘッド（仮称）から派生する左岸の雪稜を登り、その五二〇〇メートル地点に九月十五日、第三キャンプを設けた。

第三キャンプから、リッジは岩まじりとなった。このリッジをさらに登り、モンクスヘッド頂部の雪の斜面をまくと、南東稜上、標高五六〇〇メートルのコルである。九月二十三日、ここに第四キャンプを設けた。コルからは右側がすっぱりと切れ落ちた蒼氷の尾根が続き、その先には六四一五メートルの前衛峰の岩塔が敢然と聳えている。振り向けば、ブラマーIからブラマーIIに至る山群が迫力を持って立ち上がっている。とくに、ブラマーIIの北壁がすばらしい。

私たちと前後して入山したジョー・ブラウン隊は、ブラマーII峰に登っただろうか。彼がカンチェンジュンガの頂に立ったのは、二十数年前のことである。今なおザイルのトップに立ち、アルパインスタイルで、難峰ブラマーIIに立ち向かう彼には、我々学ぶところ大である。

いよいよ、シックルムーン南東稜核心部のルート工作が始まった。前衛峰に続く急峻な蒼氷のリッジにピッケルを振い、スクリューハーケンを打ち込み、ザイルを伸ばす。五六〇〇メートルのコルから、前衛峰の岩塔基部六二五〇メートルに、一〇〇〇メートル余のフィックスロープが張りわたされた。

Sickle Moon and Brammah I

Chart 15

そしてルート工作六日目の九月二十七日、リッジが岩塔につきあたるところから、岩塔基部の壁をトラバースすると、そこには信じられない程広大な雪のプラトーが広がっていた。プラトーの向こうに立つ、雪に覆われたドーム状の頂を我々は初めて見た。九月二十八日、このプラトーに第五キャンプを設営。

九月二十九日、満天の星空の午前四時、第一次アタック隊の伝田、鈴木、芳賀の三名が皆の声援を背にC4を出発。C5に到着後、頂上ドームにルートを伸ばすが、時間切れとなり再びC5に戻る。あわてることはない。核心部を通過した今、頂はもう我々の掌中にあるのだ。

翌九月三十日、第一次アタック隊がC5から、第二次アタック隊の竹中、駒宮、大林、赤須がC4から、それぞれ頂を目指す。伝田、鈴木、芳賀、駒宮、大林が正午、ついに念願のシックルムーンの頂に立った。続いて午後二時、竹中、赤須も登頂。頂からは、近くはブラマー山群、バルナジ山群、谷間をへだててヌン、クン山群、そしてはるか遠くにカラコラムの青い山並が望まれる。さらに続く十月一日、第三次アタック隊の宮本、秋本、早川の三名が登頂。目標であった全員登頂がここに果たされた。

それにしても、BCからの標高差約三千メートル。登山日数三十五日の、長いシックルムーンの頂への道程であった。

全員登頂後、次のブラマーIに備えて、ほとんど全てのフィックスロープ、ハーケン類を回収し、十月五日夜、BCに戻った。樺と柳の黄葉の中、BCにもこの日はうっすらと雪が積もった。

ブラマーI南東稜

秋景色のサッタールチンでの快適な休養を四日とり、十月十日、私たちは再びブラマー氷河を溯った。今度は氷河左岸を行く。ブラマーIへの登高の開始である。

ブラマーIの登路には、当初、私たちは北東稜を予定していた。未だ手のつけられたことのないこの急峻なリッジは、初めてここの山が見えたときから、私たちを惹付けていた。BCからも、シックルムーン登攀中も、鋭く切れ落ちるそのリッジを私たちは見ていた。しかし、偵察の結果、ヴィザに制約され登山日数の残り少いこと、不足気味の食糧のこと等を考えると、この北東稜は時間がかかりすぎると判断された。私たちはルートを、初登ルートである南東稜に変更した。ただ、初登のボニントン等のパーティーは反対側、南面のキバール・ナラからこの南東稜を辿っており、ブラマー氷河から南東稜に達するルートは未知であった。私たちは、シックルムーンからながめた、南東稜側壁の懸垂氷河の左端にルートをとることにする。

十月十一日、ブラマー氷河サザンクーム四二〇〇メートル地点に第一キャンプを設営。BCと、シックルムーンのC1から

ここに荷物を集積しながら、ルート工作を開始した。シックルムーンC1からのボッカは、ブラマー氷河本流を右岸から左岸までトラバースしなければならず、その歩きにくいモレーンの往来はことのほか重労働であった。

懸垂氷河からのルートは、セラック帯、クレバス帯、プラトー、岩稜と変化に富んでいた。シックルムーンで高度順化がかなりできていたためか、行動は順調であった。登るにつれて、アイガーの向こうからシックルムーンが見えてくる。標高四九〇〇メートルで抜け出したプラトーから眺める残照のその姿は印象的であった。十月十七日、プラトーに第二キャンプを設営した。翌十月十八日には、プラトーから稜線に続く岩稜を登り切り、待望の南東稜上に第三キャンプを設営した。標高五六〇〇メートル。翌日、これを五八〇〇メートルのスノーピーク上に移動する。

南東稜の核心部はこのスノーピークから始まった。わにの歯先のようなジャンダルム群が行く手を遮っている。スノーピークからしばらく刃先のようなリッジを辿り、ジャンダルム群の基部に達し、本格的なルート工作を始めたのは十月二十日であった。難しいルートが続いたが、雪壁、岩壁、岩稜、雪稜と変化に富んだ登攀に皆嬉々としてピッケルを振い、バイルを振っている。所々にボニントン隊が残置したフィックスロープを見つける。

十月二十二日、約一二〇〇メートルのフィックス工作の後、標高六一〇〇メートルでジャンダルム群を抜け出し、雪稜上に第四キャンプを設けた。先には雪稜が続き、ブラマーIの頂は指呼の間にある。

前日の夕刻月明りに映えるブラマーIは神秘的ですらあったのに、二十三日の朝は地吹雪の音に目を覚まされた。第一次アタック隊、竹中、鈴木、駒宮の三名は、天候の回復を見計らって午前八時、C4を出発し頂を目指す。同時にスノーピークのC3を、第二次アタック隊、伝田、宮本、秋本、芳賀、早川の五名も午前七時に出発する。収まるかに見えた地吹雪は勢を盛り返し、トップを行く第一次アタック隊を悩ます。寒い。確保する足先がチンチンとしてくる。見た目には緩やかだった頂上への雪稜はなかなかどうして急であり、そのうえカチンカチンの氷の上に軟雪が積もり手強い。七本のフィックスロープを張ると残りは一本しかない。最後の望みを託し、鈴木が雪壁を登り終えると、そこが「天地を創造し維持する神」の山、ブラマーIの頂であった。正午、嵐の中であった。続いて第二次アタック隊も午後一時到着、合流した。

シックルムーンとは対照的に、実質登攀日数十日間の、速攻登山であった。

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会学生部インド・ヒマラヤ登山隊一九七九年

活動期間　一九七九年八月～十月

目的　シックルムーン（六五七四メートル）、ブラマーI（六四一六メートル）のブラマー氷河側からの登頂

隊の構成　隊長＝伝田克彦（34、東大スキー山岳部OB）、隊員＝竹中昇（26、早大山岳部）、宮本明男（23、芝浦工大山岳部）、鈴木章（25、東洋大山岳部）、駒宮博男（24、東大スキー山岳部）、秋本友紀（23、東京農大山岳部）、大林一成（23、東京農大山岳部OB）、早川晃生（東洋大山岳部）、芳賀成明（23、駒沢大山岳部）、医療係＝赤須孝之（23、東大スキー山岳部・医学部五年）、連絡将校＝ウダイ・サテイ（34、インド陸軍少佐）

行動概要　八月十三日デリーに先発、後発隊が集合。八月十八日デリー出発。キシュトワール、ダッチャンを経て、九月一日サッタールチン（三五〇〇メートル）にBC建設。九月四日ブラマー氷河最奥部（四二〇〇メートル）にC1建設。九月八日C2（四八〇〇メートル）建設。九月十五日C3（五二〇〇メートル）建設。九月二十三日東南稜上にC4（五六〇〇メートル）建設。九月二十八日C5（六二〇〇メートル）建設。九月三十日、十月一日シックルムーン登頂（全員登頂）。十月五日～九日BC。十月十日偵察開始。十月十一日C1（四二〇〇メートル）建設。十月十六日C2（四九〇〇メートル）建設。十月十八日東南稜上五八〇〇メートルにC3建設。十月二十二日C4（六一〇〇メートル）建設。十月二十三日ブラマー登頂（八名）。十月二十八日BC撤収。

劔岳登頂をめぐって

――ある疑問点について――

柴崎芳博

(一) 問題の所在について

明治四十年(一九〇七年)七月、陸地測量部員であった筆者の亡父柴崎芳太郎一行が、三角点設定のため、当時未踏と信ぜられていた劔岳の頂上で錫杖頭と剣身を発見したことは、わが国山岳史上の一挿話のみならず、考古学上、特に山岳信仰上、貴重な資料を提供している。

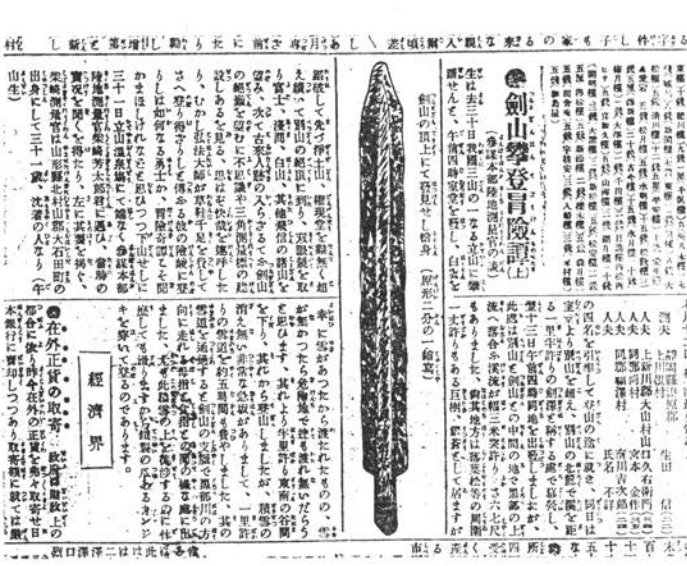
亡父一行の登頂について最初に報道したのは登頂直後立山温泉で取材した『富山日報』の記事で、明治四十年八月五日、六日の両日にわたって連載され、頂上発見の錫杖は実物大で、剣身は1/2大の石版印刷で図示されている。また、それがそのまま当時富山県出張中の部員の報告により、陸地測量部部内誌『三五会会報』(第十七号明治四〇年)にも出ている。それより約一年遅れて明治四十一年には「越中劔岳先登記」として富山日報の記事の同文が田部隆次氏の紹介により『山岳』第三年第三号雑録に転記された。同文は、明治四十年八月当時立山温泉で出会った亡父柴崎芳太郎、測夫、人夫の談話をまとめて、談話体による柴崎芳太郎の登山記として、富山日報の記者午山生なる人が書いたものである。

この父一行の登頂が、日本山岳会結成間もない頃であり、大きな反響をよび、特に明治四十二年吉田孫四郎氏一行が、二年前柴崎ら陸地測量部員の一行にしたがった宇治長次郎を案内人に雇って登頂を行い、『山岳』第五年一号に「越中劔岳」と題して第二登の記録を発表し、その中では亡父柴崎芳太郎の登頂についての疑問が提示された。これに対して亡父芳太郎は『山岳』第六年第一号(明四十四年)に反論と弁明を行っているが、その間の事情については当時の『山岳』誌上に、また戦後には山崎安治氏によって山岳誌『ケルン』(昭和三十四年第三号、後に

同氏著『劔の窓』に集録）に、また松村寿氏による『山書研究』（昭和四十一年第七号）誌上に詳細な記録と研究がある。

吉田孫四郎氏は結局唯一の資料として『富山日報』の記事を問題としていたのであり、父もまた「固と記者の来訪たるや、全く余が意料の外に存し、事の而かく珍なるに一驚せり、超えて数日、新紙は余の所言と、従属人夫等の陳言、乃至途説を束て之を採録せり、載するところの数節、事実に相異するものありしも、之が正誤を加ふるの要なきを以て、其儘不問に措けり例へば其の登るに際し、鋼を亘して攀ぢたりとか、建標にあたり、数本の木片を繋ぎ合せと云ふが如き、誤傳の主たるものとす、本誌五年の第一号に於て、吉田氏の疑問とせらるところ思ふに、是等新紙の誤報に胚胎するものと察せられる、初め測夫生田を登陟せしめし事は、攀登の能否を験するにあらずして、建標の能否を査定するに存せしのみ　云々」（『山岳』第六年第一号明治四十四年）と書いて『富山日報』の記事には誤報のあること、また父の登頂は第二回目であることを認めている。しかしこの記事はもとより登山案内として書かれたものではなく、父一行に対し感嘆を持って好意的に書かれていると思う。

筆者は中学生時代大正の末期この記事を読んで以来、一般通説とは反する故に大胆な、しかし『富山日報』の記事を精読してみればきわめて素朴な、ある疑問を持つに至った。その疑問点の中心は、錫杖発見の第一回登頂者のなかにのちの名ガイド



劍山攀登冒險譚（上）

（參謀本部陸地測量官の談）

生は去三十日我國三山の一なる立山に攀躋せんと、午前四時室堂を發し、白雲を

劍山の頂上にて發見せし槍身（原形二分の一縮寫）

經濟界

明治40年8月5日発行『富山日報』記事写し

宇治長次郎が含まれていないという点である。

すなわち、この記事の最後に『富山日報』の記者午山生の主観のかたちで「午山生云ふ　此測量は危険地でも霊地でも嫌はず跋渉せざるべからず、人夫は熟練を要するものなるに、迷信深き人夫共は兎角同業に従事するを嫌ひ少しく馴れし時分に他に轉じて帰らざるには困り居れりとなり、又測量官の一行は目下立山温泉場を根據とし、多くは露営若しくは小屋住居をなし居れるに、偶温泉に帰る事あるも至極不待遇にて、余の訪問せし時の如きは押入の如き処に押込められ居りしには見るも同情の感に堪えざりき、職務とは云ひ死を賭して深山峻岳を跋渉しつつある人々なれば、何とか相当の便宜を与ふる事にしては如何」とあり、前半は人夫の雇用者である父の意図を反映したものであり、人夫の中には土地の傳説口伝等を信じ、仕事を放棄し帰って来ぬ者のいたことを示している。

後半は立山温泉の父達に対する冷遇を同情的に書いてあるが、父の草稿（明治四十年父の帰朝後役所の機関誌「三五会」における帰朝報告会における原稿）によれば、立山温泉における冷遇の経緯を詳しく記者に説明したところ是非委細を新聞紙上に掲載して彼等（県庁の役人）を戒めざるべからずと云われたが、かかることを自分から発言するのも当り障りがあるとして自分から記者に依頼して第三者の立場から書いて貰ってあのような記事になったとある。それでも十分意を通ずることができず測量官の体面を汚したと先輩や同僚にとられることを心配し、それは旅費の節約による経済的理由からではなく、宿の部屋の全部が少数の県庁の役人で占められ刺を通じ依頼したが顧みられず、憤慨したが血気にはやる若い測夫を連れていたので自重したと弁明している。なお、立山温泉では父を含め十五名（測夫二、人夫十二名）が六畳一間に押込められていたとある。

これだけみても『富山日報』の記事の末尾の個所は、父の依頼により、しかも、立山温泉における冷遇に重点をおいていることが判るような気がする。

（二）第一回第二回登頂の人名について

『富山日報』の記事のいずこにも宇治長次郎の名前を見出し得ないことについて、同記事中氏名のでている個所を引用すれば、

「第一回登頂には

測夫　静岡県榛原郡上川根村　生田　信（二二）
人夫　上新川郡大山村　山口久右衛門（三四）
人夫　同郡同村　宮本　金作（三五）
人夫　同郡福沢村　南川　吉次郎（二四）
人夫　氏名不詳

此積雪地よりは草木を見ず、立山の權現堂より峰傳へに別山に赴く山路の如く一面に花崗片麻岩にてガサガサ岩の断崖絶壁

削るが如く一歩も進む能はず、引率せる人夫四名の中氏名不詳とせし男は此處より進む能はずとて落伍しました……

第二回には三角点測量標を建設せんものをと

測夫　鳥取県東白郡市勢村　木山　竹吉（三六）

人夫　中新川郡大岩村　岩本鶴次郎（二四）

其他を率ゐたが、二等三角点を設けんとせしも、名にし負ふ嶮山とて機械及材料を運上ぐる事能はず、止むを得ず四等三角点を建設する事とした云々」とあり、いずこにも宇治長次郎の名は見出し得ない。強いて求めれば、氏名不詳となっている落伍者に該当するのではないか？

なお、第二回登頂者のうち其他とは誰であったか、偶々父が吉田孫四郎氏の疑問に対して反論と弁明を書くための原稿の写しの後に（原稿の写しは筆書であるが、これは四年間の空白を記憶を呼び起して書いたらしく鉛筆書きで追加してある）（新聞記載の氏名は筆者が比較参考のため書加えたものである）。

第一回　（新聞）　（父のメモ）

人夫　山口久右衛門　山口　生田　信　生田

人夫　宮本　金作　宮本

人夫　南川　吉次郎　南川

人夫　氏名不詳　その他一

第二回

測夫　木山　竹吉　木山

人夫　岩本　鶴次郎　岩本

其他　野入

山崎

南川

とあり、父が第二回登頂であるとすれば、第一回登頂者を誰も連れていないことに不審を懐いたが、南川吉次郎が二回共登頂していることが判った。

ところで、宇治長次郎氏の名前がはじめて記載されたのは、明治四十二年七月の吉田孫四郎氏一行の劔岳登頂の記録以来のことである。一行は吉田氏のほか、石崎光瑤、河合良成、野村義重氏の四名で、吉田氏の記録（『山岳』五年第一号）によれば、人夫として富山県上新川郡大山村字和田村宇治長次郎（三九）、同大山村字宮地村立村常次郎（三四）、同中新川郡岩崎村佐々木浅次郎（三八）の三名を雇い入れた。長次郎をつれてくるには並々ならぬ苦心をはらった。二年前柴崎氏ら陸地測量部員の一行にしたがい劔岳先登の功を担っている剛の者だけに、今回の登山の指揮者として長次郎の参加をぜひ必要としたのであった。おりよく立山温泉で常願寺川砂防工事に従事していたので、とくに雇い入れることができた。人夫賃は食料を除き長次郎に一日一円、他二名は九十銭「当地方においては廉価なるほ

うにあらず」と記されている。

当時、山間のいわば辺境地区に在った長次郎は二年前の『富山日報』の記事は読んでおらず、一般の風評も彼が登頂したと伝えられていたに相違ない。そしてもし筆者の想像が正しければ、彼は、吉田孫四郎氏一行に従い劔岳に登ることに相当の躊躇を示したことが、この文章からも察知できる。なお明治四十年度陸地測量部事業概況（陸軍省発表）によれば、父が雇用せるときの人夫賃は一日五十五銭乃至五十八銭を要せりとあり、その約二倍近くを支払っているので、紀行文に記された如く決して廉価なほうではなく、それだけ長次郎を頼りにしていたことが判る。また一行が別山乗越に達したとき、ここで休息中の模様について「風のあたらぬ、峠の北側の岩角に凭りて休憩す。劔嶽の偉観、眼前に迫って居る筈なるが、奈何せん、白妙の雲幔、あつく霊域を秘して終った。温厚着実なる長次郎は懐旧の情に堪えぬらしく〝夫の劔の絶嶮へは二度と行くまじと決心せしに、亦何の縁因ありてかくは導者の役を勤むるか〟と言へば〝一度行ったならば三度は行かにゃならぬ約束のもの、今一度覚悟せよ〟と片傍から交ぜ返されて、微笑むも面白く云々」とあり、これまた筆者の想像が正しければ、長次郎の言葉は実感をもって迫ってくるように思われる。

また「雪の尽くる処、南北に崎嶇として延びたる劔岳の嶺続きにして、開かれし関門の形をなす。稜岩の闕に腹這ひながら俯瞰すれば眼下直ちに薙ぎ落ちて凄愴極りなき大峨壁（ばってるす）を作り、その下には削り下げたやうな雪渓幾条あり、末は早月川の水となりて白く流れ、左岸には伊折村が芥の如く付着している。此危景に接し、意気大いに揚ったが、嶮絶は之よりの巉嵓攀躋にあり、最早団体の協力に待つ能わず、各自が各自の度量と技倆の全部を傾尽してすすむべきのみ、陸地測量部員に従いたる一人夫が落伍したるもこの地点（現在の熊の岩にそって長次郎谷のコルから剣頂上へ登る途中か）なりと聞く云々」

以上が吉田孫四郎氏の「越中劔岳」（『山岳』五年一号明治四十三年）中宇治長次郎に関する記事の主要な部分であるが、これらは、筆者のいだく疑問、即ち富山日報のいう落伍者に長次郎が該当するのではないかということを念頭におけば納得できると思われる。

（三）宇治長次郎の人柄

宇治長次郎（一七八一―一九四五）は、明治大正昭和の三代にわたって立山方面で活躍した一世の名山案内人であり、特に彼とつき合ったわが国黎明期の山の指導者達が、口をそろえて彼の謙虚な性格と根からの山男振りを称えていることも事実である。彼と山行を共にした多くの山の先輩達が、彼のことを書いているが、それらを要約したものとして、松村寿氏「宇治長次

郎小傳」(『山書研究』九号昭和四十九年)により彼の性格等を引用してみよう。

そのころの山案内の多くが猟師から転業したりこれを兼業したりしたのとはちがって、長次郎は敬けんな仏信徒のゆえに殺生を好まない平凡な農民であった。その彼が名ガイドとうたわれるようになったのは、あるひと夏の雇われ仕事がきっかけだった。

明治四十年のひと夏、長次郎は陸測の人夫として柴崎芳太郎のひきいる測量隊に従って立山黒部周辺の山やまをばっ渉した。これは長次郎にとってまたとない経験となった。日ごろの仕事で鍛えぬかれた敏しょうさとバランスのよさ、体力といったものに、この山の経験が加って、後の山案内人としての基礎ができた。もしもこの夏の経験がなかったとしたら、長次郎は劔岳も黒部も知らぬ一農夫としてその生涯を終っていたにちがいない。

なおはっきりした記録はないが、明治三十五年、三十七年の信濃越中方面の二等三角測量にも、長次郎が雇われて働いたと思われるふしがある。当時の測量記録に「雇人、芦峅寺、本宮、和田にて召集」とあるのと、後述の三俣蓮華でのエピソードがその根拠である。

この最後の、たのしい人物、長次郎を語るエピソードとは、若いとき陸測の仕事をしていたころの話で、ところは信飛越の境界というから三俣蓮華岳のあたりか。そこへやってきたとき、人夫の長次郎がだしぬけに地べたにひれ伏して東の方にふかぶかと頭をさげた。それから土をつかんだり握ったり、はては起き上って地べたを踏みつけたり、奇妙な動作をはじめた。

あっけにとられた測量官がきく。

「おいおい宇治、いったいこれはどうしたことか」

彼はたのしげに答える。

「はい、ここは三国のさかい目じゃ。私はここで陛下のおられる方角にお礼を申しあげ、そして長野県、岐阜県、富山県の地面をいっぺんに踏んだり、つかんだり、握ったりしたがですちゃ」

長次郎の奇抜なふるまいに測量官はじめ一同、日本アルプス中にひびき渡るような大笑いをやった。それから一同、長次郎のまねをして土を踏んだり、はいつくばったりしはじめた。

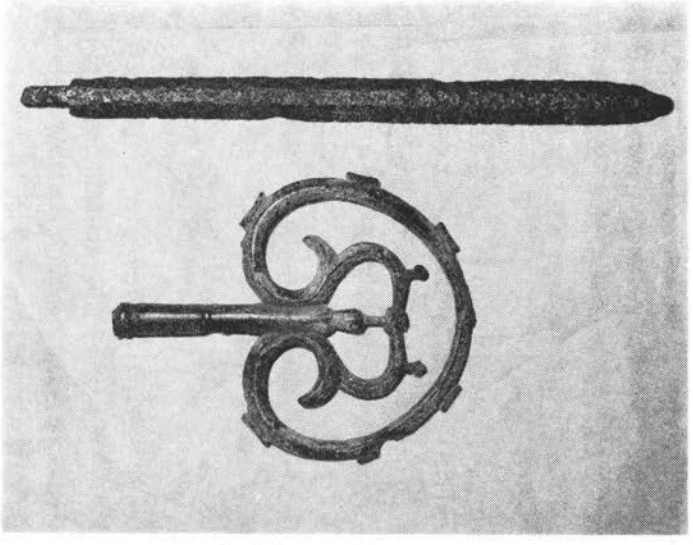
以上は長次郎の性格の一部と、陸地測量部とのかかわりを示すものである。

山のガイドには、生命をあずけなければならない場合が多く、そこには特種の信頼関係が生まれる。一部の山岳愛好家に接触したガイドたちが名ガイドと呼ばれ別扱いにされ、その傾向は現在も残っているように思われる。山での仕事で生活しなければならない人たちは、それだけの能力を身につけていたのであって、初期の測夫たちもその能力を身につけていた。

長次郎の場合、以上に加え、無口で、素朴で、悠々とした態度のいかにも山男らしい風貌が魅力であったに違いない。

なお、現在残されている陸地測量部の公式文献の中に、長次郎の名は残されてはいない。現在は国土地理院の永久保存資料となっている「一等及び二等三角点之記」には雇人召集の手段、其給料の欄があるが「三等三角点之記」には前記の「雇人召集ノ手段、其給料」の欄は設けられていない。しかし『富山日報』の記者午山生はいわゆる地方新聞の記者で、出身地等について測夫も人夫も同列に扱い、出入りの多い人夫の中で前記の小伝が正しいとすれば四ヵ月近くも一緒にいた長次郎を氏名不詳としたのは、彼がそこにいなかったばかりでなく、同村出身の人夫らが彼をかばったためと思われる。

筆者はたまたま、劔岳頂上発見の錫杖および剣身の調査の過程において、同品を所持して登頂したと思われる宗教者すなわち修験者について識りたく、わが国の山岳宗教たる修験道の特異性について学び、立山信仰には、特に登山禁忌の思想が色濃く浸滲していることを知った。この思想は根づよい民間信仰として、明治末年まで残り、敬虔な仏教徒といわれた長次郎は当然その影響を受け敢て登頂を断念したのではないかと思うに至った。



劔岳頂上発見錫杖頭及び剣身

（四）修験道と立山信仰について

山中の難行苦行を重んじた修験道は、日本の山岳信仰の一形態であって、原始的な日本の山岳信仰と、シャーマニズム、仏教の密教的要素とを習合させながら、さらには道教の山岳修行観をも加えて概ね平安時代の半ば頃に成立したと考えられている。また、修験道は、あたかも仏教の一派にすぎぬようにみなされ、事実、密教の隆盛にともなって、密教僧が呪験力に秀でるためには、山岳での修行が必須の条件とされる時代もあったが、修験道の行者たる山伏の行なう宗教儀礼のなかには、精進、潔斉、参籠、奉幣など神道的な儀礼も多く含まれるようになり、したがって、仏教における普通の密教とは違った独自の宗教を形成していったといえる。

北陸地方は東北地方とともに修験者の活躍の顕著な地方であって、修験道は山中の修行を重んずるのみならず、役小角の昔から反主流的または反都市的な傾向をおびていたから、中央政庁の官人または僧侶にとって、異種、異端の活躍の場であり、怪奇と異様にみちた世界とされ、このことが民間信仰醸成の精神的風土となっているとされている。

登山案内を業とする剛力を、立山では中語と称したが、山神と登拝者の中を執り持ち、神意を人に伝え人意を神に伝えるというのが、中語の本義であったといわれる。彼らは芦峅を根拠地とし、社寺からの鑑札を受けて業を営み、登山路の実地に即しつつ、登拝者に故事伝説を説き伝えたのであった。世襲制であった岩峅、芦峅四十八坊の衆徒が、毎年、時を定めて全国各地へ出かけ、立山縁起曼陀羅の絵解きによって立山開山の由来を語り、立山信仰を宣説したのに対して、中語は地元にあって登山者を案内しつつ実地唱導を担当した。

立山信仰を知るためには「立山曼陀羅」について理解することが有力な手段となるであろう。「立山曼陀羅」は高瀬重雄氏によれば二十数種類現存するといわれ、各坊の図柄には多少の相違があるが、基本的には似たものとされている。曼陀羅といっても、胎蔵界、金剛界両曼陀羅のように生命的な連環の上に捉えたものではなく、一種の「地獄絵、極楽絵」であり、これに重ね合せて「立山開山伝説」「女人禁制を犯した女が神罰によって杉や石に化した伝説」「弘法大師が山中で修行し、悪天狗を調伏した伝承」「剛慢な僧が山中で畜生に化した伝説」また「姥堂布橋行事」のような芦峅の祭典法要等を幾重にも描き込むなど「絵巻物」にしてよいような内容が同一画面に表現され、立山衆徒の解説（絵解き）によってはじめて判るような仕組となっている。

ところで劔岳については「立山曼陀羅」の左上部に描かれ、劔岳の上空には月輪がみられ、また劔岳の一角に必ず塔を描

き「自然石の塔」などと注記しているものがあり、岩峯の一つを塔に見立てたものと思われる。そして別山頂上硯ヶ池から劔岳を伏し拝む行者の姿が描かれている。同時に劔岳の中腹から下部にかけて、地獄の一部にとりこまれ、鬼に追われて針の山に足を踏み破り、血まみれになって逃げゆく亡者の姿を毒々しく描き出しており、上部の神聖と下部の地獄の相反するものとが一体となって劔岳を構成している。

これら「立山曼陀羅」の原図の作成時代については詳らかでないが（現存のものは、立山山麓芦峅の衆徒たちが立山信仙の布教にこの図を使い、全国各地の壇那場へ持ち行き、絵解きをし、損傷してくると、信者たちが新品を作成寄進したもので、現存はすべて江戸時代のものとなった）室町時代か桃山時代か、いずれにしても江戸時代以前のものと思われる。

奈良朝の末期或は平安朝初期、立山が開かれたほぼ同じころ劔岳が無名の修験者によって登頂されていたことは確実である。その後立山の方は修験道場として一般に開かれたに対し、劔岳は、宗教的理由或はその他の理由から閉ざされ、劔岳は登攀すべき山でなくまさに礼拝すべき山として近世に至るまで伝えられてきた。加賀藩士増崎藤左衛門が登頂に成功したが、金沢への帰途急死したとかいう口碑は劔岳の神聖不可侵を強く印象づけ、また江戸時代、快天という行者が劔岳登頂に成功し、そのことを言いふらしたため、反逆者として虐殺されたという口碑もあって、劍岳は登山禁忌の思想に深く塗りこめられていたと云える。

登山禁忌の信仰は、必ずしも頂上だけとは限らない。称名の滝を登山家として最初の探検を試みたのは新潟県出身の日本山岳会会員大平晟氏であったが、明治三十九年八月、氏は針ノ木越えして立山に登った後、猟師佐伯直次郎を案内人として芦峅から称名川を分け登った。案内人は滝つぼに近づくと恐れおののき「これから先は、われわれの仲間でも行った者がありません」といってひるむので、大平氏は単身進み、滝しぶきをあびながら、豪壮な滝を近々と仰ぎ見たという。

また、明治四十二年七月吉田孫四郎と一緒に劔岳登頂を行った河合良成氏は「その頃『劔へ行く』なんて云えば気が狂ったかと言われるのがおちだから『立山へ行ってくる』と言って出た。室堂へ帰って来て『今、劔から帰ってきた』と言ったら『そんな馬鹿なことあるか』と問題にされなかった」とある。（『四高八十年史』昭和四十一年）。

このように、登山禁忌の信仰は、明治の末年に至るまで根強く残っていたのである。

これに関して河合氏は後年「どうしてああいう山を、だれもその頃まで登らなかったか、ということをその後度々考えてみたが、どうも判断ができない。結局は、封建時代から長い間伝説的に、そこをだれも登らないのだという力で抑えられていた

もののようだ。登ってみると、露営地から四時間で登れる山だが、そこいらの山男も、だれも登らなかったというのが事実である」と述べている（河合良成『明治の一青年像』）。

筆者の父、柴崎芳太郎もまた、前述の『山岳』五年第一号に、劔岳の険阻が人を阻むのは、弘法大師が草鞋千足を費して登れなかったという伝説が一種の権威を有するに至ったからで事実以上に誇張されていることを、立山を中心として半年間実地に劔岳に登る路を研究した結果信ずるようになったと述べ、「以て同山登陟の而かく難事ならざるを判知せり。当時余の願念するところは唯測量の建標及標石、機具の運般の可能如何の一事ありしのみ云々」と書いている。

以上述べてきたことは、立山信仰、劔岳登山禁忌の思想の概要である。宇治長次郎の住んでいた和田村は常願寺川を隔てて一・五キロしか芦峅寺から離れていない。芦峅寺は岩峅寺と並んで宗教村落を形成し、山岳宗教の布教活動の本拠でもあり、幾多の宿坊が存在するが、和田には存在せず、また現在に到るまで和田村と両村とはあまり仲がよくないそうである。しかし、長次郎は敬虔な仏教徒であるというから、劔岳に対する登山禁忌の思想は直接或は間接に滲透していたにちがいない。

したがって、長次郎にとって劔岳は登ってはいけない山という伝統的心情のため、雪渓を登りつめながら登頂を断念したというのが真実ではなかろうか。これが命ぜられた任務の執行を第一と考えていた父と測夫らにとっては「長次郎が落伍した」と伝えられてきたのも極めて自然であるように思われる。

信仰は、民衆の心の奥深く根ざすものであるだけに、むげに迷信であると理屈でおしきることは難しい。しかしこのタブーが一度打破られ、世間もそれを要求するようになれば、信仰も人間社会のものであるからには、大きく変っていかざるを得ないと考えられる。

長次郎が明治四十二年吉田孫四郎氏一行のガイドをつとめたのは、既にこのタブーが破られていたわけであるが、幾分のヘジテイトがみられる。ところでこれが縁で、後年長次郎を中心に大山村の山案内のグループができ、さらに案内人組合に発展したが、いまでは長次郎は劔岳よりむしろ黒部の名ガイドとして記憶されている。

明治四十年八月『富山日報』の記者午山生が立山温泉で取材したとき、長次郎はいわゆる落伍したまま和田の自宅にもどり立山温泉には引上げてはいなかったと思われる。また敢て氏名不詳としたのは、同村で外戚関係（妻が姉妹関係）にあった宮本金作らが強力にかばったためではないか。また、対芦峅、岩峅村との関係も考慮に入れた結果ではないか。

したがって、明治四十年七月劔岳の第一回登頂で主役を演じたのは測夫生田信であり、頂上で錫杖頭及び剣身を発見し、こ

明治40年8月6日発行『富山日報』記事写し

れらを父に渡したのも彼であったに違いないと考えている。

最初に明治四十年八月五、六日の『富山日報』の紙面にでて以降、同年の陸地測量部の部内誌『三五会会報』第十七号と、明治四十一年の『山岳』三年第三号と、三部の同文と錫杖頭と剣身の石版の模写が存在する。上手、下手は別として『富山日報』の押絵が一番実物に近いのが当然であるが、最近に至って、この絵は「実物大」と書かれた筆記体の書体によって父が描いたものであることが判った。これと交換に、記事の末尾の「午山生曰く云々」を書いて貰ったと考えるのは、筆者の思い過しであろうか。

（五）長次郎谷の命名

父の関与した大正二年七月発行の陸測五万分一地図「立山」以来、昭和四十五年十月発行国土地理院の「立山」まで七種類の改訂五万分一地図がある（日本の高山地方の地図としては立山湖ができたり、発電所ダム、登山路の開設等により資料修正の頻繁に行われた地方である）。この五万分一地図に、はじめて長次郎谷の地名が採用になったのは、昭和五年修正測図（地上写真併用）昭和七年六月発行の分からである。同時に「平蔵谷」が新たに記入され、また劔岳の高さも二、九九八メートルから三、〇〇三メートルに訂正された。長次郎谷の命名者は明治四十二年の吉田孫四郎氏一行であり、「輝鍬の巨大なるものを左方に送り迎へ

ること四度、尚も下れば、最後に最も大規模の襞が顯はれた。其内面を埋むる雪も亦立派である。是ぞ陸地測量部員が、幾多度の登攀を試み、失敗を重ねたる末、終に撰んで成功し得たる劔嶽唯一の登路なれ、其位置は別山峠よりの雪渓途上にて望見する劔嶽山腹の右端、U字形をなす絶壁の南側下なり、余等之を長次郎谷と命名す。」とあり、明治四十年長次郎は確にこの雪渓をつめており、既に登山用地図には、この名前を採用しているので陸測地図にも当然書込まれたに違いない。ただその頃陸測地図をみて、長次郎のことを、出張から帰京した在宅中の父に聞いたが、父の記憶には残っていなかった。

また、筆者はかつて、父のノートに走り書きされた「登山の掟」として、▽積雪間は融雪後より登山易きこと。△登山の際には必ず案内人を雇うこと。▽案内人の言は全く信を置かざること。▽糧食は多きに失すること。▽上下山の際上下に差支えなき程度において上下すること。▽谷を見て登山の道を判断すること。（一測量官の生涯―父の思い出『ケルン』四号、山崎安治も『劔の窓』に引用）を記載した。

これは当初、諸先輩の言動をまとめたものと想像していたが、再調査の結果、これは、明治四十四年の山岳会第四回大会に父が講師として招かれた際の、準備原稿の片隅に書かれたものであることが判明、したがって劔岳登頂の経験を生したものであることが判った。

（六）小説『劔岳 点の記』のできる迄

故新田次郎氏の小説『劔岳点の記』のできるまでの経緯については、小説の後書き「越中劔岳を見つめながら」に詳しいが、私なりに想像するに、氏が書下ろしの小説にしようと思われたのは、国土地理院所蔵（永久保存資料）の『越中国三等三角点の記及び成果表明治四十年度測量掛柴崎芳太郎』の発見？であろう。いわゆる『点の記』の存在については、今までどの山書にも現われていなかったようである。それを最初に発見し、取上げたのは、小説の参考文献の最初にも挙げられている松村寿氏の「劔岳先踏前後2―陸地測量部員の登攀」（昭和四十一年『山書研究』第七号）である。松村氏は郷土富山の山岳史研究の過程で父一行の劔岳登頂について関心を抱き、国土地理院に資料を求めて訪れた。その時のことを氏は「ここでは旧陸測以来の測量記録が整然と管理されていて改めて感心させられた。六十年前の資料を見せてほしいと云う私の面倒な願いは聞き届けられて何冊かの古い記録が探し出された。本稿関係の資料として貴重な収獲は、『越中三等三角点の記』の発見であった」と述べている。これによって氏は、父と測夫（現在の測手）一行が明治四十年四月二十四日富山入りし、十月十二日西大谷観測を終えるまで一連の測量作業の日程を明らかにしたのである。

父は自宅に在っては寡黙で特に仕事の話は殆ど口にしなかっ

たので、筆者も『点の記』の存在については松村氏の論文で初めて識り、五万分一「立山」の三等三角点の殆どすべてがこの年に父の手によって建てられたことを知らされた次第である。

小説『劔岳 点の記』の出版元である文春の記者、設樂氏が資料を求めて拙宅に来られたのは、小説の出版より約二年前のことで、写しをとるために私の集めていた父に関する資料の全部をお貸しした。その中にこの『点の記』を紹介した『山書研究』が含まれていた。新田氏は「彼が集めてきた資料の中には思いがけないようなものが幾つかあった」と述べているが、『点の記』はその重要な資料の一つと思われ「このテーマは別冊文春誌上に一挙に掲載するよりも、書き下しとして世に出したい」と云わしめている。もし『点の記』の発見がなかったら書き下しの小説となっても違った形となっていたであろう。

文春の記者が資料を集め、新田氏が実地に劔岳に登られて、執筆に取りかかる前に拙宅に来られた。その時氏は「あなたの父上のことを小説として取上げるのは、私が最適任である」というような主旨を話された。それまでにも父をモデルにして劔岳登頂を小説にしようと資料を求められた人はあったが、父等の登山は単なるスポーツ登山でなく測量という技術を伴うためかそのままに終った。ところが新田氏は勿論登山家ではあるが気象台勤務の長い経験があり、富士山レーダー建設を成功させた技術者で、官庁の機構、人的関係を十分わかっている人である。また氏の山岳小説は、出世作『強力伝』をはじめ、職業的登山家を主人公としたものが多い。従って氏の自信の程がよくわかり、氏ならば埋れていた測量官達の苦労を十分書いて頂けると思った。しかし、自分の父のことを語ったり、書かれたりすることは面はゆい感じのするものであり、また対先輩同輩、対家族、対日本山岳会についてどのように書かれるか若干の心配があった。また前述の宇治長次郎に関する昔からの疑問点については、その時は黙っていた。

あの小説が出版されて、一般の書評は、一つの事がなされている裏にこんな地味な命がけの仕事のあることに感激したという主旨のものが多く、特に陸測からの同輩故河上富次郎氏（新田氏に測量の技術面の指導をした人）が地理院の部内誌『三和』第十九号に「この本を読んでいると、自分が柴崎測量官であるかのような錯覚におちいってしまう。……家内も読んでいると、丁度おとうさんが仕事をしているような気がするといっていた。」また「初めて測量官のことが小説にとり上げられた」と書かれているのを読んで、新田氏に書いていただき本当によかったと改めて感じた。氏のいずれの小説も、苛酷な自然と対決する山男達のきずなの高まりが巧みに描かれていると思う。しかし実際は当時父は若輩で、短気で欠点も多く、もっとどろどろの苦闘であったかも知れない。それに小説であるからには幾多のフィクションが含まれ、また事実不明な点を作者の解釈で

補っているところがあっても当然許さるべきであろう。それにしても、私にとって、あの小説は厳しい条件のもとに仕事で生涯を燃焼しきった父のレクイエムとして読み、私の抱いていた疑問についてはそのまま葬って仕舞うことを考えていた。

一昨年の秋、富山市で国土地理院主催の地図展が開かれ、劔岳測量当時の関係資料も展示された。また劔沢その他の山小屋には劔岳頂上発見の錫杖の模造品が土産物として発売され、その説明文には小説を引用し、長次郎発見となっている。また同じ理由から本品の実物を展示しないことの不満を訴える人もあり、事実と小説の混同視がみられた。

そこで、小説は小説として、錫杖頭をこの度新設される富山県立美術館に寄贈する前にできれば歴史的事実或は疑問点の所在なりを明確にしておくべきだと考え、広瀬誠氏（県立図書館長、立山信仰研究家）にも御意見を伺った。広瀬氏からは、「剣岳に対する伝統的心情のため登頂を遠慮した」ということであれば、かえって長次郎の真面目を顕揚することにもなるとして、私自身詳しい執筆を要請され、また氏からは度々専門的な山岳信仰について御教示を受けた。

たまたま昨昭和五十四年三月日本山岳会の山崎安治氏、近藤信行氏の紹介で「劔岳発見の錫杖を囲む夕べ」を催していただき、前述のような私見の概要を語る機会を与えられ、また『山岳』誌上に発表する慫慂を受けた。『山岳』は父とも因縁浅からぬものがあり「越中劔岳先登記」（『山岳』第三年第三号）によって問題を提起して以来、明治四十四年の第四回総会には講師として招かれた父は、大正二年高野鷹蔵、辻村伊助両氏の紹介で日本山岳会入会、大正九年九月退会した。その頃父の仕事は外地の出張が多く、送付を受ける『山岳』も殆ど当時小学生の筆者が開封して読んだ記憶がある。そんな縁があるので、この際日頃懐いていた疑問の一端を権威ある本誌に敢て述べさせていただき、諸賢の御批判と御教示をあおぐ次第である。

（七）劔岳の標高について

昭和四十五年十月発行の国土地理院五万分一「立山」の地図より、劔岳の高さは三、〇〇三メートルより二、九九八メートルに改正され、大正二年発行の陸測地図にもどったとされ、三千メートルを切ったことに富山県庁をはじめ一般登山家を残念がらした。しかし、二、九九八メートルから三、〇〇三メートルに変ったのは昭和七年六月陸測発行の分からであって、大正から昭和初期の登山家は、これにならされていたわけである。地図の値段も、七銭五厘というと、ほぼバット一函の価格であったことを覚えている。

前述の『三等三角成果表　明治四十年度』によれば、四点の三角点（大窓、別山、気和平、西千人）から劔岳を観測し三角測量によりその高度を計算している。それを立山研究書としては

最初の文献である明治四十一年六月発行の大井冷光氏著『立山案内』に発表したが、地図発行以前であったので、陸地測量部内において問題となった。同書は『山岳』第三年第三号にも紹介されているが、その記述も仲々興味がある。立山の位置と標高と題し

「立山の位置は、北緯三十六度三十分、東経百三十八度にして、越中の東微南隅、信濃の境界に近く聳立す、高さは、越中人が、加賀の白山より馬の沓一束丈低きを恨みしは、昔のことにて、今春参謀本部陸地測量部の報告に拠れば即ち左の如し。

立山　二千九百九十五米
剱山　二千九百九十八米
白山　二千七百五十米

古人は立山（連峰）を阿弥陀如来に準らへ、之を囲繞せる連峰は、七十二支峰と称し、菩薩にかたどれり、又橘南谿の名山論には、左の如く観察せり

『最も高く聳え、互ひに相争ふ程なる峰五ッあり剱峰も其一なり、其外にも峰々甚だ多く連り、波濤の如く連り、皆立山なり（中略）これを見ても、人多能なる者は、反って其名を失ふを慎むべし』　云々」

また、父は明治四十二年度現在で、わが国主要山の三角点の標高の所在地別一覧表を、明治四十四年の日本山岳会の第四回大会における講演準備のためか或は山岳会の誰かに依頼されたのか、作成したのが現在残っているが、それには勿論剱岳の高さは、二、九九八メートルとなっている。

この父の測量結果について、鈴木弘道氏は「日本高山標高一覧」の中で「戦前における高山の測量結果を示すものとして、もっとも権威があるものといえよう。」と書かれている（『国土地理院時報』一九七八第五一号）。

立山周辺で、立山雄山頂上に一等三角点が陸地測量師館潔彦氏によって建てられたのが明治二十七年、陸地測量手古田盛作氏によって大日岳、栂山、大窓山、鍬崎山などに二等三角点が建てられたのが明治三十五年で、日清、日露の両戦役で中断されたためもあるが、父が明治四十年三等三角測量を終えてからでも大正二年「立山」五万分一地図が発行されるまで六年間が経過している。それは主として地図をつくる工程に由来するものである。一般に、三角科→地形科→製図科の分担作業であるが、例えば地形科が地上写真併用されたのが昭和七年六月発行の分、空中写真撮影が採用されたのが昭和三十二年三月発行の分からであるが、従来の平板測量の場合、五万分の一図を四分割し、地形科員四人で一図幅分を担当するのだが、空中写真採用の現在では一人で一図幅、つまり作業効率は四倍になったわけである。

なお標高の精度を示す具体的事実として次のような資料が残

されている。

父は大正九年以降十二年関東大震災まで台湾阿里山方面の測量に従事したが、その間嘉義庁下の蕃人（ツォウ族）、花蓮港庁下の蕃人（ブヌン族）の蕃社に生活した。これらの蕃人はまた首狩りの風習を改めず、巡査に守られて測量を続けた。

陸測における台湾の測量は大正三年に着手し、大正十四年度に完了した。新高山（玉山）三角点の真高は、阿里山方面より三角測量を新高山に至る間に進め、別に嘉義付近一等水準点より竹崎付近に至る迄水準測量を実施して、「基隆中等海水面上三九五〇メートルに存し、其の高さは従来当部測量の結果に徴し二〇糎以上の誤差の存せざることを保証するものなり。」（以上要点のみ。大正十四年七月陸地測量部三角科より総督府宛書簡）とあり、当時において地図の精度は現在と変らないことを示している。

（備考）

修験道については、全面的に高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』に負うところが多く、その他宮家準著『修験道』、広瀬誠著『立山と白山』、富山県郷土史会『立山と黒部』、石田尚豊『密教画』等から教示を受けた。

昭和五十四年四月『岳人』三八三号黒部の衆「黒部別山」には「越中国三等三角点の記」を引用し、『今日、黒部別山の登頂者として最も早期と思われるのは陸地測量部の柴崎芳太郎氏によるものである」として三角点の選定順序を追っている。

支部の歴史

石川支部のあゆみ

若宮　昇

支部創立趣意書

今回日本山岳会ノ組織拡大シ一般山岳愛好者並ビニ登山団体ヲ鳩合シ活発ナル行動ヲ開始セントスルニ当リ各県ニ支部ヲ設立スルコトニ相成リマシタ。

我々石川県ニ在住ノ日本山岳会員並ビニ賛助各位ニヨリ日本山岳会石川支部ヲ設立セントスルモノデアリマス。

本年ハ、国民体育大会ガ当県ニ開催サレ我ガ山岳部門ニ於テモ山岳展、講演会、映写会、山岳講座、登山等ノ文化的事業ヲ実施サルベク本支部ハソノ衝ニ当ラナケレバナリマセン。

各位ノ御加入ヲ期待シ御協力ヲ御願イスル次第デス。

就而設立準備委員会ヲ左記ノ通リ開催致シマスカラ御出席下サイマス様願上ゲマス。

記

日　時　昭和二十二年一月十七日

発起人　日本山岳会員　阿部壮次郎

〃　種村　竜夫

〃　磯野　三郎

〃　金沢　岳友会

〃　石川県松任農学校山岳部

賛助発起人　橋本　忠吾　山本　文吾

白山クラブ　毛藤　一雄

和田　貞雄　藤井　安司

米島　孝一　園部六三郎
玉井　敬泉　宮田　正男
立野　清一　宮川　精一
竹内　幸次　七野　政吉

後　援　石川県体育協会

責任者　磯野三郎

日本山岳会石川支部設立準備委員会仮事務所内

支部結成時のいきさつについては、当支部会報『峯』の創立20周年記念号（昭和42年6月発行）に詳細が載っているが、この中の池田知幸氏（二代目支部長）の「支部の思い出」と題した随想から引用すれば以下のようである。

「昭和二十二年一月十七日日本山岳会石川支部は支部長、阿部壮次郎（支部事務所　金沢市五宝町九一　磯野三郎方）以下で結成された。焦眉の第二回国民体育大会、昭和二十二年十二月医王山登山（事実上最初の国体登山）を担当するため非戦災県石川在住の会員を中心とし、県内バラバラの登山団体及び、個人を結集し、一応日本山岳会石川支部名義の下に新生の石川県体育協会に協力したものと考えられる。」

この間の状況については当会員の亀田与三次氏の文章を以下に引用する。

「第二次世界大戦終了後、国民の生活は困窮をきわめ、志気も沈滞していたとき、まずスポーツを盛かんにして明朗な国民生活を建設しようとの趣旨で、昭和二十一年十一月一日から三日間第一回の国民体育大会が戦争をまぬがれた京都を中心に大阪、兵庫、奈良の四府県で開催された。

しかし、この時の山岳部門は講演と展覧会が主で、登山は行なわれなかった。

翌二十二年同じく戦災地でない当県が立候補して第二回は金沢に於て開催された。そして山岳部門に始めて登山が認められると共に我が支部が本部より計画を委任されて行うこととなったが、前例のないケースで、支部の苦労も大きかった。

最初は、会場を白山とも考えたが、会期は新雪も来る頃でこれを加越国境の医王山（九三九米）に変更、秋光を浴び全山錦を織りなす山中に集中登山の形式で行なわれた。この方法は全国から参集した府県代表選手二〇八名が山麓五つの登山口をコースとして登り、山中で合して交歓を行なうもので医王山が一躍日本的な山となった年である。

帰路は共に鳶ヶ岩で模範ロッククライミングを見学し、三蛇ヶ滝から大池、浮島（現在はのることが出来ない）を経てノゾキを廻り見上峠に出て金沢へ下山した。」

×　×　×

発端は国体登山部門の運営が目的の一部であったにせよ、国体開催が一地方支部に与えた影響は大きく、それを契機としてより前進的な山行計画が続々と提出され、実行に移されるよう

になった。特筆すべきは、現在の近代的な登山スタイルをもってしてもなかなか困難な山行が創立時の支部会員の手により数多く行なわれたことであるが、その一つを紹介したい。

昭和二十三年三月支部最初の大きな活動として積雪期白山縦走を行った。多数支援隊員を含む大部隊を周到な計画により行動させて完全に目的を遂げたのである。

以下にその時の報告書より原文のまま引用する。

「積雪期白山山脈縦走」

目　的

春近き三月とは云え積雪期の白山山脈は未だ雪深く、未踏の地として残されていた。（四月以降の記録は部分的には金沢営林署、四高旅行部、金沢医大山岳部、葦台スキー協会にあり）我々地元山岳人の誰しもが夢見ていたところであった。

北の冬季処女ルートの開発と、国立公園候補地白山の未知の景観を世に紹介する為、我々は此の壮挙を昨年第二回国民体育大会終了後、直ちに計画し、数十回に渉る会合とトレーニングを重ねてきました。

隊員名簿

白山縦走本隊

磯野　三郎　35才　隊長
山本　紀一　38才　カメラマン
西川　博　21才　庶務、会計
村本　誠登　19才　雪洞
羽場太喜男　22才　医薬
木村　桂　22才　食糧
青木　茂　22才　記録

援助隊白山隊

土田　喜作　49才　滝田外雄　25才
細川外茂次　25才　馬場勝嘉　23才
吉田　外義　24才　宗守義雄　25才

大門山出迎隊

二塚　良治　22才　小原庄作　25才
宮岸　岩夫　19才　中谷信夫　24才
津田与志雄　22才　山本泰治　28才
西出　専一　19才　山下雅博　18才
海道　辰雄　18才

連絡本部

孫田　三郎　24才

会合・トレーニング

1、昭和二十二年十二月二日
　支部例会にてメンバー決定
2、十二月六、七日　西川、青木
　見定泊挙原山往復、雪中行進
3、十二月十九日

本隊全員と援助隊責任者各一名打合せ

4、十二月二十五日本隊全員
ザイル捌練習、コース及び携行品打合せ

5、昭和二十三年一月十五日
訓練スケジュール打合せ　全員

6、一月十七日
各隊編成再検討

7、一月十八日
医王山スキー、輪カン併用行

8、一月二十二日、各方面依頼状発送
白峰、尾口村村長宛、馬狩野谷桂部落会長宛

9、一月二十五、二十六日
国府村観音山にて輪かん（爪有りと爪無しとの比較）
研究

10、一月二十八日
全員コース研究、食糧調

11、一月三十一日、二月一日
鶴来月惜山、本隊全員にて雪洞、伝書鳩の研究
スキー行、半雪洞とす。円形深さ五尺の穴にて天井スキーを周囲より突出し携天を以て被す。防寒具不備と焚火不練習のため着火せず寒さのためほとんどねむれず。
伝書鳩、北国毎日新聞社の相坂部長より四羽を借り受け、翌早朝放すも内一羽のみ帰社せり。然も二十四五時間を要せり、他三羽は遂に帰らず。鳩は荷がかさばり、不馴の点もあり、縦走には適当とは思われず。

12、二月一日～五日
大門山スキー行

13、二月三日
各隊連絡事項打合せ

14、二月七日
雪質等の研究、麻生武治氏を囲みてスキー練習（大乗寺山）

15、二月十日
石川県庁民生課長、水上鏡一氏より援助声あり。

16、二月十一日紀元節
またぎ焚火、輪かん、雪洞研究
鈴見山、大池付近にて、奥卯辰山（現在健民公園）

17、二月十四～十五日
全員にて輪かん、スキー、雪洞訓練（医王山）

18、二月十七日
例会　各班の打合せ

19、二月二十四日
本案再検討

20、二月二十六日
装備の再検討
21、二月二十六～二十七日
挙原山―二又川、雪中露営、半雪洞
22、三月二日
例会、深田久弥、麻生誠治、毛藤一雄各大先輩より色々注意事項をうける。
23、三月四日～七日
高三郎山及び笈ヶ岳より以北大門山の偵察
24、三月六日
金沢営林署長、宮崎勝二氏援助を約さる。
25、三月八日
シュラフ、ザックについて研究
26、三月九日
県庁（土井副知事に会見）
市役所（吉田助役に会見）援助方依頼
27、三月十一日
本隊全員鶴来町加賀病院にて身体検査
28、三月十二日
北陸鉄道、金名線及び湯涌バス、全員無賃乗車券交付受く。
29、三月十二日
総合打合せ
30、三月十四日
食糧買物
31、三月十七日
留守隊の任務打合せ
32、三月十八日
壮行会（仙宝閣にて）
吉田次作氏主催本隊全員
33、三月十九日
荷物分担、最後打合せ
34、三月十九日
竹田厚生大臣より激励電報受領。
35、三月二十～三十日
縦走
36、三月三十一日
午前、市内挨拶廻り、朝日、毎日新聞、県庁、市役所、商工会議所、スキー連盟、放送局、吉田次作氏宅
午後、鶴来方面挨拶、白山比咩神社、鶴来役場、小堀定信氏、池田知幸先生
37、四月六日
縦走報告会　商工会議所
38、四月七日

TOTKより報告放送

39、四月九日

竹田厚生大臣来県報告す。

40、四月十日

縦走報告会　仙宝閣

41、四月十七日

本隊員反省会

反　省

我々日本山岳会石川支部に於いてはポーラメソードの研究をやるまでには至っていない。そんな訳で今回の登山は大変勉強になった。振返ってみて各部門に於て満点だったものは殆んどない。

1、計画

大体に於て充分余分を持たした計画のつもりだったが、尚日数の余分を持たすべきであった。

2、装備

(a) オーバーシューズ

これを使用した者は磯野のみであり、実に偉力を発揮した。

全行程一度も靴下をぬらさなかった。他の隊員は乾かすのに大変労力を要したし、行動中冷たい思いをした。

尚充分油をしみ込ますことが必要である。

(b) メタ・アルコール

アルコールタシクは充分頑丈なものが必要で荷が大きくなると無理してリュックに詰め込むから、ハンダが離れて漏ったりなどして困った。メタは精分の抜けたものもあり点検を要し余分を要す。

(c) 雪眼鏡

いくら濃くてもよい、必ず予備を用意すべきである。

(d) 鉈

耐寒鉈を研究し用うべきである。鋼が凍っているので歯がこぼれ易く持参の二丁共使用不能近くなった。

(e) 時計・写真機

寒さのためか六泊中五泊まで止ってしまった。下小屋へ着いたら動き出した時計もあった。

(f) 懐炉

非常に偉力を発揮した。

頭寒足熱とは昔からよくいったもので、それに腰骨付近が地冷のため相当こたえた。二個を必要とする。

(g) 薬品

目薬が不足をきたし、日焼止クリームはかなり研究し特別調成を要すると思う。キニーネ入クリーム、オリーブ油等が良いが目下入手難であろう。

3、食糧

米・餅等に相当頼ったことが失敗であった。相当のアルバイトの後、燃料を採り炊事をすることは大変な労苦を要し、雪洞作業にも影響し、ひいては行動にも影響するものと思う。

縦走中は雪洞場所も尾根筋に制限されることが多く、ために風も相当強く火をつける迄に一苦労。水を得て飯を炊くまでに又一苦労する。炊いた飯もそのままにして置けば二時間位で凍り、餅等も焼いて肌につけておいても三時間程で硬くなる。携行した食糧によればパン、干イモ、乾パン等が良く、ハム、バター、ゴマミソ等、脂肪、糖分の多い物が良い様であった。

以上今回の縦走の食糧を簡単に述べてみたが、軽くて体積が小さく手軽に食することのできる物を選ぶことが大切ではないかと思うし、満腹感を与えるものを基準として選択すべきではないかと思う。

これらの報告書を三十年有余たった今、読み返してみると現在とのあらゆる面での雲泥の差がありありとわかる。ただ岳人としての根性だけは現在の我々よりも遥かにすぐれていた様に思われる。

この大事業の後はヒマラヤへの夢をいただき続けていたのではなかったか。

× × ×

当支部も創立来、幾たびか危機も無かった訳ではなく、昭和三十五年九月二日石川県岳連結成当初支部は県体協山岳代表団体としての立場上これに加盟しなかったが、内部の機構の足並がそろわず先輩諸氏たちが苦労されたらしい。雨降ってのたとえではないが、当支部においても海外遠征計画の話が持ち上り目標の山をチャムランとし計画を進めたがJAC理事会に名乗りをあげた時点で既に立遅れ、目標をガネッシュヒマールに転じたが後援が続かず延期とせざるを得なかった。これ以来「必らずヒマラヤへ」の夢は支部会員の心の中に燃え続け、昭和四十六年、今はなき深田久弥先生はじめ数多くの方々の協力を得て、遂に新ルートからのテイリッチミール峰登頂という支部会員の長年の夢を果したのである。この成功も支部会員相互の協力があったからにほかならないし、往時の積雪期白山系完全縦走の努力の延長線上に位置づけられるのではないかと考えている。

最近三人寄れば山岳会といわれ、出来ては消えてゆく現在、先輩達の苦労を努力により築いてきた支部の歴史と伝統を我々もしっかりと受継いでいかなければならない。

高山植物の話

小野幹雄

高山植物の特徴

夏山の魅力の一つは、あえぎあえぎ登りつめた稜線や雪渓の縁にくりひろげられる、あのお花畑の美しさであろう。たとえば南アルプスの北岳。頂上近くの礫地に展開するタカネシオガマやイワベンケイ、シコタンソウなどの、赤や黄色、クリーム色などを敷きつめた花園の美しさは息を呑むばかりだ。東北は八甲田山や飯豊山などの、雪田のあとに咲きそろうハクサンコザクラやアオノツガザクラの可憐さは、一度眺めた者には忘れられない。

高山のお花畑を彩るメンバー、いわゆる高山植物の最大の特徴は、この美しさ——がらに似合わぬ美しさといった方が正確だろうか——であろう。高さ数センチの小柄な体に、不似合いに大きく鮮やかな花をつけるものが多い。花屋の店頭を飾る園芸植物に優るとも劣らぬこの美しさが、高山のお花畑の何よりの魅力である。けれども、体と不釣合いな花の大きさは、実は花が大きいのではなくて、植物体が小さ過ぎるためである。高山の厳しい自然の中で、夏のわずか三カ月ばかりの間しか、日光を利用しての生長（物質生産）ができない高山植物は、当然のこととして一年間の生長量がきわめて少い。年間わずかに数ミリ程度の生長である。だから高さ数センチの植物体も一〇年や一五年は生き続けた結果なのだ。この生長の遅さは当然、節と節との間隔を縮め、葉を密につけることになる。そして、時至れば、その茎の頂きや、密に茂る葉の付け根に、意外なほど目立つ花をつけるのだ。それで、花の美しさというより、その花を支える植物体の貧弱さ、あるいは生長の遅さを、高山植物の特徴としてとらえるべきであろう。

高山植物の第二の特徴は、そのいじけた植物体、とくに葉の

示す共通の姿態である。それらは大体に、質が厚く、表面積は狭く、そして深く密な毛におおわれていたり、裏側に向ってめくれ込んでいたりする。これは水分の蒸発を極力抑えた、乾燥に対する自衛手段である。高山帯はいわゆる乾燥地帯ではないが、雪渓のまわりや沢すじなどを除いては、地下の水分は決して豊かではない。とくに尾根筋や頂上付近の礫地では地下水位は非常に低く、その水を求めて植物の根は長く、深く発達する。一方、常時強風にさらされるため、葉面からの水分の蒸発は甚だしい。そのような状況の中で、なけなしの水分をいかに体内に維持しておくかという必死の努力を、この厚ぼったく、毛におおわれた葉はもの語っている。もち論こういう言い方はあまりに疑人的で、目的論だとのお叱りを受けるだろうが、ダーウィン流にいい替えれば、そのような乾燥適応の仕組みをもち得た種類だけが高山帯に生を維持し得ているのだということになる。

お花畑のいろいろ

これらの特徴は、とくに吹きさらしの尾根すじや、崩壊したガレ場などのいわゆる高山礫地に生じる種類で典型的である。このような礫地に生じるお花畑を「乾性お花畑」ということがあるが、その乾性お花畑のメンバーこそ、最も典型的な高山植物ということになろうか。

これに対して雪渓の縁やその下部、あるいは湧き水のある岩の割れ目などは、高山帯の中では比較的水分に恵まれている。遅くまで残雪のある雪田も同様だが、こういう場所には「湿性お花畑」ができる。日本の高山では、ハクサンコザクラやヒナザクラ、ユキワリコザクラなどのサクラソウ類が、そのメンバーとしてよく目立つ。これらは何れも背の低い小型の草だが、ピンクや白の美しい花をつける。また、チングルマやミヤマダイコンソウなどがしばしば大きな群落を作り、アオノツガザクラやヒメシャクナゲなどのツツジ科の小低木もここに顔を出す。高山性のランであるハクサンチドリやテガタチドリ、ホソバノキソチドリなどもこのお花畑に欠かせない常連である。

水分に比較的恵まれるため、これらの種類は乾性お花畑のメンバーにくらべて、葉の特殊化——縮れたり、毛におおわれたりといった乾燥適応の程度は低い。だから一見して、その外形は下界の普通の植物に近い。しかし厳しい環境に生きることには違いがなく、遅い生長を強いられる点も同じである。植物体、とくに背丈が小さく、節間がつまり、柄にくらべて花が大きい——といった特徴はやはりそのままである。

一般に高山草原（アルパイン・メドウ）と呼ばれるのは、この湿性お花畑と、それに続く草原である。上記の湿性お花畑の常連メンバーの他に、ハクサンイチゲやミヤマキンポウゲ、それに多くのリンドウ科の種類もみられる。ヨツバシオガマやエゾシ

オガマの美しい花も混る。キバナノコマノツメ、オオバキスミレなど高山性のスミレ、それに多くのイネ科の高山植物もある。この高山草原は植物の密度が高く、またかなり広い面積を占めていて、メンバーとなる種類も多い。そしてこの草原はしばしば高山帯の下部から、針葉樹林帯（亜高山帯）のへりにまで達している。

とくに、雪融け水の流れこむ雪渓下部や、針葉樹林の縁では、高山帯とは違った豊富な水分と栄養に恵まれて、草原の背丈が非常に高くなっている。種類としては湿性お花畑の構成メンバーとダブルものが多いのだが、これが同じ種類かと疑われるほど、大きく豊かに育っていて、ときには高さ一メートルもの草丈となる。シナノキンバイやキンバイソウ、イブキトラノオ、ハクサンフウロ、グンナイフウロなどが代表種であるが、それに混ってクルマユリやヒオウギアヤメなども美しい花を目立たせる。またアザミの類や高山性のヒゴタイ、タカネコウリンカなどといったキク科の面々もここによく育っている。このような、肥えた草原をとくに「高茎草原」とよんでいる。白馬尻あたりの高茎草原は、花の満開時には圧倒されるようなボリューム感がある。

ところで、高山植物という言葉は本来は高山帯に生活の主体を置く植物群を指していう言葉で、厳密な定義はないけれど、森林限界より上部の地帯に生える植物群落の構成メンバーのことである。もちろん、その同じ種類が高山帯よりずっと下の、ときにはたかだか数百メートルの低山帯にまで降りて来ていることもあるが、高山帯を主たる棲み家としていれば、それは高山植物といってよい。一方、高山帯のすぐ下に続く亜高山帯、つまり針葉樹林帯の中を主たる棲み家とする一群の植物がある。ハクサンシャクナゲやミヤマハンノキなどのやや大型な低木をはじめ、スノキ、コケモモ、リンネソウなどの小低木、さらにベニバナイチヤクソウやコイチヤクソウ、ジンヨウイチヤクソウといったイチヤクソウの仲間、そしてフタバラン類やホテイラン、キソチドリ、キバナノアツモリソウなどといったランの種類も多い。また変ったところではオニクのような寄生植物もミヤマハンノキなどの根に生じる。

これらの面々はオオシラビソやコメツガなどの針葉樹林の林床に、下草のような形で生えていて、あまり陽の当らない薄暗がりの中に、ひっそりと生じるやや陰性な植物である。しかし、乾性お花畑などに見られる華やかな高山植物とは対照的に、じみで、味わいの深い造形のおもしろさをもった花が多く、山草家などの間でファンが多い。そんなせいもあって、森林限界より下の針葉樹林は本来の意味での高山帯ではないのだが、この林床の植物を高山植物として扱うことも多い。

世界各地の高山植物

高山植物の美しさ、特異さはもちろん日本の高山だけのことではない。アルプスを始め、ヒマラヤでも、コーカサスでも、新大陸のロッキー山脈やアンデス山系でも、高山帯の高さはそこの緯度その他で違うけれど、ほぼよく似た景観をもっている。高山という共通の状況のもとで、よく似た厳しい気象条件に適応した植物は、外形からも生理的にもほぼ同じ特徴をもってしまうからである。しかし、そのような外面的な類似、いわば他人の空似のようなこととは別に、高山植物には地域を超えて存在する「血のつながり」のようなものがある。分類学的な近縁性である。たとえば、アルプスの象徴的な高山植物であるエーデルワイスは、日本の早池峰や至仏山や木曽駒岳などにあるヒナウスユキソウの類とごく近縁な植物である。同様にイワギキョウも、イワカガミも、シコタンソウも、ハクサンイチゲも、それぞれに驚くほどよく似た仲間をアルプスやロッキーにもっている。これは単に、気候条件などの類似からでは説明できない。

このような北半球各地の高山植物相互の近縁性を、植物地理学では「極地高山要素」という考え方で説明している。それによると、第三紀に少くとも四回はくり返された氷河時代に、それ以前は北極を取り巻く北半球の高緯度地方に広い分布をもっていた植物種が、氷河に追われて南へ分布圏を移動した。その後、氷河の後退期（間氷期または後氷期）に、今度は氷河を追って再び分布圏を北上させたとき、一部は山脈の上部に上って隔離され、孤立した。だから、北半球各地の山上に孤立して生育する高山植物は、もとは共通の祖先をもち、各山塊に隔離されてから、今日まで比較的短い時間に、それぞれの場所で、異なった進化の道を歩んだと考えられる。その時間が短かいだけに進化の程度は浅く、したがって互いによく似ているというわけである。

前述のエーデルワイスとヒナウスユキソウ類も、アルプスと日本の高山にそれぞれ隔離されてから、今日までたどった進化の程度を反映したものであり、まして日本の中での、早池峰や至仏山、木曽駒岳などへの孤立は、もっと後に起こったことなので、それらの間の違いはごくわずかということになる。ハヤチネウスユキソウ、ホソバヒナウスユキソウなどの違いは、そのごくわずかな違いを表している。このような道のりを歩んだ各地の高山植物たちを、「極地高山要素」と呼んでいる。世界の高山植物相互の類似は、他人の空似などではなくて、この「極地高山要素」という共通の血縁がもたらすものと理解されている。

編者注・本稿は、昭和五十四年六月二十九日、科学研究委員会主催の講演会で話された講話をもとに、講師である筆者がまとめたものである。

追悼

中島正文氏（一八九八～一九八〇）

中島正文氏から最後のお便りをいただいたのは昭和五十四年七月二十四日。七月二十三日付の速達であった。右半身が不自由なため左手で書かれた、たどたどしい筆跡の葉書であった。何の急ぎの用かと驚いて読むと「越信新道」「宮永家々系」について『富山史壇』誌に論文を書きたいが「如何にや」ということであった。私はすぐ筆を取って「よろしくお願いします。何とぞ御健康には充分御配慮の上、御執筆下さいませ」と返事した。

中島氏は日本山岳史研究の開拓者であった。最大の力作「黒部奥山と奥山廻り役」をはじめ「神河内志」「白馬岳雑攷」等の大作がいずれも『山岳』に発表されたが、先駆的労作であって、しかも何びとの追随も許さぬ決定版であった。この他「針木峠考」「播隆上人の生涯と槍ヶ岳開山」「山手帖抜書」「立山室堂の話」等々の貴重な研究をおびただしく諸誌に発表されている。

しかし氏は昭和三十年ごろから登山史の研究を発表されなくなった。その氏が久しぶりで執筆の意欲に燃えて居られることを知って、私の心は躍った。同時に不安を覚えた。

氏は昭和四十三年四月、中風で倒れられた。奇跡的に回復されたが、半身不随に近く、松葉杖にすがって辛うじて歩行された。自宅ではいつもベッドに寝て居られた。ろれつが廻らず、お話は聞き取りにくく、左手で字を練習されたが、その筆跡は読みにくかった。氏にはお子様はなく、奥様は長い間入院されているということで、わびしい一人住まいであった。食事や掃除は近くの親戚の人がお世話していた。

氏は地元では俳人として知られ、杏子（きょうし）と号し、前田普羅氏のあとを継いで『辛夷（こぶし）』誌を主宰する、富山県俳壇の長老であった。また多年富山県図書館協会長・砺波図書館協会長を勤め、病臥後は両協会の名誉会長に推され、斯界に君臨され、富山県を全国屈指の図書館充実県にもりたてられた。氏は病床で『辛夷』の選も続けられた。図書館協会の総会等には不自由な身をおして出席され、会員は感激して、松葉杖姿の氏を拍手して迎えた。私の勤めている富山県立図書館へ突然やって来られることが年に二、三回はあった。そんなときは俳句の弟子の運転する車に乗って来られるのだが、右手右足の利かぬお体で車からの乗り降りは大変であった。

その氏が、最後の執念を燃やされたのが越信新道（針木新道とも立山新道とも信越連帯新道ともいう）であった。明治初年、加賀藩士族と信州旧大庄屋とが協力して開通社を結成し、針木峠、黒部川、佐良峠を越え、立山温泉を経て、信州と越中を結ぶ道を開き、牛を使って物資の運搬もしたが、維持困難のため数年で廃絶した。しかし、この道を利用してアーネスト・サトウもアトキンソンも針木峠を越えた。開通社解散後の荒廃した道を辿って、ローエルも針木を志した。ウエストンも二回（明治二十六年、大正三年）にわたってこの道を越え、その紀行文は『日本アルプス』『極東の遊歩場』両書を飾った。この道の歴史はなお多くの謎に包まれている。私が二十年程前この道について書いたとき、中島氏はにこにこ笑って「君の研究には大事なことが一つ抜けている」と評された。「どんなことですか」と尋ねると「それは言うわけにはいかんよ。いずれ私が書く」とおっしゃった。氏のまだお元気なころのことであった。その懸案の論文作製に氏は燃え残る力を集めて取組もうとされたのだ。

宮永家は加賀藩山廻り役の家柄で、しかも中島氏はその血筋を引き、その史料を引継いでいる。その宮永家研究はこれまた山岳史研究の重要な一環を成すものだ。その二つの論文を、私が編集に関係している『富山史壇』誌に発表したいと氏は言って寄こされたのだ。

氏の年齢と健康から考えて、おそらくこれが氏の最後の論文になるであろうと私は直感した。氏はお元気な頃よく「私の書こうと思っているものを皆書いたら、私の秘蔵史料は残らず県立図書館に保管してもらうよ。君のいるところでなくてはだめだ。史料の価値がわかる者のいるところで、保管の確実なところでなくては…。しかし、それまでは君にも絶対見せんぞ」と言われた。また松葉杖姿で図書館においでになったときも「そのうちに私の所蔵史料はお渡しするよ」といく度か言われた。いよいよその最後の論稿に着手されたのだと私は思い、燃えるような思いで氏の健康と研究の完成を祈った。

しかし、心待ちにしていた氏の論文はついに成らなかった。昭和五十五年四月二日、氏の訃報に接し、私はがっくりと肩を落した。しばらくお目にかからなかった間に、氏は癌に犯され、北陸中央病院に入院されていたという。

山岳史研究の大先達今やなし。昭和二十七年夏、氏のお伴をして立山山麓芦峅へ赴いた折のこと、それ以来のさまざまのことが夢のように思い出される。四月五日、小矢部市津沢町の鄙びた寺で氏の葬儀が営まれた。その日の空は晴れて風強く、白馬、劔、立山、薬師、黒部五郎、鷲羽の峯々が鮮やかに見えていた「若い頃日本アルプスを歩いた時…」と氏がよく話された山々だ。その山々の歴史を誰よりも深く究め、誰よりも確かに知悉していた人、今やなし。

「立山のまこと神さび五月晴」

氏の句である。氏は未完成の論文を胸に抱いたまま、はるかに立山連峰を望む小矢部川畔の祖先墳基の地に静かな眠りに就かれた。

略　歴

明治三十一年十月二十日、富山県西砺波郡津沢町に誕生。
大正十年、関西大学予科終了、同法学部中退。
大正十二年、津沢郵便局長（昭和四十二年まで）。
大正十三年六月、日本山岳会入会（会員番号八五七）。
大正十五年、俳句を作り始め前田普羅に師事。
昭和七年九月、私立中島図書館創設、館長となる。
昭和七年十一月、砺波図書館協会創立、初代会長。
昭和十二―十四年、「黒部奥山と奥山廻り役」発表、十四年合冊刊行・（小島烏水序文）
昭和十六年、「神河内志」発表。
昭和十六年六月、富山県図書館協会副会長。
昭和二十三―二十七年、「白馬岳雑攷」発表。
昭和二十五年十月、日本図書館協会、図書館設立育成功労者表彰。
昭和二十九年五月、富山県図書館協会長。
昭和二十九年八月、前田普羅の後を継ぎ『辛夷』主宰。
昭和三十二年十月、句集『花杏』刊。
昭和三十三年七月、富山県社会教育委員。
昭和三十四年十一月、社会教育功労者として文部大臣表彰。
昭和三十七年七月、「山の恩人」として厚生大臣表彰。
昭和四十年十一月、県政功労者として富山県知事表彰。
昭和四十三年四月、中風発病、半身不随となる。
昭和四十三年十一月、叙勲（勲五等双光旭日章）、北日本文化功労章、小矢部市文化功労章受章。
昭和四十五年五月、富山県図書館協会名誉会長に推戴。
昭和四十八年四月、砺波図書館協会名誉会長に推戴。
昭和四十八年、日本山岳会永年会員に推挙（在籍五〇年）。
昭和五十五年二月十二日、病状悪化、北陸中央病院入院（胃癌、肝転移）。
昭和五十五年四月二日、逝去、八十一歳。
昭和五十五年四月五日、葬儀（小矢部市津沢、正安寺）

（廣瀬　誠）

中島正文氏とは全くといっていい程交際がなかったが、昨年の夏、ある会報に原稿を依頼することになり、はじめて手紙をさし上げた。

数日たって、家人が「富山の誰かから電話です」との声に、電話に出てみると、中島正文氏からであった。わたしは驚いた。まさかお会いしたこともない中島氏から電話がかかるなんて想像もしていなかったし、年令的にいっても大先輩であり世代が全くちがっていた。それに、東京と富山という距離の遠さもあった。

それよりも驚いたのは、中島氏が病気のために寝ておられ、コトバを発するのが非常に不自由であったことである。お病気

だとはうわさで聞いていたが、右半身が不自由で寝ておられるとは知らず、原稿依頼を出してしまった失礼を自らに恥じた。

しかしながら、電話で話しているうちに、中島氏が迷惑がっているよりも、むしろひそかに喜んでおられる様子なので、わたしもうれしくなってお話を聞いていた。実際、話をするということではなく、話を聞くという状態であった。

話される内容は主として山岳書のことであり、しかも一般に市販されている印刷物ではなく、筆写本のことであった。また、収集に苦労されたことであった。戦後すぐに火災に遭われて、書物蔵も焼失したこと、その後また収集につとめられたこと、先祖が加賀藩の山廻り役であったこと、その日記が残っていて、それらを利用して『山岳』に「黒部奥山と奥山廻り役」を寄稿されたことなどを話された。わたしはもっぱら聞き役ではあったが、この際聞いておきたいことがたくさんあったので、なるべくそういう風に話の内容を持っていきたかった。

けれども、思うようにいかなかった。一つのコトバを発音されるのにだいぶ苦労されているようで、痛々しかった。家人が「ナカジマ」という音を聞きとれなかったのも無理はなかった。御本人は喜ばれているようなので、聞く方はいくらか気持は楽であったが、それでもいろいろと聞き出すというのは気が引けた。したがって三十分程話を伺ったが、量的にはそれほど多くはなかった。

コトバが不自由なのにもかかわらずお電話をいただき、しかも三十分という長い時間にわたってお声を聞くことができたのは、ほんとうにうれしかった。まして、右手が利かないので左手で原稿を書かれたという話を聞いて感動した。わたしの失礼な原稿依頼状をむしろ喜んでいただいたようで、わたしはなんとなく心楽しかった。

八十二才という高令で、右半身が不自由、しゃべることもままならないという状況での、東京の顔も知らない後輩への三十分もの電話、左手による原稿の執筆など、山男の強さなくしては考えられない。

最近でこそ中島氏の登山史研究には接することができなかったが、昭和十年代から二十年代の戦争前後にあっては、日本の明治以前の登山史研究は、中島氏によって押し進められたといってよいだろう。『山岳』に発表された研究は、次の三つであるが、いずれも大部な研究である。

「黒部奥山と奥山廻り役」
　32年1号、33年1号、34年1号
「神河内志」　36年1号
「白馬岳志雑攷」
　43年1号、45年、46・47年

特に「黒部奥山と奥山廻り役」は、これだけで一冊の本にもなるほどの大部な論文である。

このほか『山と渓谷』には次の三篇を寄せられている。

「針ノ木峠考――佐々成政の針ノ木越」
（昭和15年5月号、7月号）
「峠の古文書」
（昭和22年3月号）
「二つの鷲羽岳」
（昭和16年5月号）

いずれも古文書による論説であり、中島氏の面目躍如たるものがある。中島氏の収集した古文書の量からいっても、もっと多くの論説、研究が発表されてしかるべきであったが、このたびの死はその意味においてもじつに残念である。

絶筆とも思われる原稿によると、焼失したとされた古文書も、山廻り役の日記をはじめ、多くのものが残されていたらしいし、その後収集されたものも多い。そして、この絶筆となった原稿を書いたのをきっかけとして、研究を発表される意思があったらしいだけにじつに残念である。

中島氏の杏文庫の内容については、昭和十五年にその目録が出されたが、昭和二十一年の大火で大半を失い、その後の収集分についての目録が出されたが、昭和二十一年の大火で大半を失い、その後の収集分についての目録は一般に公表されていない。昭和三十七年にガリ版で「杏文庫山岳古史料蔵目　其二」としてまとめられたが、その後印刷されたかどうか、わたしにはわからない。しかし、この目録をみても、中島氏がどんなに執拗に江戸期の山に関する古文書を収集されていたかがわかる。

それにつけても、中島氏の登山史上の業績を偲び、杏文庫目録の作成およびその研究成果をまとめてはどうかとひそかに願っている。

中島氏とは殆んどつき合いがなかったが、三十分間も話をしたのは、たぶん会員の中では自分が最後ではないかと思うので、敢えて筆をとった次第である。

（水野　勉）

額田　敏氏（一八九二～一九八〇）

額田さんと親しくおつきあいさせていただくようになったのは、拙宅に近い船橋市の幸楽台に移られてからのことで十年近くになります。額田さんはご承知のように、戦前は会のために

活躍され、山やスキー、そして写真に関する有益な論文を発表されておられました。ところが戦後になって、まったくその活動がとだえてしまわれました。額田さんが船橋に居られると人づてに聞いて、間もなく拝眉の機を得るようになったのでした。昭和四十六、七年ごろのことです。

その頃、額田さんは東邦大学の教授を停年退職され、講師として週一回ぐらいの割で講義を受けもたれのんびりとお勤めだったのですが、如何せん老生はまだ勤め人ではありましたので、度々御宅へ参上する訳にも行かず、お互いに便りのやりとりが多かったと記憶します。そのなつかしいお便りから、すこし抜き書きさせていただきます。

「私は戦前までは山岳会の仕事など手伝いをして居りましたが、戦後に至り私の人生観に大きな疑問を感じ、以後唯一人で、今迄の様な社会との交渉を成るべく断ち切り、わが途を行くべく決心致しまして、山岳会の出入りも致さず、山をも十数年間断ちました。その後山は矢張り忘れることができず、唯一人で山行を復活させましたが、老境にも入りました関係上、手頃の低い手近な山のみに、静かに登ることに致して居りました。」

このお便りは封筒を失してしまいましたが、多分昭和四十年のはじめ頃いただいたものと思います。

「四月八日はあたかも降誕会で御皆々様のお出かけの御予定であったかも知れませんのに、そこをお訪ねして失礼したと後から考えつき恐縮に存じました。」

額田さんはこの時、老生宅が成田にあるところから一家そろってまじめな仏教信者で、花まつりに参加するのでは、と思い付かれたのでありましょう。人の心を常に考えられてから行動されるような、静かなタイプの学者でした。

「数年前に笛吹川西沢から移植しましたシャクナゲが今年始めて開花、朝夕眺めて居ります。写真に写しましたから出来ましたら御送り致します。」

「春です。リンドウの芽、スズランの芽も地上に時を間違えず出初めました。朝晩にその成長を眺めるのが楽しみであります。シャクナゲの花も蕾が発くのも遠くないと思われます。昨今『一老人の環境』です。」

このように四季の移り変りをよくお便りくださいました。

「拙著『赤外線写真』は梓書房発行が余り売れなかった様に覚えて居ります。その前に『山岳写真のうつし方』を玄光社から出しました時、赤外線写真を種々写して、それらのデータを括めるつもりで原稿にしたもので、云わば『山岳赤外線写真』とでも言うべきでした。今日から見れば、まことに幼稚なおはずかしいものです。戦災で私は本をすっかり焼きました。」

このように戦前に二冊の山岳写真の本を出されております。

「私は寄る年波で山には殆んど登りませんが、年に一度、三月に八方尾根に登り、後立山連峯の写真撮影を唯一の楽しみとして居る様な生活であります。愚妻と一所にそこの国民宿舎に泊り、雪の山を眺め、その姿を写したり散歩したりして居ります。そのために中型のマミアの6×7型を買って、それで写すのを楽しみにして居ります。それで練習のために、日曜毎に暑い夏中十五キロ位の荷を背負って、習志野原を約二里位散歩して居ります。」

これは昭和五十一年九月四日付けのお便りです。額田さんは最後まで山への愛を失わずにおられた方だったと思います。あるじの逝かれたお庭のシャクナゲもそろそろ花をほころばせはじめることでしょう。（五五・五・四）

略　歴

明治二十五年九月四日、岡山県赤磐郡高陽村字二井に誕生。
明治四十五年三月、岡山県立工業学校卒業、鉄道院に勤務。
大正七年十一月、東北帝国大学理学部化学教室に研究留学。
大正十四年七月、日本大学医学科化学教室勤務。
大正十五年六月、日本山岳会入会、会員番号九七六番。
昭和十年一月、帝国医学薬学専門学校及理学専門学校にて無機・有機化学の講義担当。
昭和二十六年、右専門学校、東邦大学となり、教授に就任。
昭和四十五年、停年退職、名誉教授。
昭和五十一年十二月、永年会員となる。
昭和五十五年五月一日、肺炎のため逝去、享年八十七歳。

著書に『山岳写真のうつし方』昭和七年玄光社、『赤外線写真』昭和九年梓書房などがある。

（小野　幸）

山口清秀氏（一九〇六～一九七九）

山口清秀君が本会に入会したのは、昭和五年二月で会員番号一一五一（終身会員）である。五十年も前からの会員だが『山岳』や『会報』などへの寄稿もすくないので、山口君が優れたクライマーであって、谷川岳におけるパイオニアの一人だったことなどは、会員間に知られてはいなかったように思う。本会の会合には時々出席しておられたようである。

一方、山岳連盟では、東京登歩渓流会の「山口清ちゃん」として多くの岳人、とりわけ関東地区の人々に親しまれていた。

万事、控えめで、謙虚な人柄であり、あまり人前で何かすることを好まないところがあった。然し登るとなると渓流会内では杉本光作君等と先頭に立って、志馬寛氏や井上氏等の会長達を補佐し、九法、中村、町田君等と共に会を引張っておられたし、他の会との交流にも手をかすなど何かと、日本の登山界に

大きな影響を与え功績があった。

山行は四百回近くもあり、利尻岳（南稜）から屋久島（宮之浦岳）まで広い範囲の山々を登っておられる。もちろん谷川岳とその周辺が最も多く、初登攀のルートがあることも見逃せない。単独行の登高がことに多く且つ光っており、君の情熱の深さと激しさが浮彫りされており、厳しいものだったことが窺われる。

本会への入会の二十四才頃には、前年の夏季、北岳、仙丈岳、地蔵岳、九月には八ヶ岳、權現岳の日帰り、翌年七月には単独で白峰三山、塩見岳、赤石岳と縦走。昭和六年一月一日～三日金峰山（三名）、七月八ヶ岳の權現岳及び、年少の弟二名をつれての八ヶ岳縦走などが記録に残されている。

そのなかの、七月の白峰三山縦走の記録には付記として「この日京大高橋健治氏外四名、北岳バットレス第五尾根の初登攀に成功した」と記されており、注目に値する。恐らく此頃から、岩壁登攀への指向が根ざしたのかと思える。

山口君の初めての山登りは十五才の時（大正十年）、御父上につれられての富士登山であり、この時山への興味が生れ、爾来六十年近く山登りを続けられた。この富士登山から終生山登りを始めたという例は、関東の方々にはかなり多いようで、私には興味深い点である。というのはこのことは言いかえれば、吾々日本人にとって富士山が、どんなにか胸中に深くその姿を写しているかを、示していると思えるからである。

さて、山口君は次第に経験を深めるに及んで、アルピニズムへ傾倒、昭和七年六月には谷川岳一ノ倉奥壁、二ノ沢左俣を単独登攀した。当時、谷川岳、とりわけ一ノ倉沢はようやく登山人の注目を引きはじめた頃で、芝倉沢出合の成蹊紅芝寮が建設された年である事を想起すれば、山口君の業績が、一ノ倉沢登攀の黎明期に当ることが判るのである。

東京登歩渓流会入会は昭和八年で、それ以後の山行は会の人達と同行が多くなり、単独行もあり、山行の度数が急に増えたのは、当然と思われる。また、愛弟幸吉君も渓流会に入って共共活躍された。

幸吉君は昭和十一年四月、残雪の一ノ倉奥壁に未踏ルートを目指して僚友と二人で入山した。猛吹雪のために、めがねへの雪の付着が激しく、途中から僚友は下山されたが、幸吉君は独りで登り続けられ、遂に帰らぬ人となられたことは、山口君にとって、また家人にとっても最大のショックであったに違いない。

それでも山口君の山行は続けられ、昭和五十四年七月病いに倒れる少し前まで歩いておられた。

家業（建材、セメント等販売）の関係で、長期の休みがとれなかったことは、山口君にとっては誠に残念なことだったと思う。然し山の頑張りを家業につぎこまれて、磐石のように隆盛な会社に築きあげられたことは、山口君の誠の心の表れで、敬

服のほかないところである。

晩年、アルプスやカナディアンロッキー、ニュージーランドの山麓を訪れたり、ヒマラヤのトレッキングなどどを愉しまれて、その折々の模様を私達に話される山口君の顔は、喜びに満ち輝いていたことを私は想い出すのである。

山口君は体躯は小柄の方で、見に目もほっそりとした感じだった。それだのにあのように駿足無類でかもしかの如く早く、岩に懸ると、素晴らしい身のこなしで軽やかに攀じる。しかもその体力の永続性のあることは、常人を遥かに抜いていた。「感」がよく、気力に満ちた行動力。そのような力があの身体のどこに隠されていたのかと不思議に思う。それらは、ある程度生れつきのものであろうが、日頃のトレーニングによるところも大きかったと思う。

家業ではセメント袋を毎日扱っていたが、その重い袋を四百個、五百個と持上げ、運び続けることにより、足腰と指の力と腕力が人一倍鍛えあげられ、またそれを自覚してやっておられたことは明らかである。

イタリーのラインホルト・メスナーが、毎日行っているトレーニングと近似性があると思う。

また、数多い山口君の単独行も、メスナーや、他の単独行者と相通じるところがある。山口君は加藤文太郎の単独行を讃え、尊敬しておられたが、その心境を同じくされていたことと私には思われる。

山口君が、困難な壁で行っていた、ザックをザイルに結んで足場におき、空身で悪場を突破してからザックを吊上げるか、或は下降してザックを背負って登り直す（いわゆるザックとアンザイレンする）方法などは、現在では単独登攀者の通常の方法となっているが、山口君はすでに昭和のはじめ頃から屢屢実行していたのである。

山口君は、私よりも半年ほど早く生まれている。即ち兄貴分である。山に同行したことは殆どないのだが、昭和九年の秋、明峰山岳会の内藤君達が一ノ倉沢三ルンゼ上部での遭難の際に、山口君、杉本君と私達が救出に尽力した時からの交友である。街ではしばしば顔を合わせた。特に山口君とは何となく気が合っていたので、話しやすいのか自分から山のことを語りにこられた。私は山口君ほど山を歩いていないので、当然聞き役に廻ったものだ。やや前こごみに、そしてやや早口に話される山口君は、まだ私にとって身近に居られる気がしているのである。

晩年、やや太り気味となり、顔にも膨みが増してきたようであったが、それは今にして思えば病気からくるむくみだったのだろうか。若い頃のあの精悍な顔立ちと身体つきがまことに懐しく思い出されるのである。

記録集『踏跡』のことを書添えるが、この本は登歩渓流会の

仲間の方々の並々ならぬ尽力によって、山口君の遺志を、生前の希望を生かして編集上梓された、山口清秀君の尊い山行の記録集である。

病床にあった山口君が、仲間の方々が急いで校正刷を製本して持参されたこの『踏跡』を手にとって、頁を繰りながら、想を山に馳せ、数々の登攀を思い出されているその喜びは、どんなにか大きかったことかと私は思う。

自家出版（非売品）の限定本で入手困難であるが、本会図書室に遺族の方から寄贈されている。是非御一読願いたい。

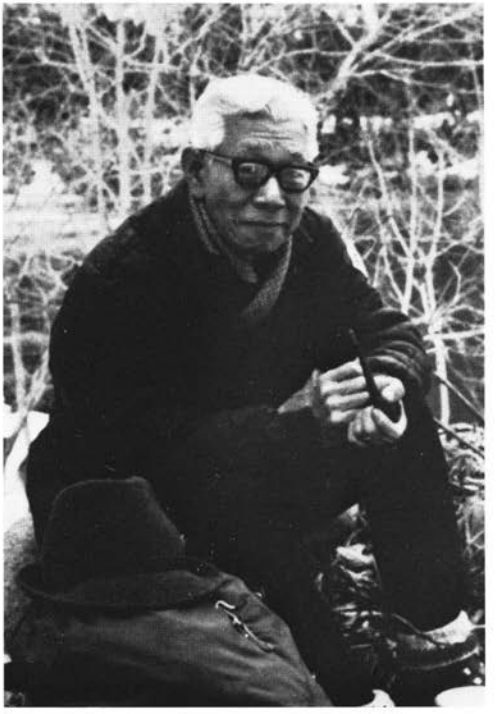
山　歴

大正十年八月、富士登山（父とともに）
大正十四年八月、白馬岳、燕、槍、上高地、焼、徳本峠（立正商業高パーティ）
昭和二年八月、立山、平、針ノ木岳（単独）
昭和四年七月、甲斐駒、北岳、間ノ岳、仙丈、地蔵岳（弟幸吉と）。九月、八ケ岳権現岳（単独）
昭和五年一月、大菩薩峠（幸吉君外）。七月、白峰三山、塩見岳、赤石岳（単独）
昭和六年一月、金峰山（幸吉君他一名）。八ケ岳権現岳、八ケ岳縦走（弟他）
昭和七年一月、甲斐駒黒戸山（単独）。六月、谷川岳、マチガ沢、一ノ倉沢、一ノ倉奥壁、一ノ倉二ノ沢左俣（以上全部単独）
昭和八年一月、甲斐駒笹ノ平（単独）。六月、一ノ倉沢第六ルンゼ―烏帽子岩（単独、初登攀）。七月、槍ヶ岳北鎌尾根―穂高縦走（単独）。八月、甲斐駒、鋸岳縦走（弟と二名）。九月、一ノ倉沢第四ルンゼ（単独）。十月、魚沼三山（単独）。
昭和九年一月、谷川岳スキー登山（熊穴沢経由）（単独）。五月、一ノ倉沢衝立沢γルンゼ（単独、初登攀）。剱岳八ツ峰、マイナーピークより（単独）。九月、一ノ倉第三ルンゼ（遭難救援）。十二月、七ツ小屋山（スキー登山）。
昭和十年一月、北沢生活、駒、仙丈、アサヨ峰（杉本、町田両氏）。二月、八ケ岳阿弥陀岳（単独）。四月、谷川本谷溯行、阿能川岳（金田君他）。六月、衝立岩北稜（杉本君他）。七月、衝立沢αルンゼ（初登攀、村上君）。八月、赤石岳、荒川岳、雲沢岳縦走（単独）。九月、オジカ沢幕岩遭難出動。
昭和十一年一月、十勝岳（杉本君他）。三月、木曽御岳（杉本君他）。四月、一ノ倉沢（幸吉君遭難）。七月、鳳凰三山、日帰り強行（単独）。八月、霞沢岳、穂高岳、屏風岩第二ルンゼ、中又白谷（茶臼頭へ直登）（杉本君他）。
昭和十二年一月、槍ケ岳、奥穂高岳（単独）。八ケ岳硫黄岳（単独）。二月、赤岳（松村君他）。四月、大倉、笠ケ岳（町田君他）。七月、一ノ倉沢第四ルンゼ（救援行）。
昭和十三年一月、北岳・池山吊尾根（単独）。三月、谷川岳万太郎縦走（積雪期一日行）（町田、小池両君）。八月、後立山縦走双六岳槍ケ岳（単独）。
昭和十四年一月、八ケ岳幕営合宿。五月、鳥海山、岩木山（単独）。六月、衝立岩南稜（丹羽君他）。七月、東北朝日岳（単独）。八月、笠ケ岳、錫杖岳、烏帽子岩（単独）。九月、谷川岳滝沢Bルンゼ上部（救援行）。

中 島 正 文 氏
Masafumi Nakajima
(1898～1980)

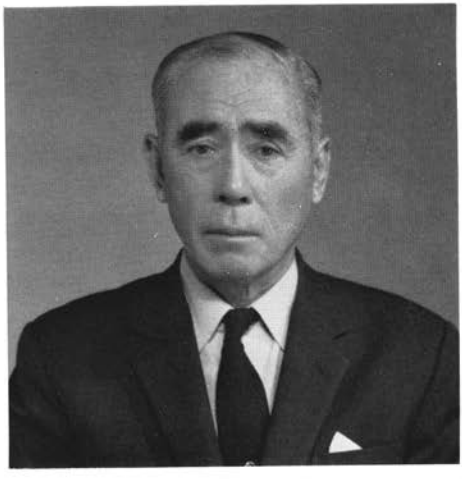
額 田 敏 氏
Hayashi Nukada
(1892～1980)

山 口 清 秀氏
Kiyohide Yamaguchi
(1906～1979)



大 野 俊 夫氏
Toshio Ohno
(1911～1979)

和 田 一 雄 氏
Kazuo Wada
(1909～1979)



酒 井 吉 国 氏
Yoshikuni Sakai
(1910～1979)

松 井 久之助 氏
Kyunosuke Matsui
(1905～1979)

藤 井 運 平氏
Umpei Fujii
(1911～1979)

宇 部　　明 氏
Akira Ube
(1948～1980)

小 林 幹三郎 氏
Mikisaburo Kobayashi
(1913～1980)

昭和十五年一月、木曽駒ケ岳。五月、平田君捜索行。七月、常念山脈縦走（徳沢―大滝山―蝶―常念―大天井―燕岳―信濃坂）（一日強行、単独）。八月、赤谷川源流（川上君）

昭和十六年一月、北岳、間の岳。二月、木曽駒（単独）。三月、守門山（杉本君他）。八月、一ノ倉沢第五ルンゼ（単独）。九月、谷川岳鷹の巣A沢（救援出動）。十月、赤石岳百間洞（遭難出動）。

昭和十七年一月、富士山（子息同行）。三月、白馬岳（井上氏他）。六月、八ケ岳立場川（川上君他）。

昭和十八年一月、鋸岳、入笠山越へ（単独）。七月、中の岳、八海山、水無川北沢右俣より（佐藤君）。八月、一の倉沢第四ルンゼ（救援行）。

昭和十九年一月、北沢小屋（単独）。七月、丹沢（単独）。

昭和二十年八月、三峰より日原へ（単独）。

戦時中及び家業専念のため三年間、山行を休止。

昭和二十四年七月、槍ケ岳（松涛、有元君捜索）

昭和二十五年、八ケ岳、谷川岳。

昭和二十六年一月、仙丈岳（杉本君他）。七月、月山（単独）。九月、阿弥陀岳。

昭和二十七年一月、赤石岳。四月、谷川岳スキー登山（登歩渓流会）。七月、利尻岳南稜（初登攀、登歩渓流会）、大雪旭岳。

昭和二十八年一月、聖岳、下河内岳（島田他）。七月、加賀白山（単独）。八月、易老岳、赤石岳、悪沢岳（登歩渓流会）。九月、一ノ倉沢（救援）。

昭和二十九年一月、塩見岳、荒川岳、悪沢岳（登歩渓流会）。七月、十二月救援参加。

昭和三十年一月、農鳥岳（雪洞・幕営による）、（登歩渓流会山行）。帰京後幽門狭窄症で入院。七月、戸隠山、高妻山（単独）。八月、黒部、剱、立山、薬師、三俣連華、烏帽子（単独）。十月、磐梯山（単独）。

昭和三十一年一月、凰鳳山よりアサヨ峰（O・B会）。八月、燧岳、至仏山（単独）。

昭和三十二年一月、那須朝日岳（単独）。

昭和三十三年一月、男体山（単独）。日光・箱根等の山々に数回単独行。

昭和三十四年八月、涸沢（救援行）。他に数回の山行。

昭和三十五年一月、西穂高岳、ジャンダルム（登歩渓流会冬山合宿）。谷川岳・尾瀬・駒ケ岳等に数回のファミリー登山を行う。

昭和三十六年一月、鋸岳、駒ケ岳（関君他）。七月の鳥海山等他に数回の山行。

昭和三十八年、御在所山・安達太郎山・家形山（単独）。

昭和四十年八月、伯耆大山（秀夫君と）以後、大山へは幾年にも亘って数度登頂する。

昭和四十一年九月、一ノ倉沢Bルンゼ（還暦祝山行）（杉本君等）。

昭和四十二年一月、瑞龍山。二月、九州由布岳（単独）。五月、伯耆大山（単独）。八月、早池峰山（単独）。十月、一ノ倉沢（杉本君還暦祝山行）。

昭和四十三年五月、石鎚山、瓶ケ森山（単独）。七月、山上ケ岳、稲村岳（単独）。宮之浦岳、永田岳（単独）。八月、茶臼岳（単独）。九月、拇指岩（小豆島）（単独）。

昭和四十五年二月、韓国岳。五月、阿蘇根子岳。六月。芦別岳、黒岳、北鎮岳。七月、大沼駒ケ岳、黒岳、羊蹄山（単独）。

昭和四十六年五月、伯耆大山（六十五才で登れてうれしい、と記す）。高千穂峰、韓国岳（単独）。

骨折・胃潰瘍のため十月より翌年五月まで入・退院を繰返し療養。以後三年間ほどは体調恢復のために低山歩きを行う。

追悼

昭和四十八年六月、一ノ倉、一ノ沢まで。「土合駅の五百段近い階段の登りにまいる。一ノ沢まで歩いて丁度、まだ登山は無理か。」と記す。お孫さん達と六甲山や夜叉神峠等に足慣しを行う。

昭和四十九年十月、木曽御岳山（重岡、岩瀬両君還暦祝行）。

昭和五十年一月、燕岳（O・B会）「高度二千六百メートル。登れてうれしい」と記し、やや調子を取り戻した様子なり。三月、ヒマラヤトレッキング（エベレスト街道）（大井、蒲生、下川、山口）。五月、南アルプス朝日岳（単独）。戸隠山、会津駒。

昭和五十一年一月、天狗岳、硫黄岳「根石岳から天狗岳稜線、強風に冬山気分を味わう。七十才で冬山に登れてうれしい。山の仲間の友情がうれしい」と記す。栗駒山、秋田駒ケ岳、武尊山、浅草岳等に登る。

昭和五十二年一月、金峰山、瑞牆山（四十余年前の元旦に登った金峰の山頂に、再度七十一才で登ったよろこびを記している）。年間に十数回の山行。

昭和五十三年一月、鳳凰山。七月、甲武信岳（単独）、「この山行で腸閉塞になり、飲まず食わずの苦しい登下降。沢登りも露営もなんの不安はないが、体力の限界か、昭和二年八月、立山、針ノ木越へ以来五十年間の単独行もこれで終りと思ふと淋しくてならなかった。」とある。（帰京後入院し、腸閉塞の手術）。十月、広河原へ（奥様と同行、初めての山行か）入笠山。

昭和五十四年、箱根の山々、道志の山、那須の山々に登る。七月八日、箱根湯坂道。最後の山行となる。

昭和五十四年七月二十三日、病気再発入院、八月十四日逝去、行年七十三才。

山口清秀君の残された『踏跡』の記録から抜書きさせて頂いたことを報告して、御遺族及び関係登歩渓流会の方々に感謝いたします。

（海野治良）

大野俊夫氏（一九一一～一九七九）

紅葉が見ごろだろうと、秋の鹿島の立教の山荘へ行ったのは昭和五十三年十月十三日のことであった。計画をしたのは、小原晴子、黒石恒、武田満子、山田靖子さんなどのJAC女流の幹部の人達である。誘われたのは大野俊夫君と私、やや老年組である。

文字通り快晴の秋空に、鹿島槍や五龍が燃えるような錦繡にいろどられていた。この山荘は稀にみる整った豪華な山小屋であった。大野君も私も大喜びで、同行した数名の女流心尽しの御馳走に更け行く秋の山荘の夜を楽しんだ。いける口の彼は、みんなのおしゃべりに思い出したように相槌をうちながら、ストーブのわきに大きなソファーを引き寄せて、持参のウィスキーをやっていた。

赤岩尾根を高千穂平の付近まで登りに行った翌日は、この二、三年持病のようになっていた手のしびれが気になるからと、山荘で留守番を引受けていたが、われわれが夕方山荘へ戻ってくると「ぼくは一日お酒を飲んでいたよ」とけろりとして

いた。なかなかの酒豪である。

時折、二、三日の山麓の旅を共にしたけれども、彼と同行した山あるきが、この鹿島谷行で最後になってしまったのは、私にとってもいささか心残りである。大野君の学生時代の山仲間の鈴木恒氏（法大山岳部O・B、もと栃木県観光課長）から、この秋、氏の勢力圏である奥鬼怒温泉へ招かれていた。それには私も一緒にさせてもらうことになっていたのだ。

大野君が日本山岳会へ入会したのは昭和八年の七月である。会員番号は一五〇〇号。とてもよい番号で、私などは羨ましく思ったものである。会員になったのはしたがって随分古く、あと三、四年生きていてくれたら五十年在籍の永年会員になっているだけに惜しまれてならない。

しかし外務省に勤めていた関係で、在外大公使館駐在が長く、働き盛りのころはもっぱら海外生活をしていたため、会員歴の古い割には日本山岳会の執行部にはいって会の仕事に参画する機会はあまりなかった。昭和五十二年四月評議員に選任され、また私が関係している自然保護委員会の委員にお願いして引受けてもらったことなどが、会とのかかわりあいと言ってよいだろう。それは、彼にとっては既に晩年のことになってしまったのである。毎月開かれる定例の委員会には億劫がらずに熱心に出席していた。

島田巽さんや、亡くなった渡辺公平さんなど、自然保護委員会は、会員歴の古い年配者が多く、大野君もそうした空気になじんで、委員会での自然保護をめぐる思い思いの議論を楽しんでいたようである。

渡辺公平さんと言えば、余談になるが、去年の五月九日に、市ヶ谷のクラブルームで委員会が開かれ、月末に大台ヶ原白川又川の林道問題について奈良県知事と懇談する予定の下打合せを、渡辺さんを中心におそくまで熱っぽく議論していた。大野君も当然同席していた。何人かで国電の中央線に乗り、私は新宿駅で別れ、大野君は渡辺さんと更に先きまで乗って行ったのであったが、その翌日の夜おそく、まったく思いもかけない渡辺さんの急逝があって、われわれはほんとうにびっくりしてしまった。十三日、荻窪の教会での告別式に参列した大野君と「いや、ほんとに驚いたね」と人の生命のはかなさを話しあったことが昨日のように憶い出される。そのとき大野君は心なしか話を交わす声に力がなかったように思う。既に自分の身体の変調に、はっきりとはしないが、気がついていたのではないかと私には想像されるふしがあった。

人間の寿命とか、運命とかにはわからないことが多い。あんなに元気だった渡辺さんが一夜にして率然として逝かれ、それから二ヶ月を経ないで、いままた大野君が不帰の客となってしまったことは返えす返すも残念で仕方がない。自然保護委員会にあいてしまったこの大きな穴は、埋ずめべくもないわれわれ

にとっての痛手であるとしか言いようがないのである。いまごろは二人して冥土の山の汚染対策でも相談していることであろう。

大野君と私とは、学校こそ異なるけれども、同時代に大学山岳部で山登りをしていたため、上高地の当時の丸西の店先きや、穂高の涸沢などでよく顔を合わせ、お互いに「また会ったね、いつごろまでいるの」などと言っては別れる間柄であったが、別に東京へ帰ってからまでつき合いを続けるというわけではなかった。

昭和四十一年の初冬、ヨーロッパを旅行していた私は、仕事の関係で農務官をやっているある書記官に会うためパリの大使館を訪れたことがある。来意を聞いた受付嬢が、私の名刺を手に中へ入ったと思うと、入れ違いのように出てきたのは、私が会おうとした人ではなく、きれいな銀髪に陽焼けした長身の大野君であった。いやその時は、大野君だとは実は気がつかなかったので、出てきたその人から「××書記官は来客中なので少し待っていただきたい、時に織内さんしばらくでしたね、いつこっちへ来たんですか」呆気にとられている私に、「ぼく大野ですよ、法政の……」と言われて飛び上がらんばかりにびっくりした。思いがけないというのは、こういうときのことなのだろう。

三十数年ぶりのめぐり会いであった。その晩も、次の夜も、彼の行きつけのモンパルナスの酒場で、おそくまで山の憶い出話しや、最近のアルプス事情、そしてまた共通の知友の消息談に花が咲いて、時の移るのを忘れた。

日本山岳会の会費が滞納になっているのではないかということをひどく気にしていたので、私が帰国したら調べて然るべく措置をしておきますよ、と言ってあげたら大変喜んで、是非そうしてもらいたいと言われた。「織内君のお陰で除籍にならないで助った」とは日本へ帰ってからもよく彼の口から聞かされた言葉である。

そのような縁から大野君が最終の海外勤務地であったフランスから日本へ帰ってきた昭和四十三年以来、とくに親しい交遊をさせてもらった。日本山岳会にいると、よい友人に恵まれる、とは会員の人達がよく言うことである。私も同感する一人であるが、大野君ともその意味でのよい交遊を重ねられたことを幸せに思う。

彼とはなにかにつけて食事を共にしたことがあった。駒形の有名な鰻の老舗「前川」には何回かつれて行かれた。「前川」の御主人大橋さんが、法政大学山岳部で同時代の仲間だったからで、彼にとってはとくに気のおけない割烹店であったらしい。また、外神田に私が贔屓にしている「その田」という天ぷら屋がある。そこの主人公は暁星の山岳部で山をやっていた人である。大野君も暁星出身であるからすっかり話が合って、いいと

ころを紹介してくれたと彼に喜んでもらえたことや、春になると武蔵境の自宅の裏庭でとれる新鮮な筍をリュックに入れてかついできてくれた厚意など、どうもこの種のことを憶い出していると、彼との親しいふれ合いが次から次へと浮んできて限りがない。この辺で同君の経歴を誌して故人を偲ぶよすがとしなければなるまい。

大野君は浅草の旧家に生まれ、暁星小学校を卒業している。暁星と言えば、藤島敏男さんや麻生武治さんの出たフランス流の躾をやる学校である。それから深川にあった府立三中（現在の両国高校）を卒業して法政大学へ入った。府立三中時代に法政大学の山岳部の人と知り合い、法政の山行計画に加わって北アルプスへつれて行かれている。そういう関係から一も二もなく彼は法政大学に入学し、そのまま山岳部員となった。当時の法大山岳部は、角田吉夫氏（本会名誉会員）や田中管雄氏（本会理事・故人）高橋栄一郎氏など、近代登山の一方の旗手となった錚々たるアルピニストが輩出し、積雪季の笠ヶ岳や上越の山々のパイオニヤーワークに登山史に残る業蹟をあげていた部であったから、大野君はそういう恵まれた環境のなかで、正統派的な山登りの仕方をしっかりと身につけていったといえるのであろう。

法大卒業と同時に得意のフランス語を生かして外務省に入り、仏領印度支那、イラン、エジプト、フランスの大使館に勤務し、海外駐在が終わると、北・東欧、ニュージーランド、オーストラリア等の巡回見本市を担当して各国へ出張を続けていた。

エジプトはナセル大統領、フランスではドゴール大統領からそれぞれ名誉勲賞を授与される光栄に浴している。また在欧中にフランス山岳会、スイス山岳会の会員になっている。角田吉夫氏が健康勝れず、そのため辞めたあと法政山想会の会長となり、母校山岳部の指導に当たられていたが、惜しむらくはその間一年で病にたおれた。胃癌ということであった。享年六十八才は、彼の深い教養、経験を生かして、日本山岳会のためにも、もっともっと尽くしてもらうべきであったのに痛恨のきわみである。故人の憶い出の一端を記して冥福を祈る次第である。

略　歴

明治四十四年（一九一一年）一月二十二日、東京浅草に生れる。
大正十二年（一九二三年）東京府立三中に入学。
大正十四年（一九二五年）、府立三中生徒のとき法大山岳部の計画に同行して中尾峠―笠岳、双六岳、槍ケ岳を縦走。
大正十五年（一九二六年）、福島県翁島にて初めてスキーをやる。
昭和四年（一九二九年）法政大学入学、山岳部員となり、以下在学中北アルプス全域、信越、上越国境の山々に多くの足跡を残す。
昭和八年十二月（一九三三年）日本山岳会に入会（会員番号一五〇〇）。
昭和十三年（一九三八年）、外務省入省。

昭和十九年（一九四四年）、仏領印度支那。
昭和二十九年（一九五四年）、在イラン大使館。エルブルース、ディマベント等を探る。
昭和三十一年（一九五六年）、在エジプト大使館。
昭和三十九年（一九六四年）、在フランス大使館。ヨーロッパアルプスに数回出かける。
昭和四十四年（一九六九年）、帰国。
昭和四十九年（一九七四年）、外務省退任。
昭和五十二年（一九七七年）、日本山岳会評議員。同自然保護委員、日本ネパール協会々員。
昭和五十三年（一九七八年）、法政山想会会長。
昭和五十四年（一九七九年）、五月癌研附属病院に入院、同年七月三日逝去。

「追　記」

故人の日記を整理されていた英子夫人から、「このようなものが出てきました」と提供されたのが、故人生前の執筆になる手記『御挨拶』である。

「一足お先へ参ります。
あの世へ行っても生前と同じように山へ登るつもりです。
まず三途の河を溯行し、賽の河原で一本たて、極地峠（極楽岳と地獄山の鞍部）でビヴァーク、何れの山に落ちつくことになるか、これはお閻魔様のお呼びを待つと致します。
生前の御厚情を深謝し、お別れの御挨拶と致します。

合掌　大野　俊夫」

（織内信彦）

和田一雄氏（一九〇九～一九七九）

早春というにはまだ肌寒い三月二十五日に東大の近くにある十方寺の本堂で和田君の葬儀が執り行われた。参列者は大正の末期から昭和十年頃迄早稲田の山岳部で活躍した古い稲門山岳会員が中心であり、式は山岳部旗を中心に若い現役が校歌を斉唱して終了した。

今年の上高地開山祭には参加出来るかも知れないと体調の回復を喜んでいたが、突然、三月のうすら寒い日に彼の訃を受けた。一瞬、心の中を冷たい風が吹き抜けた思いであった。

彼が現役時代を過した昭和初期の登山界は、学生と若い先輩群によって代表されていた。そしてアルピニズムとかスポーツ登山等の新しい問題が提唱され始め、大げさにいえば転換期でもあった。

当然各大学山岳部では技術や体力を必要とする岩登りや厳冬期の縦走が、従来の山歩きや冬期登山にとって替ろうとしていた。勿論それは目標を海外遠征、特にヒマラヤ連峯に置き、そ

の準備行動の一端としたのものであり、極地法の研究等にも情熱を傾け始めたのである。

ヒマラヤの経験を持たない我が国では技術、装備、手続きから資金面迄、第一歩からの検討が必要だった。従ってスケールが非常に大型となり大学山岳部の様な単位では対処出来なくなった。此の意味から関東に関東学生山岳連盟が誕生し、時を同じくして関西にも関西学生登山連盟が発足した。主旨は上記諸問題の協同研究と協同遠征隊の素地を作る事だった。この為に其の成果の発表機関として連盟誌を発刊し、各大学の部報は廃止して各々の動静はもっぱら記録を集合して編集する事とした。一面では、日本山岳会にも主旨の徹底を働きかけ、将来海外遠征の強力な実践母体たらしめ様とした。

この様な時代にも、和田君はもくもくと山や渓谷を歩き廻っていたのである。

河童橋のたもとに白樺食堂という、穂高餅を看板にした茶店があった。裏を下宿屋程度の二階建てにしており、山岳部の学生達がよく滞在していた。

ここの主人が実に面白い親父で、長閑な天気のいい日にはよく表のテーブルで学生達と「コイコイ」等をやっていた。親父は缶詰を学生は現金を、夢中でやったり、とったりしていたが、時には缶詰を山の様にとられてお方から睨らまれていた。

山岳部にはシーズンがなく一年中、何かと上高地で伸びていたので白樺食堂とは親類付き合いの様であった。

この主人について書きたい事が沢山あるが割愛する事として、和田君は特に親しくしていたのである。当時「白樺食堂」という看板は彼の手になるものであった。そんな事から年中ここで伸びていた昭和五、六年頃の仲間でクラブをつくる事になった。会の名称にはあれこれ述いに迷ったあげく「鰯会」という事に落ちついた。

この鰯会という名称の由来は、白樺食堂の親父さん鳥井氏が実に鰯によく似ていた事と彼が我々の面倒をよくみてくれたことに対する感謝の気持ち、そして鰯のもつ静かな上高地の雰囲気をしみじみと感じさせるからで、此の称号がでた時には全員一も二もなく拍手できまったのでる。

爾来太平洋戦争、敗戦を通じて五十年、年に数回の鰯会をやった。其の間に約半数のメンバーを失ったとはいえ何時のまにか全員七十才をこえた。この様によく続いたのも和田君のおかげである。

登山歴が物語るように、第一線的なはなばなしい登山家というより、限りなく山を愛し、重いリュックを背負って、峠や渓谷をもくもくと歩くタイプであった。そのような気持で神の田圃の小舎の建設に熱情をそそいだり、稲門山岳会や、鰯会の世話をいつも楽しそうにやっていた。山岳部の再建、合宿所の建設、また海外遠征の際には必ず彼の献身的な裏方としての努力

があった。

とかく独善的で協調性を欠く山男達をまとめて、上手く軌道に乗せてゆくにはうってつけの人物というべきだった。

五十年間「坊っちゃん」と親しまれた彼は風貌や性格になにがぴったりするものがあった。仲間で一番長生きしそうだったのに良い人から先というのは本当かも知れない。

三月十五日、一周忌の催された十方寺の帰途、別れがたく近所の五右衛門で湯豆腐の鍋を囲み鰯会をやった。

坊っちゃんの冥福を祈る

略　歴

一九〇九年三月、本郷茗荷谷に生る。
一九三二年四月、早稲田大学卒業。
一九七九年三月、永眠。

山　歴

一九二六年十二月、関温泉スキー合宿。
一九二七年八月、針ノ木越え立山、剣岳。
一九二八年七月、上高地キャンピング。
爾来在学中に烏帽子槍縦走、穂高生活、三月の槍ケ岳、三ッ峠岩登り、三月のスバリ岳等幾多の記録あり。

（上村　篤）

酒井吉国氏（一九一〇～一九七九）

酒井氏は昭和五十四年九月十八日、北里病院の一室で遠逝された。享年七十歳であった。私との交遊は五十有余年の永きに亘り、その思い出は尽きるところがないが、特に印象深いものを記して追悼としたい。

昭和三年の春、立教山岳部に入部したばかりの私を最初に山に誘ってくれたのは酒井氏で、二人で大菩薩峠へ行くことにした。飯田町を夜行で立って塩山に早朝着き、日川谷出合から大菩薩峠へ出て大菩薩嶺へ登り、その晩フルコンバ小屋に泊った時のことである。その夜はとても静かで物音一つ聞えぬほどだったが、夜が更けて来ると遠く近くに皷の音が聞えて来た。それを狸の腹皷だと二人できめこんで、明け方まで焚火を絶やさずに不気味な夜を過したことは微笑ましい想出として残っている。そのとき酒井氏は一九歳で私が一七歳だったと思う。以来酒井氏との山行の機会も多くなり、何んでも話合える親しさが増していった。酒井氏は竹を割った様な性格で何時も明るく、さっぱりとした気質であり誰からも好かれていた。その翌年の三月には鳳凰山、地蔵岳へまた二人で登った。青木鉱泉に一泊し、翌日は地蔵岳へ向ったが、一の木戸岩からは雪量が増し五

色の滝下迄やっと登って野営してしまった。その翌日も雪はますます深く、急峻なので雪の中を泳ぐ様な登りの連続で、連れて行った人夫達は引返そうと云ふのを酒井氏は最後迄頑張って遂に地蔵岳に登頂出来たが、彼の強靱な体力には驚かされたものである。

当時の立教山岳部には部長の辻荘一先生（名誉会員、四八七番）を中心に、窪田精三、廣瀬栄一、逸見真雄（一一六一番）、水越誠一、堀田弥一（一二三一番）、左手新一郎、斯波悌一郎、沢本辰雄、山縣一雄、湯浅巌（一四九六番）、浜野正男（一七三〇番）等がいて立教山岳部が一応充実して来た時代だったが、その中で酒井氏の指導力と牽引力は、部の発展強力の中軸だったともいえる。一九三六年の堀田、山縣、湯浅、浜野君等のナンダコット遠征や私の一九五五年及び五六年のマナスル参加の時などは、酒井氏は率先して支援者となり山友会（山岳部O・B）を動員して援助の労をとってくれた。

昭和二十二年復員してからは酒井吉之助商店の社長になり、山からは長い間遠ざかってはいたが、その多忙の中でも山友会の会長として後輩の面倒をよくみてくれていた。酒井氏の社長室は、夜は山友会に開放するなど、彼の山の心がそうさせたことと思う。

一九七四年は立教大学建学百年の事業の一環として、山友会ではカンチェンジュンガ山群のカンバチェン峰（七九〇二メートル）へ登山隊を出すことに決定し、酒井氏を隊長に以下十二名の登山隊を一九七三年のポスト期に送ることが出来た。しかしこの隊は悪天候に阻れ敗退を余儀無くされたが、長い間山から遠ざかっていた酒井氏が一軍を引連れてのヒマラヤは余程やり甲斐のあった山行だったに違いない。病魔に冒されながらも、例の頑張りで再起してもう一度ヒマラヤに行きたいと言っていた酒井氏が、それを果せずあの世に旅立ってしまったのは残念でならない。

略　歴

明治四十三年一月十二日、東京中央区明石町で初代酒井吉之助氏の次男として出生。
昭和八年三月、立教大学経済学部卒業。
昭和十五年、日本山岳会入会（会員番号一八六六番）紹介者、堀田弥一、小原勝郎。
昭和二十二年復員。
昭和二十二年、尊父創業の酒井吉之助商店を株式組織とし代表取締役に就任。
昭和五十四年九月十八日逝去。

山　歴

昭和三年七月、立山、劔岳より小黒部、鹿島槍岳
　七月、劔岳八ッ峯、源治郎尾根
昭和四年三月、鳳凰山、地蔵岳
昭和五年三月、早川尾根、鳳凰山

五月、甲斐駒ケ岳、鋸岳
七月、乗鞍より笠、槍、穂高
七月、針の木越、立山、劔岳
昭和六年五月、仙ノ倉岳
七月、鳳凰山、白根より塩見岳
七月、遠山川西沢と聖岳、赤石岳
十月、野呂川上流より大井川東俣
十二月、甲州より悪沢岳、赤石越、小渋川へ
昭和七年七月、鋸岳、仙丈岳
八月、北岳バットレス登攀
十月、鹿島槍岳、爺々岳
昭和八年一月、富士山
四月、仙ノ倉、万太郎山
十一月、富士山
昭和四十八年八月—十月、カンバチェン峰（ネパール）

（小原勝郎）

松井久之助氏（一九〇五～一九七九）

私はヒマラヤを調査していた頃、阪神電鉄甲子園駅の南にあった故藤木九三先生のお宅に、アルパイン・ジャーナルを借用に参上した。いつも長話となり、反対側の松井さんのお宅には、ついにお寄りできずに終った。

備後町の頃の松井さんは、山岳雑誌『ケルン』の編集と会計を担当しておられた。多分赤字には御苦心をなされたことと思う。この雑誌は、秋になると寄稿者の先生方をお招きして、一席をもうけるのが常であった。先生方とは画家の榎谷徹蔵、足立源一郎、茨木猪之吉さんたちで、今橋のさる料亭を利用した。足立画伯は、広告つきの表紙画を描いて下さった。いずれも黄泉の客となられた。

松井さんの山行の一部をひろってみると「早春の薬師岳と野口五郎岳」同行者＝鈴木覚、ポーター佐伯和一、佐伯春吉。

昭和五年三月十六日、富山—真川小屋。同三月二十日薬師岳登頂。同二十一日、黒部五郎岳（午前二時起床、四時二十分発太郎平で突風にあう。上の岳小屋—黒部五郎岳—上の岳頂上—上の岳小屋帰着午後二時二十分。（同二十二日快晴、小畑尾峠（真川峠）を登り太郎平、大多和峠、大多和村をへて、茂住で宿泊。二十三日茂住より笹津をへて、富山に下る（RCC報告Ⅲ、五二—六四頁）。

昭和十三年四月十九日、大阪組三名と吹浦の郵便局長、畠中善哉さんの世話で、大平小屋をへて蔦石を登る。案内人は渡辺喜助と豊田春昭他五名。早起して強風をついて、スキーをかり、蔦石の登り大物忌奥社より頂上に立つ。火口原を滑降し、午後八時半小屋着。二十日烈色。一行は強風下の駒止付近を滑

る。『ケルン』の終刊（第六〇号）にあたり、同人であった松井さんは一篇を残そうとこの時のことを執筆された。筆者はこのことを思い出して、一九五二年国民体育大会に参加し、吹浦班の一般参加者約八〇名をつれて登頂した。畠中さんにもお目にかかり、またこの時故深田久弥さんと始めて逢った。

松井さんは、スキーで滑降すると、日本海の中にダイビングをするような山だと語られた。

昭和五十四年十月、鈴鹿・愛知川行。同行、本荘真一（RCC報告Ⅳ、八四―九九頁）。

尚、住友山岳会編『近畿の山』昭和七年初版B6、約五〇八頁、東京・朋文堂刊、改訂版には、松井さんの「比良・小女郎ケ池の伝説」雑篇・三周ケ岳、夜叉ケ池「南紀の山々」大峠越、果無山脈などが収められている。

略　歴

明治三十八年九月十四日生
昭和五十四年六月二十五日心筋梗塞の為逝去
旧姓、新井久之助（群馬県出身）
勤務先、住友銀行・備後町支店
日本山岳会々員、一二二二番、昭和五年八月入会。
旧RCC会員、旧『ケルン』同人。

（昭和五十五年六月二十五日）

（田中栄蔵）

藤井運平氏（一九一一～一九七九）

葬儀の日は、朝から空が蒼く澄んで燦々たる陽光の降りそそぐ好日であったが、凛冽たる寒さは衰えず、彼の葬送にはまことに適わしい一日であった。

ご遺族が帰られた後も、斎場を去りかねていた私は、交野武一さんに声をかけられて帰途についた。さっき参会者一同に代って、霊前に捧げた交野氏の弔詞は、淡々たる裡に悲愁の思いを尽していて、その余韻が、まだ私の胸中を去来していた。歩きながら交野さんは「来年のエベレスト（明治大学創立百周年記念行事の一環として行われる登山のこと）の一番大切なアドバイザーをなくした」「胸の中にポッカリ穴があいたよう」、などと続け、最後に「谷口君、藤井のインメモーリアムを『山岳』に書いてやって下さい」と面を改めて言われるのだ。否私など……それは貴方こそと、強く辞退したのだが、明治（大学山岳部）時代のことはともかく、後年の日本山岳会時代のことについては、君こそ書く可きなのだと、繰り返し強く言われるのだ、お断りするすべを失って、このような次第となった。

昭和初期、所属する山岳部はちがっていたが、同じ関温泉の朝日屋旅館に合宿して、スキー練習に励んだ同時代人として、

親しく言葉を交したわけではないが、お互に面識ある間柄であった。

それから十五年近い歳月が流れ、昭和十九年九月、三回目の召集で世田ケ谷の砲兵連隊に勤務することとなった私は、そこで彼との図らざる邂逅をした、『炉辺』や『登高行』を通じ、お互の登山歴などよく知っていたので、私より一ケ月前に応召していた彼は、新しい召集将校の名簿に私の名前を見つけて、心待ちにしていたようだ。

秋晴れの一日、将校集会所のテラスで私を待ち構えていた彼が、あたかも昨日も一緒に過した同僚との朝の挨拶の様に、話しかけて来た時のことは今日も目に浮ぶ。二ヶ月許りで両人とも新しい任務で、母隊を離れて了うのだが、その間は何かにつけて楽しい時を持つことが出来た。しかし敗戦の時は、別な部隊にいたので挨拶を交すことなく訣れ、音信もなく一年半ほどが過ぎた。

次の出遭いも亦私にとっては、まことに予期しないかたちであった。たしか昭和二十一年の初冬のことである。万世橋際にある交通博物館の小講堂を会場として、日本山岳会が主催した、学生を対象とする冬期登山講習会が行われた。彼はその一受講生として、何の前触れもなく、若い受講者達の最前列に座っているのだ。然も一週間に及ぶ連夜の講習を一日も休むことなく熱心に聴講した。

じっと食い入るように、十才も年少な講師達の話を聞く、その謙虚で真摯な態度は、強く私達主催者一同の心をうったのだった。この再会を契機として、彼は私達のまん中に座るようになった。

敗戦から数ヶ月して、松方三郎さんの呼びかけで、霊南坂の松方邸に日本山岳会の先輩達が多勢集まった。槙さん、藤島さん、浦松さんなどがおられたように記憶している。これが日本山岳会戦後再興の鬨の声であり、進発の狼火であったと云えよう。この松方邸での初会合に出て来ていたもの、その後間もなく加ったもの、或は中途で退いてしまったものなど、色々の経緯もあったが、一〜二年の間に当時にして見れば若手であった私達が、おのずから党中党を作るかのようになった。

そしてこの若手達の具体的な初仕事の一つが、さきの冬山講習会であり、翌年の神山を中心とした『山日記』の復刊であり、浜野、関根、垣内達の雑誌『山』の刊行であった。その仲間達とは、堀田弥一、藤井運平、浜野正男、今村正二、関根吉郎、神山勉、辰沼広吉、千谷壮之助、林和夫、村山雅美、垣内政彦などと私であり、当時まだ大学院学生であったり、卒業延期中の山田二郎、村木潤次郎、大塚博美なども、やはり立派に私達の仲間であった。

敗戦の日、戦中派或は戦前派末期とでも言える私達は、敗戦の無念さと、民族の将来を憂う気持ちを皆一様にいだいていた

が、何をして好いのか判らなかった。唯この惨めな敗戦の祖国に、何か貢献出来ることはないのだろうかと、真剣に模索していた。

こんな時一つの思いが胸中をよぎったのだ。それは戦場に立った山仲間が、誰しも体験したことなのだが、山と山仲間への狂はしいほどの郷愁と、登山者であった誇りとが織りなして、何かにつけて、他の兵士達にはない心の拠りどころを持つことが出来た、と云うことなのである。戦いが厳しく、困難であればある程、この心は燃え熾り、自らを強く持することが出来た。

この登山者たる誇りこそ、敗戦にうちひしがれている次の世代の者達に、私達が伝え得る唯一つのよすがではあるまいか、私達に出来るのはこのことしかない、と考えるようになった。戦に行かず終戦を迎えた幸運な仲間達もすくなくはなかったが、後に続く者達の健全な成長を、一筋に念じていたことに変りはなかった。

こんな思いが仲間達の間に在ったからと言って、一度でもこれを言葉に出して云い、他に向ってひけらかそう、としたわけではない。ましてや後輩達に向って、決してその様なかたちで、語りかけたわけではない。暗黙の中に「好い登山者」を一人でも多く登山界に育てることに、力を尽そうという心を皆一様にいだいていて、これが仲間達の強い紐帯になっていたことは、紛れもないことだった。戦前の一時期、とかく学校間のセクショナリズムや独善的気どりなどの為、同時代人達の結びつきが、しっくりしていなかった様に思われるのだが、敗戦を境として、このようなことは全くなくなって了った。

こんな仲間の間での彼、藤井運平の存在は日を追って大きく、たしかなものになって行った。深く後輩達を愛し、その成長を暖く見守りながら、一旦ことにあたっては、まことに厳しく後輩達に接した心情は、私が彼とよく知るようになってから三十年、一日として変らなかった。

大塚博美や植村直己の様に、大きな業績を残した同門の後輩達に対しては、彼は敬愛の念を以てその功を称え、喜び、心から誇っていた。然し彼のいだく登山信条に悖るようなことが、若い人達の所業の中にあれば、どんな些細なことでも見逃さず、少しの苛惜もなく、彼等に接していたようだ。一九七〇年のエベレスト隊の前後に、屢々苦悩に充ちた訴えを聞かされたことが、決して忘れられない。

彼はこのように、すさまじい許りに厳しい登山家信条を中に秘めていたけれど、決して狭隘な登山家ではなかった。彼ほど日本山岳会の凡てを愛し、どんな会員とも隔意なく親しんだ人は、すくないのではなかろうか。ひとが嫌やがる国体の役員なども何回となく引き受けた。婦人部主催のパーティや合唱練習にも顔を出して、おそらくは集まった誰一人とも、何時も微笑

をたたえながら、訥々と語りあっていたに違いない。

肝硬変を病んで、昭和五十年の秋以来入院を繰り返した晩年だが、病を少しも意に介さないかのように、入退院の合間を縫って、小さな山行や、スキー行を続けていた。最後のスキー行は、昭和五十四年の二月、北大のOB達との志賀高原行だったと聞いている。その時には笠ケ岳の肩付近で疲労が甚しく、とても山頂迄は無理と思われたのに、一行に三十分以上も遅れて頂上に着き、皆を驚ろかせたとか。然もこのスキー行の為、ひそかに、大山にトレイニングを重ねたという。まことに彼の真骨頂を、そこに見るような気がするのだ。

然しついに病には克てず、昭和五十四年十二月二十三日夕逝去した。

格別他に誇るに足る登山歴を残したわけではなく、会の役員や明治大学山岳部の監督など、請われれば快く引き受けたが、決して敢て先頭に立とうとはせず、東西の山岳書を読破してその知識を誇ったわけでもなく、自らペンをとることも少なかった。それでいて、戦後の我が国登山界に於ける彼の存在は、決して小さいものではなかった。浸し難い自らの領域を堅持して、後輩の為の好き礎石たらんことのみを志した、まことに得難い登山者であったと言う可きであろう。

私個人の彼への追慕の念は、つきることなく湧いてくるのだが、一言にして言えば、私は彼から友情の上で、大きな負債を負っているような気がしてならないのだ。彼は何時も暖く、過分の信頼を私に寄せていてくれたのに、私は果してその信頼に、どれほど応えることが出来たのだろうか。

彼を敬愛し、彼を慕う多くの山仲間のある中で、同門でもない私が、霊前に追悼の言葉を述べることを許されるとしたら、私もまた彼の驥尾に付して、後に続く登山者達への、助言と鞭撻を怠ってはならぬということなのであろうか。

駑馬に鞭うって、君の霊前に、これを誓ってお訣れの言葉を終りたい（昭和五十五年七月三十日）。

略　歴

明治四十四年三月、広島市に生れ、後東京に移って成人した。
昭和三年四月、明治中学を経て明治大学商学部入学、同時に体育会山岳部に入部した。
昭和八年三月、卒業にいたる間、南北日本アルプス、妙高連山、蔵王吾妻山群、上越地区、鹿沢、菅平地区、北海道等において数多くの登山並びにスキー登山歴を残した。中でも昭和六年三月の北沢峠生活、同七年一月の魚沼駒ケ岳登頂、同三月の南アルプス北岳登頂等は、当時における先蹤的登山であった。
昭和十九年一月、スキーをよくするヤスさんと婚姻、二男一女をもうけた。
昭和二十二年、日本山岳会入会（会員番号二五四一）
昭和二十五年以降、初度入院に至るまでの間、二十年に亘り理事、評議員を歴任した。

昭和二十六年明治大学山岳部が初めて監督制を設けるに当り。初代監督に就任した。（在任一年）

職軍歴

大学卒業とともに札幌鉄道局に勤務したが、昭和九年以降長期数次に亘り軍務に服し、中支、満洲、内地等において勤務し、実役六年を超し、陸軍砲兵大尉として終戦を迎えた。正七位勲六等旭日章を授けられている。この間軍務を縫って浅野カーリット(株)、日本火薬共販(株)、化学工業統制会等に在勤し、昭和二十年十一月復職した。

昭和二十二年商工省化学局嘱託、同事務官を経て同二十八年日本カーリット(株)に入社、北海道営業所長就任。同三十八年、本社帰任、同四十一年停年退職。

昭和四十一年より社団法人全国火薬類保安協会事務局長在任のまま病となり、同五十年三月退任。爾来肝硬変の為四回に亘り入退院を繰り返えす。

昭和五十四年十二月二十三日、町田市市立病院にて逝去した。享年六十八才。

（谷口現吉）

追悼

小林幹三郎氏（一九一三～一九八〇）

小林幹三郎君の訃報を山崎さんからお知らせを頂き、とうとう長い闘病生活に終止符をうってかえらぬ人となった同君の冥福を祈る事しばし。

小林君は東京麻布の生れで在学中は小出姓であり、彼との出合いは山岳部の会合で知りあったのが最初のつきあいのはじまりであったと思う。

長い年月が過ぎた今日でも特に深い印象に残るのは、昭和四年頃から四、五年つづけて参加した鹿沢温泉の正月のスキー合宿であった。

先輩の鶴岡、神奈川両氏や数年前に他界した田口三郎助氏、来客の山崎さん等も参加されて二十名以上の合宿であった。昭和八、九年の二年間は私がOBの幹事になり小林君が在学生の幹事となり、夜の九時の消灯と朝五時の起床をきびしく実行して部員の一部からいささかうらまれたものである。

昭和九年三月、卒業後一時期服店精工に務めた後、小林家に養子縁組され家業の自動車整備業を引継ぎ、山岳部のOBとしての活躍中霧の旅会に入会し山を通じてのつきあいがつづいた。

戦時中応召し、自動車隊で大陸に転戦し数年間苦労をつくした様である。

戦後塚本閑治氏邸で霧の旅の集会が催された。この時の塚本さんの十六ミリ映画に刺激されてかこの頃から十六ミリ映画製作がはじまった様である。何度か彼の会社の事務所でうなぎをご馳走になりながら、製作映画を見せられたけれども、おせじにも上手とは云えなかった。

海外にも幾度か出かけており、映画製作が唯一の終生の趣味であった様であった。

十年位前に胃潰瘍を手術し、その時の輸血により血清肝炎にかかり、長い闘病生活に入った様である。

年に数回催される霧の旅会の催しに参加しても、以前の様な元気もなく、この二、三年は入院生活が長かった様である。

家業は長男の幹雄君に引継がれ以前に増して繁栄している様子であり、彼も心おきなく成仏した事と思う。

略　歴

大正二年（一九一三年）三月二十三日、東京芝にて小出家の三男として生まる。

昭和九年三月、東京工業専修学校機械科を卒業。

在学中蔵前山岳会部員として活躍。

松井幹雄氏の訓育を受け霧の旅に入会。

昭和十八年、結婚して小林姓となり自動車整備業を継承する。

昭和三十年、日本山岳会に入会。

会員番号四〇七三

昭和五十五年三月一日逝去。

享年六十七才

（原田幹市）

宇部　明氏（一九四八～一九八〇）

一九八〇年五月二日、第二次登頂隊員に選ばれた宇部隊員は、C4からC5に向う途中小さな雪崩にまきこまれチョモランマ北壁に逝った。

翌三日、遭難の知らせを受けた私はすぐに湯桧曽の御宅に向った。車をとばしながら初めてお会いするお母さんに何と挨拶しようかと考えつづけたが、結局言葉がみつからなかった。

家には母上を囲んで御兄弟と数人の友人が集まっておられた。私は自己紹介をしたあと、宇部の写真の前に線香を立てた。

「隊長はじめ隊員の方々に御迷惑をかけて申し訳ない。あまりに遠いところの出来事で……。何とか頂上をきわめてほしい」

母上の言葉は心のうちとは別に静かであった。

五月十日、重広、尾崎両隊員は未踏の北壁からチョモランマの頂上に立った。重広隊員は「ここが地球上の最高点だよ、君の分まで頑張ったぜ」と言いながら宇部の写真と遺髪を雪の中に丁寧に埋めてくれたという。十四日、頂上のみえる小高いモレーンの上に宇部の碑が建てられた。

その日、私は宇部からの最後の手紙を受け取った。

「……六一五〇メートルのＡＢＣに入って早くも一ヶ月が経とうとしています。北壁にもジリジリとザイルが伸ばされ、先日待望の八〇〇〇メートルラインを越えることができました。強風と寒気に悩まされましたが、最近は春めいた日が続くようになりました。中国側の服務員も最初思ったよりはるかに頑張ってくれています。小林も私も体調は良く何とか他のメンバーについて動いています。四月二十一日　ＡＢＣにて　宇部明」

最終段階を前に、ＡＢＣでの休養のひとときに書かれたものにちがいない。

一九四八年、宇部は谷川岳のふもと湯桧曽に生まれた。

宇部が鵬翔山岳会（上越支部）に入ってきたのは一九六八年四月であった。すでに会の山行から遠ざかりがちであった私にとって、宇部と共にした山行は数えるしかない。新人歓迎山行の上州武尊山では小さい体の割に馬力があるなあというのが宇部についての最初の印象であった。

その後、宇部は谷川岳登山センターに勤務するようになり、山は単に趣味やスポーツというばかりでなく生活の場となっていった。そして、山で生活し、山を考え、山を知れば知るほどより厳しい山登りを目指すようになっていった。夏の縦走から岩登り、冬の登攀へ、自由気ままに登っていた。谷川岳から北アルプスへ、そして、一九七四年夏には会の仲間とヨーロッパアルプスへ飛んだ。

その年、私たちは冬山合宿に谷川岳、一の倉沢滝沢リッジを選んだ。

一九七五年一月四日、風雪の滝沢リッジを登ってきた三人の仲間は多くの試練を乗り越え、国境稜線への最後の雪壁にかかった。その時、足もとから雪が切れて三人は稜線で待機するサポート隊の視野から消えていった。

この時、宇部はドイツのシュトウットガルトに居た。この時のことを彼は以下の様に記している。

「翌五日、行方不明を知らせる姉からの電報、そして翌六日、絶望、捜索打ち切りの国際電話が入った。あまりに遠い日本の出来事に実感がもてないと同時に、かつての事故とほぼ似た捜索活動をしてゆくだろう、僕自身の姿が想像できた。雪解けのはじまる春に帰国しよう。特別の目的をもたなかったその時の僕にとって、ヨーロッパの生活を捨てることはむづかしいことではなかった」

私たちは鵬翔山岳会各支部の協力を得て雪解けの始まる五月から捜索活動を再開した。ヨーロッパから帰国した宇部の一の倉沢での生活がはじまった。多くの仲間が入れ替りやってきて帰っていった。宇部は連日捜索活動を続け、雪渓の中に三人の仲間を発見したのは事故発生以来九ヶ月後の九月八日であった。すべてを捨て仲間を探しつづけた宇部の姿に誰もが心を打

たれた。

追悼集『滝沢リッジ』に宇部はこう記している。

「その日から一年以上経過したいま、無事に捜索が終ったことに安堵するとともに、色々あった一の倉沢の生活も懐かしく思い出されるのだから不思議なものである。

ねずみとの食糧戦争、こちらが食べられない様に工夫すれば、テキも何とか食べることを考える。結局、見るたびにテキが太っていったのだから、こちらが完敗のようであった。

降り続く雨にうんざりした六月。夏の朝の陽のあたる岩壁をながめながらとったパンとコーヒーの朝食。一人だけで仰ぎ見た月明りの一の倉、等々。

そして彼等と共に攀じた岩、踏みしめた雪の道を、かけがえのないものとして大切にしてゆきたい。いま、そう感じている」

二年後、宇部はK2登山隊に参加し大きくなって帰ってきた。翌一九七八年には群馬県ダウラギリ隊に参加し多くの困難を乗り越え頂上に立った。そして、一九八〇年二月、宇部はさらに大きなものを求めてチョモランマに向って出発した。

だが、私達はあまりに突然に良き仲間を失ってしまった。

合掌

山歴

一九六九年三月、白ケ門〜蓬峠

四月、谷川岳、幕岩尾根

五月。谷川岳、一の倉沢・衝立岩正面雲稜ルート

一九七〇年六月、谷川岳・一の倉沢中央稜

七月、白ケ門〜三国峠谷川岳・一の倉沢コップ正面壁雲表ルート

八月、蝶〜常念〜槍、穂高岳屏風岩東稜他、谷川岳・一の倉沢南稜

十月、谷川岳・一の倉沢一の沢

一九七一年一月、槍ケ岳・北鎌尾根

三月、谷川岳・一の倉沢滝沢リッジ

五月、谷川岳・一の倉沢南稜、マチガ沢東南稜、堅炭岩KⅢフェース

七月、谷川岳・一の倉沢滝沢下部ダイレクト〜第三スラブ〜ドーム壁

八月、穂高岳、滝谷第四尾根、屏風岩東壁鵬翔ルート、北穂チムニー〜ドーム北壁、四峰正面北条・新村ルート

谷川岳〜三国峠、谷川岳、一の倉沢2ルンゼ〜Cルンゼ

九月、谷川岳、一の倉沢ルンゼ、幽の沢右俣リンネ

十月、谷川岳、一の倉沢コップ正面緑ルート〜蓬峠、2ルンゼ〜Bルンゼ、エボシ奥壁凹状ルート〜中央カンテ

一九七二年一月、蝶ケ岳〜常念岳

三月、谷川岳、一の倉沢南稜

六月、谷川岳・マチガ沢、シンセン沢左俣〜東尾根、白ケ門

ゼニイレ沢
九月、谷川岳・幽の沢、中央壁左フェース、穂高岳
十月、谷川岳、一の倉沢2ルンゼ～Dルンゼ、マチガ沢、三の沢右俣、間の沢、ゼニイレ沢左俣
一九七三年三月、谷川岳～三国峠
四月、白ケ門～宝川、白ケ門、ウツボキ沢（スキー滑降）
一九七四年夏～一九七五年、ヨーロッパ・アルプス
一九七六年三月、北アルプス、黒部
八月、八ケ岳
十一月、富士山
十二月、甲斐駒ケ岳
一九七七年一月、富士山、谷川岳、一の倉尾根
三月、鋸岳～甲斐駒ケ岳
五月～十一月、K2南東稜隊に参加
一九七八年一月、赤沢山槍沢側壁正面～東鎌尾根～槍ケ岳
六月、谷川岳、一の倉沢エボシ奥壁凹状ルート～南稜
八月～十一月、ダウラギリ峰南東稜隊に参加
一九七九年三月、白ケ門～巻機山
六月、越後三山
七月、谷川岳、一の倉沢・南稜～中央カンテ、中央稜～凸状ルート、2ルンゼ～Bルンゼ～茂倉岳～清水峠～白ケ門
八月、劔岳、黒部、大タテカビン
一九八〇年三月、チョモランマ北壁隊に参加

（田中壮佶）

図書紹介

Life is Meeting

by John Hunt, Hodder and Stoughton, London, 1978, pp. 286.

かつて松方三郎さんと共に訳した『わがエヴェレスト』(原題 High Adventure) のなかで、著者ヒラリーは、一九五三年度のエヴェレスト遠征に参加を望むというジョン・ハントからの手紙を受取ったときの感想を、次のように記していた。

「この手紙は、エヴェレストで終局の成功を収める上で、特筆すべき役割を演ずるとになった人物と知合いになる、最初の糸口であった。当時すでに私は、途中で隊長を変更することにしたヒマラヤ合同委員会の決定を知っており、この決定に不賛成だったし、シプトンがだれかに取替えられたことに対して、深い失望を感じていた。〝シプトンぬきのエヴェレストじゃ同じにはいくまい〟というのが私の考えだった。〝それに一体、ハントっていうのは誰だい。今迄聞いたこともない！出来る人なのかどうか〟。」

当時すでにヒマラヤ山域を精力的に歩いていたヒラリーが、〝一体誰だい〟というほどだから、ハントの遠征隊長というのは、よほど意外な人選であったにちがいない。シプトンとの交替については、本書で控え目ながら触れられているように、かなりの経緯があったにせよ、結果的にはまちがった選択でなかったことはやがてわかる。ヒラリーは右の言葉に次いで

「ハントの人柄を裏書きする証拠は、程なく現れて来た。次々と詳細な計画が郵送されてきたのだが、それが常に核心をついていることを、私は心ならずも認めぬわけにはいかなかったからである。」

と述べている。

そのようにエヴェレスト登頂まで、知名の士ではなかったジョン・ハントが、自伝ではないと断わりながらも、その生い立ちから最近の活動に到るまでを、かなり詳しく明らかにしてくれたのが本書である。「人生はすべて出会い」と説くある哲人の言葉に感銘を受けて、このテーマでなら筆を執ってもよいと思い立ち、本書のタイトルにまで使っている通り、著者は実に数多くの人々との出会いを大切にし、温厚な筆致でそれらの人たちについて述べている。本書の魅力の一つはこの辺にもあると思う。

山登りの面で興味があるのは、まず戦前の一九三〇年代におけるハントのヒマラヤでの精力的な活動である。第一次大戦で

戦死した父親の跡を追って軍務に入り、インド駐屯を機として、一九三一年にカシミールのピル・パンジャール山域にスキー登山を行なったのが皮切りであるが、次第に未知の山地へ踏みこむことになる。当時の目標であったアフェルワットの山頂に立って、はじめてナンガ・パルバットを眺め、さらにハラモシュ、K2を遠望して早くも想いを馳せている。一九三五年にはスリナガールに近いコラホイを南面から初登頂、同年、英国山岳会ならびに地学協会の会員に選ばれるとともに、ヒマラヤ委員会から三六年度エヴェレスト遠征への隊員候補に指名される。それが英空軍での心電図検査で不適格とされ、いたく失望する。しかしその後も登山活動をつづけ、一九三七年以降、ジョイ夫人らとカンチェンジュンガ山群にみごとな足跡を数多く残している。ドイツのバウワー隊の果敢な登峯に強い刺激を受けたことも本書のなかで語られている。

一九三八年にはランプール駐屯となり、庭先からカンチの山波が遠望できるのを楽しみ、一九四〇年にはその山群中の秀峰パンディムを目指した。これはかつて三田幸夫さんも狙っていたピークで、ハントはかねて目をつけていたのだが、同峯へ向う途上、急遽帰隊を命ぜられ、欧州戦線へと転ずることになる。

やや詳しくヒマラヤでのハントの山歴を記したのはヒラリーでさえも知らなかったことだし、戦前ハントがエヴェレスト行きの候補に選ばれたことなど、知る人は稀であったろうと思うからである。

これら戦前の山行につづいて、第二次大戦下には山岳戦の重要性に着目して、その指導に努めたことが語られている。この間にも興味ふかい出会いがいくつかある。たとえば、山岳戦闘用の部隊訓練についてハントは英国山岳会の会長あてに献策する。当時の会長はG・W・ヤングであって適切に対処してくれたという。訓練の指導にあたった登山家のなかには、エヴェレストへ行をともにすることになるノイスがいた。山と雪の特攻部隊を訓練するセンターの長はスマイスだった。そこでの訓練部長にハントは欣然就任したし、イタリアの山岳地帯で実戦にも活躍したことが、淡々と回顧されている。

一九五三年のエヴェレスト初登頂については、すでに遠征記も広く読まれているので、本書ではハントの私的な回想が簡潔に記されているにとどまるが、はじめて明らかされた挿話も少なくない。

たとえば、なぜ一般の予想をくつがえして、シプトンが遠征隊長とならなかったか、ハントに白羽の矢がたてられたのはなぜか、といった疑問について、ハントはシプトンに気を使いながら、当時のいきさつに触れている。それについて詳しく紹介する紙幅もなく、すでに他誌に執筆したので、ここでは省略するが、みごとな統率力を発揮したハントの横顔が、短い章のあ

ちこちに鮮かに現われていることに注目したい。(『アルプ』二六一号所載の拙文「シプトンとハント」を併読していただければ幸甚)

エヴェレスト遠征までを本書の前半とすると、ほぼ同分量の後半部では、ハントのエヴェレスト以後の精力的な登山活動とともに、初登頂を成功させた遠征隊長の栄光とともに、その双肩にかかってくる社会的責任の重さを、誠実に受けとめるだけでなく、有能にその責務を果して行く過程について語られている。

登山活動としては一九五八年にコーカサス、六〇年にグリーンランド、六二年のパミール(この山行では、ピック・ガルモでノイスたちを先った)、六三年にギリシャ、六四年にポーランド、一九六七年のカナダ等々の山が挙げられ、その広範囲にわたる足跡におどろかされる。

だが、それ以上に眼をみはらずにはいられないのは、右に触れたように社会への奉仕的な活動の面である。エヴェレスト以後、ハントが青少年のアドヴェンチュア精神高揚のために、その組織化の必要を精力的に説いていたことは知られている。それがエディンバラ公基金として結実し、青少年の海外遠征活動に強い刺激を興えてきたことも、かなり周知のことである。

ところが、年ごとにハントが引受けさせられる公職は多くなり、そのリストをここに記すのもためらうほどである。英国山岳会、英国地学協会、英国登山審議会、クライマーズ・クラブ、全英スキー連盟などの会長に選ばれたのは当然であろうが、政府関係のいろいろな仕事も多方面にわたっている。ナイジェリア内戦について首相の私設顧問となり、北アイルランド警察諮問委員会の委員長、海外ボランティア審議会の会長、王立新聞審議会委員、さては全英保護司協会の会長までつとめていると知ると、エヴェレストのハントとだけ頭にとどめていた人たちは驚くにちがいない。ついでながら、初登頂の一九五三年にサーの称号を授かったハントは、六六年に一代貴族に列せられ、今やLord Hunt of Llanfair Waterdineといういかめしい名をもつ上院議員であることを付記して置こう。

本書の後半には、これらハントの公職についての活動が述べられているが、陸軍出身の彼がこれほど多方面に引出されるには、やはりそれだけの人柄と器量を備えているからであろう。したがって、雑駁な筆による走り書のような遠征記などと異り、みごとな生涯を誠実に生きつつある人間の半生の記録として、精読に値する一書だといえよう。最終の一章を「欧州のプレイグラウンド――一九二〇年以降」と題して、これまで余り触れられていない著者自身のアルプスでの山登りを追想しているあたり、いかにも山とともに生きてきた人らしい締めくくり方だと思わされる。

(島田　巽)

Climbing Ice

by Ivon Chouinard, Sierra Club Books, 530 Bush Street, San Francisco, California 94108, USA, 1978, pp. 192, $9.95

数年程前に『ビッグ・ウォール・クライミング』なる本が出版されたことは記憶に新しい。本書は、この『ビック・ウォール・クライミング』の氷版とも言うべきもので、その歴史からスタイル、果ては倫理に至るまで完璧といっても過言ではない程にアイス・クライミングの全てを網羅している。また技術解説の部分では、著名なクライマーの数多くの写真を適確に使用することにより、視覚に訴える解説という試みにも成功している。

また、技術書というものは大かれ少なかれ、無味乾燥になりがちなものだが、本書では、シュイナード自身の数々のクライミングの経験談を、彼がアイス・クライミングを始めた動機をも含めて、随所にちりばめることによって、読者を本書に引き込み、さらにはその技術論に強い説得力を与えることに成功しているのである。

以下、目次に従って大まかな内容の案内をしてみよう。

第一章　アイス・クライミングの歴史
○初期（ほぼ十九世紀まで）
○ルネッサンス期（エッケンシュタイン以降）
○本流とは離れて（スコットランドのアイス・クライミング）
○戦後のアルピニズム
○北米での発展
○時節到来

この章はアイス・クライミングの簡単な歴史の紹介である。文頭に、紀元前五世紀の男が岩を登っている中国の壁画を持ち出しているのがユーモラスだ。曰く、「岩を登っていた位だから、誰が氷を登っていなかったと言えよう。」

第二章　雪のクライミング
○様々な雪の性質
○ピッケル――最初に必要な道具
○登高法
○セルフプロテクションの意味
○下降法

最近日本でも使われ始めた〝プロテクション〟という単語がふんだんに出て来るが、かなり広い意味に使われている様だ。適確な訳語はあまり無い様で、そのはっきりした感覚をつかむ

為には、原書を読んで戴く以外にはない。

第三章　フランス式アイス・クライミング

○フラットフッティング

○様々な氷の性質

○アイゼン技術ーその概観

○登高法

○下降法

この章からが技術解説の核心部だが、ここでは、アイゼンを氷面に対して常にフラットに置く（フランス式）技術が述べられている。この技術は、次章のフロントポイント＝出歯を使う技術よりずっと難しいが、体力の消耗を防げる点等、その必要性が強調されている。

第四章　フロントポイント式アイス・クライミング

○フロントポインティング

○道具

○登高法

○垂壁、オーバーハング

○トラバースと下降法

最近盛んに行なわれているピオレトラクションについて、数々の写真により丁寧に技術解説がなされている。

第五章　ステップカッティングと他の技術

○ステップカッティング

○ミックス壁のクライミング

○アーティフィシャル・クライミング

ここでは、ステップカッティングの必要性、ミックス壁のクライムの概観、そしてアーティフィシャル・クライミングについて、極く大まかに、シュイナード自身の意見を中心に述べられている。

第六章　安全対策とロープ

○ロープ

○アンカー

○雪上、氷上のビレー

○ピトン技術

○その場に適応するビレーとは

○アプザイレン

日本ではあまり紹介されていない数々のビレー法が解説されていて仲々興味深い。

第七章　変化への適応

○山は一歩ごとに変化する

○雪庇のリッジ

○クーロワール

○雪面

○氷河

○クレヴァス脱出法

○スピードと安全

この章では、実際のクライミングに於ける判断力の重要性について、シュイナード独特の筆致で述べられている。原文では、この章の標題は、"Keeping your head about you." となっている。

第八章　雪崩

○地形

○どの様にして雪崩の起こる斜面が形成されるか

○太陽と風の影響

○予防策と救助、脱出

ここでは、雪崩に対して極めて概略的に述べているに過ぎない。

「雪崩の予知が科学的に為されるまでにはまだ至っていない。私にできることは、各々のメインテーマに触れることだけであり、僅かな知識でこの予知し難い力に対するのは危険である。これ以上のことは、できる限り専門書を読み、研究することを強く切望する。」

という言葉で締めくくっている。

第九章　装備

○道具と技術

○靴

○服装

○その他の装備とアドヴァイス

この章では、シュイナード自身の経験に基き、簡単ではあるが、装備についての言わばエッセンスが述べられている。尚、ピッケル、アイゼンについては第四章で、他の登攀具に関しては第六章で、それぞれ解説されている。

第十章　登攀スタイルと倫理

○挑戦

○ルールを換えて

終章として、シュイナードの登山観、クライミングに対する真摯な態度等が、多少啓蒙的に述べられている。

このように、本書はアイス・クライミングの全てを網羅している訳だが、しかし、著者自らが序文で述べられているように、本書はいわゆるビギナー向けの解説書ではない。彼は次のように言っている。

「……現在、多くのクライマー達は、岩登りをかなりやり、その後にアイス・クライミングをやるのが普通である。従って、この本はビギナー向けの本とは言えない。アイス・クライミングの技術や用語は、そのほとんどが他の分野に見られない特殊なものである。もしビギナーが一人でこの本からクライミングを学ぼうとしても、特に、基本的なロープの扱いやビレー技術に関して、自分の経験とのギャップが生じてし

まうだろう。」

確かにこの本の内容全てを適確に理解するには、かなりのクライミング経験を必要とする。しかし、随所に出てくる、シュイナード自身の体験談は、物語風に書かれているところも多く、ビギナーが読んでも肩の凝らない本であろう。それにも増して、一人の著名なクライマーの歴史を知ること自体、ビギナーに対する影響は大きなものであり、実際の技術解説部の理解は後回しにしても、一読する価値は大いにある。シュイナード自身書いている様に、所詮、クライミングの技術は、どんなぶ厚い技術書を読もうが、実際自分で何回も練習しなければ身に付かないものなのである。

ここ数年、氷爆登り、冬期のルンゼ登攀等が盛んになり、それに関する書も幾つか出たが、本書の読後感を一言で言えば、説得力であろう。それは、その内容全てがシュイナード自身の経験に基いているからに他ならない。本書は、単なるアイス・クライミングの技術書というよりは、アイス・クライミングを通して、シュイナード自身の登山観が浮き彫りにされている個性的な形態の技術書である。このあたりが、昨今氾濫する登山技術書とは一味違う、さわやかな読後感を与えてくれる大きな原因なのだろう。

尚、本書は一九七二年にはほぼでき上っていたという。しかし当時のアイス・クライミングは驚くべき勢いで発達しており、著者自身の、最新技術をも取り入れたいという意向もあって、出版が延々になっていたものである。ようやく一九七七年になり、世に出た訳だが、しかしこの五年間は決して無駄にはなっていなかった様である。

（駒宮博男）

The Shining Mountain : two men on Changabang's West Wall

by Peter Boadman, with material by Joe Tasker. London : Hodder & Stoughton, 1978. 192 pages, 15 black-and-white photoes, 12 color plates, 2 diagrams. £5.95.

ヒマラヤ登山は、八千メートル峰の攻略に目を向けている間に、ロジスティクスとか、タクティクスとかの名によって登山組織が複雑、肥大化して来たといえるであろう。その頂点は、一九五三年のエベレストの初登頂であった。この登山自体のロジスティクスの緻密さとその行動は、以後のヒマラヤ登山の規範とされ、やがて伝統的なものとして定着し、エベレストより低いヒマラヤにも適用されるようになった。

一九七六年九月、ピーター・ボードマンとジョー・タスカー

によって行なわれたガルワル・ヒマラヤのチャンガバン（六八六四メートル）西壁登攀は、他の人達なら伝統的な方法で登るかもしれない所を、たった二人で、余り費用もかけず、軽装備のアルパイン・スタイルで登るという大胆なものであった。それはE・シプトンが探検的登山の原型と呼んでいた、ライト・エクスペディションを物の見事にやってのけたものといえよう。

チャンガバンは、T・ロングスタッフをして「私が見た山の中で、最も壮麗で優美な山」と云わせしめ、古くから先鋭的な登山家の注目を集めていた山であったが、初登頂は一九七四年、東稜からC・ボニントンを隊長とする英印合同隊によってもたらされた。この登山の模様は「チャンガバン」（『山岳』七一・七二年所収の図書紹介参照）と名付けた本になり、登山界を賑わた。第二登は、この本の著者である二人に先立つこと三か月、三三日間かけて、二五〇〇メートルの固定ロープ、三〇〇本のピトン、一二〇本のエクスパンション・ボルトを使用して話題になった、戸田直樹を隊長とする日本隊によって南西稜から行なわれた。

ボードマンとタスカーの西壁は、これ等とはまったく異った計画であった。ここでは一五〇〇メートルの絶壁が続いているので、彼らは、半ばぶら下った状態でビバークを重ねなければならなかった。また、二人だけで、まる一か月以上も目標に立向って、猛烈な寒気の中での極限の登攀と献身的な努力を要求されたのである。彼等はこの登攀で、頂上近くまでロープを固定する方法を採ったが、固定ロープを張りっぱなしにして置くのではなく、荷上げをしながらこのロープを回収して上にあげていく方法を採用している。これはライト・エクスペディションにおいて、装備の全量を軽くするために採られたものである。

ボードマンの誠実さの特徴の一つは、メスナーやボニントン等のような作家達による少々大げさな自己評価の痕跡を残すようなことをしないという点である。「登攀では、どんな言葉よりも行動の方が大きくものを言う」と彼が語っているように、彼は小声で細かに控え目に登攀の様子を語る。この本の中でも、ボードマンは、詳細に、かつ豊富に登攀の模様を私達に伝えてくれている。しかし、最も興味の持たれる点は、随所に会話を採り入れることによって現わにされた二人の間の緊張した関係が、この本を本当に盛り立てていることである。

ボードマンとタスカーがチャンガバン以前には一緒に山へ登ったことが無い点は、興味深い。彼等は、相互の尊敬と山に対する情熱によって結びつけられたのだ。タスカーのすばらしい登山記録は、D・レンショオとやった、ドゥナギリ東南稜における桁はずれな二人組による登頂であった。その結果彼はイギリス登山界でもすぐれた登山家と見なされるようになった。一方、ボードマンはエベレスト南西壁遠征によって、最近は「スター」なみになっていた。二人の間の緊張関係は、この名声の

違いを出発点としてつながっていた。タスカーはいらいらしている時、憤懣をぶちまけることで自分自身の能力のあることを示したがっているに違いないと、ボードマンは思っている。ボードマンは、タスカーが、自分以上に興奮したり、困っている場合、ボードマン自身の苦しさをきわめて正直にさらけ出して見せている。競って不安や弱点を告白することを必要としていなかったが、人間を上の方へかり立てた点では無関係ではないように思われる。

タスカーの日記は、ある種の内向的精神と神経質なところが一部見られる。すなわち、彼自身（一三才から二一才まで、彼は聖職者になるための訓練をしていた）の物事を長い間心の中にためて置く習慣が、幾分話合いを不明確なものにしている。

二人は、あたり前だと思われる登山感覚以外では、本当に親密なレベルに達していなかった。彼等の結びつきの強さは、時として相手を信用しないとか、正反対の考え方をする所を基礎としていた。例えば、タスカーが下降用アンカーのシングル・ベグを固定するのを、ボードマンはうたがい深く見つめている。そして、タスカーが下降にうつり、下降し終るまで、ボードマンはアンカーにさわらない。タスカーはそのやり方を目の当りにして、大声でからかう。「やあ、それがはずれてしまえば、あんたはロープなしで立往生ということになるよ」。

ボードマンは大変興味のある観察をしている。「若し、われわれが登攀中に仲間割れをしていたならば、山はわれわれの弱点を容赦しなかっただろう」。二人は互いに支え合っていたが、合図の難しい場合は、判断を相対的に行なわなければならない。しかし、簡単な決定でも、下る事でも、後まわしにする事でも、注意をする事でも、声で伝えようとするのは、相手から見れば臆病者のように思われるし、まったく反対に、向う見ずな愚者のようにも思われる。その結果、考え方のもつれで非現実的な不穏な空気をつくり出す、とボードマンは強調している。

登攀について実際に語っていることは、ドライだと分るだけで、頂上そのものはそえ物のように思われる。タスカーとボードマンの卓越した技術のもとでは、比較的安全な登攀であり、ごく身近かな出来事で災難と言えるものは、ベース・キャンプでストーブが破裂したこと位であった。しかし、ボードマンの慧眼は、ハンモック・ビバーク中の悪夢のような様、極寒が引き起すのろのろした手さぐりの様、固定ロープで最初にユマールを使う時の独特の恐怖（王様の食事の毒味をしている道化師の仕草の様に）などの生活を、生き生きと詳細に伝えている。

彼の目が、登山においては典型的な振舞いとされるような注意深さで、道端の取つき路を見つけ出す。「人生は短い。しかしそれを更に短くはしない」彼の登山行動によくあらわされている。

最後に読者は、シプトン、ティルマン、ロングスタッフや他の先人達が、白い髭の老人達ではなくして、利口な軽装のトレッカーとして彼等の時代を先取りしていることを明らかにしている、ボードマンの鋭い見識に感謝の反応を示すであろう。

二年おくれて出版されたこの本は、どういう理由なのか余り注目されていない。わざと控え目に述べる古いイギリスの伝統と、「小さいことは良いことだ」とする新しいヒマラヤ登攀ムードがある。このような情勢の中で、彼等のライト・エクスペディションもそれほどすんなり進んだ訳ではない。出かけるまでに十分理解されていたとは云い難い。しかし、新しいヒマラヤ登山の動きがきっかけとなって、イギリスの登山界は新旧世代の交替と改革が進んでいるので、いずれは注目されることは間違いないであろう。

この本を読んで、日本のヒマラヤ登山者について感じることは、少なくともヒマラヤ登山で、多くの物質と人員がなければ安全な登山が出来ないと考えている人達、ヒマラヤ登山はアドベンチャーではないと考えている人達や、世界の登山界の動向を「流行」という言葉で片付けてしまっている人達に、「この本の著者等の行動は理解出来ない」という先入観を捨てて、読んでみられることをおすすめしたい。また、アルパイン・スタイルを指向する人達にも読まれるべきであることは勿論のことである。

さきに「注目されていない」と書いたが、一九七九年度ノン・フィクション部門で Llewelyn Rhys Prize を受賞したことを最近知った。多くの登山の名著の中に、この本の名が加えられるのも、そんなに遠くない日にやって来るものと思う。

（堀内章雄）

登山史の発掘

山崎安治著　A5判　三〇五ページ　一九七九年九月　茗渓堂　定価二五〇〇円

冒頭にある〈芥川龍之介の槍ヶ岳登山〉は「軍艦金剛航海記」と共に芥川の代表的な紀行文である「槍ヶ岳登山」の疑問点を解明したものである。この紀行文を読んだかぎりでは頂上に達したとは書いてないし、案内人と二人だけで歩いたことになっており、日時も不明である。登山に関心をもつものならさまざまな疑問が湧いてくる。第一に頂上まで登ったか、何才のときであったか、他に同行者はなかったか、食糧、服装、装備はどうであったか等々である。こういった疑問を解いてくれたのがこの〈芥川龍之介の槍ヶ岳登山〉であって、登山史の一フ

ラグメントを見事に発掘している。

まず著者は一高旅行部編集の『失いし山仲間』なる文献から芥川の登山の動機、同行者の氏名人数、食糧、服装、装備の模様、ルートの様子、歩き具合までを紹介する。ついでこの文献の筆者である中塚氏を訪問して、頂上に達したのは明治四十二年八月十二日の午前であること、また中学生時代の芥川は神伝流の水泳や柔道、機械体操に打込んでいた青年であったことを聞いてくる。

このように、著者の〈登山史の発掘〉は、文献を発見すると、だれが、いつ、どのルートを、どのようにして登ったか、を検討整理し、できるなら不明の点を関係者に直接問い合せて確認するという方法の所産であって、この方法がこの本の全体を貫らぬいているようにおもわれる。

剱・穂高の積雪期登山と岩場の登攀は大正末期にはじまり、昭和十年前後に最盛期を迎えることになるが、この〈登山史の発掘〉と〈山の履歴書〉の二章を見ておどろいたのは、山岳会の諸先輩をはじめとして、知っている方々の氏名が数多くでてくるのである。

当時、初登攀とか新登攀とかを目指しても、登っている最中の当人はこの登攀が後世、登山史の一ページに加えられるなぞとの意識はなかったとおもう。まして記録を造るのを目的とした登攀などは当時は考慮の外にあったとおもう。また戦前の大学山岳部はジャーナリズムを嫌っていたから、マス・コミに登山記録を発表するのは稀であったし、記録を残すとしても部報などに義務的に書かされる程度が多かったのではないだろうか。

半世紀まえのこんな状態の文献から手掛りを見付け、不足部分を補って精確な歴史的評価を与えることは、まさに困難なことであろう。もう十年もおそければ永久に埋れてしまう事実も多いものとおもわれる。それだけにここに文字となったことは貴重である。また知っている会員の方々が登山史の一ページを飾っているのはまことにうれしいことである。今は円満な老紳士となっている方々の若い頃の烈々たる闘志を知るとき、アマチュアー登山家の一断面はこうしたものであるとおもうのである。

〈山の履歴書〉の項には古来からの、特に徳川時代の老大な文献があがっている。これは如何にわが祖先が山へ深い関心をもっていたかを示すものである。著者のいうように徳川期の登山は藩の検分登山と民間の信仰登山との二つが主流となっているが、幕末に近づくにつれて検分登山は探険的登山に近づくし、信仰登山は講中が発達してリクリエイション的要素が多くなってくる。このどちらにも近代的な登山の要素が多分に含まれてくるのであって、明治以後の近代的登山普及の素地は、幕末までに十分にできていたことが、この本から覗えるのであ

る。

著者は最初の著書の『穂高星夜』以来、三十年ちかくわが国の登山史に情熱をもち続けている。本書は前著『日本登山史』以後の約十年間の触角にふれた登山史のフラグメントの集積である。やがては『日本登山史』の改訂につながるものとおもわれる。山岳愛好家の数で世界一のわが国に、メイソンやデジオのヒマラヤ、カラコラムの登山史、クーリッジやランのアルプス登山史以上の日本登山史の生れることを期待したい。

（今村正二）

炉辺第八号

中島信一編　A5版　五七三ページ　昭和五十五年二月二十日　明大体育会山岳部発行　非売品

いまさらいうまでもないことだが、山登りにおける最後の締めくくりが、自分、または自分たちの登山記録の整理である。これはいろいろな面から大変やっかいな作業で、ことに大学山岳部のように毎年スタッフが入れ替るグループの場合は問題が多い。

こうした点から見ても、明大山岳部の部報『炉辺』第八号の発行は関係者の並々ならぬ努力の跡が紙面に滲み出していて、まことに心強く感じられた。

この八号は戦後二冊目、十八年振りでの発行である。この間における登山界の動きは、内外ともにきわめて激しく、その渦の中にもまれながら、OB、学生が一体となって厳しい精進を重ね、世界の最高峰エヴェレストへの単独グループによる登山計画まで漕ぎつけた明大山岳部の実態が十分にうかがわれる。

第一部MACの海外登山、第二部MACのふみあと、第三部紀行、随想、わが山寮、追悼と分けられてしっかりとまとめられている。

海外登山は一九六五年プレのゴジュンバ・カン、六四年、六五年のニュージランド、七五年プレのチューレン・ヒマール、七七年プレのヒマルチュリ、七八年ポストのアンナプルナ・サウスが報告されており、ゴジュンバ・カンは六七年発行された正式報告書『登頂ゴジュンバ・カン』から植村隊員の〝登頂の感激〟を再録したうえ、登頂日誌で要領よくまとめてある。ヒマルチュリはJAC隊の断念した東壁の登攀に成功、頂上直下まで迫りながら時間切れのため第一次隊が東壁を下降途中ブロックに打たれ近藤隊員が遭難死する模様が生ま生ましい。中島信一氏による「MAC戦後の海外登山の歩み」は五四年プレのJACの第二次マナスル隊の大塚博美氏から、七八年ポストの

アンナプルナ・サウスまで克明に記録され、七〇年のJACのエヴェレスト、七五年日本エヴェレスト女子隊、七六年のナンダ・デヴィ、植村直己氏の七八年の北極点、グリーンランド縦断など、MACの主要メンバーの海外における活動の足跡は注目されてよい。

第二部は本号の焦点ともなっており、昭和三十五年から五十三年まで十九年間における主として穂高・槍、後立山、剣岳周辺での行動が述べられている。この中でとくに記録的なものは、昭和四十年春の剣岳合宿における下端から八ツ峰縦走であろう。

第三部には、これまで発表されていなかった前穂高北尾根四峰東南壁明大ルートの記録（昭和十一年八月、十一月）が小国達雄氏よって報告されている。従来四峰明大ルートと呼ばれていたルートが、ここに初めて明らかにされたことは、穂高岳の登攀史に関心をいだくものにとって見落せないであろう。巻頭の大塚氏の「炉辺談話」、町俊一氏の「大学山岳部の悩み」は、現在の学生登山界の問題点をするどく突いており、こうした苦悩はMACだけではなく、どこの学校でもかかえていることと思うが、MACなりにそれを乗り越え、新しい目標へひた向きに前進する姿を、本号はよく伝えている。

（山崎安治）

日本アルプスの蝶

田渕行男著　学習研究社刊　A4変型判
四六六頁（カラー二一六頁、モノクロ一三六頁、解説一七四頁）定価二五、〇〇〇円

「この地史の落し子たちに安らかな旅をつづけさせねばならぬ。」

「九種までも美しい蝶をはぐくみ、私に自然への指向を慫慂し、消えることのない希望の灯をともしつづけた、恩寵深い祖国日本の山に限りない回想と感謝を込めて捧げる。」

この二つの巻頭言の内、前者は、二十年前に出版された前著『高山蝶』のであり、後者は此の度の『日本アルプスの蝶』のである。この二つの言葉に高山蝶の棲家の環境に大きな悪化があったのを窺い知る事が出来る。

田渕先生（私事になるが我が家では、昭和初年以来、中学校の生物の教師として、夏休みに生徒を登山に連れていっておられた頃から既に半世紀、御交誼をいただいている）は、あえて本書に二十四年前の「高山蝶分布図」を転用されて、

「この古い分布図はそのままこの二十年間に影を薄めていった蝶たちの形見の遺書とも、また往時の繁栄を偲ぶ記念碑とも

目にうつる」

と、言われている。原因は、一つに天変地異――雪崩、出水、山崩による棲家の破壊、また一つには、人工的な――蒐集家（営業的な者さえ数多い）による捕殺と、登山の隆盛、観光事業の発展により、副次的に棲家を奪われたこと、とされている。

往時、彼女らが乱舞していた梓川辺で営業していた私には、その罪を負わされている様で心が痛む。ひたすら、彼女等が人の気の少ない恵まれた棲家で、人目につかずとも息長らえて舞っていて欲しいと祈るばかりである。

さて、暗い話から、本書の美しさにひたり込もう。各頁の一枚一枚の写真は、先生独特の山岳風景であり、科学者の見た植物描写であり、そして、三十余年かけた蝶の生態写真である。「私は生態写真だからと言って特別甘い標準で扱われることは納得出来ない。蝶の美学とも言える造形性を重視した」と、厳しい自然条件の中でよくもこんなに美しく、リアルな小さい虫が撮影出来たものと、無能な山歩きだけの凡人には驚く様な一枚一枚である。

先生は、知人のガイドの世話で、昭和二十年七月、常念山麓の牧部落に移住し、翌年より身近な一の沢から、常念岳蝶ケ岳と、通算二〇四回も登られ、又、上高地、梓川渓谷へも、足繁く通われた。そして、昭和三十四年、今では幻の名著といわれる『高山蝶』を出版されたわけである。

此の度、新著の序に、日本鱗翅学会会長の白水隆博士は「高山蝶については、分布や発生期のレイアウトは判明していたが、幼年期や生態など全く未知であった。田渕さんが、自然のフィールドの中で、一つ一つ、その究明に当られ旧著『高山蝶』を出版された事は、研究者、同好者にとって大きな衝撃であった。高山蝶の生態は、ほぼ完全に解明されたが、田渕さんの最大の心残りは、当時の出版事情でカラー写真の掲載が著しく制限された事であり、以来今日まで二十年間、新しい高山蝶の出版を心に秘めて、新しい写真や資料を蓄積されて来た結果、本書はカラー写真を大幅に取入れて出版された」とある。

本書で、田渕先生は、「生涯のスケジュールとして、終わりに近いころ仕事の山場を据えるのを理想として考えていた」といわれている如く、前著ではまだ三十余年間の蝶との交友録としては貧弱だとし、七十三才の老令をおして岳沢へ十回も本書の編集の合間に通われた。蝶への愛情と山への憶れがひしひしと感じられる。

六百枚の写真のうち四百枚がカラーという豪華さで、「自然物の生態を扱う本は色彩が絶対」という先生の執念が、やっと二十年ぶりにここに実を結んだのである。それでもまだ猶、本文中に「唯一重大な空白部があり、それには旧著との二十年間に狭められていない」と、クモマツマキ蝶の蛹化の場所について不明な点を、近年個体数の減少等状況悪化の為とはいえ探索

出来ずに残念と、心底より嘆いておられる。

こんなにして妥協も許さず、観測に厳しい先生も、又優しい詩人でありロマンチストである。「九つの舞踊」「美しきナイン」これらは先生が九種類の高山蝶に名づけた愛称である。タカネヒカゲに「ハイマツ仙人」、ミヤマモンキに「山の娘」、タカネキマダラセセリに「草原のパトロール」、オオイチモンヂに「海軍大将」等、先生が一人、風の吹きすさぶ常念乗越で、又雨のそぼふる岳沢のガラ場で、又せせらぎを聞きながら梓の川辺のテントの中での折々に、口ずさみ、呼びかけていたのではと、微笑ましく、豊かな山の生活をされて来た先生の側面が窺われ羨ましい。

明治四十三年七月末、中村清太郎氏による薬師岳にてのタカネヒカゲの発見以来、四十年目にして初めて、昭和二十一年六月初め常念乗越にてこの蝶の幼虫に出合った胸の高鳴りと昂奮の様！　霧の流れ去る中、じっと手のひらにこの小虫を乗せて見入っている先生の姿！　思うだに目に浮かぶ。そして、この小虫は、何人にも解き得なかったこの蝶の生態を明かしてくれた。又、この発見が先生の高山蝶探究の旅立ちの記念すべき出来事であった。この書の巻末の頁に、この幼虫が隠家としていた石の写真と、その幼虫のスケッチが載っていて、「埃にまみれたこの石くれに、私の三十四年にわたる限りない高山蝶の思い出を託して、長かった蝶遍歴の旅を終わることにしたい」と記されている。どんなにか重大な、この小虫との出会であったことだろう。

旧著では、四季それぞれの季節に各蝶の生態について説明されていたのを、本書は各蝶についての一生を直列的に示されて大変わかり安い。中には、満二年、足かけ三年をかけて、一生を過す蝶が居る等、氷河期の遺物、寒冷地の蝶、と驚くものである。すべて自ら我が国で初めてその生態を解明されたという自信を以って発表されているし、その写真はプロ写真家として当然のことながら美しい。特に羽化寸前の彼女等に天女を想い、妖精を偲ぶ。そして、その美しさの陰に、緊張した撮影の様子を紙面より強く感じる。

本書の中で、頁は僅かだけれど、先生が旧制中学時代から昆虫を追いかけ始め、次に蝶の彩色の写生をして高山蝶に移って行く過程が述べられている。先生は、「蝶の絵を画く事は中途半端に終ったが、物を良く見る習慣が身についた。又、カメラのレンズの性能に安易に依存し、印画をみて初めて詳細に気がつく事がある。蝶と長く見つめあって描きあげた画からは心に通う情感がにじむのを覚える」と書かれているが、昭和三十年頃、牧のお宅をお訪ねした折、拝見させていただいた、本書掲載の二枚の蝶の絵のあまりの美しさに驚嘆の声をあげたのを、つい昨日の事の様に思い出す。

又、蝶の棲家の環境を示す風景写真の一枚一枚は、それぞれ

にプロ作家としての品格があり、山の重厚さの表現は他者の真似の出来ない味がある。やはり牧のお宅にお邪魔しお話をおききした時、大型カメラ故バチバチとらず、目的を以ってチャンスを待つ、例えば何月何日何処へ行けば何がどうなっていると計算されて、その地点で三脚を立てる事がある由、科学者として無駄なフィルムは使わない、とも聞いた。半世紀に及ぶ山歩きの経験を通じて、厳しい初冬の山でも、風雨の夏山でも、小さいテントで又無人の山小屋で、ただ一人チャンスを狙った結果が、こんな立派な写真となったのだろう。昭和二十六年朝日新聞社より『山岳写真傑作集』をひっさげて写真界に田渕行男の名を轟かせて以来、山の写真では不動の地位を確立したのである。

さて、生態写真、山岳写真と、本書を彩る中で、読ませて楽しませてくれるのが、先生の美しい文章だ。学術書の様でありながら、つい詩集かとも思われる文章が各所に見られ、蝶に愛称をつけられた先生のロマンチストぶりがうかがわれる。たまたま明治三十八年、高野鷹蔵氏によってクモマベニヒカゲが日本で最初に発見された年が先生の誕生の年であり、本書の出版日は満七十四才の誕生日だという。誠に高山蝶にかけられた先生の情熱そのままの因縁と思えるのである。

日頃先生のお近くにいて、出版物に対しては格別と凝り性なのを見聞きしている者には、本書の「学研」の担当の方々が御苦労されたのではないかと思われるが、本書を先生から頂戴し拝見して、これなら先生も満足された事だろうと心よりおよろこび申す次第である。大変高価な書物とて一般家庭では入手不可能でも、自然が失われて行く次の世代の為に、各学校に、又地域の公民館等文化活動の中心に、必ず一冊備えていただきたい本と思うものである。

最後に、先生が旧書『高山蝶』のあとがきに書かれた、「私の家族に対する謝罪と感謝の心持ちを兼ねて、これをまず妻に贈る事とした」とある様に、本書もまた、まず奥さんに贈られた事と思う。先の御労作の数々をずっと陰乍らお手伝いされて来た奥さんに、私も「良かったですね。ご苦労様でした」と申し上げたい。先生御夫妻が何時までもお元気で次のお仕事が完成されます様、心より御健康をお祈り致します。

（奥原教永）

ヒマラヤ紀行

ジョセフ・D・フーカー著　薬師義美訳　A5判　五六一ページ
写真二ページ　原色版　絵一二ページ　一九七九年八月十日　白水社刊　定価五八〇〇円

一八四三年、軍医兼博物学者として、J・C・ロス率いる南極探検から帰国した。J・C・フーカーは、一八四七年十一月、三〇歳の時、東インド会社の新総督としてインドに向かうダルハウジーの船に便乗して英国を出発、東ネパール、シッキムの探検に向った。新進の植物分類、植物地理学者、そして博物学者（ナチュラリスト）として、英国政府は彼に必要経費と、最大限の便宜を供与したようである。

英国は、すでに一八二〇年頃、産業革命の完成をみ、一八三七年にはビクトリア女王が即位している。ダルハウジーは、一八五七年セポイの反乱の原因をつくった総督である。本文中、フーカーも中国に輸出される大量のアヘンについて述べているが、一八四〇～四二年にアヘン戦争がおこり、南京条約が結ばれている。つまりこの時期は、七つの海を征覇する大英帝国の黄金期である。フーカーも超一流国の若きエリート科学者として、誇りと気概に満ちあふれているのが感じられる。

日本では、一七九八年に近藤重蔵の蝦夷地探検、一八〇八年間宮林蔵の樺太探検、一八一四年伊能忠敬の沿海測量がなされている。そして、ペリイの浦賀来航で、日本中大騒動になるのは一八五三年である。フーカーの『ヒマラヤ紀行』は、翌一八五四年、チャールズ・ダーウィンに献ずとして出版された。

カルカッタ上陸後のフーカーの活躍は、まさにめざましいの一語につきる。インド総督やダージリン駐在のエージェントの最大の援助のもとにやるのだから、特製の駕篭や象、舟、従者、ポーターと可能な限りの手段を駆使する。しかし、現在、日本でこれだけの仕事を一人でこなせる三〇歳の人間がはたして何人いるだろうかと考えこんでしまう。

一日に何百種という植物標本をつくり、とくに珍しいものは、本国の植物園で栽培するために採取する。植物調査の対象は、木本・草本はもとより、シダ、コケ、モにまでおよぶ。大きな林木については、高さと幹の周囲長を測定する。もちろん、地域、地形、高度、雨量などの要因と植物の分布にも細心の注意をはらう。しかし、これだけなら、彼は植物分類は専門の植物地理学者だから、それほど驚くにはあたらないかもしれない。動物もやる。大型動物からミミズ、昆虫、魚、貝も対象とする。地質調査もおこなう。専門の地質学者たちは、植物化石の同定がでたらめだと本書でもときどき批判している。地質

とともに地形について勘案し、ヒマラヤの造山運動についても、見解を述べる。

測量、地図の作成も彼の探検の主要な目的のひとつである。六分儀、方位羅針儀（コンパス？、セオドライト？）人工地平線器（レベル？）、気圧計を駆使して測量していく。気圧計はアネロイドではなく、水銀気圧計らしい。これと、沸点の測定による高度算定の数値がよくあうのには感心する。シッキム、チベットの国境付近五千数百メートルの地点においても、たいてい数十メートルも差はでない。数メートルの差であることも、たびたびある。

気象観測にも、極めて意欲的である。晴雨、風向、雲など毎日の天候の記録。雨量、積雪量の観測。さらに温度計をフルに利用する。気温、湿度、川、池、温泉の水温、それに何メートルか堀らせて、地温を測る。一八四八年四月のダージリン到着から、東ネパール、シッキムの探検を終えてダージリンに戻り、そこを去るのは一八五〇年二月だから、ほぼ二年間、この地域の気象観測をつづけたことになる。

自然だけに限らない。人間、部族民の気質、風習、宗教、産業、食物、病気など観察の眼は鋭い。しかし、ここで私たちは、彼が「白人」であることを感じる。インテリのこととて、野蛮人という言葉はあまり出てこないが、有色人種は「原住民」であり、英国人は「紳士」と表現される。失敬な話だが、これはまあこの時代の人だからで、彼自身が英国人のうちでもとくにこういう傾向の強い人では、けっしてないようである。むしろ、植民地支配の天才といわれた英国人の人間観がうかがわれて興味深い。この書は学術的にすぐれているばかりでなく、兵要地誌としても当時重大な意義をもっていたのではなかろうか。

写真術の発達していない頃のこととて、つぎつぎとスケッチをしていく。それは専門家に清書され、細密な挿絵となって私たちを楽しませてくれる。

彼の勤勉で猛烈な仕事ぶりよりなによりも私を感心させるのは、その目的を完遂するための不退転の意志と行動力、あくなき探求心である。これぞ探検家の神髄といえよう。

カルカッタからダージリンへ行くのに、はるか西方ベナレスをまわっていく。カンチェンジュンガの西、東ネパールとチベットの国境に達し、ついでシッキムを縦断してチベット国境からチョラモーへ。再びラチューン谷をさかのぼって、チョラモーへ。しかもその間、多くの枝谷に足をのばしている。それも、遂には拘禁されるという、「原住民」の極度の妨害をはねのけての行動である。二ケ年の探検ののち、ダージリンに帰り、これで英国に戻るかとおもいきや、ヒマラ北西部カラコラム峠に達してきたT・トムソンと共に、カシア山地にでかける。ブータン入国が難かしいので、かわりにでかけたのである。実際、

よくやるなあ、とおもう。

こういう偉い人の書いた報告書だから、全編、血湧き、肉躍るというものではけっしてない。人の感情が、すなおにヴィヴィッドにはでてこないのである。読んでいるうちに、私は、これぞかの有名なイギリス料理のディナーの味ではないだろうか、とおもった。こんな興味深い経験を、よくまあこれほど味気なく書けるものだ。ついでに、さらに告白しよう。バーナード・ショウだったか、「口の悪いヴォルテールはいった。ダンテの『神曲』は永遠の名作に違いない。誰も読まないから」というものをおもいだした。しかし、中程まで読みすすむうち、私もイギリス料理に慣れてきたのか、著者が人々となじんできたのか、だんだん面白くなってきた。フーカーはあくまでゴリゴリの研究者といったタイプではなく、人づきあいは上手ではないが、やさしく親切で、感受性も豊かな人のようだ。

このような本が日本で翻訳され、いわゆる一般書店から大々的に出版された。日本の文明度はなかなかたいしたものだ、と私はおもう。訳者薬師さんの日本語は読みやすく、同氏が画きなおしたという付図も立派で、使いやすく配置されている。私は、表紙見返しの地図のスケールの誤りを発見して、薬師さんにほめてもらった。六〇を八〇に、八〇を一二〇になおせばよいのである。しいて注文をつけるとすれば、人名、地名、植物名などは原著でつかわれているものを、そのままカッコに入れておけばよいのではないか。訳者の負担には殆んどならないだろうし、少し販価はあがるとしても、本書の格というか価値はさらに高まるであろう。訳者は「解説」のところで、くわしく研究したい人は原書を読んで欲しいといっている。わざわざ日本人が原書など読む必要はない。これを読めば充分だ、と誇りと気概をもっていってほしい。その値うちのある訳書だとおもう。

「短評」を記しておこう。自分はヒマラヤの自然と人に興味をもっていると考える人は、ぜひとも蔵書として購入しておくべき書である。ヒマラヤについて研究し、論文など書こうという人には、必読の書である。

（岩坪五郎）

シルクロードの謎の民
―パターン民族誌―

J・スペイン著　勝藤猛・中川弘訳
四六判　三〇六ページ　一九八〇年
二月　刀水書房刊　定価一六〇〇円

本書は、J.W. Spain, "The Way of the Pathans" 1962, Robert Hale Limited, London の全訳である。著者は、はじ

め、在パキスタンのアメリカ大使館員として、ついでフォード財団の研究員として、一九五〇年代に数次にわたってパキスタンに滞在し、パターン（「パターン」という呼称は、本書の二章や、訳者の一人、勝藤猛氏の解説にもあるように問題があるが、混乱をさけるため仮にここでも使用しておく）についての見聞と知識とを深めていった。その成果は、博士論文としてコロンビア大学へ提出された。本書は、いわばその副産物として、論文からは洩れたエピソードや個人的な体験を中心に、一般読者むけに書きおろされたものである。

このような成立の過程からもあきらかなように、本書の目的は、パターンの歴史や文化についての、正確で普遍的な記述を行うこと自体にあるわけではない。パターンの分布、言語や土地制度、社会や風俗習慣、文学などについての記述は随所に見られるが必ずしも体系的とはいえない。パターンの総人口の約半数を占め、政治的には支配的な民族となっているアフガニスタンのパターンについては、ごく簡単にしか触れられておらず、少数民族という立場にあるパキスタンのパターンが主として対象となっているが、両者の対比が明確に意図されているわけでもない。経済、とりわけ全人口の80％近くが従事している農業や、宗教などの側面についても、充分な記述がなされているとはいいがたい。要するに、本書に本格的な「民族誌」としての内容を期待するなら、失望を味わわざるをえないことになる。

本書の狙いは、むしろ原題にも示されるように、あくまでもパターンの生き方、生きざま、いわばパターン魂とでもいうべきものを提示することにある。さまざまのエピソードを通じて、くりかえし語られるのは、何よりも自由と勇気を尊び、自らの伝統と誇りを護るためにはいかなる犠牲をも顧みない独立不羈の民パターン、というモチーフである。歴史の断章や各地のパターンに伝わる伝承、詩人たちの作品などは、著者のペシャワール旧市街の雑踏の中での体験や、荒涼たるワジーリスターンの「危険に満ちた」旅行、移動する遊牧民たちとの会話などと同様、パターンの生き方を語るための素材を提供しているにすぎないとさえいえよう。

ところで、こういった、いささかロマンティックなパターン観というものは、著者もみとめるように、キプリング以来の系譜をひくもので、それ自体は決して目新しいわけではない。そして、その当否を論ずることは、実際にパターンの社会を訪ねた経験のない評者の任でもない。類似したパターン像がくりかえし提示されてきたからには、それなりの妥当性もあるのかもしれない。ただ、人口千五百万人をこえる一つの民族のエトスというものの把握の仕方としてみれば、このように時代や地域のひろがりをこえて、容易に一致してしまうということ自体が、いささか気になる。つまり、民族のエトスを、一種の前提としてしまうことによって、それを生みだしたはずの、広い意

味での文化全体との関係を考えようとする姿勢が稀薄になってしまうのである。パシュトゥヌワレイ、すなわちパターン人の守るべき民族の伝統的な行動様式、「パターン人の掟」にしても、そのうちのどこまでが、パターンのほぼすべてが属するイスラームに源を発するものであり、どこからがパターン独自のものであるのかといった問題が生じてくる。ノルウェーの人類学者バースによれば、スワートのパターン社会は本質的に「カースト社会」と規定しうるような構造をもっているという(*)。より巨視的には、西アジアやインド世界とのつながりを考え、より微視的にはパターン内部の地域性や階級性にも目を向ける、そんなことは不可能に近いというならば、実際にそうかもしれない。ある民族のエトスを論じるというのは、もともとそれほどにだいそれた試みなのだ。ともかく、本書からも、伝統的なパターン社会の根底に流れる不変のエトス、といった西欧流の認識、ないしは願望を感じるのは、思いすごしというものだろうか。こうした認識は、何もパターンの場合に限ったことではない。アラビアのベドウィンやサハラのトゥアレグといった民族を対象とする紀行などから、パターンのそれと奇妙なほど一致するエトスの把握を見出すことは珍しくないはずだ。

もちろん、本書の内容がすべてそういった、時代を超越した部分にのみむけられているわけではない。まだ生々しい英領時代のさまざまの事件のエピソード、独立間もないパキスタン政府とパターン社会の関係、アフガニスタンとパキスタンの間での、パターン人国家「パシュトゥニスターン」独立運動をめぐる確執などについての記述などは、個々の事件への評価にかかわる立場の相違をはなれて、一つの時代の証言としての意味をもっている。もっともそれは直接的な植民地統治者ではなかったアメリカ人、という第三者としての立場からの、それなりの「公平な」視点からの記述であるのだが。そして、冷戦のさなか、当然、著者自身も全く無関係ではありえなかったはずのアメリカの政策や役割については、全くふれられていないにせよ。

要するに、本書は一九五〇年代をパキスタンですごしたアメリカ人の、それも外交官ないしそれに準ずる立場にあったアメリカ人の著書である。そのことを念頭においておくことは、本書を読む上で決して無駄ではないはずだ。

訳文は平明で読みやすい。また、原書にはない小見出しや注、語彙の解説、図版などをつけて、読者の便宜をはかるなどの工夫がこらされている。巻末の勝藤氏による解説は、パターン人の起源、現代史におけるパターン人の立場と問題、パターン人の道徳と慣習などのテーマを扱っており、教えられるところが多い。

ただ、訳書として、若干気になる点がないわけではない。第一に、「シルクロードの謎の民」というタイトル。シルクロードという語の意味を拡大しすぎる風潮が何によるものかは別と

しても、本書の本文には、シルクロードなる語は、当然のことながら出てこない。内容から考えても、本書の場合原書のタイトルを素直に訳した方がふさわしいように思われる。サブタイトルの、「パターン民族誌」も、先に述べたように妥当なものとはいえない。

第二に、写真の扱いである。あとがきには、「写真については小口和夫先生と朝日新聞社にお世話になった。他の写真は勝藤、中川の写真を使用した。」となっているが、実際には、原書の一部の写真も使用されており、原書の写真と訳者の写真の区別は明記されていない。誤解を招きやすいといわざるをえない。

第三に、序文は、原書で二ページの短いものであるが、本書の成立の事情がのべられており、評者のような立場からは、訳書にも加えてほしかった。また、索引も、とりわけ日本の読者にとってまぎらわしい固有名詞が多く登場するだけに、残しておいてほしかった。

「あとがき」にあるように、本書を「パターン人について書かれた最高の本」と評するには、評者は抵抗をおぼえるが、本書で扱われている地域やパターンについての関心がさまざまの意味で高まっている現在、邦文で手軽に入手できる文献が、いささか性急な時事解説風のものを除けば、決して豊富ではないだけに、本訳書の出版は時期を得たものといえよう。

(•) Barth, Fredrik "The System of Social Stratification in Swat, North Pakistan", in Leach, E.R. ed. "Aspects of Caste in South India, Ceylon and North-West Pakistan", 1960. Cambridge University Press, Cambridge pp. 113–146.

(鹿野勝彦)

Kanchenjunga- First Ascent from the North-East Spur

by Col. Narindar Kumar, PVSM, AVSM Vision Books, New Delhi, India, 156 pp.

一九七七年五月三十一日、N・クマール大佐率いるインド陸軍登山隊が、戦前、二回にわたる執拗なドイツ隊の攻撃を阻んだカンチェンジュンガの東北稜からの登頂に成功した。一九五五年のヤルン氷河からのイギリス隊による初登頂に次ぐ第二登である。登頂者はプレム・チャンド少佐とナイク・ニマ・ドルジェ・シェルパ（後軍曹）の二人。最終キャンプは七九九〇メートルだったから、頂上まで六〇〇メートル強の長丁場だっ

た。

本書は、この登頂に至る苦闘の記録を、隊長自身が綴った手記である。感情を抑えた、客観的な記述で、公式報告書的な色彩が強く、やはり軍人だからこういう書き方になるのだろうか、という気もするが、登山をはじめた頃に抱いたカンチェンジュンガへの憧れを持続させ、ふくらませ、ねばり強く実現にこぎつけるに至る過程や、自然描写、隊員とのやりとり、事故にあたっての苦脳など、随所に著者の心のやさしさが現われていて、面白い。

登頂態勢が整い、第一登頂パーティの二名が最終キャンプ設営のために出発しようとする前夜、CⅤにいる隊長とCⅥにいる二人との無線交信が不通になってしまう。双方必死に、まるでクイズ問答のようなやりとりの末、登頂パーティが、サポート隊に対して、若干のカラー・フィルムと酸素マスク調整用のスパナーを持参してほしいと希望しているのを、やっとサポート隊が了解するくだりなど（一三五ページ）、大変面白いエピソードで、読者としては、こういう場面に出会うと、ホッとすると同時に臨場感を味わうことができる。

インドで本格的な登山が始められたのは、一九五〇年代の後半だと思うが、たとえ、軍の支持を得ているとは言え、次第に優れた登山家が輩出しつつあることを理解することができる。登山のレベルもどんどん上がっていることは、実積が示しているが、例えば、この隊の隊員たちの経歴をみても、毎年、一つか二つずつ、大きな登山をやっているのを見て、なるほどという気がする。高所登山では、今や、こういった〝場数〟がますます重要な意味をもつ時代に入りつつある。しかし、そのようなインドでも、資金と装備の心配は大変のようで、カトマンズに行って、シェルパが各登山隊からもらった装備を買い集めたり、いいカメラが揃わなくて苦労する姿は、発展途上国インドの経済を反映している。しかし、一昔前のわが国でも同じだったのではないか。最近は、装備もよくなり、必要なものは金さえ出せばすぐに調達できるが、血のにじむような準備の苦労を味わいつつ目的の山を狙う真摯さだけは、忘れたくないものだ、とつくづく思う。

それにしても、この東北稜からの初登攀は、〝傷だらけの栄光〟という言い方がぴったりするような苦難の連続であった。戦前の二つのドイツ隊の記録を見ても、ともに降雪に苦しめられているが、一九七七年のプレ・モンスーン期も、天候が悪く、この隊も悪天候に悩まされた。その上、初期段階で、主力隊員の一人だったスクヴィンダー・シン軍曹が、CⅡからの下降中に転落死亡したために、登山活動を十五日間中断せざるをえなかった。また、副隊長のスリンダー・スルジット・シン大尉が足を捻挫して隊列を離れ、ジャワハール・シン軍曹も胆嚢炎のため、ヘリコプターで救出、さらに、一時は、七人もの隊

員がベース・キャンプで休養という状態で、一九人の隊員がフルに活動していることはあまりなく、統一のとれた、効率のよい隊であったとはとても言うことは出来ない。それにもかかわらず、着実にねばり強く隊を進めたクマール隊長の力量は高く評価してよい。また、常にトップに立ち、ルートを開き、登頂者にもなったプレム・チャンド少佐の活躍が印象的である。その他にも、デポの荷物が雪崩に流されたり、事故に至らない滑落が随所に起ったり、ヒマラヤ登山の危険というものを考える上で、さまざまのケースを提供してくれている。あのバウアーの二つの報告書（"Im Kampf den Himalaya; Unsere Expedition, 1930", "Um den Kantsch"）で描かれた悪絶無双の東北稜は、四十年以上たった一九七七年のインド陸軍隊の場合にも変わらず、きわめて危険に充ち、困難であり、その登攀は忍耐と勇気のいる仕事だった。クマール隊長の報告は、それをよく伝えている。

正式の報告書とすれば、ルート図も欲しいし、登攀ルート、遭難の状況、天候等、詳細な記述なり分析が欲しいところが多いが、それは本書の性格上、ないものねだりかもしれない。

また、本書には多数の白黒、カラーの写真が挿入されており、いい写真も多いが、印刷がけっしてよい出来栄えとは言えないのが残念である。

（中島　寛）

残照のヤルン・カン

上田　豊著　新書版二六九ページ
一九七九年八月　中央公論社発行
定価四四〇円

登山や冒険の記録で、それほど派手ではないが内容の面白いものが、文庫本や新書版に収められるようになった。この傾向は、山登りが多様化していることと深いかかわりがありそうだ。出版する側は、より広い読者層を対象とするので、物語としても面白いものを求める。それに応える内容を、登山そのもの、あるいは報告者の個性が支えていることが背景にある。『残照のヤルン・カン』は、舞台が一九七三年の登山で、記録としては古いものだが、登山の魅力や危険、未踏の八五〇〇メートルにいどむ壮絶なドラマを語る、新書版ならではの好著である。どのようにして登られたかという登山の全体ではなく、ひとりの男が、何を考えながら高峰に向かい、自然の猛威に耐え、頂上を手にし、そして傷ついていったかの記録である。

大がかりな登山隊のいわゆる報告書は面白くないものと相場が決まっている。さむらいの集団と目される京都大学学士山岳会（AACK）の『ヤルン・カン』（一九七五年、朝日新聞社

刊）も、いってみれば、それほど興味をそそられるものではなかった。資料としては貴重であるにしても、あれほど分厚くて豪華な本を、いったい何人が精読するのかな、と思った。人間ひとりひとりの面白さや息づかい、その役割を読みとるのは容易ではない。上田さんの新書本を読み、正式報告書をあらためてめくりながらそう思った。上田さんは、全体の記録としては本棚にしまいこまれたヤルン・カンに、ひとり追憶の残照をあて、そこで闘ったものたちに血を通わせている。それは六年がかりの作業だったようだ。

ＡＡＣＫのヤルン・カン登山は一九七三年に行われた。がっちりした組織に乗って準備はすすめられ、隊員が決まり、ベースキャンプへと展開する。上田さんは、尊敬する一年先輩の松田隆雄さんから特に強い誘いをうけ、山の写真をじっくり眺め、「よし、これなら登れそうだ」と六割方の成功の可能性を認めたところで隊に加わる。京大お得意のパイオニアワークにかなうし、オールラウンドな登山が実践できる。専門の氷河調査にもプラスになる。「問題とされている最後の部分は、高度さえ考慮に入れなければ、それほど困難でもなさそうだ」とみる。

五月十三日、松田、上田両隊員が七九五〇メートルの第五キャンプに入った。翌日、二人は一発勝負のラッシュ攻撃に出かけ、夕刻、頂上に立つ。「初登頂」の部分は、正式報告書とほぼ同じ記述である。しかし、準備の段階から、個人の記録として書きすすまれると、二人登頂する瞬間の描写や感激に、説得力と厚みが加わる。そこが頂上だというところで立ち止まり、眼鏡のくもりをふんねんにふき、トップを譲ろうとする。「頂上は松田に先に踏んでもらおうと考えながら、よじ登る。この計画のために彼が費した努力は、わたしとくらべものにならない。これが礼儀というものだ」ここまでが成功の物語である。

夜をついて下降するうち酸素ボンベはカラになり、ビバークの途中ツェルトが吹き飛ばされる。行動再開後ルートを見失う。高度の影響が時間の経過とともに判断力を鈍らせる。疲労困憊したものが高々度で、どんなにひどい追い打ちをかけられるか。ヤルン・カンは一転して悲劇の山となる。

動けなくなった松田隊員のためデポ地点へ酸素をとりに行こうとして二人は別れわかれになる。夢と現実の間で、十時間以上も孤独な彷徨をつづけ、上田隊員だけが救出される。その間の異常な体験は、低酸素が脳を破壊するすさまじさに充ちて戦慄させる。

登山が終わってから六年後に、この〝個人的記録〟は本になった。「右手の親指が健在だから、さして不自由ではない」その手にペンを握り、実際の山につぎこんだエネルギーをはるかに超える労力を費して書きついでいったという。――八〇〇〇メートル登山が本来もっている危険については、すでに語りつ

くされている。あらためて自分の体験を持ち出すまでもなかったろう。上田さんはそういう教訓的な意図をはなれて「時が経つとともに遠ざかっていくヤルン・カンを自分の意識のなかに定着させておきたい欲求にかられ、再び山を登り直すつもり」で机に向かったという。

正式報告書『ヤルン・カン』の序文のなかで西堀栄三郎隊長は「友を山で失ったという事実は、ヤルン・カン初登という栄光のカゲに隠されるものでなく、私たちひとりひとりが生涯負いつづけ、決して消え去ることのない人生の一部である」と書いている。ギリギリまで行動をともにした仲間のために、生きて還ったものが贈る、これは鎮魂の書でもある。青春を刻んだ山と向かいあい、自らの痛みを文章に塗りこめながら仲間との日々に残照をあてつづけた上田さんの長い歳月に、私は誠実な人柄をおもう。

ところで、いくら個人的な記録とはいえ、登山が終わってから六年後に、この種の体験を完結（文章に定着）させるというのは尋常でない。それほど、自分の登山、生と死、青春に執着があったに違いない。いや、そんな言い方は不正確で、むしろその直後は、自分の体験を文章にし、より多くの人の目にふれさせることに、大きなためらいを感じたのではないか。後悔や苦痛もあったろうと私は勝手に想像する。二人で出かけた頂上へ、帰りはひとりだったのだから——。しかし書いておかないではいられなかった。そんな苦渋が随所に読みとられる。アタックの前後、松田さんと二人きりの行動を記録する筆は慎重である。生還した自分を正当化しないように、亡くなったパートナーを傷つけないように事実を語っている。正確を心がけている。

山登りに参加したものには、そのひとり ひとりに物語がある。その物語の貴重なひとつを、新書版という誰もが手にしやすい形でさらけ出した本書は、六年前の登山に新たな肉づけをし、血を通わせている。読み終わって私は、一九六五年の私たちの山（失敗に終わった早稲田のローツェ・シャール）の記録を、あらためて読みかえそうと思った。

（成川隆顕）

会務報告

昭和五十四年（一九七九）七月～昭和五十五年（一九八〇）六月

◇**七月理事会**　七月十六日（月）ルーム

出席者　西堀、折井、渡辺、宮下、中島、中川、鈴木、高橋、川上、大森、中村、小倉、越田、山口、菅沢、岡沢、嵯峨野、小原（勝）、山崎、金坂、小原（晴）、大塚、太田、織内、近藤、田口、河野

▽議事・報告

一、日中交流登山（チョモランマ）の件

二、一九五四年度ＵＩＡＡ総会出席代表の件

三、自然保護委員会報告

（詳細は「山」四一一号参照）

◇**七月臨時理事会**　七月二十四日（火）ルーム

出席者　折井、渡辺、宮下、鈴木、高橋、川上、中村、越田、山口、菅沢、岡沢、嵯峨野、片岡、山崎、大塚、村木

▽議事・報告

一、日本山岳会チョモランマ登山隊―一九八〇派遣の件

二、日本山岳会学生部ティリチミール山群縦走隊―一九八〇年派遣の件

三、婦人懇談会報告の件

（詳細は「山」四一一号参照）

◇**八月理事会**　八月六日（月）ルーム

出席者　西堀、折井、渡辺、宮下、中島、中川、鈴木、中村、山口、高本、川上、越田、高橋、岡沢、片岡、小原（勝）、田口、金坂、近藤、小原（晴）、望月、織内、河野、木下

▽議事・報告

一、チョモランマ峰登山に関する議定書調印の件

二、チョモランマ委員会並びにＪＱＥ委員会設置の件

三、日本山岳会チョモランマ峰偵察隊派遣の件

（詳細は「山」四一二号参照）

◇**九月理事会**　九月三日（月）ルーム

出席者　西堀、折井、渡辺、宮下、中島、飯野、越田、山口、高本、鈴木、大森、中村、小倉、岡沢、中川、嵯峨野、菅沢、小原（勝）、片岡、金坂、小原（晴）、河野、大塚、山崎

▽議事・報告

一、チョモランマ登山計画の件

二、エベレスト冬季登山隊（植村直己氏）推薦状交付の件

三、集会・科学研究・自然保護・海外連絡・図書・医療・指導委員会報告の件

四、青年・婦人懇談会報告の件

（詳細は「山」四一三号参照）

◇**十月理事会**　十月一日（月）ルーム

出席者　西堀、折井、渡辺、宮下、中島、中川、鈴木、高本、小倉、嵯峨野、越田、山口、岡沢、菅沢、川上、片岡、金坂、大塚、小原（晴）、山崎

▽議事・報告

一、チョモランマ登山基本計画の件

二、秩父宮記念学術賞候補推薦の件

三、図書・山研運営・科学研究委員会報告の件
四、婦人懇談会報告の件
（詳細は「山」四一三号参照）

◇**十一月評議員会**　十一月十九日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、山本、水野、朝比奈、織内、太田、金坂、小原（晴）、山崎、大塚、木下、高遠
▽議事・報告
一、名誉会員推薦の件
二、名誉会員推薦等に関する内規改廃の件
三、チョモランマ登山に関する件

◇**十一月理事会**　十一月十九日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、中島、飯野、中川、中村、小倉、鈴木、岡沢、山口、高本、高橋、菅沢、越田、小原（勝）、片岡、金坂、大塚、村木、山崎、小原（晴）
▽議事・報告
一、名誉会員及び永年会員推薦の件
二、ＵＩＡＡ退会の件
三、評議員会報告の件
（詳細は「山」四一四号参照）

◇**支部長会議**　十二月一日（土）ルーム
出席者　折井、渡辺、平野（北海道）、中島（福島）、村上（山形）、藤島（越後）、小木曽（信濃）、大沢（山梨）、山本（静岡）、松井（岐阜）、中田（富山）、亀田（石川）、今西（関西）、西沢（熊本）
▽議事
一、会務報告の件
二、支部活動報告の件

◇**十二月理事会**　十二月三日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、宮下、中島、飯野、中川、中村、川上、岡沢、嵯峨野、鈴木、山口、高本、菅沢、片岡、金坂、大塚、山崎、小原（晴）
▽議事・報告
一、チョモランマ登山報告の件
二、昭和五十四年度年次晩餐会の件
三、支部長会議報告の件
（詳細は「山」四一五号参照）

◇**一月理事会**　一月十一日（金）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、宮下、中島、飯野、中川、高本、菅沢、岡沢、小倉、鈴木、大森、山口、越田、川上、高橋、中村、金坂、小原（晴）
▽議事・報告
一、昭和五十四年度予算案作成の件
二、日本山岳会女子ガルワル・ヒマラヤ登山隊派遣の件
三、集会委員会報告の件
（詳細は「山」四一六号参照）

◇**二月理事会**　二月四日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、宮下、中島、飯野、中川、山口、中村、鈴木、川上、岡沢、高橋、菅沢、嵯峨野、金坂、山崎、大塚、河野、小原（晴）、片岡
▽議事・報告
一、チョモランマ登山隊々員の件
二、昭和五十五年度総会日程の件
三、集会・図書・海外連絡委員会報告の件

四、青年・婦人懇談会報告の件
（詳細は「山」四一七号参照）

◇**三月評議員会**　三月三日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、望月、織内、佐藤、山本、水野、木下、河野、山崎、金坂、村木、大塚、高遠

▽議事
一、昭和五十五年度役員（監事）候補者推薦の件
二、総会提出議案承認の件

◇**三月理事会**　三月三日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、中島、飯野、中川、鈴木、川上、越田、中村、山口、菅沢、高本、高橋、岡沢、水野、村木、山崎、金坂、大塚

▽議事・報告
一、昭和五十五年度事業計画（案）及び収支予算承認の件
二、東九州支部創立20周年記念行事の件
三、集会・海外連絡委員会報告の件
（詳細は「山」四一八号参照）

◇**四月理事会**　四月二十二日（火）ルーム
出席者　西堀、折井、中島、飯野、中川、鈴木、小倉、大森、川上、山口、菅沢、岡沢、越田、中村、小原（勝）、片岡、村木、小原（晴）、山崎、金坂

▽議事・報告
一、昭和五十四年度事業報告および収支決算、財産目録承認の件
二、監査結果報告の件
三、昭和五十五年度役員の件
四、昭和五十五年度除籍の件
五、オデル氏来日招請の件
六、日本山岳会学生部カラコルム登山隊およびインドヒマラヤ登山隊派遣の件
七、海外連絡・集会委員会報告の件
八、婦人懇談会報告の件
（詳細は「山」四一九号参照）

◇**五月理事会**　五月六日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、中島、飯野、中川、鈴木、山口、小倉、岡沢、越田、嵯峨野、菅沢、片岡、大塚、村木、金坂、小原（晴）、山崎

▽議事・報告
一、チョモランマ登山進行報告の件
二、学習院大学ヒマラヤ登山隊推薦状交付の件
三、長崎北稜会カラコルム登山隊推薦状交付の件
四、山研運営・集会委員会報告の件
（詳細は「山」四二〇号参照）

◇**支部長会議**　五月十六日（金）ルーム
出席者　西堀、折井、大塚（北海道）、村上（山形）、伊達（宮城）、斎藤（越後）、中島（福島）、大沢（山梨）、山本（静岡）、中世古（東海）、松井（岐阜）、今西（関西）、野口（東九州）

▽議事
一、会務報告の件
二、支部の現状報告の件

◇**昭和五十五年度通常総会**　五月十六日（金）
於・東京都千代田区九段北四の二の二十五・私学会館
出席者　西堀会長以下一二四名（他委任一五八一名）

▽総会次第

一、会長挨拶　西堀栄三郎
二、会務報告　中川　武
三、物故会員に対する黙祷
四、昭和五十四年度事業報告　中島　信一
五、昭和五十四年度収支決算、財産目録報告　飯野　亨
六、監査報告　片岡　博
（右、承認）
七、昭和五十五年度事業計画案の件　中島　信一
八、昭和五十五年度収支予算案の件　飯野　亨
（右、原案どおり承認）
九、昭和五十五年度役員（監事）選任の件
監事として次の各氏を選任した（任期は一年）
＜監事＞小原勝郎（再任）、鴫原啓佑（新任）
十、昭和五十四年度除籍の件
十一、議事録署名人選任の件
（詳細は「山」四二〇号参照）

◇**六月理事会**　六月九日（月）ルーム
出席者　西堀、折井、渡辺、中島、飯野、中川、越田、大森、中村、小倉、岡沢、高橋、鈴木、山口、鴫原、大塚、山崎、小原（晴）、河野、金坂

▽議事・報告
一、日米環境会議への本会代表者派遣の件
二、オデル氏来日日程の件
三、集会・図書・医療・科学研究・会報・山研運営委員会報告の件
（詳細は「山」四二一号参照）

会務報告

◇**小集会**

▽第三八三回　昭和五十四年九月十二日（水）ルーム
北海道日高の山と谷を語る会　講師・林　和夫氏

▽第三八四回　昭和五十四年十月二十六日～二十七日（金～土）赤岩峠
峠を越える山旅

▽第三八五回　昭和五十四年十一月十四日（水）ルーム
ヒマラヤの蝶を語る会　講師・堀勝彦氏

▽第三八六回　昭和五十五年一月十三日～十五日（日～火）八方尾根スキー懇親会

▽第三八七回　昭和五十五年二月十五日（金）私学会館
日本山岳会チョモランマ登山隊壮行会
「山」四一七号参照

▽第三八八回　昭和五十五年二月二十二日（土）ルーム
新入会員オリエンテーション

▽第三八九回　昭和五十五年三月一日～二日（土～日）長岡市、松之山温泉
「山」四一八号参照（科学研究委員会共催）

▽第三九〇回　昭和五十五年六月六日～八日（金～日）那須甲子岳周辺
第四回山菜山行

◇**主なる行事および集会**

▽鳥海山高山植物探索行（科学研究委員会主催）
昭和五十四年八月十一日～十二日（土～日）鳥海山
「山」四一四号参照

▽自然保護全国上高地集会
昭和五十四年九月二十九日～三十日（土～日）上高地

▽科学研究委員会第四回講演会
昭和五十四年十月九日（火）ルーム
チョモランマ地域の氷河と気候　講師・施雅風氏（中国科学院）
▽第十二回山岳図書交換会
昭和五十四年十月二十七日（土）ルーム
「山」四一四号参照
▽植村直己氏中国帰国報告会
昭和五十四年十月三十一日（水）私学会館
▽第二十二回もみじ会（静岡支部主催）
昭和五十四年十一月十日～十一日（土～日）天城湯ケ島温泉
▽昭和五十四年・年次晩餐会
昭和五十四年十二月一日（土）京王プラザホテル　出席者二八七名
「山」四一五号参照
▽この一本展
昭和五十四年十二月一日（土）京王プラザホテル
▽自然保護集会
昭和五十四年十二月六日（木）ルーム
三十五年目の樺太　講師・佐々保雄氏
▽雪崩講習会（遭難対策委員会・学生部委員会共催）
昭和五十四年十二月六日（木）ルーム
▽女性のための登山セミナー（婦人懇談会主催）
昭和五十四年十二月～五十五年三月の間に六回開催
講師・金坂一郎、松永敏郎、清水清二、川上　隆、中島道郎、村井葵の各氏
▽ヤングアルピニストの集い
昭和五十四年十二月九日（日）労音会館
▽第二十四回登山技術講習会（山スキー技術）
昭和五十五年二月九日～十一日（土～月）鳥海山
▽第十一回山岳図書を語る夕べ（図書委員会主催）
昭和五十五年二月十三日（水）ルーム
烏水の方法　講師・近藤信行氏
▽日本山岳会チョモランマ登山隊壮行会
昭和五十五年二月十五日（金）私学会館
「山」四一七号参照
▽第八回山岳史談会（図書委員会主催）
昭和五十五年二月二十六日（火）ルーム
大正期のわが山登り　講師・麻生武治氏
▽雪害実験研究所見学会（科学研究・集会委員会主催）
昭和五十五年三月一日～二日（土～日）
長岡市国立雪害実験研究所
「山」四一八号参照
▽第十八回木暮理太郎碑前懇談会
昭和五十五年五月十日（金）金山平
▽東九州支部創立二十周年記念山行
昭和五十五年五月二十三日～二十五日（金～日）九重山
「山」四一八号参照
▽第三十四回ウェストン祭
昭和五十五年六月一日（日）上高地
▽科学研究委員会第五回講演会
昭和五十五年六月二十六日（木）ルーム
山岳科学について　講師・西堀栄三郎氏

◇海外登山界との交流

▽本年度は二十か国六十団体と情報および機関誌の交換をおこなった。

▽ＵＩＡＡ（国際アルピニスト連合）一九七九年度総会に丹部節雄会員が出席（昭和五十四年十月二日～四日アメリカ・ニューハンプシャー州ピンカムノッチ）

▽青年懇談会で昭和五十四年八月にドイツ山岳連盟との青年交流登山のため、ドイツへ代表を派遣

▽学生部インド・ヒマラヤ登山隊（隊長　伝田克彦）が昭和五十四年九月三十日、十月一日にシックル・ムーンへ全員登頂、十月二十三日にブラマーにも登頂

「山一四一七号参照

▽日本山岳会チョモランマ登山隊（総隊長　西堀栄三郎）が昭和五十五年五月四日に北東稜から、五月十日に北壁完登し、それぞれ登頂に成功

「山一四二一号参照

▽婦人懇談会ガルワル・ヒマラヤ登山隊（隊長　高本信子）が昭和五十五年五月三十一日と六月一日にケダルナート・ドーム登頂

「山一四二三号、四二四号参照

▽中国登山関係者との活発な交流が行なわれた。

◇その他のトピック

▽「山岳」第七十四年（一九七九年度）昭和五十四年十二月刊行　（担当理事・倉知　敬）

▽会報「山一四〇九号～四二〇号を発行　（編集代表・岡沢祐吉）

▽「山日記」一九八〇年版を刊行　昭和五十四年十二月刊　（編集代表・小倉　厚）

一九八〇年度役員

会　長　西堀栄三郎

副　会　長　折井健一、渡辺兵力

常務理事　宮下秀樹、中島信一、飯野　亨、中川　武

理　事　川上　隆、山口節子、中村純二、鈴木郭之、大森薫雄、倉知　敬、小倉　厚、越田和男、高橋　聡、嵯峨野宏、菅沢豊蔵、岡沢祐吉、高本信子

監　事　小原勝郎、鴫原啓佑

常任評議員　山崎安治、金坂一郎、村木潤次郎、大塚博美、小原晴子

評　議　員　田口二郎、佐藤テル、望月達夫、織内信彦、太田　敬、朝日奈英三、木下是雄、山本朋三郎、水野政博、近藤信行、野口秋人、河野幾雄、伊達篤郎、高遠　宏

支　部　長　大塚　武（北海道）、佐藤敏彦（岩手）、柴田均二（秋田）、村上勝太郎（山形）、伊達篤郎（宮城）、中島正夫（福島）、斎藤平七（越後）、奥原教永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、尾上　昇（東海）、松井辰弥（岐阜）、中田清兵衛（富山）、増江俊三（石川）、今西寿雄（関西）、織田　収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、西沢健一（熊本）

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXXV 1980 **Issued in December 1980**

Contents

In English (also in Japanese, pages in parenthesis)

The Chomolangma Project 1980—North Face and Northeast Ridge ····· Hyoriki Watanabe··· 1(1)

First Ascent of Pumari Chhish (1979) ····· Takao Sasaki··· 6(57)

Shumari Kunyang Chhish (1979) ····· Kouhey Echizenya··· 7(64)

Skamri (1979) ····· Tadashi Kamei··· 9(78)

Latok Ⅲ (1979) ····· Kazushige Takami··· 9(87)

Teram Kangri Ⅲ (1979) ····· Sumito Hanada···11(102)

Nilgiri Central (1979) ····· Masaki Aoki···12(139)

Traverse of the Big 5 glaciers and Ascent of Sia Kangri (1979) ····· Seiichiro Hiraoka···14(111)

Annapurna Ⅰ, North-east Buttress (1979) ····· Yasuo Kubota···15(155)

The Kishtwar Himalayas in 1979 ····· Noboru Takenaka···16(160)

In Japanese

Rakaposhi North Ridge (1979) ····· Eiho Ohtani·····(70)

A Thought on Latok Ⅰ Expedition ····· Naoto Takada·····(95)

Ascent of Pasu Peak (1978) ····· Susumu Shinmyo·····(118)

South-west Wall of Thamserku (1979) ····· Takashi Kimura·····(123)

North Wall of Kantega (1979) ····· Koichi Takeuchi·····(133)

Ascent of Ganesh Himal Ⅱ (1979) ····· Hideo Ogura·····(147)

A Study on History of Ascent of Mt. Tsurugi ····· Yoshitaro Shibazaki·····(166)

History of Ishikawa Section ····· Noboru Wakamiya·····(182)

Essay on Alpine Floras ····· Mikio Ono·····(189)

In Memoriam ····· (193)

Book Reviews ····· (222)

Club Notes : July 1979–June 1980 ····· (248)

Research on fragile crampons ····· Hokkaido University Alpine Club·····(20)

Editorial Staff

Yasuji Yamazaki, Ichiro Kanesaka, Nobuyuki Kondo,
Jusetsu Setsuda, Chizuko Ikeda, Noboru Takenaka,
Kei Kurachi, Toshiyuki Fujimoto

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sun-View Heights, 5-4 Yonban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo

Office Bearers and Committee

1980 (May 1980–April 1981)

President : Eizaburo Nishibori
Vice-Presidents : Ken'ichi Orii, Hyoriki Watanabe
Honorary Secretaries : Hideki Miyashita, Shin'ichi Nakajima, Takeshi Nakagawa
Honorary Treasurer : Tohru Iino
Auditors : Katsuro Obara, Keisuke Shigihara

Committee

Hideki Miyashita
Takeshi Nakagawa
Yukichi Okazawa
Nobuo Omori
Kazuo Koshida
Satoshi Takahashi
Shin'ichi Nakajima
Nobuko Takamoto
Atsushi Ogura
Kei Kurachi
Takashi Kawakami
Junji Nakamura
Tohru Iino
Toyozo Sugawara
Hiroyuki Suzuki
Setsuko Yamaguchi
Hiroshi Sagano

Council

Yasuji Yamazaki
Junjiro Muraki
Takashi Ohta
Nobuyuki Kondo
Jiro Taguchi
Eizo Asahina
Hiroshi Takato
Ichiro Kanesaka
Hiromi Ohtsuka
Tomosaburo Yamamoto
Akito Noguchi
Teru Sato
Koreo Kinoshita
Haruko Obara
Nobuhiko Oriuchi
Masahiro Mizuno
Tokuro Date
Tatsuo Mochizuki
Ikuo Kohno

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Takeshi Ohtsuka
Yamagata : Katsutaro Murakami
Fukushima : Masao Nakajima
Shinano : Norinaga Okuhara
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Toyama : Seibei Nakata
Gifu : Tatsuya Matsui
Kwansai : Toshio Imanishi
San'in : Osamu Oda
Kumamoto : Ken'ichi Nishizawa
Iwate : Toshihiko Sato
Akita : Kinji Shibata
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Heishichi Saito
Yamanashi : Isaburo Ohsawa
Tokai : Noboru Onoe
Ishikawa : Toshizo Masue
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

The Chomolangma Project 1980—North Face and Northeast Ridge

Hyoriki Watanabe

1. Planning

A long-cherished hope for the Japanese Alpine Club had been to ascend the Himalayan Mountains from the Chinese side. Members of J.A.C. had spent considerable time studying the feasibility of the project. In February 1979, our application papers for the Chomolangma Project were submitted to the All-China Sports Federation. A favourable response came on June 26, 1979 in the form of official permission from China Mountaineering Association allowing us to climb Mt. Chomolangma in 1980.

At the end of July 1979, practical matters concerning the Project were discussed in Peking between the China Mountaineering Association and representatives of J.A.C., the Japan Mountaineering Association, Japan-China Cultural Exchange Association (the three bodies to whom the official permission had been addressed) and the Yomiuri Newspapers Co., a sponsor of the Project. Agreement was reached and the protocol was signed and sealed. It must be emphasized that this was an especially significant event for both China and Japan, for it gave Japan the very first opportunity to conduct mountaineering activities in China, and it demonstrated China's willingness to accept foreign mountaineers for the first time in her history after the revolution.

The J.A.C.'s plan was to attack the summit of Mt. Chomolangma (i.e. Mt. Everest) in parallel from the northeast ridge and the north face. To us the northeast ridge looked especially suited for the carrying up of cameras for television broadcasting, which had never been attempted before. It was an entirely unprecedented scheme of mountaineering in so far as it envisioned simultaneous reporting on TV. With this in mind the Chomolangma Party was made up of three subparties. They were the northeast ridge party (twelve members), the north face party (twelve members), and the reporters' party to cover newspaper and television publicity (thirteen members). In addition to these men I, Hyoriki Watanabe, as Leader of the Chomolangma Project, was to be in overall command of all these three subparties. Assistant Leaders Yoshio Hamano and Hideki Miyashita were to take full charge of the northeast ridge party and the north face party respectively. Further, Atsuo Saito was assigned

to join as an attendant doctor, and a liaison member stationed in Peking would participate in compliance with the China Mountaineering Association's request. Thus in total there were forty men. Along with basic and overall planning and preparation, the two climbing subparties and the reporters' subparty carried out their own examinations and preparations.

Cooperation from China was indispensable for the Project. It came generously in the form of 56 Chinese people (two liaison officers, three interpreters, two managers, 22 high cooperators, four radio operators, six cooks, three drivers, one accountant, and 13 Yaku attendants). The high cooperators would act as Sherpas on the Himalayan Mountains. We were fortunate enough to have assigned 14 high cooperators for northeast ridge, and eight for the north face. These high cooperators, however, were only to assist in carrying the loads up to the altitude of 7,500 m. Beyond that it was entirely up to the Japanese expedition members. Considering there would be approximately ten actual climbers for each route, it was necessary to ensure that the subparties consisted of physically sound and strong men.

We left Japan in February 1980 going by way of Beijing, Chengdu, Lhasa reaching the base camp at the end of the Rongbuk Glaciers (5,150 m) early in March, driving the last 750 km from Lhasa. Our plan was to set up the advance base camps at 6,500 m on the East Rongbuk Glacier (the north east ridge route), and at 6,200 m on the Central Rongbuk Glacier (the north face route) by around March 21st. Both subparties were to start climbing Mt. Chomolangma either in late April or early May with the homecoming being planned for early June.

2. Reconnaissance

A preparatory party was dispatched for the period of two months in September 1979 in order to (1) reconfirm the feasibility of two routes on the north side of Mt. Chomolangma, (2) get accustomed to the fast change of altitude resulting from covering the first ascent stage by truck, and (3) grasp a thorough comprehension of circumstances in China and Tibet. While exploring the route from the East Rongbuk Glacier to the North Col (Chang La, 7,007 m), three Chinese cooperators were killed and a Japanese mountaineer was wounded by an avalanche. This accident prevented the reaching of the North Col which had seemed imminent. However, at least the route itself was confirmed. As for the Central Rongbuk Glacier, the reconnoitering party discovered the starting point on the north face. With the trial ascent to about 6,250 m of the north face, the feasibility of climbing the upper north face was considered reasonable. The recon-

naissance party returned to Japan at the beginning of November with substantial and fruitful information acquired by this trip to China.

3. The Northeast Ridge Route

In the middle of March 1980, the northeast ridge party commenced its climb. They relied on the transportation by Yakus to the East Rongbuk Glacier with the moraine route stretching to an altitude of 6,500 m. The advance base camp was established beneath the North Col by March 22nd. On March 25th the party reached the North Col, where the fourth camp was set up for the northeast ridge route. Although heavy wind made it difficult for the party to move aggressively during the period from late March through early April, the party could build its fifth camp (7,600 m) on April 6th. It had the vitally important cooperation from the Chinese support staff who carried up the necessary loads of equipment and provisions by April 15th. Heavy winds severely damaged the camp while it had been left unattended but everything was rebuilt by April 20th. The party then proceeded to establish its sixth camp (8,010 m) on April 23rd to where essential loads of about 230 kg were carried. At this stage, the party was in position to attack the summit. All members met at the advance base camp on April 25th to rest before the beginning of this attempt.

On April 29th the four climbers assigned to scale the summit and six supporting members left the advance base camp. They stopped overnight at each camp and established their seventh camp on May 2nd. The original plan was to set up the seventh camp at a level above 8,500 m on the north east ridge, but extremely heavy winds and snow stopped them from building the camp any higher than 8,250 m. The number of the summit climbers was reduced from four to two, Yasuo Kato and Susumu Nakamura (in charge of TV), on the grounds that there might not be enough oxygen to supply all four. The remaining two climbers were to support the summit party to the second step.

The four men headed for the summit on May 3rd. The condition of the route, however, was very rough. Hence the speed of climbing was forced to be reduced. This resulted in their late arrival, at seven in the evening, at the snow ridge leading to the peak. As Nakamura felt sick, Kato proceeded on his own from there and finally reached the summit at 8.55 that same evening. On account of the pitch darkness after sunset they each had to bivouac on their way back down. Luckily the winds had died down and the weather conditions had improved to become fine. At the height of 8,750 m, both Kato and Nakamura were able to camp out without oxygen. They were of stout heart and

came down to meet the supporting members the following afternoon. They all returned to the sixth camp in good condition. While the original plan of video-taping at the summit was not accomplished it should be considered a worthwhile achievement that the peak was conquered by the authentic Mt. Everest route.

4. The North Face Route

All the members of the north face parties gathered at the advance base camp on the Central Rongbuk Glacier (6,150 m) on March 25th. The first rough spots of the north face route were encountered at the starting point of the north face and the ice ridge above the altitude of about 7,000 m. From a steep slope of 60 degrees with protruding hard ice a considerable number of stones fell down in the afternoon. The route to the third camp (6,900 m) on the ice ridge was tough but the camp was set on April 4th. From this point, the slope was less steep following a narrow and shallow couloir into an upper snow field 8000 m high. At 7,700 m above sea level, an appropriate place was found for the fourth camp. The distance from the third to the fourth camp was very long causing some difficulty with the load carrying. With assistance of the Chinese high cooperators, however, the party succeeded in setting up the fourth camp on April 18th. The ascent to the upper face started the following day. On April 20th, the party reached the Hornbein couloir, extending to above 8,000 m. The fifth camp was established at 8,350 m as the position from which the summit would be attacked.

The first attack by the north face party coincided with that of the northeast ridge party, April 29th. The first three attackers were to start and the second two attackers would follow on April 30th. However, when the first group left the fifth camp for the summit, a deep snow pile from the previous day and the worsening weather prompted them to return from the exit of the couloir. The second group of attackers encountered a snow slide as they approached the fifth camp. Akira Ube's fixing rope was torn off which caused him to fall and to be lost forever. On account of this tragedy all members reassembled at the advance base camp for reassessment and eventually for another attempt. The third attack then started on May 7th with two summit climbers, Tsuneo Shigehiro and Takashi Ozaki, and two supporting members. In the early morning of May 10th they left the fifth camp to continue relatively smooth climbing until they reached the snow field at the upper part of the Hornbein couloir. Conditions of the snow field were very bad, and the climbing speed was reduced. Instead of ascending the rock to the summit, the party made a traverse to the west side

and came out on the west ridge. They continued climbing despite of lacking oxygen at this point, finally arriving at the summit at 8.50 pm on May 10th. As the oxygen supply had in fact ran out around five o'clock that afternoon the conquest of the summit was achieved without oxygen. After descending to 8,700 m on the west ridge they had to bivouac as Kato of the northeast ridge party had done. Again, fortunately the evening weather was favourable. They headed down the following day reaching the advance base camp on May 12th in fine spirits. With this ascent of the north face of Mt. Everest first in the world's mountaineering history the Chomolangma Project came to its successful conclusion.

The members :

(1) **Headquarter**

Leader ; Hyoriki Watanabe

Doctor ; Atsuo Saito

(2) **Northeast Ridge Party**

Assistant Leader ; Yoshio Hamano

Climbing Leader ; Yasuo Kato

Members ; Shoji Nakamura, Takashi Ohara, Yoshinori Hasegawa, Kotaro Yokoyama, Kunio Kai, Yoshimichi Furuhata, Matsuji Yamashita, Masayuki Kamiya, Toichiro Mitani

Doctor ; Shoji Nishiyama

(3) **North Face Party**

Assistant Leador ; Hideki Miyashita

Climbing Leader ; Tadao Kanzaki

Members ; Takeyoshi Takatsuka, Kazushige Takami, Tsuneo Shigehiro, Akira Ube, Toshiaki Kobayashi, Tsuguyasu Itami, Takashi Ozaki, Shohei Wada, Gota Isono, Shin Gashu

(4) **Reporters Party**

Kimihiro Shimada, Yoshinobu Emoto, Nariyuki Okajima, Toshitaka Kitagawa, Noriyuki Oshima, Kanji Iwashita, Shizuo Kimura, Susumu Nakamura, Keishi Tashiro, Koichiro Sato, Akihiro Arai, Yutaka Matsuno, Kenji Tomokata

First Ascent of Pumari Chhish 1979

Takao Sasaki

We started Rawarpindi by truck and microbus on May 26, 1979 passing through new Karakorum highway, and arrived Gilgit on May 28. From Gilgit we went to Nagar by 11 jeeps.

It was after 4 days when we could start the caravan, which took us for 6 days to Brumpal of 4,200 m high on June 9. After 10 days of carrying up luggages of 2.5 t weight to a site of 4,300 m high we built BC on June 19 on the side moraine between Kunyang glacier and Bralung Sar glacier. The route to camp 1 was on Kunyang glacier and snow slope of 1,000 m high. We pitched C 1 at 5,300 m high on June 23. There was an ice wall of 60° and 600 m high between C 1 and C 2. We needed 4 days for route making. C 2 (6,000 m) was built on July 5. The route between C 2 and C 3 was on flat snow face. We went passing through this snow face about 6 km, and built C 3 at 6,000 m high on July 9. From C 3 snow face of average 50° and 900 m high was traced for 4 days and C 4 (6,900 m) was built on July 14. We fixed rope of 2,300 m length in total.

The first ascent was made on July 15 by Hideo Yokoyama, Koichi Minami, Masaki Oohashi and Shigeki Chiba. They started C 4 at 2 : 00 a.m. and reached the top at 12 : 00 a.m. The second ascent was on July 17 by Susumu Ogasawara, Yoshimasa Chiba, Michio Hayashi, Michihiro Kanno, and Mitsuo Shiroishi.

We returned to BC on July 19.

The members of Japan Hokkaido Alpine Association Karakorum Expedition to Pumari Chhish were : leader Takao Sasaki (M.D.), assistant leader Susumu Ogasawara, member Hideo Yokoyama, Yoshimasa Chiba, Katsutoshi Kariya, Kenji Hirooka, Koichi Minami, Michio Hayashi, Michihiro Kanno, Mitsuo Shiroishi, Masaki Oohashi and Shigeki Chiba.

Shumari Kunyang Chhish 1979

Kouhey Echizenya

In 1979 Academic Alpine Club of Hokkaido sent a party to Shumari Kunyang Chhish (Kunyang Chhish North Peak). The party planned the ice craft training of the members and the ascent of the peak by all members.

Approaching march and climbing

The main party arrived in Rawalpindi on May 14. After preparation of foods and equipment for one week, we started from Rawalpindi to Gilgit by Karakorum highway, and arrived in Nagar on May 30. The employment of porters at Nagar was extremely troublesome. We stayed for four days there and made effort to employ them cooperating with the Hokkaido Alpine Association party to Pumari Chhish and West German party to Lupgar Sar. But finally we must to pay one hundred Ruppies per day per porter. During the marching to the base camp, we were told about the economic crisis in this area and also the importance of the control by the Government from porters and liason officer. With six days marching, we reached at Pre-base camp (4,200 m). From Pre-base camp all the equipment had to be carried up to Relay-base camp (4,360 m) only by the shoulders of members. On June 17, we carried up all luggages to Relay-base camp.

June 18–23

After walking 3 km on the Kunyang glacier, across the ice and further climbing up to snowy ridge to 4,900 m, we built C1 on June 19. C2 was built in the small ice basin on 5,250 m after climbing up the wide snowy slope.

June 24–July 4

From C2 the climbing route was barricaded by dangerous icefall full of huge ice towers, hanging ice wall and fragile rock gully. We attacked a small ridge in ice fall and stretched the fixed rope of 700 m to snowy saddle at 6,000 m, but unfortunately interrupted there. We tried another route on the steep ice wall, and finally this route was found passable using this ice wall route, we built C3 (6,000 m) on the west end of magnificently wide ice basin, on July 4. This ice basin extends to the foot of surrounding peaks; Pumari Chhish, Kunyang Chhish Main peak and Yukshin Gardan Sar. All these mountains as well Yazghil Domes seemed climbable from this side.

July 6–10

The route from C3 to C4 (6,700 m) was on steep but wide snowy ridge mixed with rock. C4 was built on the narrow saddle near the shoulder of ridge from the peak. All members were well acclimatized and in good condition. Eight members gathered at C4 on July 10 for summit trial.

Ascent to the Top

At 6 : 00 a.m., on July 11, we started C4, and traced the ropes fixed on the day before The route was on the narrow ice and snow mixed ridge, which gradually turned to snow wall. All members stood on the summit at 10 : 15 a.m. After playing with kites on the summit we descended to C3.

Remarks

Our club intends the ascent of the eight thousanders in midwinter season. It gives us many problems to be solved. For example, we need many strong members acclimatized beyond 7,000 m, special equipment protecting from the severe wind and coldness, etc. Our expedition to Kunyang Chhish aimed at a program for acclimatizing pattern on high altitude. It seems that the climbers should be exposed to the relatively high oxygen pressure and high carbon oxide pressure after loading of high altitude stress, because the receptor of O_2 and CO_2 in the body will react in adaptation beneath high threshold of O_2 and CO_2 pressure. And the improvement from hypoxic muscular stress seems to take more than one day. At our next plan of Baruntse expedition 80/81 midwinter, we whould like to investigate the wind and coldness above 7,000 m in Himalayan range in midwinter season.

Members : Kouhey Echizenya, M.D. (31) Leader, Eiji Shimozawa, M.D. (30) Assistant Leader, Osamu Hanai (27), Akinari Ishimura (26), Jin Takahashi (25), Akio Koizumi (22), Shinri Irikawa (21), Hiroyuki Shiga (20)

Skamri 1979

Tadashi Kamei

The Yokohama Alpine Club Karakorum Expedition, led by Tadashi Kamei, succeeded in the first ascent of Skamri (6,736 m), located on the Pakistani-Chinese border. The other 6 members were Tetsuo Nogami, Norio Fukuda, Saburo Mitsumoto, (Miss) Tomoko Aoyagi, (Mrs.) Atsuko Shibata and (Miss) Noriko Furusawa.

The caravan started from Bongla after 4 hours drive from Skardu and went via Dusso, Chapo, Chongo, Askole, Korophon, Dumordo River, Panmah Gl. and Drenmang Gl. On June 21, Base Camp was established at 4,300 m on the left bank moraine of Drenmang glacier.

Skamri has three peaks : East, Central and West. Our ascent route was taken along the south ridge of the highest East Peak. C 1 (4,700 m) was established on June 30 on the South Skamuri glacier (a tentatively named branch of the Drenmang glacier) at the foot of the south ridge, C 2′ (5,250 m) on July 10 at the terminus of the south ridge after an ascent of a 50 degree snow and ice slope, C 2 (5,600 m) on July 12 in the middle of the south ridge over a 25 m ice wall and finally C 3 (6,200 m) on July 19 after an ascent of a couloir splitting the massive rock on the ridge's east side. On July 20, Tetsuo Nogami and Norio Fukuda got to the top of the East Peak after a struggle with unstable deep snow on the steep narrow ridge. The top could accomodate just two men. The second attack was abondoned because of bad weather.

Latok III 1979

Kazushige Takami

Forward :

In 1975 the Hiroshima Mountaineering Club succeeded in the 1st ascent of Kampire Dior (7,143 m) which is located in the western part of the Karakorum. In 1979, we fortunately obtained permission to climb Latok Ⅲ (6,949 m). In

this essay, we would like to describe how we climbed the beautiful mountain.

Caravan :

6 members including Yoji Teranishi, the leader, arrived at Rawalpindi on June 1, 1979. We had to stay there in sweltering hot weather for two weeks to make the necessary preparations for climbing and to wait for the opportunity to fly to Skardu which we finally reached in 3 flights by mothplane.

In Skardu, we employed sixty porters and started for the mountain which had fascinated us for so long a time. It took one week to complete the laborious caravan through such dry areas as Doissu, Chongo and Askole. At last, on June 25, we set up the Base Camp on the left plateau of Baintha Lakpar Glacier at 4,600 m altitude.

There we discharged all porters except for four high-altitude porters. The beautiful B.C. location allowed us to see the pyramidal shape of Latok III directly in front of us, and we could get fresh water from a creek near-by.

Climbing :

We began climbing on June 26. On June 29, after approx. 4 km crossing of the moraine and trembling up the flat and monotonous glacier for about 4 hours, we established Camp 1 at 5,100 m.

On July 2, Camp 2 was set up at 5,700 m on the snow ridge provided with the protruding, so-called "Snow Cap". It was hardly possible for the high-altitude porters to move above this camp, the continuous rock climbing being too difficult for them. This camp was to be the base for conquering the peak. Therefore, all provisions for climbing had to be accumulated there.

We found a route in the rock zone above Camp 2 and installed Camp 3 on July 6 with an exhaustive effort.

Camp 4 was set up on July 10 after cracking and clearing very hard ice. The continuously steep and overhanging rock walls standing above C4 had been anticipated to be the crux of the route. Luckily the climbing turned out to be straight forward and secure because of good weather and the abundance of cracks which allowed free use of pitons.

On June 13, we tried to reach the summit, but were hampered by heavy snow with strong wind which unfortunately defeated us on the rock wall at 6,800 m. We decided to return to C4. It was much worse the next day (July 14) and we could not go out of the tent at all.

God smiled on us on July 15. At dawn we found ourselves in very fine weather, which promised climbing. Leaving C4 at 5 : 30 a.m., and jumaling the

rock wall for 2 hours, we were finally on the snow cliff leading to the long-awaited summit. At 10 : 20 a.m. 4 members, Teranishi, Mori, Takami and Okudaira, reached the windless top of Latok Ⅲ, which gave us a beautiful and unforgettable view, from K 2 on the east to Nanga Parbat on the west.

Return :

The withdrawal started at 12 : 00 a.m. Takami quickly climbed down to Base Camp where the liason officer was waiting. The other members assembled at B.C. on July 16 and our expedition ended without any accident.

Looking back to the expedition, we note that it took only 20 days for us to reach the summit after arriving at B.C. The essential reason for this is probably the continuously fine weather we had. Because of this, we could steadily follow our schedule and continue progress from when we started our caravan on June 18 until July 20 when we turned homeward.

We also must express our gratitude for our liaison officer Naseem Haider Malik. He professionally managed the porters during the caravan and maintained B.C. while we were away.

Members : Yoji Teranishi (33) Leader, Kazushige Takami (34) Climbing Leader, Sakae Mori (40), Kiyokazu Kitamura (30), Keiso Sadatomo (29), Naoki Okudaira (27), Liaison Officer : Naseem Haider Malik (24)

Teram Kangri III 1979

Sumito Hanada

Academic Alpine Club of Hirosaki University succeeded in the first ascent of Teram Kangri Ⅲ (7,382 m) on August 3, 1979. The party's name was Hirosaki University Karakorum Expedition 1979.

Our party was composed of the following members : leader ; Sumito Hanada, climbing leader ; Masatoshi Sato, members ; Zenzo Shikanai, Mitsutaka Kudo, Masanori Oka, Takayoshi Sato, Osamu Nonomura, Tetsuo Hasegawa, Junji Kurotaki, Kenji Nikko, Akira Marui and Gaku Ishii. Our liaison Officer was Captain Mohamed Ali Akhtar.

After the official business and wait for the flight to Skardu in Rawalpindi, all members gathered at Skardu on May 27. About 6 hours drive by jeep took

us to Khaplu, 100 km from Skardu, where we selected the porters and re-packed our baggage.

On June 1, we began the approach march from Khaplu to Teram Kangri III with 153 porters. Although we had trouble with the porters during the caravan, we went up and down Bilafond La and across the Siachen glacier. Finally Base Camp (5,200 m) was established on the Teram inner glacier on June 27.

We took the route on the south ridge between Teram Kangri I and III. Camp 1 (5,440 m) was made at the foot of a gully on the right side of the south ridge. We climbed up the gully, setting Camp 2 on the south ridge at 6,150 meters, and Camp 3 at 6,450 meters. Because of the falling snow, we were forced to stay at Camp 3 for a week, before making Camp 4 (7,070 m) on the Pakistani-Chinese border on July 28.

After three attempts, three members of the party, Mitsutaka Kudo, Masanori Oka and Junji Kurotaki, succeeded in gaining the summit (7,382 m) on August 3. On August 6, on the way from Camp 1 to Base Camp, Masanori Oka fell into the river on the Teram inner glacier and died when a soft snow bridge collapsed below him. The next day we found the body in the glacier lake about 400 m below where he fell. The body was salvaged and after the postmortem examination buried there on Auguat 8. On August 15, we left Base Camp.

Nilgiri Central 1979

Masaki Aoki

In the spring of the year 1979, the Matsuyama University Nepal Himalayan Expedition 1979 sponsered by the Matsuyama University Alpine Club and led by Masaki Aoki, made the first ascent of Nilgiri Central (6,940 m) by the southeast ridge. The summit was reached by 2 members (Kohichi Sakata and Yasuo Tsuda) on April 30 and by 3 other members (Jun-ichi Yuyama, Toshiro Hamada and Aoki) on May 1.

We five, accompanied by Doctor Tohru Itano and Keizo Shigematsu, who escorted us as far as Chhoya, began an approach march from Pokhara on March 23 and arrived at Chhoya on the 29th. But here, most of the porters refused to go ahead beyond Thulobugin pass, which was still covered with snow. Thus

we decided to charter a helicopter for transporting loads and some members to Base Camp, following a precedent set by the French expedition to Annapurna I and the Austrian expedition to Fang. Base Camp was established on April 4 at 4,100 m on the left bank of the Nilgiri Glacier, near the base of the northern route to Annapurna I.

The route from Base Camp started up the left bank at first, and then crossed the glacier to the other side through its wide front in order to reach a fork between Nilgiri Central and South. Camp I was made at the fork on the right bank of the Nilgiri Glacier at 4,800 m on April 10.

The glacier between Nilgiri Central and South, on which the route was taken, has two large fierce icefalls, but the nêve widens at the upper part, which is surrounded by the southeast ridge of Nilgiri Central, the main ridge between Nilgiri Central and South, and the east ridge of Nilgiri South. Up to nêve our route was nearly the same as that of the Japanese expedition (Shinshu University party) to the east ridge of Nilgiri South in 1978.

Camp II was located on a plateau between two icefalls at 5,450 m on April 20. The first icefall lost us in a maze of crevasses and threatened us with serac avalanches. Unfortunitely, our anxiety came true when 3 sherpas, including sarder, met with an avalanche on the 24th, but they had the good fortune to dodge serious injuries.

The second icefall was in not so terrible condition as the first one, but it was only the 25th that we placed Camp III at 6,200 m on a remarkable col on the southeast ridge, having passed through the icefall and an easier slope from the nêve. Above the col the corniced ridge was so steep and so laden with hard snow blocks on ice that we had to take a route on the western flank of the ridge, a very steep rise of about 300 meters to a shoulder near the junction peak of the main and the southeast ridges. Ropes were fixed along nearly the whole length.

On April 30 we left Camp III at 6 : oo a.m. separately : the first summit party and the support-second summit party. The latter carried food and a tent in case of a forced bivouac of the former. The first party reached the summit at 11 : 25 a.m. and returned to Camp III in the course of the day. Meanwhile, the support-second summit party pitched camp near the junction peak and got to the top at 10 : 30 a.m. on May 1, but was forced to bivouac in the middle of the ice face that very day. The weather was very fine during the attack and that was fortune if we consider that until this period the weather in the Annapurna

range had changed with clockwork regularity : fine in the morning, but snowy in the afternoon and at night, sometimes with thunder.

On May 3 we evacuated Camp III and II and returned, on the 4th, to Base Camp where Dr. Itano was impatiently awaiting.

Traverse of the Big 5 Glaciers and Ascent of Sia Kangri 1979

Seiichiro Hiraoka

We, the 10 members of Kyoto Karakorum Club, started marching from Bongla, on May 21, 1979. From Arandu where we arrived on the 24th, we splitted ourselves into the two groups, the main and supporting parties.

The main party made a round trip to Chogo Lungma Glacier, and took the course to Kero Lungma Glacier, thereafter crossed over Nusik La to Hisper Glacier, and reached Hisper Pass on June 15th. Then, the party went down the Biafo Glacier to Askole where they joined the supporting party on June 21st.

After having made necessary arrangements for mountaineering we started journey again. We went up Baltoro and Abruzzi Glacier down to the foot of Sia Kangri.

On Sia Kangri we have followed the G.O. Dyhrenfurth's route. Base camp was established at 5,030 m on the junction of South Gasherbrum Glacier and Abruzzi Glacier. Camp I on the Conway Saddle was set up at 5,910 m, and Camp II and Camp III, at 6,430 and 6,900 m respectively.

On July 30th, Kobayashi, Mizukoshi, Miyashita, Hayashibara, Futagami, Takahashi, and the high-altitude porter, Gohar Shah, have reached the summit of Sia Kangri (7,422 m). Kobayashi and Futagami got to the top of Baltoro Kangri III (7,280 m), the highest of the Baltoro Kangri Group.

After the ascent of Sia Kangri, Kobayashi, Mizukoshi, Futagami, Hayashibara, Takahashi and Gohar Shah descended Siachen Glacier, and the rest of the members returned to Skardu. The former group, the main party, called upon Base Camp of the Teram Kangri III Expedition established on the junction of Lolofond Glacier and Siachen Glacier. On August 13th, the party went over the Bilafond La and went down Bilafond Glacier. Thereafter the party reached

Goma, on August 15th.

Our members were Ryuji Hayashibara, Leader, Sadami Etori, Seiichiro Hiraoka, Takeshi Mizukoshi, Toshiaki Kobayashi, Junichi Futagami, Dr. Junichi Takahashi, Tsugio Kurita, Sokoh Umemura and Katsuhiko Miyashita.

Annapurna I, Northeast Buttress 1979

Yasuo Kubota

Federation of Shizuoka Prefecture Mountaineering Union organized the Shizuoka Himalayan Expedition to Annapurna I to celebrate its 30th anniversary.

The expedition party was consisted of Hironobu Yagi, Leader, Kazuo Ishikawa, Keizo Tanabe M.D., Hiroyuki Takita, Yasuo Kubota, Hiroyuki Un-no, Shūji Yanagisawa, Takashi Mitsui, Sadao Kudō, Seizō Tanaka, Yoshishige Morita and Katsuhiro Watanabe.

We started the approach march from Pokhara with 230 porters on March 6. We had snow storm when crossing Thulo-Bugin pass, for which we had to pay Rs. 50 per day to Porters.

We built BC at 4,200 m on North Annapurna glacier where we met a French party aiming skiing on Annapurna. Both party started climbing North Annapurna glacier almost at the same time.

The followings are the date and the height of camps we built on the mountain :

B.C	4,200 m	March	28th
C. 1	4,900 m	April	7th
C. 2	5,400 m	April	13th
C. 3	6,100 m	April	25th
C. 4	6,850 m	April	28th
C. 5	7,500 m	May	4th

We selected the climbing route on a snow and rock mixed ridge, at left bank of the glacier to avoid big ice-falls. We needed 300 meters fixed-rope for this ridge. Then, a gully and a rock ridge led us to the plateau on North Annapurna glacier, where we set up Camp I. After crossing the plateau we took the route on the snow ridge at right side of a big ice-bilding. Up there

we found a flat place and set up Camp 2.

Original route is climb up straight toward the Sickle glacier, but we climbed up on North-east buttress from Camp 2. We were strained very much, because of the tear of avalanche on the way of traverse from Camp 2 to the edge of this buttress.

The North-east buttress was not only steep but also very sharp, covered with very hard ice. We fixed rope of 800 meters between Camp 2 and Camp 3 which was set up on this ridge. Thereafter we negotiated a 50 m steep ice wall right up of Camp 3, and we reached at the steep and wide snow slope stretching up to the top. Camp 4 and Camp 5 were built on this wide snow slope.

On May 4, first attacking members got to Camp 5, but we put off summit trial because of violent gall and bad weather on next day.

On 6th, we further put off our attacking plan because one of the members suffered from high altitude sickness and was carried down.

Finally on 8th Seizo Tanaka and Pema Sherpa succeeded in arriving the summit of Annapurna I at 12 : 10.

During our stay in the mountain two sherpas of French-Skiing expedition were badly injured, because of the avalanche down from the upper parts of Sickle glacier, and one of French attacking member was dead because of his slipping right under Camp 4, on their way back from the Summit down to their Camp 3.

Our north-east butress route was difficult but safe. Fortunately enough we could finish our program without accident on May 14 when we withdrew BC.

The Kishtwar Himalayas in 1979

Noboru Takenaka

Foreword :

We, The Japanese Alpine Club Indian Himalaya Expedition 1979, visited the Kishtwar Himalayas to have two goals in the autumn of 1979. One was Mt. Sickle Moom (6,574 m) and the other was Mt. Brammah I (6,416 m).

Our expedition party consisted of the following members.

Leader : Katsuhiko Denda (34)

Member : Noboru Takenaka (26)
Akio Miyamoto (23)
Akira Suzuki (25)
Hiroo Komamiya (24)
Tomonori Akimoto (23)
Kazunari Obayashi (23)
Shigeaki Haga (23)
Akio Hayakawa (23)
Takayuki Akasu (23)

Liaison Officer : Major Uday Sathe (34, Indian Army)

Sickle Moon was first climbed through the south-west face from the Kibar Nullah by the Indian expedition led by Lieutenant Colonel D.N. Tankha in 1975. Brammah I was first climbed through the south-east ridge from the Kibar Nullah by the Indo U.K. joint expedition led by C. Bonington in 1973. The attempts to climb these two peaks from the Brammah glacier, however, had not been done yet until our expedition. We were deeply interested in the ascents of Sickle Moon and Brammah I from the Brammah glacier.

On August 23, we left Kishtwar for Parmar by truck, and arrived in Parmar. We started the march-in for Sattarchin with 35 mules from here on August 25. On September 1, we reached Satterchin and established the base camp. It's height was 3,500 meters.

Sickle Moon :

We started the alpine activities toward Sickle Moon on September 2. Our scheduled climbing route was through the south-east ridge. We established the advance base camp at 4,000 meters on the Brammah glacier on September 2. Camp 1 was set up 4,200 meters on the glacier on September 4. We looked at two hanging-glaciers up to the south-east ridge in front of C1. We made up the climbing route through the left end of the left-hand hanging-glacier, first climbing up the gully, then crossing a snow slope, which led us to a snow flat place. We set up Camp 2 here on September 8. It's height was 4,800 meters. Then we took the route on the steep ridge which led to Monk's head (5,750 m) on the south-east ridge. It was a snow and rock mixed ridge. Camp 3 was set up at 5,200 meters on the ridge on September 15. We fixed a rope for 1,000 meters between C2 and C3. On September 23, we at last reached the south-east ridge and set up Camp 4 at 5,600 meters on the ridge. We could see Brammah I and II, however, had not yet been able to see the top of Sickle

Moon. It was hidden by the gendarme of Sickle Moon (Peak 6,415 m) on the south-east ridge. In order to get to the top of Sickle Moon we had to cross this gendarme at any cost. The south-east ridge toward the gendarme not only steep but also very shaped, which was covered with very hard ice. We needed 6 days and 1,200 meters fixed-rope until crossing the gendarme. We traversed the gendarme at 6,200 meters, then we found an unbelievably broad snow plateau. We established the attack camp at 6,200 meters on the snow plateau on September 28. We had first been able to see the top of the Sickle Moon at the snow plateau. Sickle Moon looked like a dome with a very soft snow.

On September 30, Denda, Suzuki and Haga left A.C. to climb up toward the summit at 7 : 00 a.m.. Komamiya and Obayashi also left C4 for the summit at 4 : 00 a.m.. The sky was full of stars when they started. Takenaka and Akasu also left C4 for the summit at 6 : 00 a.m.. Denda's party and Komamiya's party reached the summit of Sickle Moon at 11 : 40 a.m.. They stayed on the summit for one hour. They were enjoying the fine view. They could see Mt. Nun, Mt. Kun and the Kishtwar Himalayas mountains. Takenaka's party also reached the summit at 2 : 00 p.m.. Next day, on October 1, Miyamoto, Akimoto and Hayakawa also reached the summit at 1 : 00 p.m..

Therefore we all could succeed in the first ascent of the south-east ridge of Sickle Moon.

We returned to B.C. at Sattarchin on October 5.

Brammah I :

Having taken a rest for four days at B.C., we started the alpine activities toward Brammah I on October 10. We went up the Brammah glacier again. We established the advance base camp at 3,800 meters on the Brammah glacier on October 10. Our scheduled climbing route was the north-east ridge, which was a new climbing route, however, we had to change it into the south-east ridge due to a shortage of food and climbing days. We entered Southern cwm of the Brammah glacier. We set up Camp 1 at 4,200 meters in S.C. on October 13. We made up the climbing route through the left end of S.C.. We reached the snow plateau where we set up Camp 2 on October 18. Its height was 4,900 meters. From here we climbed up the spur which led to the south-east ridge. Camp 3 was set up at Snow peak (5,800 m) on the ridge. The upper side of the south-east ridge which was seen at S.P. assumed a very difficult climbing point. The very core of the south-east ridge was the gendarmes which laid from 5,900 meters to 6,100 meters. We needed three days and 1,200 meters fixed-rope

to make up the climbing route through them. Having crossed them, we set up the attack camp at 6,100 meters on the south-east ridge on October 22.

Next day, on October 23, Takenaka, Suzuki and Komamiya left A.C. at 6 : 30 a.m. and Denda, Miyamoto, Akimoto, Hayakawa and Haga left C 3 at 7 : 30 a.m. for the summit of Brammah I in the snowstorm. Takenaka's party climbed up eight pitches (300 m) on the steep ice ridge. Suddenly the steep ridge turned into a snow flat place, which was the summit of Brammah I. We got the top of Brammah I at 12 : 15 p.m.. Denda's party also reached the summit at 1 : 30 p.m..

We withdrew from B.C. at Sattarchin on October 28.

We returned to Delhi on November 6.

Postscript :

We could fortunately accomplish the ascents of Sickle Moon and Brammah I from the Brammah glacier. I think that the Kishtwar Himalayas is suitable for a light expedition. And I think that "North Face of Brammah II", "North-east Ridge of Brammah I" and "Traverse of Mts. of Brammah" are interesting unclimbed objects in Kishtwar Himalayas.

In the end we would like to extend our thanks to Indian Mountaineering Foundation and their president Mr. H.C. Sarin.

Situation of Camps :

B.C. : 3,500 m in Nanth Nullah (Sattarchin)

Sickle Moon

A.B.C. : 4,000 m on Brammah Glacier
C. 1 : 4,200 m on Brammah Glacier
C. 2 : 4,800 m
C. 3 : 5,200 m
C. 4 : 5,600 m on South-east Ridge
A.C. : 6,200 m at Snow Plateau
Summit : 6,574 m

Brammah I

A.B.C. : 3,800 m on Brammah Glacier
C. 1 : 4,200 m in Southern Cwe of Brammah Glacier
C. 2 : 4,900 m at Snow Plateau
C. 3 : 5,800 m at Snow Peak
A.C. : 6,100 m on South-east Ridge
Summit : 6,416 m

アイゼンの破損について

北海道大学山岳部

I はじめに

アイゼンは積雪期の登山を行う者にとっては不可欠の装備であり，その歴史も長い。かつてのアイゼンは重く，その機能面では現在のものより数段劣っていたが，破損するということは稀であったようである。ところが，1975 年度の春山において，我々の山岳部内で 8 件のアイゼンの破損があり，時を同じくして広島大学山岳部の針ノ木岳遭難があった。これは間接的ではあるが，アイゼンの破損が原因の一つになっている(注)。その後も部内では 1976 年度 1 件，1977 年度 8 件，1978 年度 4 件と破損事故が続発した。特に 1977 年度の冬山では，日高山脈縦走パーティのメンバーのアイゼンが，カムイエクウチカウシム山付近で後に説明するような構造上の欠陥により，左足から突然はずれ，稜線から約 200 m も滑落するという事故が起きた。さらに同パーティにおいては，もう 1 人のメンバーのアイゼンのジョイントが折れ，かなり困難な山行を強いられ，途中で山行を放棄せざるを得なかった。また同じ時に日高山脈の他の山域に入山していたパーティでも，アイゼンの破損事故が 2 件ほど起こり，山行を貫徹できなかった。

いずれも大事にはいたらなかったが，一つ間違えば死にもつながる事故であった。このような事から，我々はアイゼンの材質や構造に対して大きな不安と疑問を抱くにいたった。アイゼンが破損すれば，場所によっては滑落，転落という事態に結びつく。これほど頻繁にアイゼンが破損する以上，これらの事実を省みず，また対策も考えずに，今まで通り山に登り続けることはできなかった。我々は今まで持っていたアイゼンに対する認識を新たにしなければならないことを痛感し，1978 年春からアイゼンの研究に取り組んだのである。

まず初めに，アイゼンの破損事故の実態を把握する必要があった。そこで，全国大学山岳部の協力を得てアンケート調査を行い，その結果を分析した。さらに，アイゼンの構造，材質両面から欠陥がないかどうかを調べる必要性を感じた。幸い，材質面からの調査は，北大工学部の金属工学科の御厚意もあり，僅かではあるが調べることができた。しかし，現在のアイゼンの構造及び厚みで，はたして充分な強度をもっているのか，という構造面からの調査は，この問題の難しさ及び人手の不足からできなかった。

ただ，今までの経験から，各種アイゼンの構造的特徴はピックアップしてみた。さらに実践的な問題として，アイゼンが破損した瞬間登山者はどういう状態に陥るのか，という実験や，破損箇所の修理方法，アイゼンの保管法などの検討を行った。

注）昭和 51 年3月 24 日，広島大学山岳部の一行6名は，北ア針ノ木岳付近を通過中，新雪表層雪崩にまき込まれ，4名の犠牲者を出すにいたった。この事故の直接の原因は，岩稜をたどらずに，岩稜基部下方の雪面をトラバースしようとした，ルート選択の誤りにあるが，このような行動に追い込まれた間接的要因として，パーティのメンバーのアイゼンが，当日行動中に破損していたことがあげられる。このため，ルート選択に大きく影響があったばかりでなく，アイゼンのないメンバーの確保のために，パーティ全体が少からず消耗していたと思われる。

II　アイゼン破損事故に関するアンケート調査

1978 年 12 月，全国 93 大学山岳部（積雪期に活発に山行を行っていると思われる大学山岳部）を対象に，1975～78 年の過去4年間におけるアイゼンの破損事故に関する実態調査を行ったところ，そのうちの 51 校から回答が送られてきた（アンケート回収 55%）。

以下の調査結果は，51 校の中での破損事故状況である。ただし調査方法は，自由記入法とし，項目ごとにデータを集計した。

1.　メーカー別アイゼン使用者数と破損件数

アイゼンの使用者数をメーカー別に分類してみると，表 II-1 のようになる。特に使

表 II-1　メーカー別アイゼン使用者数

メーカー	使用者数	全体に対する割合(%)
タニ（国産）	169	34.5
サレワ（西ドイツ）	128	26.1
シャルレ（フランス）	51	10.4
ドメゾン（フランス）	50	10.2
カドタ（国産）	28	5.7
東京トップ（国産）	18	3.7
SMC（アメリカ）	17	3.5
シモン（フランス）	12	2.4
スチュバイ（オーストリア）	5	1.0
インターアルプ（イタリア）	4	0.8
ダイワ（国産）	3	0.6
エバニュー（国産）	2	0.4
HOPE（国産）	1	0.2
グリベル（オーストリア）	1	0.2
クロッグ（イギリス）	1	0.2
合計	490	100.0

タニとサワレの型の内わけ

メーカー（型）	使用者数	全体に対する割合(%)
タニ（旧型）	57	11.6
（新型）	80	16.3
（新改良型）	14	2.9
（プレス）	4	0.8
（その他）	14	2.9
サレワ（プレス）	116	23.7
（ショイナード）	12	2.4

用者数の多いタニとサレワについては「機種（型）」による内分けを出した(注 1)。メーカー別にみると，タニ製品が3割強を占め，「機種」別ではサレワのプレスが2割強で最も多い。尚，1人で2組以上のアイゼンを使用している場合があるので使用者数は延べで表わした。

次にメーカー別の破損件数を表 II-2(注 2)，図II-1 に示す。全体の使用者数に対する破損件数の割合は 19% で，つまり 10 人に2人の割合で破損していることになる。この値はアイゼンの重要性を考慮すれば非常に大きな値といえる。

表 II-2 メーカー別破損件数

メーカー（型）	使用者数(のべ)	破損件数
タニ（新）	96	28
（旧）	58	9
（改）	14	2
（プレス）	4	1
（その他）	15	0
タニ（全体）	187	40
サレワ（プレス）	118	16
（ショイナード）	15	9
サレワ（全体）	133	25
ドメゾン	52	9
シャルレ	51	2
カドタ	28	2
東京トップ	18	2
S. M. C.	17	0
シモン	19	14
スチュバイ	5	3
インターアルプ	4	1
その他	8	1
合計	522	99

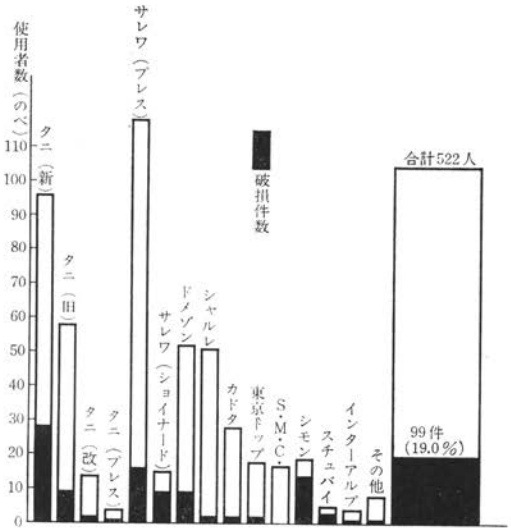


図 II-1 メーカー別破損件数

注 1) タニ（旧型）：ジョイント交換不可能な型
タニ（新型）：ジョイント交換可能な型
タニ（新改良型）：ジョイント交換可能，プレートつき
これらについては後述の「アイゼンの構造的特徴」の項を参照されたい。

注 2) 表 II-2 では，1つのアイゼンでジョイントが折れて，その部分を交換し，再び折れた場合，使用者数2，破損件数2とした。そのため，使用者数が表 II-1 のメーカー別使用者数より 32 人多くなっている。

2. 破損部位について

次に，アイゼンのどの部位がよく破損しているかを 図II-2(注 3)に示す。ジョイントが最も多く，次に多いのがリング部附根である。リング部附根とは 図 II-3 の斜線の部分をこう名付けた。破損の具体的な例をいくつかあげると，急なルンゼをダブルアックスで登攀中,オールアジャスト式プレスアイゼンの左右の前リングの附根が折れた例や，縦走中にプレスアイゼンのツァッケが3本折れ，おまけに両方のジョイントが折れた例がある。グラフのその他とは，プレスアイゼンのかかとを押える部分が外に開き，アイゼンが靴からはずれて滑落した例や，氷瀑登攀中にサイドのリング部附根のリベットがゆるみ，アイゼンが靴からはずれそうになって前爪で立っていられなくなった例などである。アイゼンはその種類によって形状が異なるので，すべてが 図 II-2 のような傾向を示すわけではない。例えば，ジョイントのみ破損しているものもあれば，プレスアイ

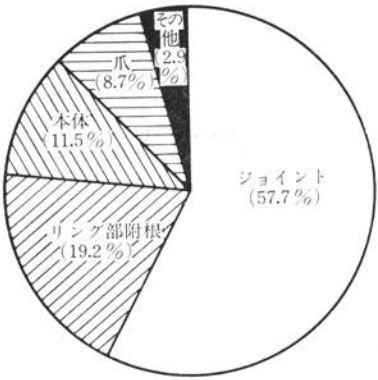


図 II-2 アイゼンの部位別破損率
(破損件数 104 件)

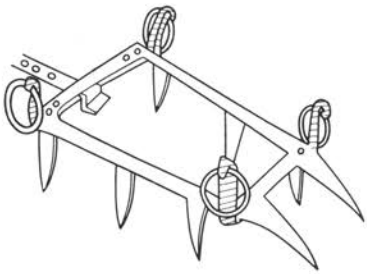


図 II-3 リング部附根

ゼンのようにあらゆる部位で破損しているものもある。メーカー（型）別による破損部位の割合を図 II-4 に示した。

注 3) 図 II-2 の破損件数 104 件と表 II-2 の 99 件との違いについて。

表 II-2 ではジョイントやリング部附根などの交換可能な部位が破損し，交換して再び破損した場合，使用人数 2，破損件数 2 としたが，爪や本体などの交換不可能な部位が一度の山行で 2 ケ所折れた場合は，使用人数 1，破損件数 1 としてある。ところが図 II-2 ではこの破損件数も 2 としたため，全体として 104 件となっている。以下の図 II-4～II-12 でも破損件数は 104 である。

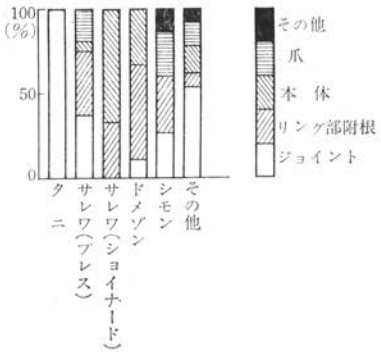


図 II-4 メーカー別破損部位
(破損件数 104 件)

3. 破損部の使用日数

図 II-5 は，破損部の使用日数と破損件数の関係を，全体及びメーカー（型）別に表わしたグラフである。図（全体）から，50 日以内での破損のケースが 6 割を占めていることがわかる。その中でも 10 日以下の使用日数で破損するということは，そのアイゼンを購入して初めて，あるいは 2 度目位の山行で破損しているという事である。ひど

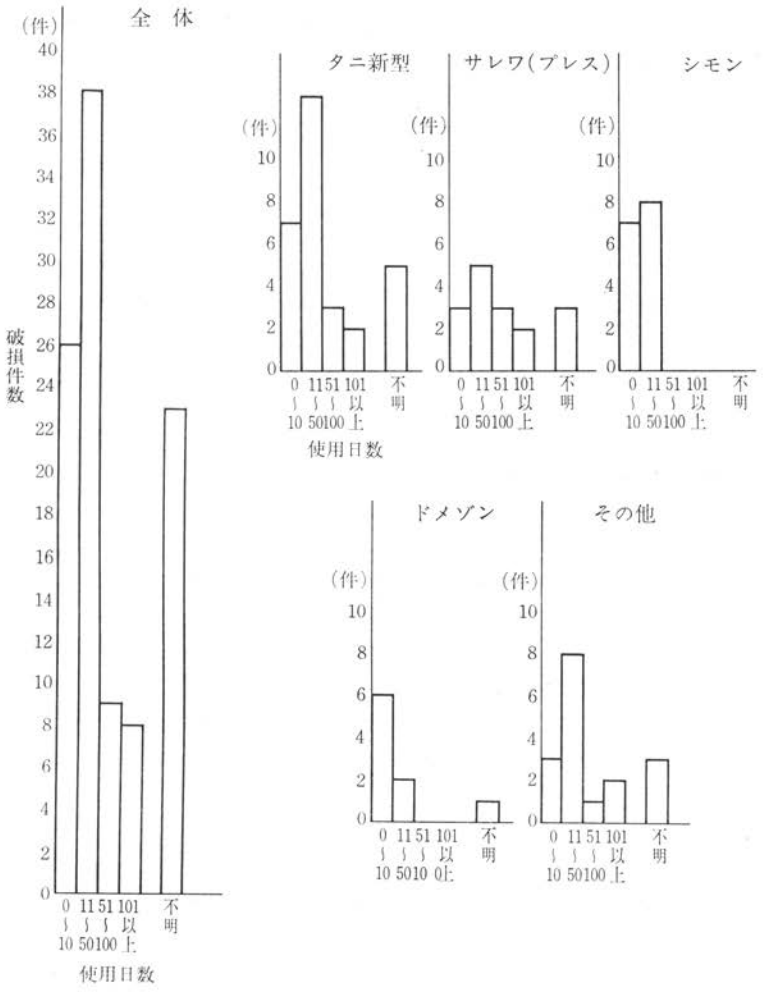


図 II-5　破損部の使用日数と破損件数

い例としては，購入したばかりのプレス式アイゼンを装着して歩いたとたん，本体が2ケ所にわたって折れ落ちてしまった例や，購入後使用9日目にアイゼンを装着し，点検の為にガチガチと踏みつけた時，石ころに当って本体の後リングの附根部が折れてしまった，という例がある。これら2件の例は，同じメーカーの製品であった。その他，新品でジョイントやリング部附根が折れている例が，かなりあった。これらは製品完成時にすでに欠陥が内在していたとしか考えられない。

4. 破損した場所の状態

破損した場所の状態を調べたところ，図 Ⅱ-6 のようになった。岩と雪（氷）のミックスした場所及び硬雪での破損が多いが，日本の冬山では，このような場所でアイゼンを使うケースが多いので，当然のことといえる。むしろここで注目すべきは，アイゼンに無理な急激な力のかかる可能性の少ない軟雪，硬雪でも，かなりの数のアイゼンが折れているという事実である。もっとも，折れた時点までのアイゼンの使用履歴も当然問題になる。

5. アイゼン破損時の歩行状態

どういう歩行状態でアイゼンが破損し，破損直後登山者がどうなったかを調べたものが，図 Ⅱ-7，図 Ⅱ-8 である。

まず，図 Ⅱ-7 からどういう歩行状態で破損しているかを見ると，歩行（登高）中が最も多く 56.7% を占めている。急激な力をかけた時（雪面又は氷に強くけり込んだ時と急に無理な力をかけた時）は 21.4% である。これは，登山中は，単なる歩行（登高）をしている時間の方が，急に無理な力をかける機会の生じる時間より，はるかに多い事を考えればうなずける。しかし，我々はここで，アイゼンは何も急激な力をかけた時ばかりでなく，歩行中（登高中）でも折れるんだ，ということを知ることができる。もちろん，前項と同じように，破損までのアイゼンの使用履歴が問題とはなる。

次に，アイゼン破損直後，登山者がどういう状態に陥ったかについて述べよう。図 Ⅱ-8 をみると，「バランスをくずして滑落した」のが 5.8%（6件），「滑落はしないが危険な状態に追い込まれた」が 9.6%（10 件）と，危険な状態に陥ったケースが合わせて 15.4%（16 件）もあったことが注目される。これらの例としては，クラストした雪面を登高中，ジョイントが折れてバランスをくずし滑落した例や，穂高縦走中，岩場でアイゼンの前爪2本でフットホールドに立った時，ジョイントが折れてバランスを失ったが，ホールドをしっかりつかんでいたので転落をまぬがれた例，又，槍の穂先からの下りでプレス式アイゼンのサイドリング部附根が折れ，バランスをくずしたが，ザイルでストップした例があった。その他，氷瀑やルンゼ登攀中にジョイントやサイド部が折れ，何とか危機を脱したという例も少なくなかった。全体的に見ると「なんともなかった」が 60.6% と最も多いが，これは図 Ⅱ-7 からもわかるように，歩行中などのさ

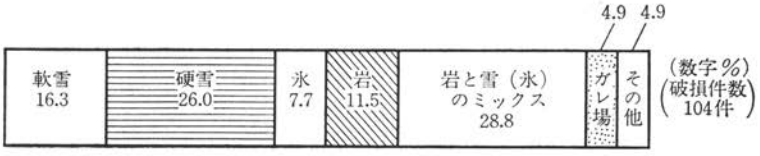


図 II-6　破損した場所の状態

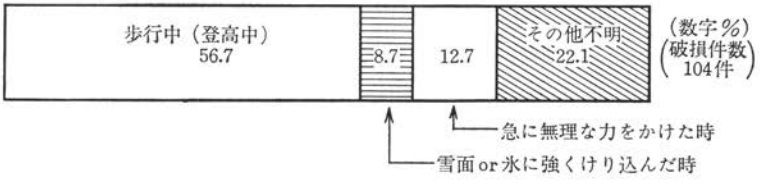


図 II-7　どういう歩行状態でアイゼンは破損しているか

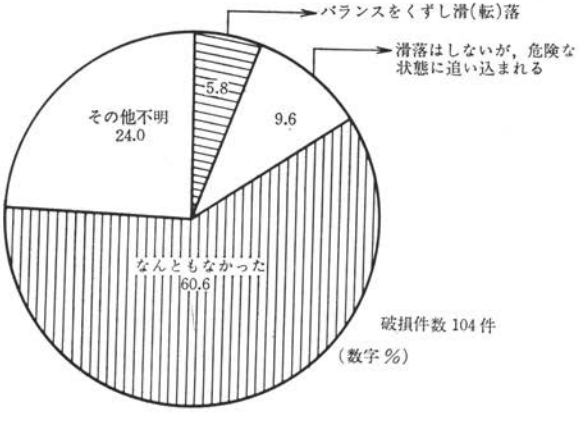


図 II-8　アイゼン破損直後登山者はどういう状態に陥っているか
（破損件数 104 件）

ほど危険でない場所での破損が多い為であろう。いずれにせよ「危険な状態に陥った」15.4% という数値は，決して小さな数値とは言えまい。

6. 事故時の対処とその後の山行への影響について

アイゼンの破損事故時の対処の仕方を，図 II-9，その後の山行への影響を図 II-10 に示す。

まず対処の仕方であるが，図 II-9 の合計を見ると「スペアーを使う」が 14.4% と少なく，「針金その他で修理」が 50% と多い。部位別に見ても，ジョイントやリング部附根のような予備があるか，又は他の型の予備で代用がきくような部品が破損しても「スペアーを使う」が少ない。つまり，大部分の人がアイゼンの破損などということは意識せずに，したがって予備部品など持参しなかったのではあるまいか。そして折れてからあわてて修理したのが実情であろう。「修理しない」も 21.2% と多いが，この例としては，厳冬期の穂高でジョイントが折れ，その後アイゼンの前部をはずして後部だけで鹿島槍まで縦走したという例があった。

次に，山行への影響についてであるが，図 II-10 を見ると，「山行を途中で断念した」のが 10.6% (11 件) もあり，又「ハンディを負いながら続行」したのが 47.1% (49 件) と多いのは，やはり，アイゼンの重要性を物語っていると言えよう。「山行にまったく影響なし」が 23.1% (24 件) あるが，こう答えた人は半数以上が予備の部品，あるいはアイゼン一式を持参していたし，下山途中の破損も多かった。

予備を持たずにアイゼンが破損した場合は，山行に重大な影響を与えるといっても過言ではあるまい。

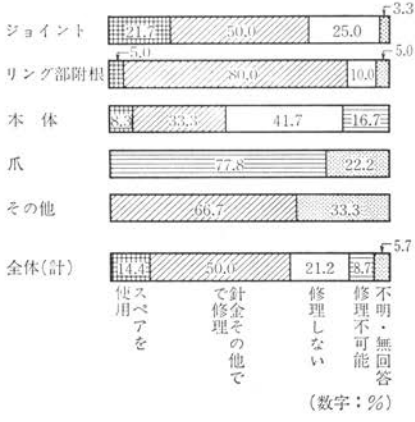


図 II-9 アイゼン破損事故時の対処の仕方

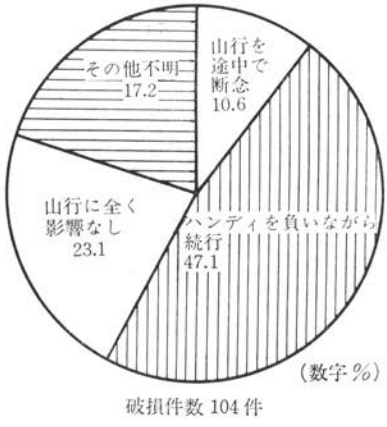


図 II-10 その後の山行への影響

7. 破損時の気温について

アイゼンは主に鋼で作られており，鋼は一般に低温ではもろくなる（低温脆性）。そこで温度と破損件数との関係を調べてみた。結果を図 II-11 に示す。10℃～0℃ のプラスの気温で 9 件の破損が起きているという事実に注目したい。又，−1℃～−10℃ で 27 件，−11℃～−20℃ で 16 件と破損件数が多く，−20℃ 以下では破損件数 0 である。これは日本の冬山が一般に −1℃～−20℃ 位の気温の日が多い為であろう。アイゼンに用いられている鋼が低温脆性をきたす温度はかなり低いはずであり，これらの事実から上記の破損例が低温脆性によるものと考えにくい。

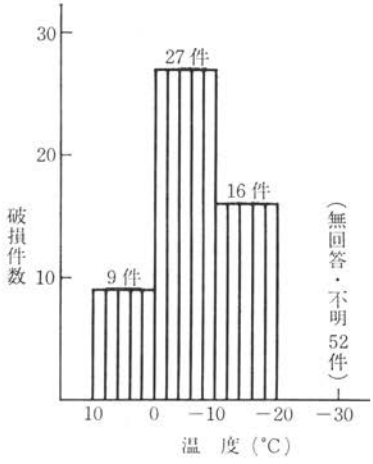
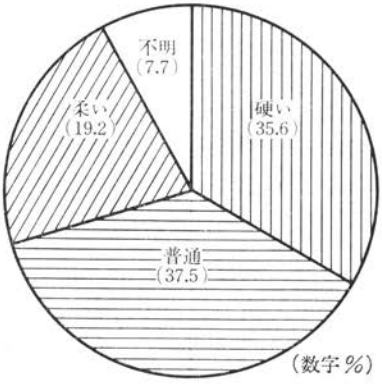


図 II-11　破損時の気温と破損件数

8. 靴底の硬さについて

アイゼンの破損に対する，靴底の硬さの影響を調べたものが，図 II-12 である。靴の硬さは，硬い，普通，柔い，の 3 段階にわけている。硬い靴とは，底に鉄板等が入っており曲がらないものや，特に氷壁用などに作られたものである。普通とは，底に鉄板等は入っておらず，比較的新しいものなど，つまり底が平らで力を入れると少し曲がるというものである。柔いものは，底の曲がるやわらかいもの，又古くなって底がそりかえっているものまで入る。さて，図 II-12 から，硬い靴及び普通の靴で 3～4 割，柔い靴で 2 割弱破損していることがわかる。メーカー側や登山用具店は，「柔い靴ではアイゼンの寿命を縮めますよ」とよく言われる。我々も柔い靴ほどよく折れているのではあるまいかと予想していたが，意外な結果が出てきた（これは柔い靴をはく人が少ない，ということかも知れない。）。



（破損件数：104 件）

図 II-12　靴底の硬さと破損率

いずれにしろ，現在のアイゼンでは，硬い靴を使用しても，かなりの破損が起っているというのが実態である。硬い靴だからといって，決して安心できない。

III　材質面からのアイゼンジョイントの調査（1978 年 10 月～1979 年 2 月）

最近のアイゼンの破損事故は，前述のアンケート調査からもわかるように，ジョイント部に多い。ジョイントの形は数種類あるが，代表例を写真 Ⅲ-1 に示す。これら 3 種のジョイントともすべて破損している。又,破損は写真のネジ部や打ち抜き穴部で多い。1976 年の広島大学の遭難報告書に，当時行なわれたジョイントの破損機構に関する調査がのっている(注 1)。又，ある雑誌にもアイゼンの金属組織に関する調査がのっていた(注 2)。そこでこれらのことを背景として，ジョイントの破損事故を材質の面から調べることを試みた。検討を進めるにあたってジョイントの製造法（工作工程，熱処理工程）や規格などを札幌・門田製作所及び名古屋・梶田製作所に御教示いただいた。文中に専門的な箇所も多いが，なるべく（注）をつけて解説した。

1.　調査に用いたアイゼンジョイント

現在，市販のアイゼンは数種類あり，基本的な構造は似ているが，ジョイントの形状及び本体の形状に若干の違いがあり，それぞれ外力の加わり方は多少異なるものと思われる。すべてのアイゼンについて，そのジョイントを調べることは時間及び入手の面で困難であった。そこで本調査では，名古屋の梶田製作所で製作されている「タニ」（鍛造品(注 3)）及び西ドイツ製の「サレワ」（プレス製品）のジョイントを使用した。前者は写真 Ⅲ-1 に示したネジ式のもの，後者は鋸歯状の切れ込みのついたものである。用いた理由はこれらのアイゼンの使用頻度が高く，その為かジョイント部に比較的多くの折損が報告されたことと，入手し易い為であった。

上記の二種のジョイントの化学組成と工作法は次のとおりである。

＜タ　ニ＞

ジョイントの素材は日新製鋼製で，特注品である。その化学組成を表 Ⅲ-1 に示す。梶田製作所の報告値と，日本製鋼所の分析値とを示してある。この組成は JIS 規格のクロム・モリブデン鋼であり，SCM 3 に近い。SCM 3 は軸類・アーム類などに使用されており，焼入れ性が良く焼戻し脆性(注 4)が少く，引っぱり強さにすぐれた特殊鋼である。次にジョイントの工作法を図 Ⅲ-1 に示す。特にネジ部は転造(注 5)と呼ばれる技術で作られており，普通のネジ切りよりも表面は滑らかとなり応力集中が小さくなる。焼入れ・焼戻し温度は SCM 3 を用いて実験的に再現したところ，870℃ 焼入れ，500℃ で 80 分焼戻したものが，硬度・組織とも最もタニ・ジョイントに似ていた。

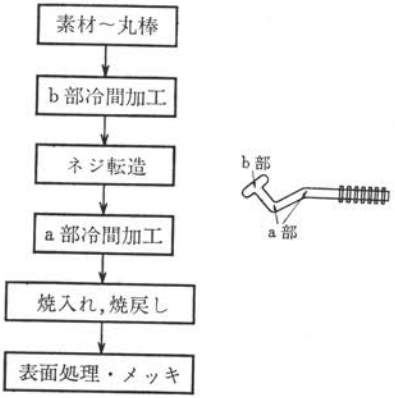


図 III-1 タニ・ジョイントの工作法

表 III-1 タニ・ジョイントの化学組成

▶梶田製作所からの報告値

C	Si	Cr	Mo	Mn	S	P	Ni
9.35%	0.30	1.01	0.30	0.75	0.03 以下	0.03 以下	

▶日本製鋼所での分析値

C	Si	Cr	Mo	Mn	S	P	Ni
0.38%	0.26	1.02	0.21	0.71	0.015	0.018	0.01

＜サレワ＞

化学組成については日本製鋼所での分析値を表 III-2 に示す。これは西ドイツ製であり，JIS 規格に同じような鋼種が見あたらない。工作法についても不明である。ただし後述するようにジョイントの各部分の硬度にバラつきがないので加工後に熱処理（焼入れ，焼戻し）を受けたと推定される。

表 III-2 サレワ・ジョイントの化学組成

C	Si	Cr	Mo	Mn	S	P	Ni	Ti	Cu
0.32%	0.35	1.51	0.24	0.54	0.012	0.009	1.46	0.05	0.20

2. 調査の手順及び調査結果

1） 破損したジョイントの調査

タニ，サレワ共，1本ずつの破損したジョイントが入手できたので，まずこれを調べてみた。残念ながら破面は錆の付着がひどく，破面観察ができなかった(注 6)。そこでジョイントの軸方向（縦断面）とそれに直角な方向（横断面）を切断，研摩し光学顕微鏡観察を行ってみた。

＜タニ・ジョイント＞

ネジ底に1ケ所，クラックの存在が認められた。写真 Ⅲ-2 に示す。クラック発生のきっかけとなる欠陥がすでに製品完成時に内在していたのか，又はクラックそのものが使用中に発生したのかは，この写真だけからではわからなかった。使用日数は約 30 日であった。

＜サレワ・ジョイント＞

明らかに有害と思われる大きな非金属介在物(注 7)が見られた。これを写真 Ⅲ-3 に示す。この大きな非金属介在物の生成原因としては，鋳込みのときの耐火物の巻き込みか，圧延中でのスケール(注 8)の巻き込みなどが考えられる。この非金属介在物が破断のきっかけとなった可能性も充分考えられる。使用日数は不明である。，

2) 未使用の市販製品ジョイントの調査

タニ，サレワ共，破損にいたる使用日数は様々である。例えば数年使用しても破損しない場合もある。しかし，比較的短い日数で破損する場合も多いということがアンケート調査からもわかった。この事実は，製品完成時にすでに欠陥が内在していたのではあるまいか，という疑問をいだかせた。そこで未使用の市販製品ジョイントを調べてみた。

＜タニ・ジョイント＞

初めに非金属介在物について調べた1例を写真 Ⅲ-4 に示す。写真から見ると非金属介在物は少く，清浄度(注 9)は 0.133 であった。次に金属組織を写真 Ⅲ-5 に示す。写真から焼入れ，焼戻しを受けていることが判断できる。焼入れ温度は不明だが，焼戻し温度は約 500℃ である。又，組織は全体に均一であった。硬さはビッカース硬さ(注 10)で 300～350 kg/mm² であり，ジョイントの各部分でのばらつきは見られなかった。さらにミクロ及びマクロなクラックは見い出されなかった。加工組織の流れや，非金属介在物の状態から，素材の圧延方向をジョイントの軸方向にとっていることが判明した。強度の面から考えればこのとり方は正しいといえよう。

次に，シャルピー衝撃試験機(注11)を用いて，ジョイントを温度 −17℃ に保って，ネジ部に衝撃を加えてみた。この温度は，実際の日本の冬山での気温を想定した(注 12)。その結果，振り上げ角 $\theta=30°$ で破断した。その破面を写真 Ⅲ-6 に示す。これは延性破面と呼ばれ，粘い割れ方をした時の破面である。つまりこの温度ではまだ面性，じん性を保っており，低温脆性は現われない。

＜サレワ・ジョイント＞

まず非金属介在物の状態を写真 Ⅲ-7-a, Ⅲ-7-b に示す。清浄度は 0.153 であり，一般的である。又 TiN（窒化チタン）が均一に分布していた。前述した破損品にはこの TiN が見られなかった。この破損品は 4～5 年前に購入されたものであり，その後に TiN を分散させて材料の引っぱり強さ，じん性などの改良をはかったものと思われる。現在のものには大きく有害な非金属介在物は見られず，材質は 4～5 年前と比べて良くなっているようだ。

次に金属組織を写真 Ⅲ-8 に示す。焼入れ後，充分な焼戻しを受けているらしく，ソルバイト組織(注 13)となっている。又，組織は全体に均一であった。硬さはビッカース硬さで 160～180 kg/mm² であり，タニと比べてかなりやわらかく，ジョイントの各部分でのばらつきもなかった。ミクロ及びマクロ・クラックは見い出されなかった。加工方向はサレワの場合，素材の圧延方向と 45° の角度をなす方向をジョイントの軸方向にとっている。これも強度の面から考えれば正しいと思われる(注 14)。次にシャルピー衝撃試験機で，ジョイントの温度を −16℃ に保って衝撃を加えた。その結果振り上げ角 $\theta=70°$ で破断した。破面を写真 Ⅲ-9 に示す。これも延性破面であり，この温度ではまだ延性，じん性を保っていることがわかる。

3) 実際に山で使用されてきたジョイントの調査

前述のように，未使用のジョイントにクラック発生のきっかけとなるような表面亀裂，内部亀裂，大きな非金属介在物は見られなかった。そこで，次に実際に山で使用されてきたジョイントを調べてみた。使用中のジョイントに関しては，タニ・ジョイントは比較的入手容易だったが，サレワ・ジョイントは入手が困難だった。この為，以後の検討はすべてタニ・ジョイントに限って行った。

＜タニ・ジョイント＞

使用中のジョイントは 6 個得られたので，軸方向に切断してその切断面を観察した。結果を表 Ⅲ-3 に示す。特徴あるクラックがネジ底の隅に見いだされた。この表からわ

表 III-3 使用中のジョイントの使用日数と切断面観察の結果

	使用日数	切断面観察の結果
試料 1	約 25 日	ネジ底数 23 のうち 3 つのネジ底にクラックが存在
試料 2	20～30 日	ネジ底数 18 のうちすべてのネジ底にクラックが存在
試料 3	不明	ネジ底にノッチの存在
試料 4	15～20 日	ネジ底にノッチの存在
試料 5	約 40 日	ネジ底にノッチの存在
試料 6	約 150 日	ネジ底数 17 のうち 11 のネジ底にクラックが存在

（注） ノッチとは，使用中にできたと思われる凹凸をこう呼んだ。

かるように，使用日数の増加に伴って必ずしもクラックの発生個数も増えるというわけではない。次に，試料2に観察されたクラックを写真 Ⅲ-10, 11, 12 に示す。最大のものは写真 Ⅲ-10 のように，ネジ内径の5分の2にも達していた。試料1及び6のクラックもこれと同じものであった。次に同じクラックを走査型電子顕微鏡で観察した結果を写真 Ⅲ-13 に示す。特徴ある溝をもち，これは腐食によって形成したものと思われる。クラック内には腐食生成物が見られた。写真 Ⅲ-14 には試料2のクラック面を示す。さらにクラックが結晶粒界に沿って走っているのか，結晶粒内を貫通して走っているのかは不明であった(注 14)。

4) タニ・ジョイントのメッキについて

実際に山で使用されてきたジョイントに見られたクラック観察から，腐食とクラックの形成が密接な関係をもっていると考えられる。そこで，腐食を抑制するメッキ層のジョイント本体に対する付着の強さを調べてみた。表面メッキについてはX線マイクロアナライザで分析した結果，ニッケルメッキ(注 16)がほどこされており，その厚みは約 5 μm であった。まずねじ込みによる摩耗，はげ落ちを実験してみた。しかしジョイントに 120 回のねじ込みを加えてもメッキは剝離しなかった。もちろん実際の山行ではこれほど多くねじ込むことはない。次にネジ部にシャルピー衝撃試験機で力を加えてみた。試験機のハンマー打撃部にゴムを装着し，試料の温度を −18℃ に保って，振り上げ角 $\theta=10°$ で，試料の両面から数回たたいてみた(注 17)。この試料を走査型電子顕微鏡で観察したところ，メッキ層にはクラックが入っていた。なかには母材にまで入っているクラックも見られた。つまり，ニッケルメッキの付着性は良く，簡単に剝離せず，むしろ応力によって割れが入ることが判明した。

3. 考　　察

以上の結果から，タニ，サレワ共に，未使用の市販ジョイントには大きな非金属介在物，マクロ及びミクロ・クラックのような使用後の亀裂と結びつくような有害な欠陥はなかった。もちろん試料数が少ないので，試料数を多くすれば，欠陥の見つかる可能性もないとはいえない。ところが，タニ・ジョイントの場合，実際に山行に使用してきたジョイントに6つの試料中，3つも特徴あるクラックが見られた。つまりこのクラックは使用中にできたものであろう。写真 Ⅲ-10〜13 からわかるように，応力と腐食によって形成されたクラックと思われる。実際の山行中，ジョイントには複雑な応力が加わることが考えられる。特にネジ底の隅は最も応力集中を受けるであろう。腐食環境については，山中の場合，水分や大気，温度差などによって異ってくると考えられる。防食法としては，ニッケルメッキがほどこしてある。ところが実験結果より，応力が加わると，このニッケルメッキは剝離するよりも割れが先に入ることがわかった。写真のクラックは，ジョイントに加わる繰り返しの応力によって，まずメッキ層が割れ，ニッケル

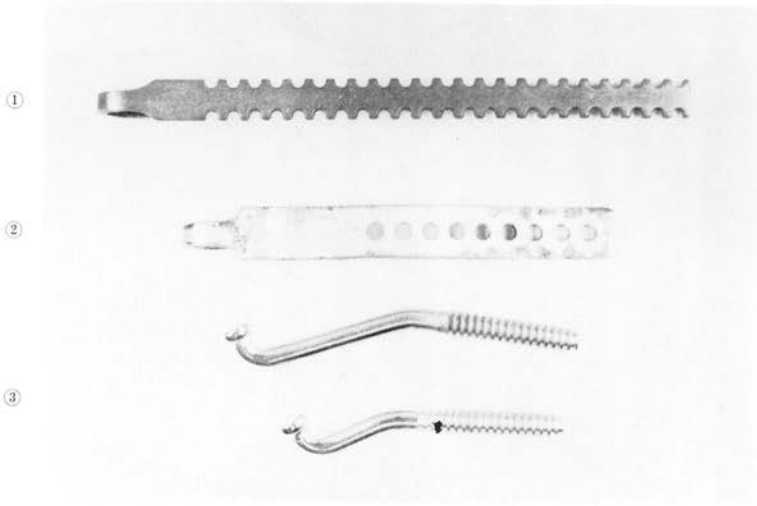


写真 III-1　各種ジョイント

①	鋸　歯　率	サレワ・ジョイント	(西ドイツ)
②	打ち抜き穴式	東京トップ・ジョイント（トップスノーマン）	(国　産)
③	ネ　ジ　式	タニ・ジョイント	(国　産)

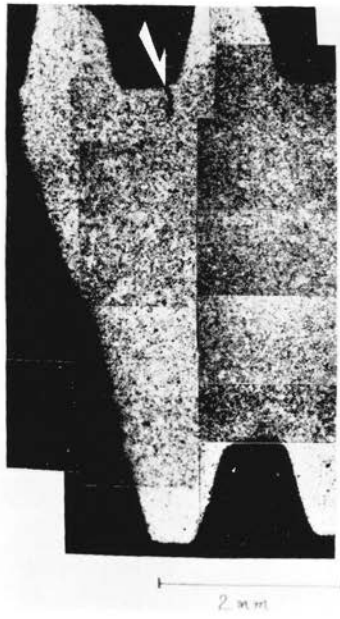


写真 III-2

タニ・ジョイント，ネジ部のクラック

（矢印はクラック部）

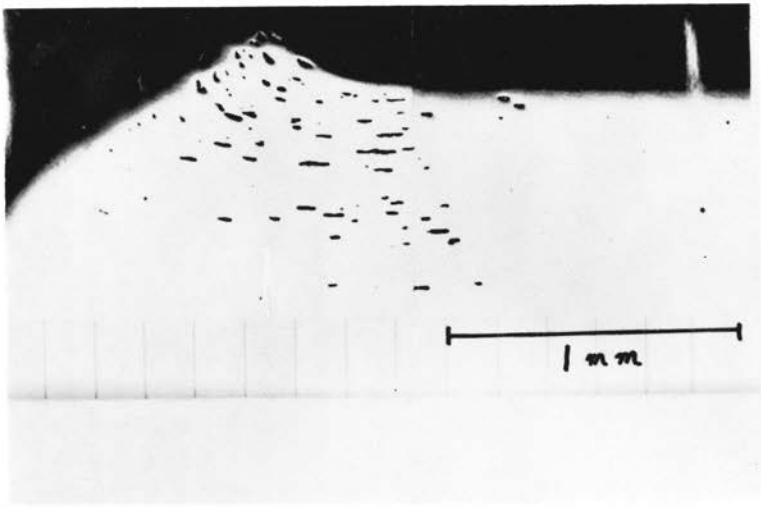
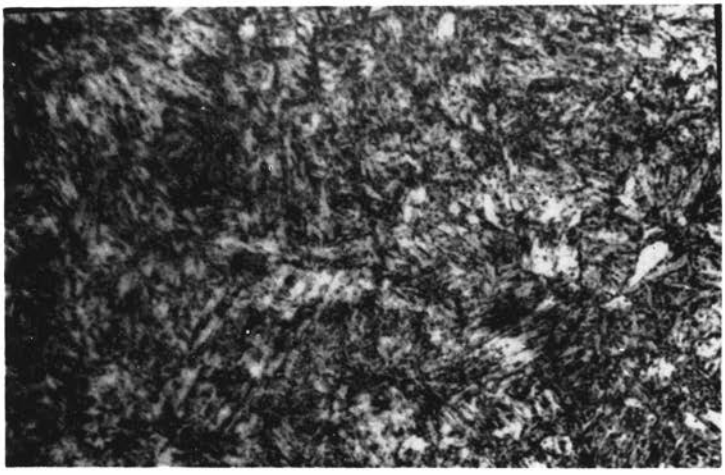


写真 III-3 サレワ・ジョイント（断面図）の非金属介在物

×50

写真 III-4 タニ・ジョイントの非金属介在物

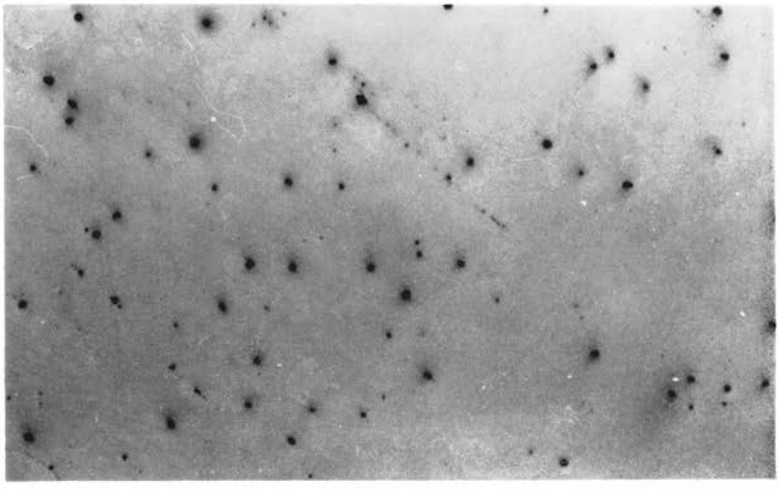


×1000

写真 **III-5** タニ・ジョイントの金属組織

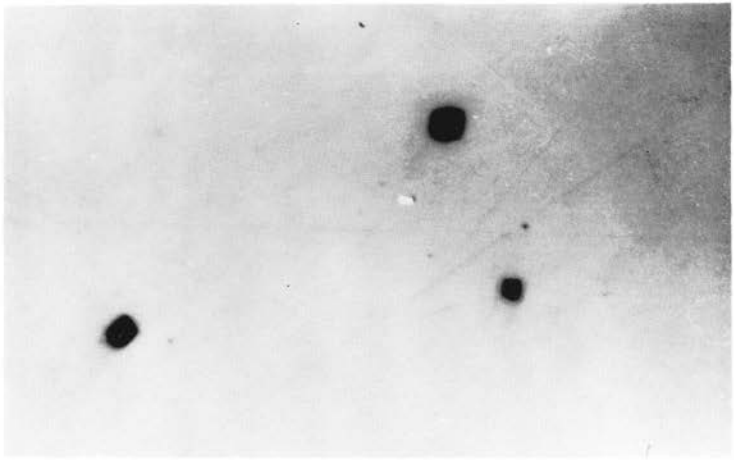
×1000

写真 **III-6** タニ・ジョイントの破断面



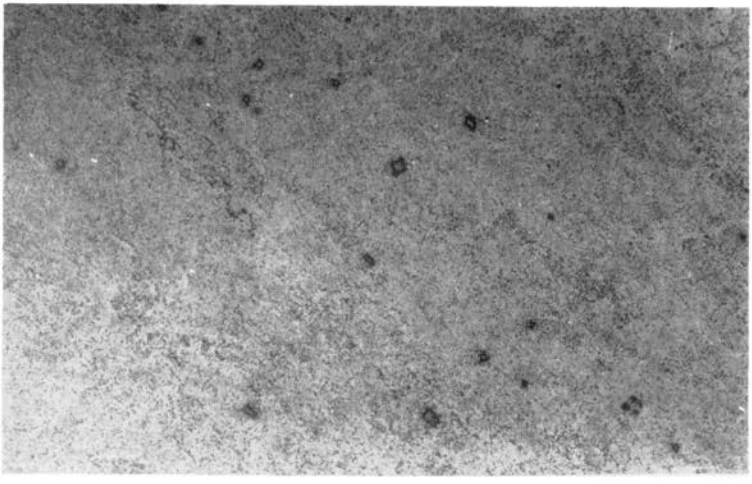
×50

写真 III-7-(a)　サレワ・ジョイントの非金属介在物



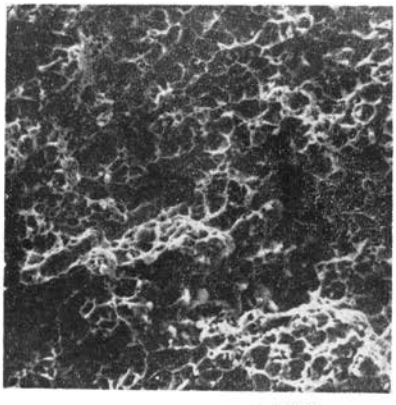
×200

写真 III-7-(b)　サレワ・ジョイントの TiN



×100

写真 **III-8** サレワ・ジョイントの金属組織



×1000

写真 **III-9** サレワ・ジョイントの破断面

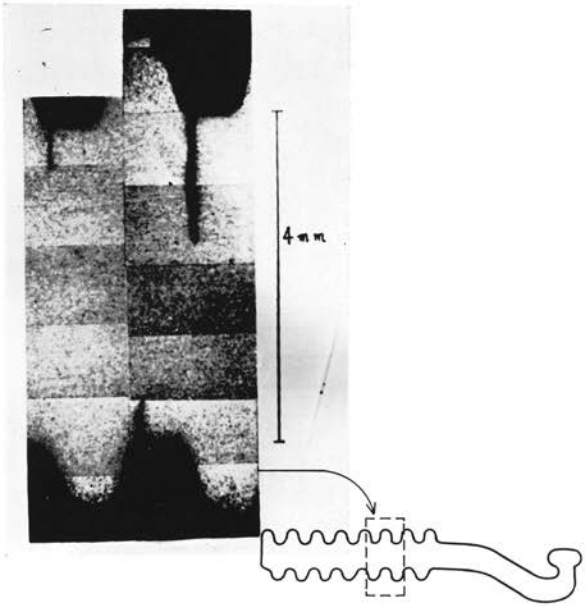
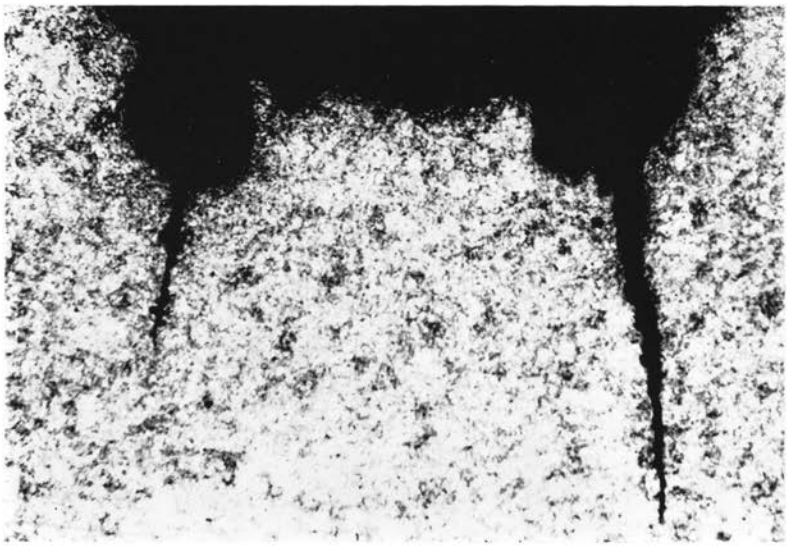


写真 III-10　タニ・ジョイントのネジ底に見られたクラック



×100

写真 III-11　タニ・ジョイントのネジ底に見られたクラック

×50

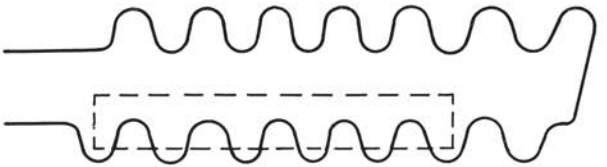
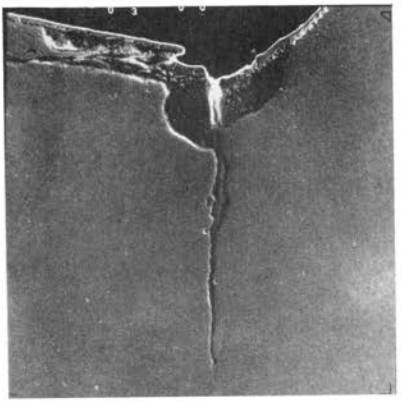
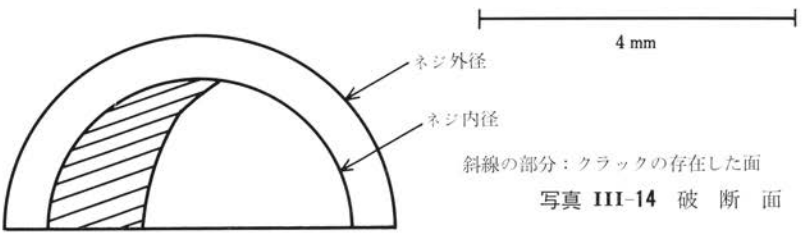


写真 III-12 タニ・ジョイントのネジ底に見られたクラック



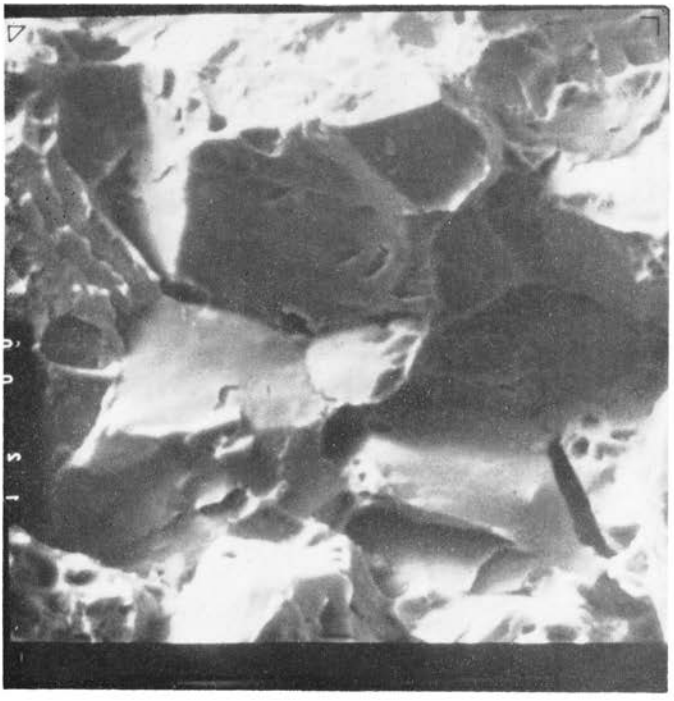
×300

写真 III-13　タニ・ジョイントのネジ底に見られたクラック



斜線の部分：クラックの存在した面

写真 III-14　破　断　面



×1200

写真 III-15 ラプラド・ドメゾンの破面

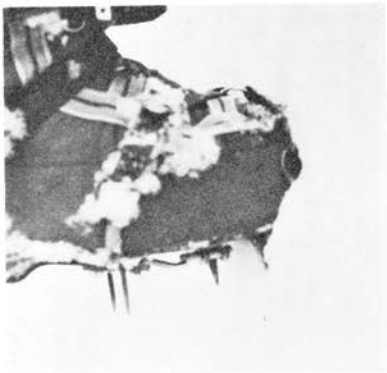
（粒界破壊のパターンを呈している）

写真 IV-1-ⓐ

写真 IV-1-ⓑ

写真 IV-2-ⓐ

写真 IV-2-ⓑ



ⓐ

ⓑ

ⓒ

写真 IV-3

アイゼンのジョイントの折れた瞬間

は鉄より貴(注 18)な為メッキ層よりも露出した母材の方が先に腐食し，写真のような腐食孔ができ，そこが切欠きとなって応力が集中し，クラックが発生したものと思われる。

タニ・ジョイントに関しては破断にいたる一つのパターンが，応力と腐食によるクラックの発生と進行によるものであると推定される。対策としては，応力及び腐食の面から次のようなことが考えられる。

ア） ネジ底隅の曲率半径を大きくする

イ） ネジ部の内径を大きくする

ウ） 鉄より卑な金属をメッキとして用いる

エ） ある一定期間使用したら新しいジョイントと取り替えていく

これら各項目についての検討及びクラックの発生，進行のメカニズムの解明，さらにサレワ・ジョイント他の調査は今後の検討課題である。

（補　足）

本実験が終了して間もなく，ラプラド・ドメゾンのアイゼンの後リング部附根の破損事故があった。破損時の天候は雪，気温は約 −10℃，使用日数は 9 日であった。破損したときの情況は，アイゼンの着装を確める為に踵を岩に軽くトントンとたたいた時である。幸い破損品がすぐ手に入り，錆も付いていなかった為，走査型電子顕微鏡で観察してみた。結果を写真 Ⅲ-15 に示す。この写真から粒界破壊のパターンを呈していることがわかる。これは前述の延性破壊と異なり，脆い破壊形式である。恐らく製品完成時に不純物が結晶粒界に偏析していたのではあるまいか。使用 9 日目にこのような脆い破損をするということは，明らかに製品完成時点での欠陥品である。

注 1）「広島大学体育会山岳部遭難事故調査報告書」昭和 52 年 2 月

注 2） 矢野正　KINZOKU Vol. 48, No. 5, 1975, 49〜51

注 3） 厚さ 4〜5 mm の素材を打ち抜いてから爪及びリング部附根を鋳造している。

注 4） 焼き入れとは，鋼を硬化し，または強さを増加するため，ある一定温度(変態点という)以上の適当な温度に加熱した後，急速に冷却する操作。焼き戻しとは，焼き入れした鋼の靭性を増加するため，変態点以下の適当な温度に加熱したのち冷却する操作。焼き戻し脆性とは，焼き入れ，焼き戻しの後の材料に現われるもろさの性質をいう。

注 5） ネジ溝を彫ってある型の間に棒材を挟んでネジを成形する。タニ・ジョイントの場合，ある適当な温度に熱した素材と型とが相対的に回転しながらネジが成形される。

注 6） これについては，前述の広島大学の調査によれば，レプリカ樹脂に錆を粘着させることを根気よくくりかえすことによって腐食層の除去に成功している。しかし，この腐食層の除去は大変むずかしく，材料や時間の面で不可能であった。

注 7） 酸化物，珪酸物，硫化物，耐火物，鉱滓などが金属中に介在しているものをいう。大きなものはもちろん有害である。一般に鉄の原子との密着性が悪く，小さくても無い方が望ましい。しかし，鉄の原子との密着性が比較的良く，小さく分散していればかえって材料の性質を

高める場合もある。(後述する TiN など)

注 8) 空気中または他の酸化気圏中で加熱することによって金属表面に発生する酸化皮膜。

注 9) ランダムに分布した点状介在物の顕微鏡観察による面積率。

注 10) 硬さ測定法の一つ。ダイヤモンドの四角錘を試片の表面に押圧し，できたくぼみの面積で荷重を除した商。

注 11) シャルピー衝撃機は回転軸を持つハンーを所定の角度に振り上げて，軸垂直線上に支持した切り込み付きの試験片に衝撃を加える実験機械であり，ハンマーの振り上げ角度によって，その衝撃の度合を表わす。

注 12) 本来なら冬山の温度は −25℃ 位を想定し，さらに安全性を持たせる意味で −30℃ 位で実験すべきであるが，エチルアルコールと氷しか手元になかったため，−17℃ までしか下げられなかった。

注 13) 英人 SORBY 博士の名に因んで命名された鋼の組織の一つ。α鉄と微粒セメントタイトとの機械的混合物であり，低温でも脆くならない特徴がある。

注 14) 圧延された鋼は，体心立方格子である鉄鋼の結晶が，圧延される方向か，又はそれと 45° の角度に並ぶようになり，その方向にもっともすぐれた強さを持つ。従って，ジョイントの軸方向は，圧延方向にとるか，それと 45° の角度の方向にとるかが望ましい。

注 15) 鋼の元のオーステナイト結晶粒を出す Villella の試薬その他で腐食液の温度，腐食時間を変化させて調べたが，いずれも結晶粒が鮮明に出なかった。

注 16) 本実験中 (1979 年 1 月)，梶田製作所から最新のジョイントをいただいた。これは今までのものより若干やわらかく，メッキはニッケルとクロムであった。形状は同一である。現在市販されているものはこれであろう。

注 17) 実験中，少しばかり塑性変形を起こさせてしまった。これは明らかに失敗であった。なぜなら，山中ではタニ・ジョイントはおおむね弾性変形しか受けないと思われ，塑性変形を受けるとしてもごくまれな場合であるためで，実験でも弾性変形内にとどめるべきであった。

注 18) イオン化傾向のより小さい金属を貴であるという。一般にイオン化傾向の大きいものの方が酸化されやすい。

IV 実際にアイゼンを使用するにあたって

ここでは，実際にアイゼンを使用するにあたって参考になると思われる事項をあげてみた。登山者が装備を使いこなすために，装備の研究・考察をする一つの参考となれば幸いである。我々の考察は不完全なので，登山者一人一人がさらに装備に対する研究・考察を怠りなくして欲しい。

1. アイゼンの構造的特徴

これはアンケート調査をもとに，使用者が多いと思われるアイゼンについて，その構造的特徴を，我々なりに考察したものである。

＜タニ旧型＞

ジョイントがネジ式である点が特徴である (新型・新改良型も同じ)。破損はこのネジ部に集中している。この型はジョイントが本体に取り付けられており，交換することがで

きないので，新改良型タイプに改造するほうがよい。前爪部は交換可能で，10 本爪にも 12 本爪にもできる（尚この型は製造中止された）。

＜タニ新型＞

旧型を改良して，ジョイントを交換可能にしたもの。靴底のそりに対して，ジョイントと後部の接点が曲らないので，ネジ部に力が集中する。この型も新改良型タイプに直すほうがよい（製造中止）。

＜タニ新改良型＞

新型の欠点を改良してネジ部に加わる力を分散させている。旧型，新型，新改良型とも，ジョイント以外での破損は現在まで聞いていない。ジョイントの破損さえ解決されれば，かなり頑丈なアイゼンとなるであろう。

＜カジタ・スーパーアイゼン＞

フル・アジャスト・タイプであり，踵部をとめるものはワイヤーである。このワイヤーが，使用しているうちにほつれてきやすいので，常時点検することが必要であろう。また，バンドを通すリングが弱い感がある。

＜サレワアイゼン No. 200～No. 203＞

板厚 2 mm と 3 mm のものがある。このアイゼンは材質が軟らかいので，爪の減り方が早い。これを解決するために，爪の先端だけタングステンを埋めたものもある。軟らかい材質のため，靴のそりに対しても比較的曲りやすく，ジョイントのみに力が集中する傾向は少ないようだ。しかし肉厚が薄いためか，いろいろな部位で破損している。また，爪が曲ったり，リング部附根が外側に開いて曲ったりする問題もある。確かに重荷を担いで岩，雪，氷の上を歩き回るには不向であろう。日本の冬山では板厚 3 mm の方が良いと思われる。

＜ショイナード・サレワ＞

オールアジャストで，靴に完全に合わせることができる。これは特に氷壁用に作られており，曲げに弱い構造となっているので，底の硬い靴で使用する必要がある。リング部附根と本体に破損が多い（9 件）。

＜R・ドメゾン・クランポン＞

前爪部は，氷壁用及び氷と岩のミックス帯向きの 2 種類が用意されている。形態は他のアイゼンと異なり，前・中・後部の 3 つの部分に分かれている。確かにアジャストはしやすいだろうが，ジョイント部が 2 つに分かれているため，弱点が増えている。このアイゼンの材質は他社のものと比べて非常に硬い。

＜シモン・マカルー＞

氷壁向。ジョイントと前爪及び後爪部の接点は曲がらない。そのため，ジョイント部への力の集中が大きいと考えられる。踵部のストッパーは軟らかく，あまり役に立たないらしい。アイゼンバンドを工夫するか，針金などで補強する必要がある。

2. ジョイントが破損した瞬間における登山者の状態について

前項のアイゼンの構造を見ていただけると判るが，現在のアイゼンは大きく三つの型に分けられる。

① アイゼンの後爪6本と前爪部をジョイントでつなぐもの。これはタニ・アイゼンに代表される。

② 後爪4本と前爪部をつなぐもの。これはサレワ，シモンなどに代表される。

③ 氷壁用のジョイントの無い一体式のもの。例えば SMC，サレワ・ショイナードなどである。

これらについて，それぞれのジョイント，あるいはジョイントに替る本体が折れた瞬間，登山者はどうなるだろうか。斜面の傾斜及びアゼンバンドの締め方によって，どうなるかは大方予想される。我々は，実際にこれを確認すべく一つの実験を行ってみた。

(実験日時) 昭和 54 年 3 月 6 日

(実験に用いたアイゼン)

①の型としてタニ，②の型としてシモン・マカルーを使用した。③の型はその構造上，実験に用いることができなかった。アイゼンバンドは写真 Ⅳ-1 (a)～(b)，Ⅳ-2 (a)～(b) のとおりの締め方で実験を行った。

(実験方法)

まず，90 度と 45 度の傾斜をもつ二つの雪面をつくる。この雪面は，前日から水をまき，比較的硬くしておいた。あらかじめジョイント部に切欠を入れ，使用中に破損するようにしておいたアイゼンで斜面を直登し，破損した瞬間の登山者の状態を調べる。

(実験結果)

タニで 90 度の雪壁を前爪で直登した場合，ジョイントが破損すると写真 Ⅳ-3 のようにアイゼン前爪部が抜け，登山者は転落した。45 度の斜面をアイゼンをフラットに置いて直登した場合は，アイゼン後爪部が残っていたため，滑落しなかった。

次にシモンで 90 度の雪壁を直登した場合，ジョイントは折れても前爪部は靴からはずれず，登山者は転落しなかった。45 度の斜面の場合，ジョイントが折れた瞬間，前爪部が靴からはずれ登山者が滑落した例と，靴からはずれず滑落しなかった例があった。これはアイゼンバンドの締め具合，及びアイゼンと靴との形状によると考えられる。

以上，結果は大方我々の予想通りであった。ジョイントなどの一部が破損しても，アイゼンが靴からはずれないようにするには，アイゼンバンドの締め方の工夫が必要である。我々は，アイゼンバンドの締め方の工夫を若干試みてみたが，どうにもうまくいかなかった。登山者諸兄の工夫を期する次第である。

3. アイゼンの修理方法

アイゼンは山行の安全性を確保するために重要なものであり，もし山行中に破損が起

きた場合は，適切な修理が行なわれなければならない。以下に述べるものは，我が部で今までに行なわれてきたものとアンケートで集めた修理法である。

＜ジョイント部の修理方法＞

i） 予備のジョイント使用

これが最良の方法であり，以後の山行にも全く影響はない。注意する点は，予備は少なくとも１人で２本所持し，サイズ及び形状が使用アイゼンに合うものであるかどうかを山行前に確認しておく。予備のない機種もあるが，中には他社製品の予備ジョイントが使用可能なものもある。

ii） 針金で固定し細引きで補強する方法

予備がないアイゼン又は予備を持っていな時は，アイゼンの前後部のジョイント差込み口などを利用して，針金と細引きでジョイントの代用をさせ，その上からビニールテープを巻く。今までの経験から針金だけだとすぐ切れてしまい，又細引きだけだとのびきってしまうことがわかった。したがって，今のところこの方法が最も良いと思われる。ビニールテープは，針金及び細引きの摩耗を防ぐ為である。もちろんこの場合，毎日点検する必要がある。この修理法はあくまでも応急処置であるから，修理後の長い山行は危険が伴う。

＜リング部付根の修理法＞

この部分も，予備のある機種がある。ジョイントと同様，予備使用が最良である。

次に図Ⅳ-1(a)～(c)で示すように，ツァッケにリングをかけ，針金で固定する方法がある。この場合は，靴が左右にずれることがあるので，さらにアイゼンバンドで上から固定するとよい。リングが破損した場合は，図Ⅳ-1-(d)で示すようにツァッケにアイゼンバンドをかけて使用する。この場合アイゼンバンドが消耗することと緩みやすい欠点がある。長い歩行はできないと考えるべきである。

＜本体及びツァッケについて＞

本体の破損は，氷壁用に作られたジョイントの無い一体式のものに多いが，これについては修理がほとんど不可能である。したがって人数の多い山行や長期山行の場合は，予備のアイゼンを持っていくことが望ましい。

＜修理用具について＞

修理用具としては最低限以下に述べるものが必要である。また予備のアイゼンは，メンバー全員に合うようにアジャストできるものがよい。

○ドライバー	○プライヤー
○針金（多量）	○細引き
○ビニールテープ	○予備ジョイント
○リング部附根（予備）	○アイゼンバンド

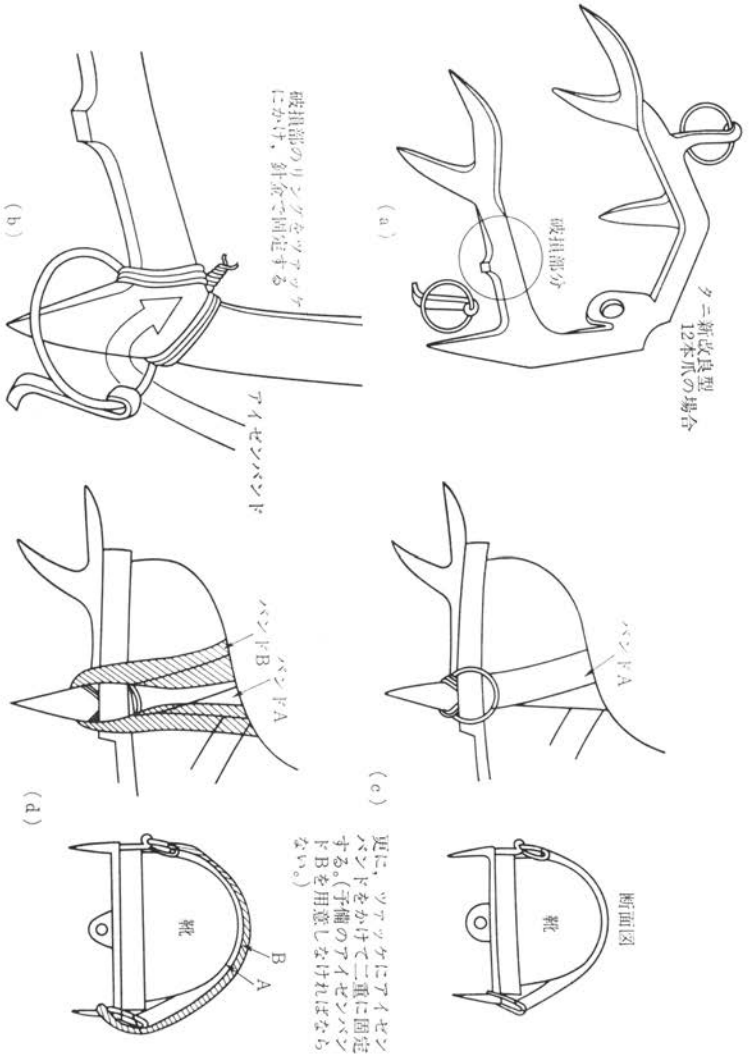

ター新改良型
12本爪の場合
破損部分
(a)
破損部のリングをツアックにかけ，針金で固定する
アイセンバンド
(b)
バンドA
(c)
バンドB
バンドA
(d)
断面図
靴
更に，ツアックにアイセンバンドをかけて二重に固定する。(予備のアイセンバンドBを用意しなければならない。)
B
A
靴

図 IV-1

4. アイゼンの保管について

自分の使う用具をきちんと保管しておくことは当り前のことであり，それが自らの命を託す登山用具ならばなおさらのことである。ところが，この当り前のことができないことが多い。赤く錆びついたアイゼンや，白い錆のついたカラビナなどを時折見かける。このように装備を手入れせず放置している人が少なくない。登山者の装備に対する認識の変革を強く望む次第である。さて，アイゼンの保管については，決定的な方法はないが，山行の前後に最低次の諸点に注意したい。

i） 腐食の進行を防ぐ。

使用後は乾いた布で水分をきれいに取り去る。山行中でも，できるだけこまめにやる。山行後は油をひいておく。ジョイントは油の中につけておくのも1つの方法である。里での腐食は馬鹿にならない。一度ついた赤錆は取り去る。

ii） 変形やいたみがないか調べる。

特にジョイントやリング部附根，リング，ネジ類などに気をつける。サレワなどはやわらかいので，多少の変形は大丈夫と思うが，ひどい場合は予備と取り替える。爪は常に研いておく。注意深く観察すると，ルーペでクラックが確認できる場合もある。

iii） アイゼンバンドの損耗を調べる。

V おわりに

以上，述べてきたように，現在市販されているアイゼンは意外に破損しやすく，それに伴う滑落事故も実際に起っている。今までのところ，アイゼンの破損が直接の引き金となった死亡事故は見あたらないが，これまでの滑落事故の中には，潜在的な原因となった事故が含まれていた可能性がある。このような状況では，登山者は「アイゼンは折れるんだ」ということを念頭に置いて使用しなければならない。アイゼンが破損した場合を想定すれば，修理具や予備品は必携品となるであろう。またジョイントなど消耗のはげしいと思われる部品は，ある一定期間使用したら新しいものと交換するといったことや，使用後の手入れ，防錆対策も必要である。

一般に，登山用具は安全性を確保した上で，機能性，経済性が考慮されなければならない。アイゼンについても同様であるべきなのだが，購入したばかりのアイゼンが，最初の使用において破損するといった例などから，安全性に対する配慮に関して疑問を感じざるを得ない。薄すぎると思われる鋼材の厚さ，さらに切欠となる打ち抜き穴などを多くつけることでは，はたして充分な強度が確保されているのであろうか。使用者としての我々の立場からみると，現在のアイゼンは強度不足の感は否めない。登山形態の分化による装備の特殊化や機能性追求は最近の傾向である。

しかし，アイゼンをどのように機能化しようとも，絶対的強度はある程度保っていかなくてはならないし，それなしには機能性というものは生せないであろう。現在のアイゼンは，あまりに機能性ばかりを追求しすぎるきらいがある。最近のアイゼンの特殊化

に伴い，破損原因として使用法の誤りの指摘がある。確かに，そのアイゼンの使用目的から逸脱した使い方をして折れた場合もあろう。しかし，雪上を歩くという基本的動作の中で破損している場合が，アンケート調査を通じても，また我々の部内にもある。登山という複雑な要素をもった行為をなす時，無理な力がアイゼンにかかってしまうことは避けられないのではないだろうか。事は使用法のみの問題ではない。もちろん，絶対に折れないアイゼンなどは作れるはずがない。しかし，現在の破損状況には目に余るものがある。

メーカー側は改めて強度のあるアイゼン製作を心がけてほしい。さらに製品検査，強度試験などの方法を再検討する必要はないだろうか。そして，その方法及びデータなどを公にするべきである。外国製品についても輸入元などが責任をもって同様のことを行うべきである。

さらに登山者も，自分の目的に合ったものを正確に選び，誤った使い方を極力さけるようにするべきだ。最近は登山用具店に行けば何でも購入することができるため，自分の装備について考え，その装備を確実に自分のものにするという姿勢が失われつつあるのではあるまいか。登山者はもっとアイゼンの強度について考えるべきである。結局は登山者さえしっかりしていれば装備は改良されていくものであると思う。

また登山用具店は，メーカーと登山者の間に立つものであり，アイゼンの使用範囲，その製品の説明などを利用者，特に初心者に示すよう努めてほしい。商品である以上，その製品に責任がもてるよう，もっと前向きに考えてもらいたい。

現在までのところ，登山者，メーカー，登山用具店の三者間の意思疎通が必ずしもうまくいっているとは思えない。我々登山者側としては，この三者間の意思疎通をスムーズに運び，さらに強く，機能性に富む登山用具が作られるよう努力しなければならない。不完全なレポートではあるが，登山者，メーカー，登山用具店の方々に少しでも参考にしていただければ幸いである。

最後に，アンケート調査に協力していただいた各大学山岳部，ジョイント調査にあたり御指導ならびに御助言いただいた北大工学部金属工学科の松原教授，田海助手，また有益な参考資料をいただいた札幌門田製作所，名古屋梶田製作所，札幌秀岳荘の皆様に厚くお礼申し上げます。

学研の山岳地図集成シリーズ

全国の主要山岳を網羅。山岳関係者の基本図書

日本山岳地図集成 全2集

■編・著＝吉沢一郎ほか

主要山岳を中心に図取りした、いままでにない本格山岳地図集。全国の一、五〇〇メートル以上の山岳を網羅し、山名、沢名、ルート名をはじめ、山小屋やキャンプ地、水場などの登山情報を豊富に収録した。

●第1集＝総頁200頁 収録地図54図 解説99頁
●第2集＝総頁190頁 収録地図40図 解説78頁
●B4判（364×257ミリ）上製本／箱入り
●全2集セット現金価格（定価）28、000円
●分割払価格＝29、400円（支払回数6回 支払期間6か月 実質年率17.0%）

永遠の標的ヒマラヤ・カラコルム連峰を世界で初めて集大成

世界山岳地図集成 全2集

■監修＝吉沢一郎

世界の登山家の夢であるヒマラヤ・カラコルム連峰が全地域大縮尺で集大成されたのは世界でも初めてである。美しいレリーフ4色地図とカラー写真、ルート解説など最新の情報が山岳愛好家だけでなく広く興味をそそる。

カラコルム・ヒンズークシュ編
■編・著＝高木泰夫／宮森常雄
●B4判／上製本／総頁350頁／カラー32頁
●定価＝21、000円

ヒマラヤ編
■編・著＝諏訪多栄蔵・薬師義美ほか
●B4判／上製本／総頁328頁／カラー32頁
●定価＝19、000円

美しき氷河期の後裔「高山蝶」を克明に記録した写真集

田淵行男 日本アルプスの蝶

日本アルプスの雄大な自然に息づく9種の高山蝶の生活史を克明に描く。山岳写真家、田淵行男氏が34年の歳月と尽きせぬ情熱を込めたライフワークの集大成。

■造本・体裁
●A4変型判●総頁466頁（カラー216頁・モノクロ36頁・解説174頁）●収録写真（カラー約400点・モノクロ約200点）
■定価＝25、000円

298点のカラー写真で初めて描く

写真集 ヨーロッパの高山植物

■写真・解説＝大場達之

本書は、アルプスを中心に、ピレネー、スカンジナビア、アイスランド、オリンポスなどヨーロッパの主な高山植物を、その場所で記録した貴重な写真集です。

■造本・体裁
●A4判原色解説40頁・総114頁・カラー298点・1色解
●定価＝7、500円

発行 学研 学習研究社

●内容見本ご希望の方は下記宛ご請求ください。
(株)学研美術販売
〒145 東京都大田区上池台4-40-5 ☎東京(03)720-1111(代)

TOP BRAND OF WORLD

——世界のトップ・ブランドをご愛用ください——

スカルパ登山靴／イタリア
スカルパ登山靴はイタリアの名門、世界の最高水準をゆく高級登山靴です。遠征隊用から一般用まで揃っています。

アルバータ羽毛製品／中国
アルバータ羽毛製品を中国と取組んで6年、すでにヨーロッパと同品質のレベルにまで達しています。遠征隊用から一般用まで数多くの品種を扱っています。

スワンドライ・ウールジャケット／ニュージーランド
羊毛の国、ニュージーランドのバージンウール100％のアウトドアスポーツ用の保温力抜群のジャケットです。

ハンガロテックス毛織手袋／ハンガリー
ハンガリー原産毛を脱脂しないで編みあげた伝統ある毛織手袋は世界の登山家に愛用されています。

ヤーヌス靴下／ノルウェー
80年余の伝統から生まれたヤーヌスの毛織製品は北欧独特のジャガード柄。高品質を誇る名品です。

マウンテンハウスFD食品／米国
米国のアポロ計画で開発された超軽量、ハイカロリー、保存期間80年の夢の食品です。

総輸入元、発売元

㈱キャラバン

〒170 東京本社　東京都豊島区巣鴨1－25－7　☎ 03（944）2331
〒564 大阪支店　大阪府吹田市豊津町54－4　☎ 06（386）0451
〒062 札幌営業所　札幌市豊平区美園一条6－47　☎ 011（822）8664
〒812 福岡営業所　福岡市博多区堅粕4－23－16　☎ 092（472）0980

M·KATAGIRI
SINCE
1914
TOKYO JAPAN

山とスキーの専門店

キスリング
クレッターザック
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島3－38－9
〒113　片桐盛之助
電話　東京（831）{ 1794番 / 6680番

信頼されて50年

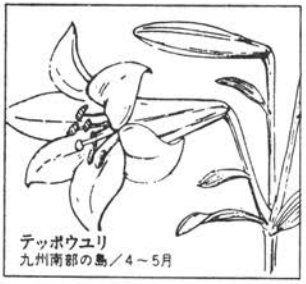
山とスキー用品専門店

TAKAHASHI

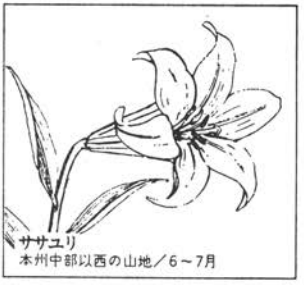
山友社 たかはし

四谷本店 〒160新宿区三栄町3番地 TEL (351)7432·1912
八重洲口店 〒103中央区八重洲1－5－11 TEL (271)1560·8575
新宿店 〒160新宿マイシティ5番街 TEL (352)6564

日本全国で
一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月

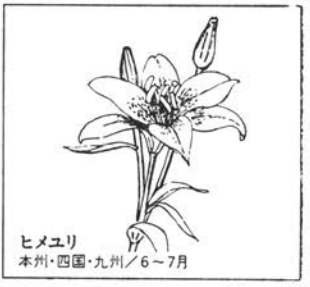


ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月

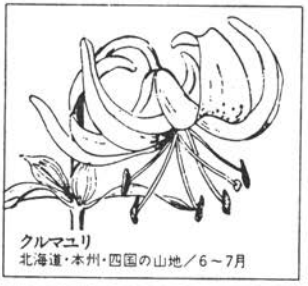
オトメユリ
東北地方の山地／6～7月

ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月

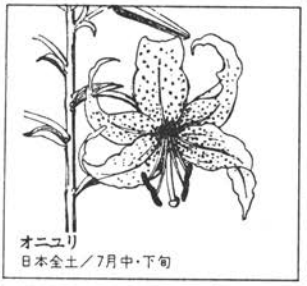
イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上～下旬



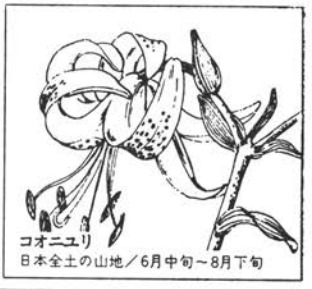
ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月



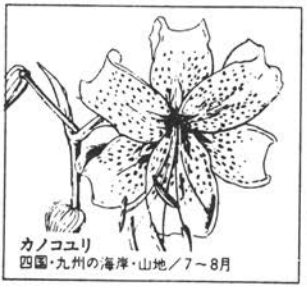
クルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月



オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノコユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で220余ヵ店。
それぞれの地域で、みなさまのくらし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょうけんめい努力しています。
シンボルはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。

いつもごいっしょ
協和銀行

日本登山大系 全10巻

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉 弘編

●発売中

本邦初のバリエーション・ルート・ガイドの集大成
岩場・沢・冬期尾根ルート約四千を完全収録
豊富なルート図・概念図と詳細な解説
全国百数十に及ぶ精鋭山岳会、山岳部による執筆

1 北海道・東北の山
2 南会津・越後の山 (2回配本 定価三二〇〇円)
3 谷川岳 (3回配本 定価二六〇〇円)
4 東京近郊の山
5 剣岳・黒部・立山
6 後立山・頸城
7 槍ヶ岳・穂高岳 (1回配本 定価二五〇〇円)
8 八ヶ岳・奥秩父・中央アルプス
9 南アルプス
10 関西・中国・四国・九州の山

A5判 概念図・ルート図多数・口絵写真6～8頁

101東京都千代田区神田小川町三―二四
振替東京九―三三二二八電二九一―七八一一

白水社

待望の銘品が今、二村からあなたの手に。

グランドジョラスの8日間、長谷川恒男氏も使用。

¥50,000
ダブルアックス用
★二村スペシャルピッケル
(受注生産)

¥50,000
ダブルアックス用
★二村スペシャルバイル
(受注生産)

¥45,000
ダブルアックス用
★二村スペシャルハンマー
(受注生産)

スペシャルタイプは全て、オーダーできます。但し、製作上困難な部分を除きます。 写真のスペシャルタイプは、長谷川恒男氏がグランドジョラス（ウォーカー稜）冬期単独登攀の時に使われたものです。

秀山荘

営業時間 平日＝AM10:30～PM8:00 日曜・祭日＝AM11:00～PM6:00

池袋店／豊島区東池袋1－44－8☎(984)4211
五反田店／品川区西五反田7－22－17卸売センター1F (ミツコスポーツプラザ)☎(494)2670・3247
名古屋店／名古屋市千種区内山町3-85 (今池共同ビル内) ☎052(741)2010

■地方の方は通信販売をしております。

山と自然と旅を愛する人へ…

きたぐにの動物たち　本多勝一　A5変型判/1200円

新版 山を考える　本多勝一　四六判/980円

冒険と日本人〈改訂新版〉　本多勝一　四六判/1200円

山のパンセ　串田孫一　A5変型判/1500円

若き日の山　串田孫一　A5変型判/1500円

心の歌う山　串田孫一　A5変型判/1800円

山菜記〈正・続〉　片岡博　B6判　正・980円/続・620円

旅の山菜　片岡博　A5変型判/1500円

谷川岳ヒゲの大将　高波吾策　B6判　1200円

剣岳の大将 文蔵　佐伯文蔵　B6判　1200円

上高地の大将　木村殖　B6判　1200円

はるかな尾瀬　朝日新聞前橋支局編　B5変型判/1500円

炉辺山話　岡茂雄　四六判/1300円

キャンピング　ブルーガイドL　680円

私たちのシルクロード　平山美知子　四六判/1400円

K2登頂幸運と友情の山　広島三朗　A5変型判/1300円

山の博物誌　西丸震哉　A5変型判(近刊)

北アルプス　日本山岳写真集団/カラー写真集　A4判/8000円

東京付近の山〈改訂新版〉　ブルーガイド編　A5変型判/1600円

ネパール パキスタン ヒマラヤ・トレッキング　ブルーガイド海外版/1380円

ヨーロッパ・アルプス　ブルーガイド海外版　880円

東京 銀座1-3　実業之日本社　振替東京1-326

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部
品の販売・関連機器の斡旋取扱

株式会社橘エンジニアリング
名古屋市中区橘一丁目27番8号
〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

豊かな
生活環境を築きあげる……

(建　材)	(機　器)	(電　機)
●カーテンウォール	●NKフィルター	●電気洗濯機
●アルミ自然発色NKカラー	●各種浄水・廃水処理装置	●冷凍ショーケース
●サッシ ドア	●熱交換器 装置	●冷蔵ショーケース
●用途別サッシ ドア	●熱交換器用フィンチューブアライトロン	●オープンショーケース
●各種間仕切	●ウエルフィン	●ウォータークーラ

日本建鐵株式会社
取締役相談役　早川種三
東京都千代田区大手町2－6－2　〒100
TEL 東京（03）270－6511(大代表)

海外の山と旅
シエラブランカ

アラスカ・カナダ・USA・メキシコ・南米・ニュージーランド

トレッキングからエクスペディションまで

シエラブランカはアラスカからパタゴニアまで
南北アメリカ大陸とニュージーランドを得意とし、
それら山岳関係のインフォメーションを用意しています。
もちろん私達はヨーロッパやヒマラヤも知らないわけではありません。
バックパッキング、トレッキングからエクスペディションの
パッケージはもとより遠征隊のための航空便や
地上手配、地図、エアタクシー、登山申請、保険などに関し
私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。
どのようなことでもお問合せ下さい。答えることも私達の仕事です。

黒川　恵（JAC・ACC・中大山岳部OB）
貫田宗男（JECC・カモシカ同人）
佐藤芳夫（露草登高会）
小笠原重篤（東京岳人倶楽部・在アンカレジ）
吉岡　誠（日大探険部OB）
智片健二（JAC・東京外語WV）

プレイガイドツアー
シエラブランカ
108 東京都港区高輪3-13-3
ホテルパシフィック3階
☎03−445−7533

大修館書店

図説百科 山岳の世界

山のすべてを解説し、山と人間とのつながりを記述した山岳文献

第1章＝世界の山々　山岳の多様性／人工衛星から見た地球の高山／海底の山岳／地図の上の山岳／ヨーロッパの山岳……

第2章＝山岳の生成と消滅　地球とその地殻／造山運動の学説／プレート・テクトニクス／アルプス山脈の生成……

第3章＝山岳の気象　世界の気象システムにおける山岳地帯／高地の気象／山岳地帯の風／山岳における気象要素の影響……

第4章＝山岳の植物と動物　適応による生存／高地の植物相／団塊植物の利点／動物の適応形態／ヨーロッパの森林……

第5章＝山岳の自然災害　落石だ、気をつけろ！―登山者の危険／ペルーの山崩れ／地形と山崩れ／なだれだ！……

第6章＝山岳の生活と文化　山岳と神話／初登頂―アルピニストの活躍／ヒマラヤ―昨日と今日／ネパールの山岳文化……

第7章＝山岳の開発　歴史的な山越えと初期の開発／空から見る山岳／モンブラン登頂／山登り、岩登りと難易度……

著者
アルベルト・バウムガルトナー
ハンス・ビーベルリーター
ノーマン・ディーレンファース
エルヴィン・グレッツバハ
ハンス・ハイエルリ
トニー・ヒーベラー
ギュンター・シュワイツァ
日本語版 監修
西堀栄三郎
宮下啓三

翻訳・校訂者
石井不二雄
大井正一
岡沢祐吉
小野有五
喜多尾道冬
木村武二
中村純二
畑中信一
宮下啓三
山崎安治
若林隆三
渡辺　勝
（五十音順）

〈体裁〉 B4変型判（240×320㎜）・上製310頁（カラー103頁）・写真・図版600枚
発行予定56年1月　予定価20,000円

〔内容特色〕 ●世界の山岳界第一線の著者陣七名による卓抜な内容。美術的にも、科学的にも貴重な六〇〇枚におよぶ写真と図版類。斬新なレイアウトの紙面に、世界の山岳のあらゆる側面をわかりやすく解説した山岳文献の基本図書である。●地球上のさまざまな山岳を網羅し、その地理的地学的な解明をこころみ、また山がいかに生成され消滅していくか、その気候、風土、動植物、あるいは生活、文化、産業、スポーツなど、山岳の自然と文化のすべてをあますところなく、体系的に記述する。―いうまでもなく他に類を見ない山岳総合文献である。●本書は山に登り自然に親しむ人々に、新しく豊かな知識と刺激をあたえるものである。

小島烏水全集 全13巻 別巻1

編集委員　島田　巽・串田孫一　山崎安治・近藤信行
編集協力　小島隼太郎

第6回配本　第八巻　**日本アルプス** 第四巻ほか
飛騨双六谷紀行のほか日本山岳会成立後の烏水の山に関する逸文を収録　菊判・上製函入・挿絵他11丁・本文664頁　定価8,800円

4 不二山　山水無盡蔵他　8,800円
5 日本山水論　山水美論他　8,800円
6 雲表　日本アルプス（1巻）6,800円
7 日本アルプス（2・3巻）　7,200円
10 アルピニストの手記　書斎の岳人　8,800円

〒101　東京都千代田区神田錦町3-24　振替東京9-40504　電話294・2221〈大代表〉　●内容見本呈

山の総合誌〈岳人〉四〇〇号記念出版

新岳人講座 全九巻

A5判・上製本函入り／定価各三〇〇〇円(〒300円)

監修 徳久球雄 塚本珪一 湯浅道男 雁部貞夫

昭和二十二年五月創刊以来、五十五年十月号で四〇〇号を迎えた山の総合誌「岳人」。その記念事業の一つとして、二〇〇～四〇〇号に掲載されて好評を博し、今日なお読者の求めの多い珠玉の紀行文、論文、画文、研究、記録などを全九巻に収録。各巻、現代登山界の趨勢に適した分野別に編集。

第1回配本11月中旬

第1巻 アルピニズムI
●日本登山史を中心に
山崎安治／広瀬潔／中村清太郎／武田久吉ほか

第3巻 技術と用具I
●入門、岩登り、積雪期
円山雅也／岡本龍行／小西政継／横山厚夫ほか

第4巻 技術と用具II
●食糧、山スキー、遭難
金坂一郎／堀田弘司／青木洋／山下喜一郎ほか

続刊内容

第2巻 アルピニズムII
登山思潮の変遷について

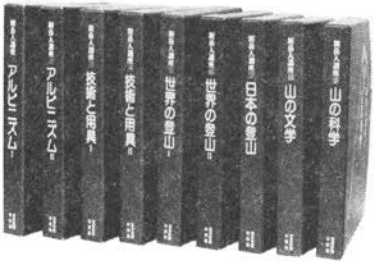
第5巻 日本の山
登攀記録、現状と展望について

第6巻 世界の山I
ヒマラヤ、カラコルム、ヒンズー・クシュ

第7巻 世界の山II
アンデス、アラスカ、アルプス

第8巻 山の文学
随想、紀行、画文

第9巻 山の科学
気象、雪氷、地形、地質、動植物、医学



東京新聞出版局 東京都港区港南2の3の13
電話・(03)471－2211 振替東京5－5497

この日航機は、米国・ボーイング社製B-747型(ジャンボ)ジェット旅客機です。

地球は、何回飛んでも新しい。

ベルト着用のサインが消える。機内が急ににぎやかになる。
初めて訪れる土地の話に花が咲く。書類を取り出した方は、ご出張のお客さま。
スチュワーデスたちには、一段と忙しい時間がはじまる。
機内でのおもてなしはもちろん、日本航空では、ご出発前から、
さらに現地で、そしてご帰国まで、きめ細かなお世話を心がけています。
世界へ広がる広範な路線網と、豊富な便数の日航機。きょうも世界各地で、さまざまな
旅のドラマが生まれています。飛ぶたびに新鮮です。日航機で行く旅。

JAL
日本航空

未踏に刻む

冬山の必需品、アイゼン。トップの12本爪軽量アイゼンは靴にピッタリとフィット。長さ調節はもちろん、幅調節もできる最新タイプ。つま先部は靴底と同カーブの特殊カーブだから靴とアイゼンとがジャストフィット。むだなく足の動きをアイゼンに伝えることができます。

●スノーマン12本爪アイゼン　¥13,000
クロームモリブデン鋼、プレス加工品、氷壁登攀、厳冬期用、ジョイント部チタン鋼使用

●スノーマン10本爪軽量アイゼンL　¥11,000
●スノーマン10本爪軽量アイゼンM　¥11,000
クロームモリブデン鋼、プレス加工品、氷壁登攀、厳冬期用、ジョイント部チタン鋼使用
メッキ、カラー塗装の2重表面処理

NEW TOP

株式会社 ニュートップ
東京都台東区台東1-37-7
〒110 ☎03-834-5521

〒102 東京都千代田区3番町24 TEL 262・0525

ヨーデルの調べと山賊料理をお楽しみ下さい

FONDUE Brigand STYLE
Restaurant
山賊フォンデュ

自然を愛する
人達の
お店です

Brigand

レストランブリガンド
東京都港区西麻布4-5-2 ☎03-407-3009

山岳名著選集

■各巻A5判

プモ・リ〈世界で最も美しい山〉

世界で最も美しい山と推賞されるプモ・リ。登山の楽しみ喜びを存分に語りかける一冊！

●ゲルハルト・レンザー著 織方郁映、橋本信訳・定価2500円

"遠い頂"ヌプツェ

プレ・モンスーン期にヒマラヤの未踏峰ヌプツェ北西峰へアタック

●登歩渓流会編著・定価2500円

冬のアイガー北壁初登攀

緑の牧場にそそりたつ怪奇なアイガー北壁の冬期初登攀成功の記録！

●トニー・ヒーベラー著・横川文雄訳・定価1200円

ダウラギリ登頂

地上に残る8000メートルの未登峰の"白い山"ダウラギリに挑み、1960年ついに初登頂に成功したスイス隊の報告書。

●M・アイゼリン著・横川文雄訳・1500円

エヴェレスト登頂記

"白き神々の座"エヴェレストに、強力な登攀隊と科学班のアメリカの記録。

●J・アルマン著・丹部節雄訳・2500円

パミール〈シルクロードの城塞〉

東西トルケスタンを結ぶシルクロードの要所、神秘な魅力をもった山域パミール。レーニン峰への日本隊遠征の記録。

●田村俊介編著・定価2500円

遥かなる天山〈天山に魅せられた探険家セミョーノフ伝〉

壮大な中央アジアの探険とロマン。セミョーノフの伝記。

●A・セミョーノフ著・田村俊介訳・2500円

中央アジアの高峯〈パミール速攻日本山岳会隊の記録〉

日本山岳会隊18人の両峰登功の記録。

●田村俊介編・2500円

登山ハンド・ブック・シリーズ

全6巻

山岳研究会編

●A5判
●各巻・定価980円

1. 登山教本
2. 登山技術
3. 世界の山岳
4. 山の心
5. 山の自然科学
6. 山の資料

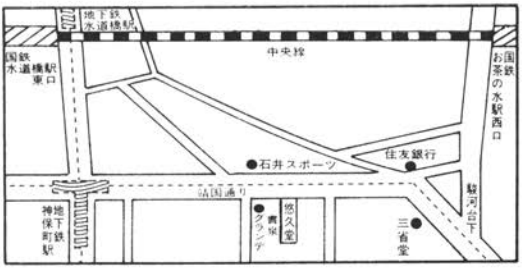
ベースボール・マガジン社 〒101 東京都千代田区神田錦町3-3 ☎03(291)7901

背中が選んだ
曲線ザック。
俺のザックは曲線ザック。
随所に取り入れてある曲線が、
体にジャストフィット。
体力をロスすることなく担ぐことができる。
それに、背面にある溝のついた
パッドが汗を逃がし、
いやなベタつきは解消だ。
いつも山行を快適にする
〈ベルグ〉アタックザック。
——俺の相棒。
〈ベルグ〉アタックザック
MIZUNO
THE WORLD OF SPORTS
美津濃は 新しいワードマークへ変えていきます

山岳書・動植物書

古本の買入と販売

関係書の御相談もどうぞ—地方出張も致します



㈲悠久堂書店

〒101 東京都千代田区神田神保町1—3

☎03（291）0773・0920

“より良きテントの最高峰をめざす吉田のテント”

1952	日本山岳会	マナスル踏査隊
1957	文部省	南極観測隊
1956	日本山岳会	マナスル登山隊
1970	日本山岳会	エベレスト登山隊
1970	日本山岳会東海	マカルー登山隊
1976	植村直己	グリンランド横断
1978	日本大学	北極点遠征隊
1978	植村直己	北極点単独旅行
1978	植村直己	グリンランド縦断旅行

（敬称略）

吉田テント

東京都杉並区桃井1—3—3
☎(399)2548・夜間(398)8469

ニッチの

登山・ハイキングシリーズ

定評ある著者陣容！
全56巻
定価各500円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

① 奥武蔵　武甲・雲取
② 奥多摩　大菩薩
③ 奥秩父
④ 陣馬・高尾　秋川渓谷
⑤ 丹沢山塊
⑥ 富士・五湖　三ッ峠
⑦ 箱根　熱海・湯河原
⑧ 奥日光　奥鬼怒
⑨ 尾瀬　銀山湖
⑩ 軽井沢　妙義山
⑪ 伊豆半島　大島
⑫ 三浦半島　鎌倉
⑬ 美ヶ原　霧ケ峰
⑭ 谷川岳
⑮ 八ヶ岳　蓼科山
⑯ 那須・塩原　鬼怒川
⑰ 磐梯・吾妻　安達太良
⑱ 志賀高原　草津白根
⑲ 上高地　乗鞍岳
⑳ 黒部・白馬　鹿島槍
㉑ 房総半島
㉒ 浅間・蓍平
㉓ 蔵王連峰
㉔ 八幡平　岩手山・駒ヶ岳
㉕ 霧ヶ峰　白樺湖・蓼科山
㉖ 雲ノ平
㉗ 妙高・戸隠　野尻湖・黒姫
㉘ 南アルプス北部
㉙ 中央アルプス
㉚ 南アルプス南部
㉛ 北アルプス
㉜ 加賀白山　白川郷
㉝ 飯豊・朝日
㉞ 大雪山　層雲峡・然別湖
㉟ 槍・穂高　アルプス銀座
㊱ 立山・剣　黒部渓谷
㊲ 東海自然歩道Ⅰ
㊳ 東海自然歩道Ⅱ
㊴ 東海自然歩道Ⅲ
㊵ 入笠山　守屋山・高遠
㊶ 苗場・島甲　清津峡
㊷ 越後三山　奥只見・巻機山
㊸ 御岳　木曽路
㊹ 金剛山　葛城・岩湧山
㊺ 六甲・摩耶
㊻ 比良連山
㊼ 大峰・吉野
㊽ 大台ヶ原　大杉谷
㊾ 赤目・青山　室生寺
㊿ 鈴鹿連峰　御在所・伊吹
(51) 大山・蒜山
(52) 三瓶山　帝釈峡
(53) 秋吉台　三段峡
(54) 九重山　久住高原
(55) 英彦山　耶馬渓
(56) 阿蘇山

※保存用には
日本登山地図集
Ⅰ中部山岳・信州篇
Ⅱ関東・上越篇
をどうぞ——定価各4,800円

地図がグーンと丈夫になりました
ユポ紙使用
耐水性・強度・きれいさバツグン
（王子油化合成紙）

雷鳥マークのカラー表紙
に衣替えして新発売!!

地図の　日地出版
本社　東京都千代田区西神田2-2-15
東京 03　(261)5126
支店　大阪市南区安堂寺橋通り3-60
大阪 06　(252)7421

雨宮 節　登山とスキーの店

代々木 山幸

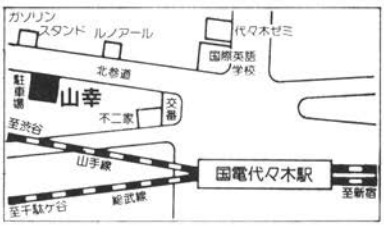
〒151 東京都渋谷区代々木1-21-9
☎ 03(370)1100
●年中無休 AM11:00～PM9:00(日・祭日PM8:00)（下車徒歩3分、駐車場もあります。）

●初心者への山案内

常設登山相談室

〈山幸登山学校〉

年間を通じての登山教室を開講いたします。
新緑の頃の親子参加のキャンプ教室、清流の沢登り、植物観察山行、アルプスの夏山教室、岩登り、新雪の雪山教室等を企画しています。又、ガイド付きのコース案内もいたしますのでご相談下さい。



三田幸夫

わが登高行 下巻

新刊

内容・山の仲間たち・随想・底倉記。著者の筆は六十年に及ぶさまざまな事象を、闊達自在に写し出している。（上巻内容 青春の山々・アルバータ遠征・インド時代とその回想 三、八〇〇円）
定価 四、五〇〇円

川崎精雄
中西 章
望月達夫
横山厚夫
山田哲郎
共著

続 静かなる山

新刊

執筆は、前回同様五人がほぼ同じ分量をうけもった。こんな山が……と云うような、珍しい山が前回以上に現われてくるに違いないが、読者にそう思っていただければ、半ば以上の成功と云えるだろう。（望月達夫）（正一、七〇〇円）
定価 一、八〇〇円

望月達夫

折々の山

新刊

多年、長期間の休暇がとりにくい仕事に就いているため、出かけた山旅も二、三日か、精々数日間の、国内のものばかりである。本書の題名を『折々の山』とした所以である。（著者あとがきより）
定価 一、九〇〇円

日本山岳会編

山日記

一九八一年
昭和五六年版

登山―人工と自然の調和／西堀栄三郎／チョモランマ北壁／尾崎隆／火山式／正英／山の装備／堀田弘司／山の医療／中島道郎／便覧／小屋一覧／行程表／交通連絡先／日本の山（新稿）登山地図／案内書／索引図その他

好評発売中

登山史の発掘	山崎 安治	二、五〇〇円
快晴の山	織内 信彦	二、五〇〇円
山・人・本	島田 巽	二、四〇〇円
山を見る日	川崎 精雄	二、九〇〇円
森林・草原・氷河	加藤 泰安	二、五〇〇円
山に忘れたパイプ	藤島 敏男	三、二〇〇円
北の山続篇	伊藤秀五郎	二、七〇〇円
日高山脈	北大山の会	二、四〇〇円
雪原の足あと	坂本 直行	三、八〇〇円
山・原野・牧場	坂本 直行	一、五〇〇円
原野から見た山	坂本 直行	四、二〇〇円

山の本売場ご案内

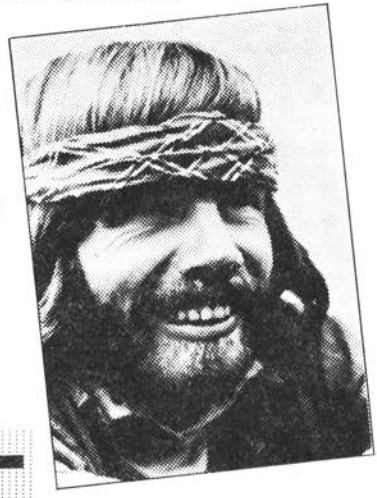
お茶の水店3階が『山の本』の売場です。ぜひご来店下さいませ。

営業時間
平日 10時半～8時
日祝日 12時半～6時半

東京神田駿河台2の1
茗溪堂

山と溪谷社 〒105 東京都港区芝大門1-1-33
☎03(436)4021／振替・東京8-60249

ラインホルト・メスナー著作集



第七級 極限の登攀

日常のトレーニングと恐るべき単独登攀の手記を通じて語る注目の書　横川文雄訳　B6判／定価850円

挑戦

ヒドン・ピーク北西壁の登攀のすべてを綴った驚異の山岳文学　横川文雄訳　B6判／定価1600円

大岩壁 その歴史ルート体験

世界の七大岩壁を制覇した世界で唯一人の男が自らの壮烈な体験を語る　横川文雄訳　A4変型／定価5800円

エヴェレスト 極点への遠征

世界初の無酸素登頂に成功するまでの着想と壮絶な登攀の全貌を語る　横川文雄訳　B6判／定価1500円

冒険への出発 五大陸の山々で

アルプスから世界の高峰へ青春時代の初登攀行と山での考察を語る　横川文雄訳　B6判／定価1200円

山岳　第七十五年（通巻一三三号）
一九八〇年十二月一日発行

価三〇〇〇円

発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京二六一局四四三三番
振替口座　東京三―四八二九番

発行人　西堀栄三郎

〈編集委員〉
山崎安治・金坂一郎
近藤信行・節田重節
池田智津子・竹中昇
倉知敬・藤本敏行

印刷所　株式会社　技報堂

発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　東京二九一局九四四二番
振替口座　東京八―二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

The Himalayan Journal

(Records of the Himalayan Club)

Edited by

K. Mason, C. W. F. Noyce and H. W. Tobin

Vols. 1-15 (1929-1949)

Oxford at the Clarendon Press

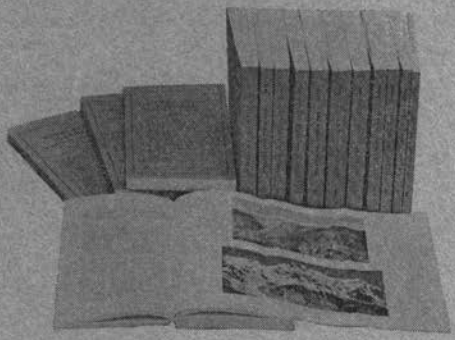
Reprint edition

Set price (Paper-bound) **¥85,000**

●300部限定版
●体裁：原本と同じです。
●分売はいたしません。

●本復刻版をお買い上げくださったお客様には，国立国会図書館所蔵の「深田久彌旧蔵書目録」(九山山房蔵書) を無料進呈いたします。

●ヒマラヤン・クラブ会員は10%引きにてご購入いただけます。



〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は，1929年の4月にヒマラヤン・クラブの機関誌として創刊され，以来50年にわたりヒマラヤ研究の基本的文献として高い評価を得てきています。そのなかでも，初期に出された〈ヒマラヤン・ジャーナル〉は，ヒマラヤ登山をつくりあげた過去の業績を集大成し，ヒマラヤ高峰登頂の名誉を担うべき先駆者たちの偉業をしるすものとして，永く古典としての地位を保っています。ヒマラヤの綿密な探査研究・登攀技術をはじめ，ヒマラヤ登山の先達となる貴重な研究・記録が殆ど本誌に圧縮され，結果として1950－1960年に築かれたヒマラヤ高峰登頂の黄金時代の足懸りをつくったことは衆知の事実です。

このたび弊社が刊行致しました復刻版は，世界の秘境といわれ，数々の未知の分野を残すヒマラヤ・内陸アジアに関する重要な内容を含み，また入手のむずかしくなっている第1－15巻を，ヒマラヤン・クラブのご許可を得て刊行したものです。斯界の皆様のご研究の資料のひとつとして，ぜひご購入くださいますようおすすめ致します。

発売元
Ⓜ丸善
東京本店：〔〒103〕東京都中央区日本橋2－3－10 ☎(03)272－7211 振替東京7-5番
支店・営業所－東京(お茶の水・丸の内・内幸町・浜松町)・札幌・旭川・仙台・弘前・秋田・盛岡・山形・郡山・
筑波・八王子・横浜・新潟・静岡・名古屋・金沢・京都・滋賀・大阪・神戸・姫路・岡山・松山・広島・山口・
福岡・長崎・鹿児島・沖縄／ニューヨーク・シンガポール
■丸善洋書コーナー：新宿伊勢丹・池袋芳林堂

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXXV

1980